遠谷全集

透谷全集

島崎藤村編

堂陽舊

改編透谷全集

折れたる
咲かせけり
夏の花
遠雷

北村透谷遺著

透谷全集

全一冊

島崎藤村編

透谷未亡人にさゝぐ

序

透谷が亡くなつてからもう二十七年にもなる。私が初めて透谷に逢つたのは麹町三番町にあつた巖本善次氏の家の應接間で、透谷は二十五歳、私はまだ漸く二十二歳の青年であつた。當時透谷は巖本氏の主宰する『女學雜誌』に寄稿しはじめた頃であつたが彼が特色の深い論文の最初の試みとも言ふべき『厭世詩家と女性』は早く既にその年頃に出來たものであつた。私の透谷を愛する心は、それから二年の後、彼が僅かに二十七歳で早く斯の世を去つた時まで續いて行つたばかりでなく、その心は彼が死後になつてますゝ深くなつて行つた。あの友人と私との緣故も深い。彼の絕筆ともいふべき『エマルソン』(民友社出版、十二文豪の内)の評傳は未完成のまゝの原稿を私が引受けて整理したものであり、彼の遺稿として最初に世に公けにした『透谷集』(文學界雜誌社出版)は私が編んだり校正したりしたものであつた。たしかあの最初の

集は雜誌『文學界』の同人であり編輯者であつた星野君兄弟の手で七百部を印刷し、それきり絶版としたかと思ふ。私があの友人と交つたのは亡くなる前の三年間位に過ぎないが、しかしその短い間が私に取つては何か一生忘れられないものであり、透谷が死んだ後でも書いた反古だの日記だの、種々書き殘した手紙なぞを見る機會があつて、長い年月の間にあの友人のことを考へて見ると、堀つても堀つても盡きないやうな種々なものが後から後からと出て來るやうに思はれた。これほど私が透谷のことを忘れないといふのも、一つは自分の年の若く心の柔かな青年時代にあの友人と知合になつたからでもあり、一つはあの友人の書き遺したものを纏めて置かうと思ふほど深い緣故のあつたからでもあるが、就中私があの友人から感化を受けたことの深かつたからであらう。彼こそはまことの天才と呼ばるべき人であつたと思ふ。

もし露西亞のクロポトキンが『露西亞文學の現實性と理想性』を書いたやうに、吾國に『日本文學の現實性と理想性』ともいふべきものを書いて呉れる人があつたら、その人は日清日露兩戰役へかけての時代を背景として、すくなくも二人の文學者の生涯を見逃すまいと思ふ。一人は二葉亭だ。今一人は透谷だ。この二人は、書いたものでも、歩いた道でも、第一その生活の基調からして隨分違つたものといふ氣はするが、意味の深い未完成のまゝで斯の世を去つたことだけは似て居る。

『大丈夫の一世に立つや必ず一の抱く所なくんばあらず。然れども抱くところのものは必ず見るべき功績を建立するにはあらず。建築家の役々として其業に從ふや、幾多の歲月を費して後確かに巍乎たる樓閣を起すの算あり。然れども人間の靈魂を建築せんとするの技師に至りては其費すところの勞力は直ちに有形の樓閣となりて、ニコライの高塔のごとく衆目を引くべきにあらず。』

これを讀む人は今から三十年も前に、これが青年の透谷によつて書かれたことを想ひ見て欲しい。當時、山路愛山がまだ血氣壯んな史論家として民友社に居た時であつた。愛山は賴山陽論の冒頭に、文學卽ち事業なることを說いて、文學は事業であるが故に尊い、山陽の文學に意味のあるのはそれが事業であるからである、世を益することもなく、人世に相涉ることもないや

うな空の空な文學は事業とは言はれないといふことを說いた。透谷が起つて一擊を加へやうとしたのは、この愛山の主張に對してゞあつた。彼は山陽のやうな事業家以外に、別に人間の靈魂を建築しやうとする技師のあることを言つて見せて、世を益することもなく人間に相涉ることもないやうに見える文學に反いてより尊い事業のあることを辯明した。その時の透谷は可成激した調子で、同じ駁論の中に次のやうなことをも書いて居る。

『吾人は記臆す、人間は戰ふために生れたるを。戰ふは戰ふために戰ふにあらずして、戰ふべきものあるがために戰ふものなるを。戰ふに劍を以てするあり、筆を以てするあり、戰ふ時は必ず敵を認めて戰ふなり、筆を以てすると劍を以てすると戰ふに於いては、相異なるところなし。然れども敵とするものゝ種類によつて戰ふものゝ戰ひを異にするは當然なり。戰ふものゝ戰ひの異なるによつて勝利の趣も亦た異ならざるを得ず。戰士陣に臨みて敵に勝ち凱歌を唱へて家に歸る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家を評して事業といふ。事業を尊ぶべし、勝利を尊ぶべし、然れども高大ある戰士は斯くの如く勝利を携へて歸らざることあり。彼の一生は勝利を目的とした戰はず。別に大に企圖するところあり。空を擊ち虛を狙ひ、空の空なる事業をなして、戰爭の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。』

戰ひの人としての透谷はこの一節にもよく顯はれて居る。斯ういふものを讀み返して見ると、若い透谷を眼のあたりに見る心持がする。愛山はこの透谷の駁論を讀んで一晩中よく眠らなかつたといふ話さへある。これほど彼は、戰たうともしたし、又戰つた。そんなら彼のいふ空の空なる事業とは何を暗示したものであらうか。今日から見て、彼の短い生涯には奈何いふ意味があるだらうか。一體來るべき時代の早い先驅者として、透谷は何を戰つたのであらうか。それには、私は簡單に、彼の生涯を紹介して見たい。

透谷を語るには、どうしても彼の早い結婚生活にまで行かねばならない。

透谷のお母さんは京橋彌左衞門町の角に煙草屋の店を出して居た。透谷の亡くなつた後、私はあの二階へ上つて友人の遺した反古を調べて見たことがあつた。細君が取出したいくつかの葛籠の中からは、種々の反古やら、書きかけの舊い草稿やらが、部屋中一ぱいになるほど出て來

た。透谷はどんな反古でも、假令破つて捨てゝしまひたいやうなものでも、自身に書いたものは皆大切に細君に仕舞はせて置いた。そんな一寸したことにも透谷の人となりがあらはれて居たが、その時私はあの友人がまだずつと若かつた頃に石坂孃に宛てたといふ長い手紙を讀んで見た。孃はみな子さんと言つて、やがて透谷の細君になつた人だ。透谷の結婚が終生の好い伴侶を一人の異性に見出したやうな誠意から出發したことは、あの手紙が十分によくそれを證據立てゝ居た。それには自己の少年時代のことが飾るところなく長々と叙してあつて、まるで友人にでも宛てゝ自己の將來の希望を語るやうに書いてあつた。あれはめづらしい手紙だ。透谷の戀愛に多分の友情のあつたことも想像せられる。ところが斯の結婚には種々困難があつた。透谷のお母さんは、透谷自身の言葉を借りて言へば『世にも恐るべき神經質の人』で、あまりに氣質を同じくしたやうな透谷とは相容れなかつた。お母さんの愛は兄なる透谷よりも寧ろそれほど神經質でない弟の方にあつまつて居たらしい。透谷は母子の苦い爭ひを深刻に經驗した人の一人だ。彼の結婚はこのお母さんに悅ばれなかつたばかりでなく、代議士としての相應な立地にあつた石坂氏からも悅ばれなかつたかと想像せられる。彼の執つた道は自由結婚だつた。その儀式はある基督教の會堂で質素に行はれたとも聞いて居る。

この結婚によつて透谷は彼の周圍にあつた親しい人々を失つた。彼の始めた結婚生活はそれらの人々に對して血戰を開いたやうなものだつた。後になつて透谷の書出したものは、その舞臺が巖本氏の『女學雜誌』であつた關係からとは言へ、『厭世詩家と女性』といひ、『處女の純潔』といひ、『心機妙變を論ず』といひ、其他、兩性の間に起つて來る問題を取扱つたものゝ多いのも決して偶然ではないと思ふ。

『大濤怒り、激浪躍るにあらずや、人心何ぞ獨り靜かなるを得む。』

この嵐は、透谷をして安い眠を貪らしめなかつたやうなこの嵐は、彼が周圍の親しい人々に對して血戰を開いた時に、早くも彼の生命の内部に起つて來たことを想像するに難くない。それにしても透谷はまだ若かつた。この世の重荷を負ひながら、夫とし父としてのつとめを果さうとするには、彼の結婚はあまりに早かつた、彼は漸く二十四歳ぐらゐで既に一人の兒の父となつた。私が初めて彼の寓居を訪ねたのは高輪東禪寺の境内であつたが、ふうちやんといふ女の兒の生れたのも、あの高輪の家であつたと記憶する。

艱難は早く來た。若い夫婦は貧しさとも戰はねばならなかつた。のみならず、彼の始めた結婚生活には稀に見る誠實が籠つて居たが、彼にはそれに耐へて行くだけのある力を缺いて居た。それが彼の氣質から來て居た。あの友人の短い生涯に對して暗涙を催さしめるのもその人世の不如意にある。

透谷は明治元年に相州小田原で生れた人だ。彼のお父さんは小田原の士族であつた。まだ透谷が小さかつた時分は、兩親は彼を祖父母の手に托して置いて東京に出た。彼は十一歳の時まで小田原に居て、非常に嚴格な祖父の教育の下に成長した。祖母といふ人は温順な婦人で、少年の彼に對しても優しくあるべき筈の人だが、不幸にして實の祖母ではなく、繼祖母であつた。この祖父の非常にやかましかつたことゝ、祖母の彼に對する愛情の薄かつたことゝで、後になつて彼が氣鬱病を發した一番の根本はそこから起つて來たと自白して居る。彼は明治十四年に東京へ移つて、彌左衛門町のお母さんの家から數寄屋橋側の泰明小學に通つた。彼の雅號の透谷も數寄屋橋の『すきや』から來て居る。あの泰明小學は私が少年時代に學んだ母校でもあつて、在學當時は互ひに知らなかつたが、後になつてその事を話し合つて互ひに緣故の薄くないことを思つたこともあつた。こんな少年時代の同じ記憶に繫がれて居ることは、一層あの友人と私とを結びつけたかとも思ふ。

透谷の氣鬱病は早く青年時代に彼を襲つたともいふ。彼はそのために一月ばかりも床に就いたことがあるといふ。彼のお父さんは心配して、しばらく彼を旅に送り、思ふまゝに山野を跋渉せしめた。私が知つてからの彼は可成旅好きで、その事は彼の書いたものにも出て居るし、『飄遊は吾性なり』と言つて見せた言葉のはじにも殘つて居るが、さうして旅行癖の素地を作つたのも、あの氣鬱病を煩つた後で初めて獨り旅を試みた時に基するともいふことである。

透谷自身の言葉を借りて言へば、彼は不羈磊落な性質を父から受け、甚だしい神經と、强い功名心とを母から受けた。彼の神經質は感じ易いといふところを越にて、傷み易いほどの程度のものであつた。猫一匹、彼の住居の側に捨てるものがあつても、彼にはそれが氣になつて、その家も住み憂くなつたと聞いたことさへある。この神經質に加へて、何物にも拘束されること

を好まなかつた親譲りともいふべき性質は、やゝもすると彼の結婚生活を暗くした。精神の自由を求めて止まなかつたやうな彼は戀愛そのものを深思するやうに成つた。『厭世詩家と女性』をはじめ『吾牢獄』等の諸篇にはその邊の深い消息が泄らしてある。

しかし透谷はよく努めた。しば〳〵襲つて來る貧しさの中で、彼は無名の一青年と食を分つことさへもあつた。彼はまたよく住居を變へた。『社會を以て家となさず』といふ言葉を彼にしてはじめて言へるやうな氣もする。彼は行く先に幻住の家を求めたかのやうにも見ゐる。彼の書いたものは、論文でも何でも皆自身の生活に交渉の深い創作であつた。彼は前後二回、芝公園の地内に移り住んだことがあつて、一度はあの公園地の舊三十八號に、今一度は舊二十號四番に移つたが、殊に後の方の住居は紅葉館の裏手にあたるところで、飯倉の通りへ出られる細い坂道に接した位置にあつた。土地が高燥で樹木も鬱蒼とした具合が彼の性質によく協つたといふことは、彼の書いたものにも見ゐて居る。あの芝公園の家は餘程氣に入つたと見ゐ、あそこで書いたものには懷しみの多いものが出來た。

『心機妙變を論ず』、『他界に對する觀念』、あゝいふものを書いたのもあの林の中だ。短い瞑想の記錄のやうなもので、あそこで透谷の書いたものには、私の好きな『秋窓雜記』のやうなものがある。意地の悪い鴉が來て高い梢の上で啼くのを聞いて、皮肉屋といふものは文壇にばかり居ると思つたらこゝにも居た、といふやうなことを書きつけたものも有つたが、あゝいふ輕い氣分が持てるほどあの住居は樂しかつたと思ふ。

結婚後の透谷に弟子であり知己であつたやうな一人の女友富井松子の出來たことも、輕く見逃せないやうな氣もする。彼が奥州の方へ旅をして歸つて來る頃には、その人は亡くなつた。『哀詞序』一篇は短いものであるが、その女友の死を記念するための深い悲みが寄せてある。あの奥州の旅から歸る頃から、彼は自身にも異狀の起つたことを知つたと見ゐて、健康を回復したいとの願ひから麻布簞笥町の家を引拂ひ、國府津の海岸に近い前川村に移つた。前川村の古い長泉寺は透谷が先祖の骨の埋めてある緣故の深いところで、そこの部屋を假りの住居としてあつた。あの海岸では、透谷の他の時代に見られないほど靜かな、半ば樂しく半ば傷いて居るやうな時が來たやうであつた。『國府津時代は樂しうござんしたと』、よく細君が透谷の亡くなつた後で、私達に話し聞かせたことを覺ゐて居る。私もよくあの寺を訪ねて、時には近所の娘達を

集めて裁縫などを教へて居た細君を本堂の側の廣間に見かけたこともあつた。透谷が自作の『蝶の歌』などを私に讀んで聞かせたのもあの寺だ。激し易く迫り易かつた透谷も、あそこでは海岸の秋を欲んで『萬物の聲と詩人』だの、『情熱』だの、『一夕觀』だのといふものを書いた。けれども惜しいことに、その頃の透谷の身體はもう餘程弱つて居た。あの國府津時代に出來たのは、いづれも深味のあるものばかりであつたが、しかし餘り長がいものはもう書けなかつた。彼は戯曲にも多くの興味を持つて居て、『五緣』、『十夢』といふやうな大きな計畫を立て、その中の『惡夢』には僧の公曉を主人公にした史劇を試みかけたが、それも極僅かしか筆を着けなかつた。『エマルソン』評傳も未完成のまゝで筆を捨てゝしまつた。

斯うして戰ひ疲れた透谷はもう一度彌左衛門町の煙草屋の二階へ、それ見たかと言はないばかりのお母さんの家へ歸つて行つた。精力の盡き果てた彼が半ば傷いたやうな身體をお母さんの家へ運ぶ前には、彼はもう奈何にも仕樣がなくなつたことを感じて、一切の義務といふやなものをも捨てゝしまひ、西行のやうな放浪生活を送つて見たいと考へたり、自分の子供にはもう決して文學を遣らせたくないと考へたりするやうな人であつた。早くから氣鬱病に罹つたといふ彼は、ある點まで自分の頭腦に病的なところのあるのを自覺して居て、それにうち勝たうくゝと努めたらしくも思はれる。彼の天才は恐るべき生の不調和から閃めき發して來たと言つてもいゝ、でも、彼が奈何にひるまない精神の所有者であつたかといふことは、横になつてうち震へて居るやうな床の上でも、『どうも世間の奴等は不健全でいかん』と言つて、彼の思想を不健全なりとするものを逆に不健全として嘲つて居たのでも知れる。彼は矢盡き刀折れた戰ひの人のやうに細君にも共に死に就くことを勸めたとかいふ。その時、細君はまだ幼いふうちやんのことを言つて、夫の言葉には隨はなかつたともいふ。慘ましい死は不幸な友人を待つて居た。それからの透谷に殘されたものとては、いかにして潔く斯の世を辭すべきかと、その最後の方法を見出すことばかりであつた。彼は一度お母さんの家の物干場で死を急がうとして果さなかつた。最後に彼は以前の住居であつた芝公園の家へ移つた。丁度私が彼を見舞つた時は、彼の『エマルソン』が十二文豪中の一册として民友社から屆いた日であつた。彼はその本を手に取つて見たくらゐで、中を開けて見る氣も無かつた程に覺ゐて居る。丁度五月十六日の晩の月夜に、彼は病室を脫け出して、家の周圍にある樹の下で縊れて死んだ。

『悲しきLimitは人間の四面に鐵壁を設けて、人間をして或る卑野なる生涯を脱することを能はざらしむ。鵬の大を以てしても蜩の小を以てしても同じくこの限を破ること能はざるなり。而して、蜩の小を以て自らその小を知らず、鵬の大を以て自らその大を知らず、同じく限に縛せらるゝを知らず、欣然として自足するは憫れむべき自足なり。この憫れむべき自足を以て現象世界に處して快樂と幸福とに缺然たるところなしと自信するものは、淺薄なる樂天家なり。彼は狹小なる家屋の中に物質的論客と共座を同じくして、泰平を歌はんとす。歌へ、汝が泰平の歌を。』

これを書いた時分の透谷はまだ〳〵元氣だつた。しかしこの文章の中に顯れて居るやうな彼の特有な強い自意識は死の旅を急がうとする最後の時まで失はれずにあつたらうと思ふ。彼は限りない感慨をもつて斯の世に別れを告げて行つたらうと思ふ。

こんな風にして透谷の惜しい生涯は終つた。彼は誠意の籠つた戀愛をも、そこから出發した結婚生活をも、すべて疑問としてこの世に殘して置いて行つた。彼の生涯は結局失敗に終つた戰ひだつた。彼の亡くなつた時は、ふうちやんはまだ極幼なかつた。漸く四歳ぐらゐだつた。彼はその一人の力ない愛兒を若い未亡人の手に殘した。人としての彼に取つて、これが失敗でなくて何であらう。

しかしその慘澹とした戰ひの跡には拾つても盡きないやうな光つた形見が殘つた。彼は私達と同時代にあつて、最も高く見、遠く見た人の一生だ。そして私達のために、早くもういろ〳〵な支度をして置いて呉れたやうな氣がする。

こゝで私は二葉亭のことを振返つて見たい。『文學は男兒畢生の事業とするに足りない。』といふ意味の言葉を殘して晩年を露西亞の旅に送つたあの二葉亭には、默然と手を拱いて、時代に對して行つたやうな趣がある。二葉亭の生涯には、藝術と實行の分裂ともいふべき悲みが味はれる。そこに空虛がある。滿されがたい空虛がある。その空虛は近代に勃興した科學的文明が藝

術の世界に齎した悲みと言ふことも出來ると思ふ。透谷には二葉亭に無い熱意があつた。彼は二葉亭が藝術と實行との間に感じたやうな空虛を感じなかつた。

二葉亭も戀愛を描くことから出發した。『浮雲』の物語はこれを證して居る、透谷も戀愛を描くことから出發した。『蓬萊曲』一篇はこれを證して居る。しかし二葉亭は歩けば歩くほど、戀愛から離れて行つたやうに見ゐる。それと反對に、透谷は歩けば歩くほど戀愛を重く視るやうに成つて行つた。そこにあの二人の生涯の相違が感じられる。

二葉亭の行き着いたところは、實行にも就き得ず藝術にも歸り得ないやうな苦しい沈默ではなかつたらうか。透谷のやうに人生の不調子を痛感したものは到底現狀の打破に行かずに居られなからうと思ふ。

斯う思つて見て來ると、透谷が進まう〳〵として動いて行つた方向が今更のやうに迫られる。彼をしてあゝいふ方向を執らせたのも、彼の若い生命に起つて來た嵐の力だといふことが感ぜらるゝ。彼が内部の生命を論じたり、創造の力を說いたり、精神の自由を唱へたりした幾多の言說を讀み返して見ると、私は隨所に彼の心の芽を見つけることが出來るやうに思ふ。

私の友人の中でも、蒲原有明君は昔からよく透谷を認めた人の一人だ。その獨創的な素質に於いては明治年代に於ける最大の詩人として透谷に許したことのあるのも蒲原君だ。その蒲原君が透谷に就いての近頃の感想に次のやうな一節がある。

『透谷は何としても惜しい文學者の一人であつた。あれだけの强烈な感情と複雜多樣な素質を有しながら、それが眞に指導的精神となるべき唯一の確信に到達する機緣に觸れ得なかつたことはまことに止むを得ぬことである。透谷には思想の動搖を統一する信念の代りに、主我的暝想があつた。唯心自省に沈む結果は早くもその出世作たる『蓬萊曲』に豫想せられて居たと見られやう。曲中には弘誓の船が描かれてある。これらは『神曲』的ではあるが、その弘誓の船は現實から絕緣せられた實現力のない空想的施設である。從てそれは勿論宗教的とは言はれない。

透谷をして煩惱熾盛の人生を痛感することからさまたけたのは、その主我的瞑想であつた。それであるから、透谷自身の生活に於いても、それが悲慘な運命に行き詰つてしまつたのであらう。』

蒲原君は特有な冷靜もつて、透谷に對する熱い愛惜の情を述べて居る。私はこの蒲原君の感想を讀んで近頃うれしいものゝ一つと思つた。蒲原君の言ふやうな、主我的瞑想はたしかに透谷の弱點だつた。彼の生前に多くの藝術的な企圖がありながらも、それを實現するの機會もなくて意象が未完成のまゝで終つたといふのも、いづれもその弱點からだつた。あれほどの生命觀を抱いた透谷が新しい道德の方向を指し示したのみで、遂にそれが彼自身の統一力となるところまで行かなかつたことは返すゞゝも惜しく思ふ。實際、彼がどういふ戰ひを戰つたかは彼の早い結婚生活が最も直接にそれを語つて居る。

透谷に尊いところは何事も根本から見て掛らうとしたことである。

『ある肯われ臆にあたりて横たはる。ところは海の鄕、秋高く天朗らかにして、よろづの象よろづの物、凛乎として我に迫る、恰も我が眞率ならざるを笑ふに似たり。恰も我が力なく辨なく氣なきを罵るに似たり。渠は斯くの如く我に透徹す。而して我は地上の一微物渠に悟達することの甚だ難きは如何ぞや。』

これは彼が國府津時代に書いた『一夕觀』の一節である。『萬づの象、萬づの物、凛乎として我に迫る、』とはいかにも詩人としての彼の面目をよく語つてある。彼は何事にもこの透徹と悟達とを期した。彼は自身にも言つて居るやうに、物に感ずることが深くて悲みに沈むことも尋常でなかつた。又、美しいものに意を傾けることも人に過ぎて多かつた。けれども彼が物に感じ、美しいものに意を傾けるといふは、物を通じ形を鑿ちてその心髓に徹しなければ休むことを知らないやうな熱意から來て居た。彼は俗韻俗調の詩人が徒らに自然の美を玩ぶことを憎んだがその彼自身は、自然の美に動されることの少いのを自ら怪しむほどの多感な詩人であつた。彼が生命の内部に突き入らう〳〵として審美上の詮索にのみ滿足せず、道德の創造性にまで考察を向けた熱心には驚かれる。『生命のないところに信仰はない、信仰のないところに道德にな

い』と彼は言つて居る。この内觀が主我的な瞑想に墮ちて行つたのはし彼とては止むを得なかつたことだらう。

透谷は空想の多い青年時代の初期から、政治に行かうとしたり、宗教に行かうとしたり、哲學に行かうとしたりした。彼は今の早稻田大學が專門學校と言つた時代に、政治科に居て法律を修めたこともある。一時は基督教に籍を置いて、フレンド教會から出た『平和』といふ雜誌の編輯を手傳つたこともある。彼が巖本氏と知るやうに成つたのも、巖本氏が基督教派の文筆の人として後進の彼を認めたといふばかりではなく、彼の方でも當時の巖本氏が早いフエミニズムの運動に心を動かさるゝところがあつたからであらう。斯うした種々な閲歷は彼の性格の複雜を語り、一面には彼の時代の激しい動搖を語つて居る。

透谷の文學的生涯は彼の早い結婚と共に開けた。人としての彼が歩いた路は近代の生活を考へるものに取つていろ〳〵な暗示を與へる。彼には天才の誠實があつた。その誠實が彼を導いて短く傷ましくはあるがしかし意味の深い生涯を送らせたと思ふ。

最後に、私がこの『透谷全集』の編み直しを思ひ立つたことに就いていさゝかこゝに書き添へたい。ことしの春のことであつた、私は透谷未亡人から久しぶりの消息に接した。その中に、『透谷が亡くなつて最早二十七年にもなる、自分も大分年をとつた』といふ意味のことが書いてあつた。未亡人も今は孫まであつて、牛込新小川町の家の方に靜かに暮して居られる。あの二十七年の長い苦節に耐へて來た人をなぐさめるためにも、私は日頃心がけて居たこの全集の編み直しを急がうと思ひ立つたのである。

透谷の書いた論文で、彼の思想の中心と見るべきものは、『厭世詩家と女性』をはじめ、『心機妙變を論ず』、『他界に對する觀念』、『人生に相涉るとは何ぞや』、『精神の自由』、『内部生命論』、『情熱』、その他の諸篇であるが、それらはみなこの書の中に讀まれる。透谷は小説にも、戯曲にも筆を染めようとしたが、『星夜』、『我牢獄』、『鬼心非鬼心』、その他に見るやうな詩的な創作の方に好いものを遺した。それでこの書にはさういふ創作を集めて、彼が生前に自分でも意に滿たないものとした一二の小説や未完成のまゝの戯曲などを省いた。透谷は又、數に數いて僅かながらに、

『ほたる』、『蝶のゆくへ』、『雙蝶のわかれ』、『眠れる蝶』、その他の好い詩を遺した。注意深い讀者は明治年代の最初の新しい詩の芽をこの書の中に見つけるであらうと思ふ。

この書の中にある透谷の日誌、石坂孃へ宛てた長い手紙なぞは、彼の自傳とも見るべきで、その意味からも注意すべきものであると思ふ。それから、この書の終りに添へてある透谷の手紙は最近に未亡人の手許に發見せられたものである。私はこの書に收めようとして收め得なかつた二篇の遺稿あることを遺憾におもふ。それは劇詩『蓬萊曲』と、『エマルソン』の評傳とである。前者はやゝ舊稿の部に屬するし、後者は未完のまゝのものであるから、こゝには割愛することにした。『蓬萊曲』からは挿詩二章だけを取るにとゞめた。しかし透谷の書いたもので、彼の特色のよくあらはれて居る詩文の殆んど全部は集めて置いたつもりだ。

この書こそ眞に『青春の書』と言つていゝ。かういふ私は透谷の遺著がもう一度新しい裝ひをもつて今の世の青年男女諸君に讀まるゝ日のあることを樂しく想像する。

『情熱といふ言葉一つを見つけるにさへ、透谷はその一生を費した。見たまへ透谷以前にも情熱といふ言葉はあつた。しかし彼が賦與したやうな意味の情熱といふ言葉はなかつた。』

これは私が曾て透谷に就いて書いた言葉の一つだ。おそらく、來るべき時代の『踏み臺』となることを覺悟して倒れて行つたやうな、彼の情熱はこの書を讀むものゝ心に深く何物かをインスパイアせずには置くまい。

大正十年九月、麻布飯倉にて

島崎藤村

目次

第一篇　芝公園地内にて

厭世詩家と女性……一
油地獄を讀む……三
伽羅枕及び新葉末集……二
粹を論じて伽羅枕に及ぶ……七
松島にて芭蕉翁を讀む……五

第二篇　高輪東漸寺境内にて

蓮華草……四

歌念佛を讀みて……四五
星夜……五三
脫蟬子に與へてその星夜を評す……六〇
脫蟬子の答……六一
又脫蟬子へ……六五
我牢獄……六六
德川時代平民的理想……七四
德川時代平民的虛無思想……八六

第三篇　再び芝公園地内にて

三日幻境……九九
心機妙變を論ず……一一三
秋窓雜記……一二四

他界に對する觀念……一二九
處女の純潔を論ず……一四一
鬼心非鬼心……一五一

第四篇　麻布簞笥町にて

富嶽の詩神を思ふ……一六〇
罪と罰の殺人罪……一六四
人生に相涉るとは何ぞや……一七四
滿足……一八九
精神の自由（明治文學管見の一）……一九六
快樂と實用（明治文學管見の二）……二一二
變遷の時代（明治文學管見の三）……二三一
政治上の變遷（明治文學管見の四）……二三九

頑執妄排の弊……二三四
内部生命論……二三九
國民と思想……二五三
熱意……二六七
桂川を評して情死に及ぶ……二七一

第五篇　國府津在前川村にて

哀詞序……二七九
ほたる……二八三
蝶のゆくへ……二八四
雙蝶のわかれ……二八五
眠れる蝶……二八七
萬物の聲と詩人……二九〇
情熱……二九七
一夕觀……三〇四
ゆきだをれ……三〇七

第六篇　斷篇及び舊稿

蓬萊曲の中より……三一五
露のいのち……三一五
髑髏舞……三一七
彈琴……三二三
みゝずのうた……三二四
短歌四首……三二五
發句一つ……三二六
マンフレッド及びフォースト……三二七

第七篇　日誌及び手紙

日誌より
(透谷二十二歳の時)……三四一
(二十三歳の時)……三四三
(二十四歳の時)……三六三
(二十五歳の時)……三七一
(二十六歳の時)……三八二
手紙の中より
父へ送りしもの……三八六
石坂美那子へ送りしもの……三九四
旅より妻へ送りしもの……四〇六

第一篇　芝公園地内にて

明治二十五年二月より
同年四月まで

厭世詩家と女性

戀愛は人世の秘鑰なり。戀愛ありて後人世あり。戀愛を抽き去りたらむには、人生何の色味かあらむ。然るに尤も多く人世を觀じ、尤も多く人世の秘奥を究むるといふ詩人なる怪物の尤も多く戀愛に罪業を作るは、抑も如何なる理ぞ。古往今來詩家の戀愛に失する者舉けて數ふ可からず。遂に女性をして嫁して詩家の妻となるを戒しむるに至らしめたり。詩家豈無情の動物ならむ。否其濃情なる事常人に幾倍する事著るし。然るに網繆終りを全ふせざる者多きは何故ぞ。ギョオテの鬼才を以て後人をして彼の頭は黄金、彼の心は是れ鉛なりと言はしめしも、其戀愛に對する節操全からざりければなり。バイロンの嵩峻を以ても、彼の貞淑寡言の良妻をして狂人と疑はしめ、去つて以太利に飄泊するに及んで、妻ある者、女ある者をしてバイロンの出入を嚴にせしめしが如き、或はシェレイの合歡未だ久しからざるに妻は去つて自ら殺し、郎も亦た天命を全

ふせざりしが如き、彼の高嚴莊重なるミルトンまでも一度は此轍を履んとし、豪逸なるカーライルさへ死後に遺筆を梓するに至りて合歡團欒ならざりし醜を發見せられぬ。其他マルロー、ベンジョンソン以下を數へなば、誰か詩人の妻たるを怖れぬ者のあるべき。

思想と戀愛とは仇讐なるか。安んぞ知らむ戀愛は思想を高潔ならしむる慈母なるを。エマルソン言へることあり、尤も冷淡なる哲學者と雖も戀愛の猛勢に驅られて逍遙徘徊せし少壯なりし時の靈魂が負ふたる債を濟す事能はずと。戀愛は各人の胸裡に一墨痕を印して、外には見ゆ可からざるも終生抹する事能はざる者となすの奇跡なり。然れども戀愛は一見して卑陋暗黑なるが如くに、其實性の卑陋暗黑なる者にあらず。戀愛を有せざる者は春來ぬ間の樹立の如く、何となく物寂しき位地に立つ者なり。而して各人各個に人生の奥義の一端に入るを得るは戀愛の時期を通過しての後なるべし。夫れ戀愛は透明にして美の眞を貫ぬく。戀愛あらざる内は社會は一個の他人なるが如くに頓着あらず、戀愛ある後は物のあはれ、風物の光景、何となく假を去つて實に就き、隣家より我家に移るが如く覺ゆるなれ。

蓋し人は生れながらにして理性を有し、希望を蓄へ、現在に甘んぜざる性質あるなり。社會の

羈絆に苦しめられず眞直に伸びたる小兒は本來の想世界に生長し實世界を知らざるものなり。然れども生活の一代に實世界と密接し抱含せられざる者はなけむ。必ずや其想界、即ち無邪氣の世界と、實世界、即ち浮世又は娑婆と稱する者と相爭ひ相睨む時期に達するを免れず。實世界は强大なる勢力なり、想世界は社會の不調子を知らざる中にこそ成立すべけれ、既に浮世の刺衝に當りたる上は、好しや苦戰搏鬪するとても遂には弓折れ箭盡くるの非運を招くに至るこそ理の數なれ。此時想世界の敗將氣沮み心疲れて何物をか得て滿足を求めんとす。勞力義務等は實世界の遊軍にして常に想世界を覗ふ者、其他百般の事物彼に迫つて劍鎗相接爾す。彼を援くる者、彼を滿足せしむる者、果して何物とかなす。曰く戀愛なり。美人を天の一方に思求し展轉反側する者實に此際に起るなり。生理上にて男性なるが故に女性を慕ひ、女性なるが故に男性を慕ふのみとするは人間の價格を禽獸の位地に遷す者なり。春心の勃發すると同時に戀愛を生ずると言ふは古來似非小說家の人生を卑しみて、已れの卑陋なる理想の中に縮小したる毒弊なり。戀愛豈單純なる思慕ならんや。想世界と實世界との戰爭より想世界の敗將をして立籠らしむる牙城となるは即ち戀愛なり。

此戀愛あればこそ理性ある人間は悉く惱死せざるなれ。此戀愛あればこそ實世界に乘入る慾望を惹起するなれ。コレリッヂがロメンオ、エンド、ジュリエットを評する中に、ロメオの戀愛を以て彼自身の意匠を戀愛せし者となし、第一の愛婦なる「ロザリン」は自身の意匠の假物なりと論ぜるは、蓋し多くの戀情を獸慾視して實性を見究めざる作家を誡しむるに足る可し。

戀愛は剛腹なるバイロンを泣かせしと言ふ微妙なる音樂の境を越へて廣がれり。戀愛は細微なる美術家と稱へられたるギョオテが企る事能はざる純潔なる寶玉なり。彼の雄邁にして輭慢を兼ねたるダンテをして昊天高上に絶叫せしめたるも其最大誘因は戀愛なり。彼の痛烈悲酸なる生涯を終りたるスウイフトも戀愛に數度の敗れを取りたればこそ彼の如くになりたれ。嗚呼戀愛よ、汝は斯くも權勢ある者ながら爾の哺養し爾の切に需めらるゝ詩家の爲に虐遇する所となる事多きは如何に慨歎すべき事ならずや。

女性を冷罵する事東西厭世家の常なり。釋氏も力を籠めて女人を罵り、沙翁も往々女人に關して慊らぬ語氣を吐けり。我露伴子の一口劍を草するや巧に阿蘭を作りて作家の哲學思想を發揮し、更に風流悟に於て其解脫を說きたる所余の尤も服する所なり。蓋し女性は感情的の動物なり、詩家も亦た男性中の女性と言ふ可き程に感情に富める者なり。深夜火器を弄して閨中の人を愕かせしバイロン必らずしも狂人たりしにあらざる可し。蓋し女性は或意味に於て甚だ偏狹頑迷なる者なり、而して詩家も亦た或點より觀れば之に似たる所あるを免れず。蓋し女性は優美纖細なる者なり、而して詩家も亦た其思想に於ては優美纖細を常とする者なり。豪逸雄壯なる詩句を迸出する時に於ても詩家は優突を旨とするものなるを以て自ら女性に似たるところあるを免れず。其他生理學上に於て詳に詩家の性情を檢察すれば神經質なるところ執着なるところ等類同の個條蓋し數ふるに遑あらざる可し。是等の類同なる諸點あるが故に同性相忌むところよりして詩家は遂に綢繆を全ふする事能はざる者なるか。夫れ或は然らむ。然れども余は別に說あり、請ふ識者に問はむ。

合歡綢繆を全ふせざるもの詩家の常ながら特に厭世詩家に多きを見て思ふ所なり。抑も人間の生涯に思想なる者の發萌し來るより、善美を希ふて醜惡を忌むは自然の理なり、而して世に熱せず、世の奥に貫かぬ心には人世の不調子不都合を見初むる時に初理想の甚だ齟齬せるを感じ、實世界の風物何となく人をして慘惻たらしむ。智識と經驗とが相敵視し、妄想と實想とが相爭戰

する少年の頃に浮世を怪訝し、厭嫌するの情起り易きは至當の者なりと言ふ可し。人生れながらにして義務を知る者ならず、人生れながらに德義を知るものならず、義務も德義も雙對的の者にして、社會を透視したる後己れを明見したるの後に始めて知り得可き者にして、義務德義を辨ぜざる純樸なる少年の思想が始めて複雜解し難き社會の秘奥に接する時に誰れか能く厭世思想を胎生せざるを得んや。誠信は以て厭世思想にかつ事を得べし。然れども誠信なる者は眞に難事にして、ポーロの如き大聖すら、嗚呼われ罪人なるかなと嘆じたる事ある程なれば厭世し、眞相を知りたる人にして、これに勝つほどの誠信あらん人は凡俗ならざる可し。ポープの樂天主義の如きは蓋し所謂解脫したる樂天にして其會つて唱ひし詞句に「凡ての自然は妙術なれば汝の能く解する所ならじ、凡ての偶事は指呼に從ふものにして汝の關する所ならじ、凡ての不和は遂に調和なる事も汝が會し得る所ならじ、一部に惡と思はるゝ所のものは全部に善、傲慢に、訊ふ勿れ、誤理に惑はさるゝ勿れ。凡そ一眞理の透明なるあらば其の如何なる者なるを問はず、必らず善なるを疑ふ勿れ。」と云ふ一節あり。蓋し斯の如きは人世の壓威を自力を以て排斥したりと思惟する者にして、抑も經驗の結果なり。凡そ經驗なきの思想には斯の如き解脫思ひも寄らぬ事なり。

偖て誠信の以て厭世に勝つところなく、經驗の以て厭世を破るところなき純一なる理想を有てる少壯者流の眼中には實世界の現象悉く假僞なるが如くに見ゆ可きか、曰く否、中に一物の假僞ならず見ゆる者あり、誠實忠信「死」も奪ふ可らずと見ゆる者あり、何ぞや、曰く戀愛なり。情は鬪爭すべき質を以て生れたる元素なれども其戀愛の域に進む時は全然平和調美の者となり、知らず知らず一女性の中に圓滿を畫かしむ情人相對する時は天地に强敵なく、不平も不融和も悉く其席を開きて眞美の天使をして代て坐せしむ。少き思想の實世界の蹂躙する所となる事多し。特に所謂詩家なる者の想像的腦隨の盛壯なるときに、實世界の攻擊に堪へざるが如き觀あるは止むを得ざるの事實なり。況んや沈痛凄惻人生を穢土なりとのみ觀ずる厭世家の境界に於てをや。曷んぞ戀愛なる牙城に據る事の多からざるを得んや、曷んぞ戀愛なる者を其實物よりも重大して見る事なきを得んや。戀愛は現在のみならずして一分は希望に屬する者なり。即ち身方となり、慰勞者となり、半身となるの希望を生ぜしむる者なり。夫れ厭家世は此世に屬する者として言はゞ名譽にもあれ、利得にもあれ、王者の玉冠にもあれ、鐵道王の富榮にもあれ、一の希望を置くところあらざるなり。故にこの世の希望と厭世家とは氷炭相容れざるの中なる可し。然る

に戀愛なる一物のみは能く彼の厭世家の呻吟する胸奥に忍び入る秘訣を有し、奇しくも彼をして多少の希望を起さしむる者なり。情の性は沈靜なるを得ざる者なり。其の一たび入るや人の心を攪亂するを以て常とす。況してや平生激昂しやすき厭世家の想像は、この誠實なる社會に遭ひて脆くも咄嗟の間に奇異なる魔力に打ち勝たれ、根もなき希望を釀し來り、全心を擧げて情の奴とするは見易き道理なり。

世界は一たび我を犧牲にすると同時に我れなる「己れ」を寫し出す明鏡なり。男女相愛して後始めて社會の眞相を知る。細小なる昆蟲も全く孤立して己が自由に働かず、人間の相集つて社會を爲すや相倚托し、相擁するによりて始めて社會なる者を建成し、維持する事を得るの理も相愛なる第一階を登つて始めて之を知るを得るなれ。獨り棲む中は社會の一分子なる要素全く成立せず、雙個相合して始めて社會の一分子となり、社會に對する己れをば明らかに見る事を得るなり。

男女既に合して一となりたる曉には空行く雲にも顏あるが如く、森に鳴く鳥の聲にも悉く調子あるが如く、昨日といふ過去は幾十年を經たる昔日の如く、今日といふ現在は幾代にも亘るべ實存の如くに感じ、今迄は緣遠かりし社會は急に間近に迫り來り、今迄は深く念頭に掛けざりし儀式も義務も急速に推しかけ來り、俄然其境界を代へしめて無形より有形に入らしめ、無頓着より細心に移らしめ、社會組織の網繩に繫がれて不規則規則にかわり、換言すれば想世界より實世界の擒となり、想世界の不羈を失ふて實世界の束縛となる。風流家の語を以て之を一言すれば婚姻は人を俗化し了する者なり。然れども俗化するは人をして正當の位地に立たしむる所以にして、上帝に對する義務も、人間に對する義務も、古へ人が爛熟たる花に譬へたる德義も、人の正當なる位に立つよりして始めて生ずる者なる可けれ。故に婚姻の人を俗化するは人を眞面目ならしむる所以にして、妄想滅し、實想殖ゆるは人生の正午期に入るの用意を怠らしめざる基ひなる可けむ。厭世家が戀愛に對すること常人よりも激切なるの理由前に既に述べたり。怪しきかな戀愛の厭世家を眩せしむるの容易なるが如くに婚姻は厭世家を失望せしむる事甚だ容易なり。そも〳〵厭世家なるものは社會の規律に遵ふこと能はざる者なり、社會を以て家となさゞる者なり、「世に愛せられす世をも愛せざる者なり」(I love not the world, nor the world me)繩墨の規矩に掣肘せらるゝこと能はざる者なり、「普通の快樂は以て快樂と認められざる者なり」

(My Pleasure is not that of the world etc) 一言すれば彼等が穢土と罵るこの娑婆に於て社會といふ組織を爲す可き資格を缺ける者なり。故に多くの希望を以て多くの想像を以て入りたる婚姻の結合は彼等をして敵地に蹈入らしめたるが如きのみ。彼等が明鏡の裡に我が眞影の寫るを見て益厭世の度を高ふすべきも、婚姻の歡樂は彼等を誠信と樂天に導くには力足らぬなり。

彼等は人世を厭離するの思想こそあれ、人生に羈束せられんことは思ひも寄らぬところなり。婚姻が彼等をして一層社會を嫌厭せしめ、一層義務に背かしめ、一層不滿を多からしむる者是を以てなり。かるが故に始は過重なる希望を以て入りたる婚姻は後に比較的の失望を招かしめ、慘として夫婦相對するが如き事起るなり。

女性は感情の動物なれば愛するよりも愛せらるゝが故に愛すること多きなり。愛を仕向けるよりも愛に酬ゆるこそ其の正當の地位なれ。葛藟となりて幹に纏ひ賁はるが如く男性に倚るものなり、男性の一擧一動を以て喜憂となす者なり、男性の愛情の爲に左右せらるゝ者なり。然るに不幸にして男性の素振に己れを嫌忌するの狀あるを見れば嫉妬も萌すなり、廻り氣も起るなり、恨み苦みも生ずるなり、男性の自ら繰戻すにあらざれば、眞誠の愛情、或は外れて意外の事あるに至る可し。而して既に社會を厭へるもの、破壞的思想に充ちたるもの、世俗の義務及び德義に重きを置かざるもの、即ち彼の厭世詩家に至りては果して能く女性に對する調和を全ふし得可きや。

夫れ詩人は頑物なり。世路を潤步することを好まずして我が自ら造れる天地の中に逍遙する者なり。厭世主義を奉ずる者に至りては、其造れる天地の實世界と懸絕すること甚だ遠しと云ふ可く、婚姻によりて實世界に擒せられたるが爲に、わが理想の小天地は益狹窄なるが如きを覺へて最初には理想の牙城として戀愛したる者が後には忌はしき戀縛となりて我身を制抑するが如く感ずるなり。此に至つて釋氏をして惑哉肉眼吾今觀之從頭至足無一好也と罵り、又た其内甚臭穢外爲嚴飾容加又含毒蟄劇如蛇與龍と叫び、更に又た婦人非常友如燈焰不停彼則是常怨猶如畵石文云々等の語を發せしめ、東洋の厭世致をして長く女性を冷遇するの積弊を起さしめたり。

婚姻と死とは僅に邦語を談ずるを得るの稚兒より墳墓に近づく迄人間の常に口にする所なりとはエマルソンの至言なり。讀本を懷にして校堂に上るの小兒が他の少女に對して互に面を赧ふすることも、假名を便りに草紙讀む幼な心に戀愛の何物なるかを想像することも、皆な是人

生の順序にして正當に戀愛するは正當に世を辭し去ると同一の大法なる可けれ。戀愛によりて人は理想の聚合を得、婚姻によりて想界より實界に擒せられ、死によりて實界と物質界とを脫離す。抑も戀愛の始めは自らの意匠を愛する者にして對手なる女性は假物なれば好しや其愛情益發達するとも遂には狂愛より靜愛に移るの時期ある可し。此靜愛なる者は厭世詩家に取りて一の重荷なるが如くになりて合歡の情或は中折するに至るは豈惜む可きあまりならずや。バイロンが英國を去る時の咏歌の中に「誰れか情婦又は正妻のかこちごとや空涙を眞事とし受くる愚を學ばむ」と言出けむも實に厭世家の心事を暴露せるものなる可し。同作家の「婦人に寄語す」と題する一篇を讀まば英國の如き兩性の間柄嚴格なる國に於てすら斯の如き放言を吐きし詩家の胸奧を覗ふに足る可けむ。

嗚呼不幸なるは女性かな。厭世詩家の前に優美高妙を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通辨となりて其嘲罵する所となり、其冷遇する所となり、終生涙を飲んで寢ねての夢覺めての夢に郎を思ひ郎を恨んで、遂に其愁殺するところとなるぞうたてけれうたてけれ。戀人の破綻して相別れたるは、双方に永久の冬夜を賦與したるが如しと、バイロンは自白せり。

油地獄を讀む

刑鞭を揮ふ獄吏として、自著自評の抗難者として、義捐小說の冷罵者として正直正太夫の名を聞くこと久し。是等の冷罵抗難は正太夫を重からしめしや將た輕からしめしや、そは玆に言ふ可きところならず。余は油地獄と題する一種異樣の小說を得たるを喜び、世評既に定まれりと告ぐる者あるにも拘らず、敢て一言を挿まんとす。

油地獄は小說評註と犬蓼とを合せて綴ぢて附錄の如くす。小說評註は純然たる諷刺にして、當時の文豪を罵殺せんとする毒舌、紙上に躍如たり。然れども其諷刺の原料として取る所の、重に文體にありしを以て見れば、善く罵りしのみにして未だ敵を塵滅するの力あらざりしを知るに足らむ。

油地獄と犬蓼とは結構を異にして想膸一なり。駒之助と貞之進其地位を代へ、其境遇を代ふ

れば貞之進は駒之助たるを得可く、駒之助は貞之進たるを得べし。然り、駒、貞、兩主人公は微かに相異なるを認むるのみ。然れども此暗合を以て著者の想像を狹しと難ずるは大早計なり。何となれば著者の全心は、廣く想像を構へ、複雜なる社會の諸現象を映寫し出でんとにはあらで、或一種の不調子（インコンシステインシー）、或一種の弱性（フレールチー）を目懸けて一散に疾驅したるなればなり。一種の不調子（インコンシステインシー）とは何ぞ。曰く現社會が抱有する魔毒是なり。一種の弱性とは何ぞ。過去現在未來を通ずる人間の戀愛に對する弱點なり。

綠雨は巧に現社界の魔毒を寫出せり。世々良伯は少しく不自然の傾きを示すと雖、今日の社會を距る事甚だ遠しとは言ふ可らず。栗原健介は極めて的實なり。市兵衛の如き阿貞の如き個々皆な生動す。而して美禰子と駒之助に至れば照應甚だ格好。深く今日の社會を學び其奥底に潛める毒龍を捉へ來つて、之を公衆の眼前に斬伐せとの志が正太夫。

何れの社會にも魔毒あり。流星怪しく西に飛ばぬ世の來らば、淺間の嶽の火烟全く絶ゆる世ともならば、社會の魔毒全く其蔕を絶つ事もあるべしや。雲黑く氣重く、身蒸され心塞がれ、迷想頻に蝟集し來る。これ奇なり、怪なり。然れども人間遂にこれを免かること難し。黑雲果して魔か、大氣果して毒か、肉眼の明を以て之を爭ふは詩人にあらざるなり。黑雲悉く魔なるに非ず、大氣悉く毒なるにあらず、啻黑雲に魔あり。大氣に毒ある事を難ぜんとするは實際世界を見るも、實世界以外を見ること能はざる非詩性論者の業として放任して可なり。

吾人は非精無心の草木と共に生活する者にあらず。慾に荒さび情に溺れ、癡に狂する人類の中に棲息する者なり。己れの身邊に春水の優々たるを以て樂天の本義を得たりとする詩人は知らず、齊しく情を解し同じく癡に驅られ、而して己れのみは身を挺して免れたる者の他に對する憐憫と同情は遂に彼をして世を厭ひ、もしくは世を罵るに至らしめざるを得んや。世を厭ふものを以て世を厭ふとするは非なり。世を罵る者を以て世を罵るとするは非なり。世を厭ふ者は世を厭ふに先ちて己れを厭ふなり。世を罵る者は世を罵るに先だちて己れを罵るなり。己れを遺れて世を遺るゝを知る。己を空うして世を空うするを知る。誰れか己れを厭ふ事を知らずして眞の厭世家となり、己れを罵ることを知らずして眞の罵世家となるを得んや。

われは非凡なる綠雨の筆勢を察して、彼が人類の心宮を觀ずるの法は先づ其魔毒よりするを認めたり。彼は人類を一種の軟骨動物と思做し、全く誠信なく、全く忠誠なく、心宮中に横威を奮

ふ一種の怪魔か自由に人類を支配しつゝありて、唱々奇怪至極の此社會かなと觀念し來りて、之を奸猾なる健介に寓し、之を窈窕たる美形美禰子に箝め、之を權勢者なる世々良伯に寄す。之を小歌に擬し、下宿屋の女主に份す。著者の眼中社會の腐濁を透視し、人類の運命が是等の魔毒に接觸する時に如何になる可きや迄甚深に透徹す。是點より觀察すれば著者は一個の諷刺家なり。然れども著者の諷刺は諷刺家としての諷刺なる事を記臆せざる可からず。自然詩人の諷刺は諷刺するの止むを得ざるに至りて始めて諷刺す。始めより諷刺の念ありて諷刺するにあらざるなり。始めより諷刺せんとの念を以て諷刺する者は自ら卑野の形あり。宜なるかな諷刺大王(スウイフト)を除くの外に絶大の諷刺を出す者なきや。

スウイフトの諷刺せし如く、スウイフトの嘲罵したる如くに沙翁も亦諷刺の舌を有し、嘲罵の喉を持しなり。然れども沙翁の諷刺嘲罵は平々坦々たる冷語の中に存し、スウイフトは熾熱せる痛語の中にあり。ハムレットに吐露せし沙翁が滿腔の太嘲罵は自ら冒犯す可からざる威容を備ふるを見れど、スウイフトの痛烈なる嘲罵は炎々たる火燄には似れど、未だ陽日の赫耀たるには及ばず。

諷刺にも二種ありと見るは非か。一は假時的(テンポラル)なり、他は永遠にして三世に亘るなり。假時的なる者は一時の現象を對手とし、永遠なる者は人世の秘奥を以て對手とす。政治を刺し社會を諷する者等は第一種にして、人生の不可避なる傷痍を痛刺して自らも涙底に倒れんとするが如き者は第二種なり。第一種は第二種よりも多く直接の視察(オブザバンス)より暴發し、第二種は第一種よりも多く哲學的觀察によりて湧生す。

第二種のものは戯曲其他の部門に隱れて、第一種の者のみ諷刺の名を縱にする者の如し。一時の現象を罵り、政治若くは社會の汚濁を痛罵するを以て諷刺家の業は卒れる者と思ふは非にして、一時の現象を透視するの眼光は萬古の現象にも透視すべき筈なり。一現象は他の現象と脈絡相通ずるをも徹視すべき筈なり。故に諷刺家は假時的(テンポラル)なりとして賤しむ可きにあらず、一現象の中に他の永遠の現象を映影せしむるを得べければなり。エゴイズムを外にし、狂熱を冷散するとも別に諷刺の元質世に充盈せりと見るは非か。

綠雨は果して渾身是諷刺なるや否やを知らず。譬諭に乏しく構想のゆかしからぬ所より言へば未だ以て諷刺家と稱するには勝へざるべし。然れども油、犬、兩篇を取つて精讀すれば溢るゝ

ばかりに冷罵の口調あるを見ざらんと欲するも得べからず。而して疑ふ、彼の冷罵は如何なる對手に向ふて投ぐる礫なるや。對手なくして冷罵すと言はゞ彼は冷罵せんが爲に冷罵し、諷刺せんが爲に諷刺する者にして、世は彼を重んずること能はざるべし。對手ありて冷罵すとせば如何なる對手にてやあらむ。對手は能く冷罵者を輕重す可ければ、この吟味も亦た苟且にす可からず。

曰く社會なり。彼は能く現社會を洞察す。特に或る一部分の妖魔を捕捉するの怪力を有す。此點より見れば彼は一個の寫實なり。油地獄に書生の墮落を描くところなどは宛然たる寫實家なり。然れども彼に寫實家の稱を與ふるは非なり。彼は寫實の點より筆を着せず、諷刺の點より筆を着したればなり。唯だ譬諭なきが故に諷刺よりも寫實に近からんとしたるなり。彼は寫實家が社會の實相を描出せんとするが如くならで、諷刺家が世を罵倒せんとて筆を染るが如くす。彼が胸中を往來する者は人間界の魔窟なり、人間界の怪魅なり、心宮内の妖婆なり。彼れ能く是等の者を實存界に活け來つて冷罵輕妙の筆を揮ひ、能く人生の實態を描ける者豈凡筆ならんや。彼は諷刺家と言はるゝこと能はず、寫實家と稱へらるゝこと能はず、諷刺家と寫實家を兼有せる小説家と名けなばいかに。

抱一庵の「曇天」想高く氣秀いで、一世を驚かすに足るべき小説なりしも世は遂に左程に歡迎する事なかりし。其故如何となれば、彼は暗々裡に佛國想を擔ひ入れて奇拔は以て人を驚かすに足りしかども、遂に純然たる日本想の一日劍に及ばざるを奈何せむ。辻淨瑠理、巧緻を極めたりしも遂に風流佛に較す可き樣もなし。外國想が日本想の純全なるに加かず。一片相が少くとも圓滿相に如かざることを是なりと認め得ば、余は綠雨が、社會の諸共に認めて妖魔とし魅窟とするの處一片相を取り來つて、以て社會全體を刺すの材料とせるを惜まずんばある可からず。奇想却つて平凡の如くに見ゆ、妙刺却つて痴言の如くに聞へ、快罵却つて不平の如くに感ぜらる。斯の如きもの綠雨が撰みたる材料の不自然にして顯著に過ぎたるものなりしことより起るなり。何が故に不自然なりと云ふ、曰く社會の魔毒は綠雨が撰みたる材料の上には商標の如くに見はるれば、之を罵倒するは鴉の黑きを笑ひ、鷺の白きを罵るが如く感ぜらるればなり。罵倒する材料すでに如此なれば其痛罵も的を外れ、諷刺も神に入らざるこそ道理なれ。又た惜しむべし。

惜む惜む、この諷刺の盈々たる氣を以て譬諭の面を被らず、素面にして出たることを。惜む惜む、この寫實の妙腕を以て徒らに書生の墮落といへる狹き觀察に偏したることを。君に寫實の能

なしとは言はず。天下君を指目するに皮肉家を以てす。君何んすれぞ一瞰して一世を罵倒するの大譬論を構へざる。小説評註は些技なり。小説家幾人ありとも未だ罵倒すべき巨幹とはならざるを知らずや。罵倒すべき者あり、爆發彈を行る虚無黨が敵を倒す時に自らも共に倒れて、同じく硝煙の中に露と消ゆるの趣味を能く解せば、いざ語らむ、現社界とは言はず、幾千年の過去より幾千年の未來に亘る可き人間の大不調子是なり。

この評を草する時傍らに人あり、余に告げて曰く、駒之助と云ひ、貞之進と云ひ、餘りに輭弱なる人物を主人公に取りしにはあらずやと。余笑つて曰く、是れ即ち緑雨が冷罵に長ずる所以なり。緑雨は寫實家の如くに細心なれども、寫實家の如くに自然を獵ること能はず。彼は貞之進を鑄る時既に八萬の書生を罵らんことを思ひ、駒之助を作る時に既に唐樣を學得せる若旦那を痛罵せんとするのみにて、自然不自然は彼に取りて第二の問題なればなりと。

不自然は即ち不自然ながら、緑雨も亦た全く不哲學的なるにはあらず。駒之助の實情と、その物狂ひを寫せるところ、眞に迫りて露伴が悟り過ぎたる諷刺よりも面白し。諷刺を離れ、冷罵を離れたるところ斯般の妙趣あり。戯曲的なる犬蓼寫實的なる油地獄。われは、あつぱれ明治二十四年の出色文字と信ず。われは此書を評すとは言はず、只だ奥州より歸りて二日、机上の一册子を取つて讀みしもの即ち此書にてありければ、讀過する數時間に余が腦中に浮び出たる感念を其儘筆に任せて書き了り、思量する暇もあらず。冷罵の事、諷刺の事、當らざるの説多からむ。識者の是正を待つ。

伽羅枕及び新葉末集

一は實を主とし、一は想を旨とする紅葉と露伴、一は客觀的實相を尚び、一は主觀的心想を重んずる當代の兩名家。紅葉は伽羅枕を露伴は辻淨瑠理を、時を同うして作り出でたり。此二書に就き世評既に定まれるにも拘らず、余は聊、余が讀來り讀去る間に念頭に浮びし感を記する事となしぬ。

余は二作を讀み了りける後、奇しくも實想相分るゝ二大家の作に同致（フィデンチティ）の跡、瞭然見る可き

者あるを認めぬ。從來の諸作は分明に紅葉をして細微なる人情の觀察者たらしめ、露伴をして逸調の奇想を吐く者たらしめたるに、不思議にも伽羅枕及新葉末集に至りて兩家の意匠の其外部の形式の如何に拘らず陰然相似たる所あるが如し。

紅葉の佐太夫は女性にして、露伴の道也は男性なり。然れども兩著者の意匠中に入りて其奥を窺へば、佐太夫も道也も男女の境を脱して、混沌として唯だ兩主人公の元素同一なるを認むべきのみ。佐太夫とは歴々武士の落胤、道也とは名家釜師のなれの果て、其生立を聞けば彼も母一人、此も母一人、彼は娼家に養はれ、此は遊蕩と呼ぶ母に嬭養はる。彼は賣色場裡に人と成り、此も好色修行に身を抛ち、彼も華奢豪逸を以て心事となし、此も銀むくの煙管を路傍の狗に與へて去るの傲遊を以て快事となす。此等の同致を列記すれば際限あらじ。然れ雖、余が此二作意匠相似たりと言ふは此等外部の同致のみにあらず、作家着想の根本に入りて理想の同致あるを認めたればなり。

若し推して言ふ事を得せしめば、紅葉は露伴の長所に、少くとも乘入らんとせしなり。而して露伴も亦た對髑髏、奇男兒等の鋭利なる奇想を廻り遠しとや思ひけむ、紅葉獨得の寫實界にまぐれ込まむとの野心を抱きしなり。故に伽羅枕は紅葉從來の作に見る可からざる奇氣を吐けり。而して新葉末は露伴が登壇以來見せし事なき人情の微妙を細察したり。然れども余は兩作家の位地全然轉倒したりと言ふにはあらず、唯だ紅葉は露伴に近づき、露伴も亦た紅葉に近寄り、而して紅葉は紅葉の本體を備へ、露伴は露伴の實色をあらはすと言ふのみ。某評者の言へりし如く佐太夫の生涯は江戸の苦海に沈みし後、前半部とは全く異れる人物となれり。又た同評者の言はれし如く所々に時代違ひの如き者あり。要するに彼が其實娣に會ひて後の心想は全く變じて前半部若し紅葉獨得の寫實筆法なりせば、後半部はむしろ理想――遊廓内の女豪傑を寫す筆法を變じ來りて、往々にして有り得べからざるが如き事實を寫し出す事他の諸作に比して不似合なるを覺へしむ。究竟するに紅葉は實を寫す特有の天才より移つて、佐太夫なる或意味に於ての理想的傳記を畵き出たるを以て、平常の細微巧麗なる紅葉の作を讀み慣れたる眼には何となく琴曲を欲ふ時に薩摩琵琶を聞くが如きの感あるなれ。余は佐太夫を以て紅葉の理想なりとは斷ぜず、唯だ其性質の天晴傾城の神とも言はる可き程なるを見て、紅葉は寫實の點より墨を染めたりと言はんより、寧ろ理想上の一紅唇、「兩刀を横へて、いかめし作りの胸毛男を、いくたりとな

く隨伴に連れたる娣が身を眼下に見下さんほどの粹の粹、廓内にての女豪傑になつたる佐太夫を主觀的に畫き出たりと見るは非か。

去つて新葉末集を讀め。風流佛、一口劍等に幽妙なる小天地想を謳ひ、一種奇氣拔く可らざる哲理を含みたる露伴の詩骨は徒らに「心機靈活の妖物」なる道也の影に痩せさらばひぬ。道也は實に一妖物なり、奇物なり。露伴にあらずんば誰か能く斯般の妖物奇物を擒にせん。平凡無癖を以て愚物なりとし、一癖あるにあらざれば談ずるに足らずとする露伴に道也あるは無理ならぬ事なり。蓋し理想詩人の性として必らず人生を其或る一面相より觀察する者なる故に、道也が奇男兒を作りたる詩人の懷裡に宿りたるは無理ならぬ事なり。然れども道也は理想上の人物として、佐太夫と共に心機靈活の妖物として、遊廓内の豪傑として、粹の粹として、遂に佐太夫程に妙ならず。理想家としての露伴が寫實家なる紅葉のこの種の理想に於て少しく席を讓りたるを惜しむ。然れども元よりこの種の理想に於て優劣を較するの愚を、われ學ぶ者ならず。若し夫れ明治の想實兩大家が遊廓内の理想上の豪傑や畫くに汲々し、我が文學をして再び元錄の昔に返らしむる事あらば吾人の遺憾いかばかりぞや。

この兩著書に於て二大家相邇近したりとは前に述べたる所なるが、偖て兩著書の相邇近したる中心點は何處に存するや。言を換へて云へば兩著書が小極致とするところは何れにありや、何れにありて同致を見はすや。曰く兩書共に元祿文學の心臓を穿ち、之に思ひ〳〵の裝束を着けて出たるところにあり。或人は此書に於て露伴の文章漸く西鶴を離れて獨創の體を出せりと言ひしが、文章に於ては或は然あらんかなれども、其想に至りては却て元祿を學ぶこと前の著述よりも多きに似たるを怪しむ伽羅枕が紅葉の一代女にして、公けに元祿を代表する事批評家既に言へり。われ二大家を以て元祿作家の摸擬者と貶する者ならず。別に天眞の詩才ありて存すること我が深く二大家に信ずる所なるが、可惜此二書の世に出たるより余をしてかねて元祿文學に面白からずと思ひしところを、此二書を通じて訴へ出づるの止むを得ざるに至らしめぬ。

そも元祿文學の輕佻なるは其章句の不羈放逸なるが故のみならずして、其想臓の輕佻なるが故なり。謠曲時代の幽玄なる思想を見ざるのみならず、優美高妙なる精神を失ひたるのみならず、遊廓内に生長したるのみならず、是等の者を外にしても元祿文學が大に我邦文學に罪を造りたる者あり。其を如何にと言ふに戀愛を其自然なる地位より退けたる事即ち是なり。戀愛な

る者は人生の秘機を說明すべき妖女にして、戀愛を除きたる曉には恐らく美術も文學も價なき珠となり果つべけん。彼の輕佻なる元祿文學は遊廓内の理想家とも言つべき魔道文學者、好し其始祖には何か拔く可からざる一貫の見識ありたりとせんも、其相續者、摸擬者等の文學上の位地を看れば、恐らく遊廓を以て彼等の天園と見做し、正路を步むの人を愚物視し、人生の大不調子、大不都合を見るよりも寧ろ小頑小癖小不調子小不都合の眼を具するを尙び、偏曲輭弱なる意氣より朴直なる野暮の中に隱れたる美を嘲り、至善至惡に對する妙念は殘らず擺脫し去りて只だ慾火炎上の曲りくねりたる一時のすゞしさを此上なき者と珍重す。夫れ戀愛は花なり、造化の花なり、之を碧玉瓶中に見るよりも墨陀境上に見るに美の價あり。然れども去て吉野の物さびたる造化の深き峯のあたりに見るに其美其妙塵垢に近き墨陀の外に勝る事幾倍なるを知るべし。何となれば花は造化の天使（ネーチューナ）なるが故に尊きにて、造化の威嚴と妙契とが深ければ深き程其花の妙は尊きなれ。戀愛も亦た斯くの如く造化の妙契と威嚴に遠ざかるところには如何に豪逸奢美を粧ふとも其美其妙は枯瘦して、濱の砂地に生へたる小草のあはれ氣に咲く花の如けんかし。遊廓は即ち砂地なり、其中に生へたる花は即ち遊廓的戀愛なり。美の眞ならず自然ならぬ事多言を用ひずして明瞭なる可し。さりとて元祿文學が遊廓内の事のみを主としたりと言ふにはあらず、然れども元祿文學者の戀愛に對する思想は好し純然たる遊廓外の素人を寫す場合にも宛然として遊廓的戀愛、即ち世に所謂好色的戀愛を主としたる事實は一點の辨折を容るゝの餘地なかるべし。思へ、好色と戀愛と文學上に幾許の懸隔あるを。好色は人類の最下等の獸性を縱にしたるもの。戀愛は人類の靈生の美妙を發暢すべき者なる事を。好色を寫す、即ち人類を自墮落の獸界に追ふ者にして、眞の戀愛を寫す、即ち人間をして美を備へ靈を具する者となす事を。好色教導者となり、通辨官となりつる女士は即ち人類を驅つて下等動物とならしめ、且つ文學上に至妙至美なる戀愛を殘害する者なる事を。

粹を論して伽羅枕に及ぶ

心して我文學史を讀む者必らず德川氏文學中に粹なる者の勢力おろそかならざりしを見む。

巣林子以前に多く此語を見ず。其尤も盛なるは八文字屋以後にありと云ふべし。彼の所謂、洒落本、こんにやく本、及び草双紙類の作家が唯一の理想とし、武道の士の八幡摩利支天に於けるが如く此粋樣を仰ぎ尊みたるの跡滅す可からず。

粋樣の系統を訊ぬれば平安朝の風雅之れが遠祖なり。證を換へて言へば日本固有の美術心より自然的屈曲を經て玆に至りしなり。而して其尤も近き親は戯曲と遊廓とにてありしなり。戯曲の事は他日論ず可ければ此には省きつ。遊廓と粋樣の關係に就きては一言するも無益ならざるべし。抑も當時武門の權勢漸く内に衰へて、華美を競ひ遊惰を事とするに及びて、風教を維持す可き者とては僅に朱子學を宗とする儒教ありしのみ。而して儒教の風教を支配する事能はざるは往時伊太利に羅馬教の勢力地に墮ちて教會は唯だ集會所たるが如き觀ありしと同樣の事實なり。然るに各藩の執政者にして杞憂ある者は法を嚴にし戒を布きて、以て風俗の狂瀾を遮ぎり止めんと試みけれども、遂に如何ともする能はず、外には嚴格を裝ひたる武士道の勇者も、内は言ひ甲斐なき遊冶郎にてありし。泰平と安逸とは人心を驅つて遊蕩に導くは古今歴史上の通弊なり。德川氏三百年の治世の下に遊廓の勢力甚だ蔓延したりしも亦た止を得ざる事實なり。

勇武の士氣漸く衰へ、儒道は僅に一流の人心を抑へ、滔々たる遊蕩の氣風世に流るゝに當つて粋樣なる文學上の理想世に出でたり。而して先明を遊廓内に放てり。武士も紳士も此粋樣を仰ぎ尊みたり。遊冶社會の本尊佛として、色道修行者の最後の勝利として、此粋樣に歸依する者甚だ多かりき。然れども粋樣と相照應して共に威光を輝かしたる者こそあれ。そを何と言ふに其頃盛なりし俠客道なり。蓋し粋は愛情の公然ならぬより其障子外に發生せしもの、俠は武士道の軟弱になりしより其屏風外に發達せしもの、此二者物異なれども其原因は同樣にして娣と弟との關係あり。然るが故に粋は俠を待つて益々粋に俠は粋を賴みて益俠に、この二者隱然、宗教及び道教以外に一教門を形成したるが如し。

粋と俠とは遊蕩の敗風より生じ、遊廓を以てテンプルとなしたる事前に言へるが如し。然れども、當時の文學中の最大部分たる洒落本、戯作の類の大に之に與りて力ありし事を思はざる可からず。當時の作家は概ね遊廓内の理想家にして且つ遊廓場裡の寫實家なりしなり。愛情を高潔なる自然の意義より解釋せず、遊廓内の腐敗せる血涙中より之を面白氣に畫き出でたる者にて、遊廓内の理想を世に紹介し世に敎導したる者實に彼等の罪なり。

粋と俠とは遊廓内に生長したり。而して作家は之を世に敎へたり。西鶴其積より下つて近世の春水谷峨の一流に至るまで、多くは全心を注いで此粋と俠とを寫さんことをつとめたり。抑も粋は人の好むところ、俠も人の愛するところ、然れども粋をして必らずしも身を食ふ虫とならしめ、俠をして必らずしも身を傷ふものとならしめしは先代の作家大に其罪を負はざる可からず。

左りながら余は粋と俠とを我が文學史より抽き去らん事を願ふ者にあらず。先にも言へる如く嚴格なる封建制度の下にありて、淫靡を制する權とては儒敎の外になく、宗敎の勢力は全く此點に及ぼすところなく、唯だ覺束なき儒敎の以て萬法自然なる戀愛を制抑しつゝありしのみなる世に、斯かる變體の佛出現ましまして、以て戀愛の衆生を濟度したるは自然の勢なるべし。粋樣と俠樣とが相聯つて當時の文士の理想となりしも怪む可き事にはあらず。

紅葉は當今の歐化主義に逆つて起りし文人なり。純粋の日本思想を以て文壇に重きを持する者なり。われ之を彼が從來の著書に徵して知り、而して伽羅枕に對して初めて其說を堅ふするを得たり。粋と俠とは從來の諸文士の理想なりしに今日の紅葉にして鞭を舉げて此問題に進まんとは余の期せざりしところなり。さはれ紅葉は德川時代の所謂好色文士とは品異れり。一篇の想臆好色を畫くよりも寧ろ粋と俠とを狹き意味の理想に凝らし出でたりと見るは非か。既に紅葉は廓内の理想家にあらず。而して粋と俠とを寫す必らずしも之を崇拜しての著述にあらずとするも正しく粋と俠とを以て主眼となしたるは疑ふ可からざるが如し。余は此書の價値を論ずるよりも寧ろ此著の精神を覗ふを主とするなり。即ち紅葉が粋と俠とを集めて一美人を作り、其一代記を書したる中に如何なる美があるを探らんとするなり。

われ曾て粋と戀愛との關係を想ひて惑ひし事あり。そは舊作家の畫き出せる粋なる者眞の戀愛とは異なる節多ければなり。粋と戀愛とは何處かの點に於て相撞着するかに思はるゝは非か。試に少しく之を言はむ。

戀愛の性は元と白晝の如くなり得る者にあらず。若し戀愛の性をして白晝の如くならしめば古來大作名篇なる者得難かるべし。戀愛が盲目なればこそ痛苦もあり悲哀もあるなれ。また非常の歡樂、希望、想像等もあるなれ。「戀と哀は種一つ」と巢林子が歌ひけるも戀愛が白晝の如くならざるよりの事なり。故に戀愛が人を盲目にし、人を癡愚にし、人を燥狂にし、人を迷亂さす

ればこそ古今の名作あるなれ。而して古今の名作は爰を以て造化自然の神に貫ぬくを得て名作たるを得る所以なり。然るに彼の粹なる者は幾分か是の理に背きて白晝の如くなるを旨とするに似たり。盲目ならざるを尊ぶに似たり。戀愛に溺れ惑ふ者を見て粹は之を笑ふ。總じて迷はざるを以て粹の本旨となすが如し。粹は智に近し、即ち迷道に智を用ゆる者。粹は德に近し、即ち不道に道を立つる者。粹は仁に近し、即ち魔境に他を慈しむ者。粹は義に近し、粹は信に粹し、假僞界に信義を守る者。乃ち迷へる内に迷はぬを重んじ、不德界に君子たる可きことを以て粹道の極意とはするならし。之れ即ち戀愛の本性と相背反する第一點なり。凡て戀愛は斯の如き者ならず、粹道は戀愛道に對する躓石ならんかし。近く人口に鱠炙する文里の談(はなし)の如き尤も此說を固からしむるに足る可し。

次に粹道と戀愛と相撞着すべき點は粹の雙愛的ならざる事なり。抑も粹は迷はずして戀するを旨とする者なり。故に他を迷はすとも自らは迷はぬを法となすやに覺ゆ。若し自ら迷はゞ粹の價値既に一歩を退くやの感あり。迷へば癡なるべし。癡なれば如何にして粹を立拔く事を得べき。粹の智は迷によりて已に失ひ去られ、不粹の戀愛に墮つるをこそ粹の落第と言はめ。故に苟くも粹を立拔かんとせば文里が靡かぬ者を遂に靡かす迄に心を隱かに用ひて、而して靡きたる後に身を引くを以て最好の粹想とすべし。我も迷はず、彼も迷はざる戀も粹なり。彼迷ひ、我迷はざる間も或は粹なり。然れども我も迷ひ彼も迷ふ時既に眞の粹にあらず。

今伽羅枕を讀むに粹の粹を寫さんとせし跡歷々として見受けらる。佐太夫なる一美形の生涯に想像したるところを悉く此粹に歸す可きにはあらねど、其境界より見れば、即ち世の俗粹をたらかし盡し、世の金銀を砂礫と見做し、世の榮華を色道の中に收め盡さんとせし心意氣を見れば彼れの出家前の日々の生涯の半ばは粹道の極意を貫ぬくにありし事知る可し。讀者若し詳に伽羅枕の後半部を讀まば彼の義氣、彼の俠氣、彼の毒氣とを兼ね合せて、一條の粹拔く可からざるあるを見む。其田島に對するを見よ、其幼兒に對するを見よ、其幸三に嫁して後に正助の囑みに應じて富四郎を難なく說き伏せたる後又た正助にも股を喰はせし粹氣を見よ。而して最後に猛然悔悟して横死せしめし三十有餘の癡漢の冥福を祈るに至りしを見よ。之れ即ち粹の本性にはあらずや。

佐太夫始めより眞の粹を味はゝざるに似たり。對手とするところ多くは霜頭の老爺にして自

らを盲目とすべきものに會はざりし。否な會はざるにあらざるべし。作者の彼を寫して粹癖を見はすや已に戀愛と呼べる不粹者を度外視してかゝれるを知らざる可からず。粹癖なる者の、堅固なる戀愛の敵にして凡てのフレールチーと相伴はざるを表はすを知らざる可からず。粹の凝りたる者には如何なる者も矢を向くる事能はざるを示せし著者の粹道の理想高しと言はざる可からず。「義理と情には脆くして人一倍の泣蟲と」(八十五頁)佐太夫には言はせたれど、この義理と情にも我が粹癖はうち勝つ者なる事は讀者の酌み取る餘情に任せたり。「佐太夫居常寛濶にして云々」(八十頁)と著者は言ひたれども其寛濶も粹癖と相戰ひて恐ろしき毒氣を吐くことあるも讀者の見るまゝに任せたり。人生榮枯の大理も讀むまゝに讀ませたり。好色本として粹を畫かず、粹の理想を元として粹を畫きたるところ余が此篇に向つて感ずるところなり。余は此著の價値を論ぜんと試みしにあらず、此著を讀み去る間に余が念頭に浮びたる丈の粹の理を摘んで斯くは筆になしたるのみ。若し粹の本體に至りては他日更に詳論するところあるべし。

松島に於て芭蕉翁を讀む

余が松島に入りたるは四月十日の夜なりき。奥の細道に記する所を見れば松尾桃青翁が松島に入りたる、明治と文化との差別こそあれ、同じく四月十日の午の刻近くなりしとなり。余が此の北奥の洞庭西湖に輕鞋を踏入れし時は風すさび樹鳴り物凄き心地せられて、中々に外面に出でゝ島の夜景を眺むべき樣もなかりき。然れども、われ既に扶桑衆美の勝地にあり、わが遊魂いかでか飄乎としてそゝり出で、以て靈境の美神と相通化せざるを得んや。

寢床われを呑み、睡眠われを無何有鄕に抱き去らんとす。然れ共われは生命ある靈景と相契和しつゝあるなり。枕頭の燈火誰が爲に廣室を守るぞ。憫むべし燈火は客を守るべき職に忠信にして、客は臥中にあれども既に無きを知らざるなり。燈火よ客の魂は魄となりしか、ならざるか、飛遊して室中には留らず。汝何すれぞ守るべき客ありと想ふや。

また滅。滅又明。此際燈火はわれを愚弄する者の如し。燈火われを愚弄するか、われ燈火を愚弄するか、人生われを愚弄するか、われ人生を愚弄するか、自然われを欺くか、われ自然を欺くか、美術われを眩するか、われ美術を眩するか、韻。美。是等の者われを毒するか、われ是等の者を毒するか、詩。文。是等の者果して魔か、是等の者果して實か。

燈火再び晃々たり。われ之を惡くむ。内界の紛擾せる時に、われは寧ろ外界の諸識別を遠けて暗黑と寂寞とを迎ふるの念あり。内界に鑿入する事深くして外界の地層を沒却するは自然なり。内界は悲戀を釀すの場なる事を知りながら、われは其悲戀に近より、其悲戀に刺されん事を樂しむ心あるを奈何せむ。手を伸べて燈を搖き消せば今までは松の軒に佇み居たる小鬼大鬼共哄々と笑ひ興じてわが廣間を塡むる迄に入り來れり。而して、われは一々彼等を迎接せざりしかども半醒半睡の間に彼儕の相貌の梗概を認識せり。

小鬼大鬼われを圍めり。然れども彼等は悉く暴戾惡逆なる者のみにあらず。悉く兇横なる暴威を逞うする者のみならず。中にはわが枕頭に來つて幼稚なる遊戯をなしつ嘻笑する者もあるなり。何となく心重くなりたれば夜具の袖を擧げて一たび拂ふに、大鬼小鬼其影を留めず消ゑ失せぬ。少時にして喧笑放語傍若無人なる事前の如し。餘りにうるさくなりたれば枕を蹴つて立上り、一隅の圓柱に倚つて無言するに、大小の鬼儕再び來らず。靜かに思へば鬼の形しけるは我身を纏ふ百八煩惱の現體なりける。

靜坐稍久し無言の妙漸く熟す。暗寂の好味將に佳境に進まんとする時、破笠弊衣の一老叟わが前に顯はれぬ。われ仍ほ無言なり。彼も唇を結びて物言はず。

彼は無言にして我が前を過ぎぬ。暫らくして其形影を見失ひぬ。彼は無言にして來り、無言にして去れり。然はあれども彼の無言こそは我に對して絕高の雄辯なりしなれ。知る人は知らむ、桃青翁松島に遊びて句を成さずして西歸せしを。而して我を蓋ひし暗の幕は我をして明らかに桃青翁を見るの便を與へたり。

怪しくも余は松島を冥想するの念よりも、一句を成さず西歸せし芭蕉翁の無言を讀むの樂みに耽りたり。古へより名山名水は詩客文士の至寶なり、生命なり。然れども造化の秘藏なる名山、名水は往々にして韻高からず、調備はらざる文士の爲めに其粹美を失却する事あるを免かれず。

飄遊は吾性なり。飄遊せざれば吾性は完からざるが如き感あり。天地、粹あり、山水、美あり。造

化之を包みて景勝の地に於て其一端を露はすなり。詩性ある者が景勝の地に來りて神動き氣躍るは至當の理なり。然れども景勝の地は僅に造化が包裡する粹美の一端なる事を知らば、景勝其自身に對する觀念は甚だ大ならずして景勝を通じ風光を貫いて造化の秘藏に進み、其粹美を領得するは豈詩人の職にあらずや。如何にして造化の秘藏に進み、粹美を縱にすることを得む、如何にして俗韻を脫し高邁なる逸興を樂むを得む。請ふ共に無言なる芭蕉翁に聽かむ。

「美」は遂に說明し盡す能はざる者なり。「美」は肉眼の輕佻なる判斷によりて凡人に誤解せらるゝと同じく、雄大なる詩人哲學者をも眩惑しつゝある者なり。至妙なる繪畫能く人を妖魅す。然れども繪畫の妙工も一種の妖魅力に過ぎざるを奈何せむ。吾人眞如を捕捉すと思ふ時に眞如の燦然たる光は眞如を惑はし去る。「美」を觀るの眼も亦た斯の如し。正面に立つて「美」を觀る事は雲のかゝりたる時の外はかなはず。迷宮の中にあつて「美」の所在を爭ひ、右に走り左に馳せ、東に疲れ西に憊るゝ者比々皆な是なり。韻士は力を籠めて韻致を探り、哲學者は思ひを凝らして析解を試むるも、迷宮の迷宮たるは始めより今に至るまで大に變るところはあらざらむ。

然れども迷宮と知つて迷宮に入るは文士の樂しむところにして、迷宮に入る事能はざるは文士の悲しむ所なり。古へより文士の景勝を探る者未だ迷宮に入らざるに、未だ妖魅を受けざるに、未だ造化の秘に近かざるに、先づ筆管を握つて秀句を吐かんとする者多し。造化に對して禮を失ふ者と云ふべし。彼等は彫琢したる巧句を得べし。然れども妖魅せられざる前の巧句は人工なり、安んぞ神靈に動かされたる天工の奇句を咏出する事を得んや。ひとり探景の詩文のみに就きて云ふにあらず、凡ての文章が神に入ると神に入らざるとは即ち此境にあり。古來の大作名著が神に入れるは孰れ神靈に動かさるゝを待ちて筆を握らざる者のあるべき。一たび妖魅せらるゝは蓋し後に澄清なる識別を得るの始めなるべけれ。

景勝は多少のインスピレイションを何人にも與ふる者なり。故に景勝は如何なる田夫野郎をも詩氣を帶びて逍遙する者とならしむるなり。然るに所謂詩客なる者多くは景勝を以て詩を成さゞる可らざる所と思ふ。景勝をして自然に詩を作らしめず、自ら强いて詩を作らんとす。こは實に設題して歌を作る歌人の惡風と共に日東の陋習なり。彼等をして造詩家たらしむるも、詩人たらしめざるも玆に存す。彼等をして作調家たらしむるも、入神詩家たらしめざる者玆に存す。而して此事ひとり景勝を咏ずる詩人に限るに非ず、人間の運命を極めんとする近代の意味に於

ての文學家が、筆に役せられて文の神を失ふも皆此理に外ならず。試に思へ當年芭蕉の俳句を作らざる可らざるは、今日の文人が文章を揑造せざる可らざるよりも甚しかりしを。況や扶桑第一の好風に遊で一句を作さずして歸りし事如何許の耻辱にてありけむ。然るも凡庸の作調家が爲すこと能はざる所を芭蕉は爲せり。芭蕉が余の前にひろがれる一卷の書なること是を以てなり。

われ常に謂へらく、絶大の景色は文字を殺す者なりと。然るに、われ新に悟るところあり、即ち絶大の景色は獨り文字を殺すのみにあらずして「我」をも沒了する者なる事なり。絶大の景色に對する時に詞句全く盡るは即ち「我」の全部既に沒了し去られ、恍惚として、わが此にあるか、彼にあるかを知らずなり。彼は我を偸み去るなり。否我は彼に隨ひ行くなり。立々不識の中にわれは「我」を失ふなり。而して我も凡ての物も一に歸し廣大なる一が凡てを占領す。無差別となり、虛無となり、糢糊として踪跡すべからざる者となるなり。澹乎たり、廖廓たり。廣大なる一は不繫の舟の如し。誰れか能く控縛する事を得んや。こゝに至れば詩歌なく、景色なく、何れを我、何れを彼と見分る術なきなり。之を冥交と曰ひ、契合とも號くるなれ。

冥交、契合の長短は靈韻を享くるの多少なり。靈韻を享くるの多少は後に產出すべき詩歌の靈、不靈なり。冥交契合の長き時は自ら山川草木の中に己れと同樣の生命を認め來つて、一條の萬有的精神を遠暢し、唯一の裡に圓成せる眞美を認め、われ彼れが一部分か、彼れわが一部分かと疑ふ迄に風光の中に己れを箝入し得るなり。この時に當つて句を求むるも得べからず。作調家(テユニイムスト)は遠く離れたり。詩人は斯る境界にあつて句なきを甘んずべし。蕉翁が松島に遊びて句なかりしは果して余が讀むところの如くなりしか、或は非か。一卷余が爲には善知識なり、說の當非は暫らく措きて、余が松洲に泊せし一夜の感慨は斯くの如し。家に歸りて奧の細道を閱するに蕉翁は左の如く松島に於て誌せり。

ちはや振神のむかし大山ずみのなせる業にや造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞を盡さむ。

第二篇　高輪東漸寺境内にて

明治二十五年五月より
同年八月まで

蓮華草

咲くも迅し散るも迅し春の花、たのしみしも速し、かなしみしも速し人の戀。定まりなき世に定まりあるものを求め、心なきものに心あらんことを願ふ人の迷ひのはかなさよ。

村雨は空に宿なきものか、など人の袂を犯すこと多き。ぬるゝことをたのしむ燕ならば雨の中をいとはまじ。美くしく、濁りなき優しの魂に、その雨のかゝりがちなるは何たる事ぞ。訝かれば訝かるべし世のならひ、何の譬ぞ美と醜とは。

友と連立ちて廣尾に遊びたるは一村雨を讀みたる同じ日なり。野面を見渡すかぎり美くしきむしろを布きつめたる花の心はさていかに。誰が爲めに?。造化は汝にありて至美をあらはすに汝は虚心にて野にかゞやくか、または摘む人の手を招き寄て自ら散るを早むるか。摘む人に罪ありと言はゞ、摘まゝる者にも罪はあるべし。兎角、野の奥の人の浮かれ來ぬあたりに咲ける

花やめでたかるべし。

摘むものに眞心あれかし、摘まるゝものにもまことあれよと祈るなり。花は散るべし、いつまでか戀の影に人は迷はむ春の魅力長かれと願ふは愚なり、花は散るべき時に惜しむべからず、花は散るとも人のまことは常にのこるべし。造化の美を宿す汝は幸なるかな。然はあれども汝が美は汝の皮膚にありと思ふなかれ。皮膚の全く腐爛して後に汝にのこるべきものあり。これぞ我が慕ふ美なるぞかし。われは汝が靈の涙をもてひとつ〳〵の珠と爲すものにあらず、吾は汝が聲をもて悉く天女の樂なりとする者にあらず、惟だ折々に汝の中懷より溢れ出る造化の美を見る時に汝を天界のものと崇む、わが戀は卽ち是なり。

村雨の汝が袂に降り易きは是非もなし、降らば降らせよ心なき世に心ありとは思ひたがへぞ、恨みは人にあり天には何をか喞つべき。この世は譬にあらず、まことなり。譬の中にまことを見るが智なるべし。摘むものにも摘まるゝものにも天は拘はるところなし、心せよ摘む者と摘まるゝもの。散らぬ間を傲り顏なる花も、散るべき花に迷ひ浮るゝものも、同じく春に翫弄ばるゝなり、うたてやな。

歌念佛を讀みて

巢林子の世話戲曲十中の八九は主人公（ヒロイン）を遊廓内に取れり。其清潔なる境地より取り來りたる者は甚だ少數なる中に、お夏清十郎、歌念佛は傑作として知られたり。余は歌念佛を愛讀するの餘、其女主人公に就きて感じたるところを有の儘に筆にせんとするのみ。若し、巢林子著作の細評を聽かんとする者あらば逍遙先生、又は篁村翁が許へ行かるべし。余、豈、巢林子を評すと言はんや。

中の卷の發端に「かゝる親には似ぬ娘お夏は深き濡ゆゑに菩提心と意地ばりて嫁入も背ものびく〳〵の……」と書出してお夏に既に戀ある事を示せり。然れども、背ものびく〳〵といふところにて親々の眼には極めて處女らしく見ゆる事を知らせたり。清十郎（卽ちお夏の情人）が大坂より戻り來りたる事を次に出して「目と目を合する二人が中、無事な顏見て嬉しいと心に

心を言せたり」と有處にて更に兩人の情愛の秘密を示せり。

然るに、清十郎が沓脱に腰をかけて奥の方の嫁入支度を見て平氣にて「ハァ余所には嫁入が有そうな云々」と言ひしときにお夏が「又ねすり言ばつかり、おんなし口で可愛やと云ふ事がならぬか意地のわるい」と言ふ言葉を聞けば、お夏は既に處女にあらずして莫連者か蓮葉ものゝいたづらあがりの語氣を吐けり。讀んでお夏が「我も室で育ちし故、母方が悪いの、傾城の風があるのとて何處の嫁にも嫌はるゝ。これぞ宜い事幸いと、猶、女郎の風を似せ」と云ひ出るに至りては、お夏が無邪氣なる意氣地と怜悧なる戀の智慧を見るに足るべし。「あの立野の阿呆顔、敷銀に目が眩みて、嫁に取ふといやらしい」と云ふ一段に至りては彼の戀愛の一徹にして處女らしきところを蔽ふ能はず。

二人の情通露見したる時に朋輩勘十郎の奸策同時に落ち來りて、清十郎が布子一枚にて追ひ拂はるゝ段よりお夏の愛情は一種の神韻を帶び來れり。清十郎の胸の中には戀の因果といふ猛火燃えしきりて主從の緣きるゝ神の咎めを浩歎して七苦八苦の地獄に顚墮したるを、お夏の方にては唯だ熾熱せる愛情と堪ゆべからざる同情あるのみ。ひそかに部屋の戸を開きて外に出づれば悽惻として情人未だ去らず。泣いて遠國に連れよと、くどく時に清十郎は親方の情にしがまれて得應へず。然るを女の狂愛の甚しきに惹かされて遂に其の誘惑に從はんと決心するまでに至りし頃、中より人の騒ぎ出でたるに驚かされて止ぬ。美術の上にて言ふ時はお夏のこの時の底から根からの戀慾は巧に穿ち得たるところなるべし。

清十郎の追拂れたりし時には未だ分別の闇には迷はざりしものを。このお夏の狂愛に魅せられし後の彼は早や氣は轉亂し、仕損ふたら浮世は闇、跡先見へぬ出來心にて勘十郎と思ひ誤りて他の朋輩なる源十郎を刺殺したるも戀故の闇に迷へばこそ。清十郎既に人を殺して勘十郎の見出すところとなり、家の内外に大騒擾となりたる時にお夏は狂亂したり。其狂亂は次の如き靈妙の筆に描出せらる。

「あれ、お夏と呼ぶわいの。おふ〳〵其所にか、どこにぞ、いや〳〵いや待て暫し。あれは我家に父の聲我を尋ねて我を呼ぶ。親も懐しや、夫も戀しや。父は子をよぶ夜の鶴、我は夫よぶ野邊の雉子」又下の卷に入りて「宵さこひと云ふ字を金紗で縫はせ」より以下「向ひ通るは清十郎じやないか、笠がよく似た、菅笠がよく似た。笠が笠がよく似た、菅笠がる。笠を案内の物狂ひ」の一節。

「なふ〳〵、あれなる御僧我殿、御かへしてたべ、何處へつれて行く事ぞ。男返してたべなふ。いや御僧とは空目かや」の一節「尋ぬる夫の容形、姿は詞に語るとも、心は筆も及びなき、ほんじりとして、きつとして、花橘の袖の香に」以下の一節等はいかにもヲフエリヤが狂ひに狂ひし歌に比べて多く愧じず「フォースト」のマーガレットが其夫の去りたるあとに心狂はしく歌ひ出でたる「我が心は重し、我平和は失せたり」の靈妙なる歌にくらべても、左まで劣るべしとは思はれず。

疑ひもなく「お夏」は巣林子の想中より生み出せる女主人公中にて尤も自然に近き者なり。又尤も美妙なる靈韻に富める者なり。梅川の如き、小春の如き、お房の如き、小万の如き、皆是れ或一種の屈曲を經て凝りたる戀にあらざるはなし。男の情を釣りたる上にて釣られたる者にあらざるはなし。或事情と境遇の壓迫に遭て心中する迄深く契りたるにあらざるはなし。然に此篇のお夏は主人の娘として下僕に情を寄せ、其情は初に肉情に起りたるにせよ後に至て立派なる愛情（アフエクション）にうつり、果は極めて神聖なる戀愛に迄進みぬ。

著者は元よりオフーストの如き哲學的生産の男主人公を作る可き戲曲家にはあらざりし。然れども清十郎の品格を檢し來れば忠兵衛、平兵衛、治兵衛、其他の如き暗迷の資性とは趣を異にするところ多し。お夏の口にて言はせたる「姿は詞に語るとも心は筆も及びなき」にて既にその高品の心なる事を示し、追ひ拂はれたる後に後悔の言葉、または末段の「虚言を云ふまじと毎朝天道氏神を祈りしかども、若き者の悲しさは、只今、非業に死んとは思ひも寄らず」より以下句々妙味あり、述懐に於て其人品の異凡なる事を示せり。左ればお夏が愛情の自からに靈韻を含む樣になるも自然の結果にて作者の用意淺しと云ふ可からず。

余は此篇を以て巣林子が戀愛に對する理想の極高なるものと言はんと欲す。世に戀愛なるものゝ全く抽き去るを得て、凡て神聖なる宗教的思想の統御に歸する事あらば戀愛のことを談ぜざるもよし。苟くも戀愛が人生の一大秘鑰たる以上は其素性の高潔なるところより出で、其の成行の自然に近かるべきは文學上に於て希望せざるを得ざる一大要件なり。

抑も戀愛は凡ての愛情の初めなり。親子の愛より朋友の愛に至るまで凡そ愛情の名を荷ふべき者にして戀愛の根基より起らざるものはなし。進で上天に達すべき淨愛までもこの戀愛と關聯すること多く、人間の運命の主要なる部分までもこの男女の戀愛に因緣すること少なからず。左れば文人の戀愛に對するや須らく嚴肅なる思想を以て其美妙を發揮するを力むべく、苟くも

卑野なる輕佻なる浮薄なる心情を以て描寫することなかるべし。

高尚なる意あるものには戀愛の必要特に多し。そは其心に打ち消す可からざる弱性と不滿足と常に宿り居ればなり。戀愛なるものはこの弱性を療し、この不滿足を癒さんが爲に天より賜はりたる至大の恩惠にして、男女が互に劣情を縱にする禽獸的慾情とは品異れり。プラトーの言へりし如く戀愛は地下のものにはあらざるなり。天上より地下に降りたる神使の如きものなることを記臆せよ。野外に逍遙して芬郁たる花香をかぐときに其花の在るところに至らんと願ふは自然の情なり。其花に達する時に之を摘み取りて胸に挿まんとするも亦た自然の情なり。この情は底なき湖の如くに一種の自然界の元素と呼ぶより外はなかるべし。之を打つとも破るべからず、之を鑄るとも形すべからず、之を拔き去らんとするも能くすべからず。宇宙の存すると共に存する一種の靈界の原素にあらずして何ぞや。

戀愛は詩人の一生の重荷なり。之を說明せんが爲に五十年の生涯は不足なり。然れども詩人の名の付きたる人は必らずこの戀愛の幾部分かを解得したるものなり。而して戀愛の本性を審にするは古今の大詩人中にても少數の人能く之を爲せり。美は到底說明し盡くすべからざるものにして、戀愛の中に含める美も、到底、說明し得るまでには到ること能はず。然れども詩人の職は說明にのみ限るにあらずして說明すべからざる者をその儘に寫し出るも亦詩人の職なれば、詩の神に入りたる詩人の爲すところは說明に力を籠めずして却つて寫實に精を凝らすにありき。寫實とは云へども世の所謂實際派の爲すごとく人間の獸慾を唯一の目的として描出するの謂にあらず、人間に不完全の認識あるよりして何物かを得て之を贖はんとの慾望は天地間自然の理なれば此慾望の一轉して他の美妙なる位地に思慕を生ずる實情を描寫するを詩人の本領とは云ふなり。バイロンがうたひし如く己の冷々たる胸に溫熱を生じ、己れの頑剛なる質を和らげ〻優柔なる性情を與ふるもの即ちこの不完全が多少完全になされし徵なり。これを爲すもの戀愛の妙力にあらずして何ぞ。

ロメオ、エンド、ジュリエットの著者は何が故にロメオが鬱樹叢中に彷徨したりしやを記せず。彼は唯だロメオに自然なる一種の思慕ある事を顯はすに甘んじたり。一種の思慕とは即ち前に言ひし一種の原素なり。彼は此原素を說明せずしてこの原素を寫實したり。ハムレットの著者は明らかに人々をしてハムレットの戀愛に狂へる者なることを言はしめ、其オフエリヤとの

問答に就きて之を確かめんとせしめたり。これもロメオを書きし戀愛に對する極致と趣を一にして唯だ是にては他に大なる不完全、不調子の實現を備へたる點に於て異なるのみ。フォストの著者が其主人公をしてマーガレットに近づかしめ、一瞬時に愛情を湧出せしめて、從前の不完全なる觀想の大結局を戀愛の中に總べたるなど戀愛の不可拔なる大原素なることを認むるにあらずんば能はざるところとす。

日本文學史を觀じ來れば戀愛に對する理想余をして痛歎せしむるもの多し。別して巢林子の著作の中に戀愛の戀愛らしきもの甚だ尠なきを悲しまざるを得ず。蓋し其の爰に到らしめしもの諸種の原因あるべし。萬有教の教理寂滅の宗教思想より來れる關係、支那文學史との關係、氣候風土より發生せる色情の惡風、其他區々あるべしと思はるれど、兎に角、事實として肉情より愛情に入り、愛情より戀愛に移ることを記する著作の多きこと疑ふ可からず。生命あり希望あり永遠あるの戀愛は到底萬有教國に求むることを得ざるか、そも〳〵、いつかは之を得るに至るべきか、我邦文學の爲に杞憂なき能はず。

歌念佛は巢林子の著作中戀愛を自然なる境地に嵌めて寫實したるもの〻上々なる事は余の竊かに自から信ずるところなるが、自然は即ち自然にてあれど何の生命もなく、何の希望もなく、其初めは肉情に起し、其終りを愛情の埋沒に切りて「よし是も夢の戲れ」と清十郎に悟らせしめたるを見ては佛教を恨むより外なきなり。文學の極衰極盛を言ふもの今に之れありと聞く。余は極衰論者に其極盛のいはれを聞かんことを願ひ、極盛論者に其極盛の理をきかん事を望む。我邦未來の文學をいかにせばや。

星、夜

晝もし長からば物を思ふひまなくて好かるらむ。否夜もし長からば樂しき夢を結ぶ事もありて好かるらむ。晝にはわれ晝の思ひあり、夜にはわれ夜の思ひあり、いづれを安き時と定めん由はなけれど、もし晝と夜との境なる薄暗の慘憺たる時の苦がさを思へば、われは事務繁き晝か夢、長き夜かの一を樂しまんとするなり。

始めて彼女を見たるは厚生館に音樂會のありし時、その時、彼女は七草を散らしたる裾摸樣を着て皎々たる素手を伸べ金石の音を唇頭に轉ばしてアルトの獨誦をなしたり。喝采の聲湧くが如くに起りて動搖めきわたる中に一曲を唱し終りて坐に就きしが、やがて友らしき令孃と共に見へずなりぬ。次に彼女を見たるは我友人なる某新聞の記者が松の三日に歌留多會を催ふして少年男女を招きける時その時、の一座にも彼女は加はり居りて小捻の糸の緣の端、同じ組に膝を幷べて、二た口三口言葉を交はすも不思議なるかな、迷ひの始め。

其後同じ記者を訪ひたる時に彼女が姓名をそれとなく問ひ試みたるに、記者は何心なく彼が在りたる學校、彼の家、彼の性質までも問はず語り。これを始めとして折々彼女の噂をする我言葉に流石こもれるものありしを見てとりし我友は或夜の閑談に我爲に周旋の勞を辭せざるべしと言ひ出でぬ。兎も角もして玉へと應へて別れたるが此時より我夜は長くなりぬ。

頃は春の初めなり、我友は滿面に香はしき笑を湛へて根岸近き我閑宅を音づれ來ぬ。履脫より上ると齊しく我肩を一二擊して、「これより君の家に永久の春は宿らむ。うぐひすの鳴音を家内にて聞くは樂しからずや。」我友は彼女の父に緣故あるを以て明白に我が今日の位地を語り、我將來の希望を告げ、世に賴母しき男なりと言ひて其愛女を嫁すべき機會至れるを促がしたるなり。彼女の父は始終默聽し居たりしが、我が從來の品行などを我友の說き終りたる後に漸く兎も角も娘の心中もあればと言ひて其日の我友の勞力は濟みしが、幾日か經し後に娘も他意なければと言ひおこしたれば車を飛ばして吉報を齎らし來りしなり。斯くして約は結びたれど彼女は未だ修むべき學業のあればとて尙ほ一年程は合歡の禮を舉げぬ事となりぬ。

もし我が彼女に會はぬ前の事を思へばわびしげなる野中の松に風の當り易きが如く世の事物に感觸する事多かりし。彼女の情を得たる後は物として春の色を帶びぬはなく、自ら怪しみて霞の中に入りたると思はるゝ程に苦く辛らく面白からぬ物に隔たりて、甘く美くしく優しき物のみ近づきぬ。

肥へ太りたる駒にうち乘りて春の野に遠乘したる時、菜の花の朝日に照りかゞやきたる畦を過ぎて緩々と流るゝ小河の岸に優々ゝ駒を立てたる心地は此は此戀の眞味なり。

彼女が學校の歸り途などに我家を過ぎりて安否を問ひ吳るゝ時我はまことの友を得たるうれしさに後は斯くよ、斯くして斯くよなど將來の事業を打ち開けて語りなどしつゝ彼女の嗜める

音樂の道に就きて談話する事もありてその樂しさは、その甘さは言もて得盡くすべくもあらず。

飜々と蝶の花上に舞ふ頃となれば我も浮かるゝ戀の羽なきを恨み、彼女が許に使ひして郊外に策を曳くべきに伴になりてよと甘だれたる文を屆けて呼び寄せたる事もあり。緣新らしく添ひたる松の樹影に小憩して淸く甘まき物語の盡くべき時もなし。自らも怪しむ程に多辨になりて聽く人あらばおかしと思はんなどうち笑ひし事もあり。その人の現前（プレゼンス）は我に取りて「光」の如く、暗夜を照らす「月」の如く、よろづの曇れる思想は妖魅の日光に會ひて消ゆるが如くに我を離れ去りて一面の玲瓏たる玉路我前に開きて我行住に世ならぬ自由を供すと觀ぜしは僞言ならず。鳥の聲も昨日に異なれる妙韻を吟ずるやうに覺へ、花の色も昨日とは異種なる天然の靈妙をあらはすと見へ、歩々人境の外に出で語々天外の香を薫じ、景狀すべからざる樂寂の境地に長き春の日を暮らして黃昏の家路の旅は疲れ果てたる夢の中にあり。

斯かるもの我が迷ひ入りし春にてあるなり。我は迷ふと云ふ字を好まず。然れども過ぎ去りたる今日より昨日の事を思ひかへせば迷はざりしと辨ずるも要なし。明らかに我は春といふ魔に翫弄せられてありしなり。いかにとなれば、月は五度ほど圓くなりて、また缺けたる後、彼女の母なる人より我に一書を送りて其の愛女を靈魂より引き裂けり。その文言を見れば唯だ彼のごとき者を差上ては御爲にならずと存ずる故にとあるのみ。

彼女よりは一言の音信もあらず。母に同意したるか、又は母の同意を促したるなるか。かつて我が事業を打明て語りたる時に樂しそうなる、而して我が肩に憑りたりし時の躑躅園の歡意は彼の遊女の賣色の笑にも似たる一時の假造より出でしものなりしか。否な左程の下品の女子とは誰が目にも見ゆべき道理なし。我が戀に盲したる目の咎にもならじ。そも何者か我が外に彼女の情を釣りたる人のあるか。左る惡性の男に容易く靡くべき無智のものとは思はれず。

何か言ひおこすならむと待ちに待ちたる日の數も三日を過ぎて礫の音もなし。腹立だしさにその人の寫眞を取出で、眼を閉ぢながら引裂きて、うち捨てんとするに、あやにくに閉ぢたる眼の自然に開らけて其人を見れば會ひし日の笑顏にて我前に立ちけり。笑顏かと思へば涙あり。涙あるかと思へば浮き浮きしたる無邪氣の顏となりてうつれり。はては楊弓場あたりに見る紅粉に腐りたる面の色をうち做して我を尻目に見るかとうつりて、思はず持ちたる手を離れハタと机に音すれば忽ち元の戀人なり。信じつ疑ひつ、迷ひつ晴れつ、夜一夜燈火の油の燃へつくる

まで取り出しては仕舞ひ、仕舞ひてはまた取出しつ。自らも怪しむほどに狂はしく意志の弱き男となりぬ。

明くる朝早曉に家僕を呼醒して彼人の家に最後の使者とならせぬ。咲き殘りたる山吹の花を揉み散らして彼人の寫眞と幾通の彼人の手書とを封じこみて送りかへしたり。そのかへりに我が寫眞と我が書狀とを送りこしぬ。その書狀の中には月と共に醒めて夜越に書きたるものもありけり。

我は婦人の情の斯くも變はり易きものなる事を信ぜんと欲して信ずる能はず。男心を夏の空に譬ふるは男に情なしと云ふ意味にや。男に情なしと言ふ意味を夏の空に寓する事をなさば女に情なき事をいかなる言葉もて言ひ盡さんや。否々我は彼女に忘れられたりとは知れども彼女を以て我を欺きたるものなりと言ふことはなすまじ。我を欺きたるもの彼女の如くにして彼女にあらず、彼女を圍みたる春の色こそ我を迷はしたるものにてありけれ。彼女の雙眸の内にわれは我が情思を投げ入れて其反酬を求むるに切なりし時を回顧すれば惘然として我が現在の境界を知る能はず。

再たの夜は來れり。古今の雜書を亂抽して眼を紙上に注げども心は遠く枯野を馳せめぐれり。今朝散らしたる山吹の花片の落ちて坐上にあるを拾ひあげ、鉛刀（こがたな）を右手に持ちて細々に切斷し、斷又斷、針の頭ほどに細斷して窓の外に投げやりぬ。どこへ散りどこへ落ちしか花の行方は。

この夜はいつになく蒸し苦くして寢られず。上野の鐘の響近う聞ゆれど數ふるもうるさし。我が書齋は荒れはてたる廣野の如く、我が枕は冷へ凍りたる野中の巖にも似たり。輾轉又輾轉、幾度か夢に入らんとして現にかへり、くる〳〵と一つの思ひをめぐり來て復た同じ思ひにかへる。うるさや〳〵と拂ひかける瞬時のみ妄想は消れど、あとは再び悲しき戀といふもおぞましや。忘れはてん、忘れん忘れん、會はぬ昔時よと胸の中に聲を勵ましても流石に表には出し兼ね。やがてすや〳〵と眠りたりしと覺ゆしが自からの鼻息に驚きて飛び起てば胸のあたりを毒蛇に固く緊められしと見しは是も夢なりき。

餘りの事にあきれ果てゝ去らば「眠」を床の中に求めず、空の景色にても眺めて、眼はともあれ、心丈にても安ませばやと障子を靜かに推し開き、雨戸をひらきて空を見れば月は西へ西へと落ちゆきて慕ひしものゝ影はなく、茫々たる虛空に無數の星屑の炳々たるあるのみ。

脫蟬子に與へて其「星夜」を評す

「星夜」の主人公となりし男

「星夜」面白ろく拜見仕候。彼の事ありてより、はや小半年、前契の歡愁悲喜も既に忘れ居候ひしに思ひもかけず御作によりて復一種の感情を味ひ、且つ、かけても思はぬ小說中の主人公と相成終り、芽出度からぬ艶名を流し候事如何なる歲のまはりあはせかと一笑仕候。御文章は寔に暢達にして、意の到る所筆亦之に從ひ候御手際、只管感佩の外無之候。厚生館の音樂會にて小弟が始めて彼女を見、彼女は音樂者なりとし玉ふこと往時を憶ひ起して賢契の覆案の妙に敬服仕候。松の三日の歌留多會にて戀ひ初めたりとの事思はず失笑いたし、彼の友人の某に讀ませ度存じ候。併しこれは文の結構上姿勢を取る所より小弟に寃を蒙らせ玉ひしなるべく、いつもながら文士の狡猾手段と御仲間同志の事故御恕るし可申上候。一篇の結構上媒酌者なる新聞記者が最初の口をキ、シのみにて雲がくれいたし、破談の書狀直接に彼女の母なる人より來れりとなされ候事おかしく存じ候。こゝは矢張母なる人が（父を前に出したれば此度は母を使ふがよろしかるべし）記者殿を通じて小弟迄「彼の如き者を差上げては……」の意を達せしめたるやう御書き被遊しなれば記者殿も前に照應し、母なる人が直接に書狀を送くるといふ事實有間敷こともなくなり申候べし、如何。御文章上の事は暫らく措き主人公として少々憾みを申上度個條有之、即ち小弟の愛を御寫し被下候事甚だ卑しく、失望を御描き遊ばさるゝ處いと深き事に御坐候。甘たれたる文を屆けて郊遊に連れ出したる、多辯になりたるなど眞僞打まじりたる小說なれば咎むる程の事にも無之るべけれど、去りとては主人公となりし小弟甚遺憾に存じ候。また躑躅園にて彼女が小弟の肩に憑りて小弟の志望を喜び聽きたりとなされ候は小弟を以てをんななんぞに漫れらるゝやうの人物と見て下され候ひしか。平生知己のやうにてもなしと御憾み申候。

兎に角、賢契の御寫し被下れし小弟の愛は世間普通たはれをの愛にして、堂々たる士君子の愛にては無之、少くとも小弟の愛にては無之候。

寫眞をながめて夜一夜明かしたること、山吹の花片を細斷したること、小弟成程一時彼等の無禮を怒り、失望も致したれど、かやうなる女々しき失望は致し候はざりき。知り候はぬ

人々には主人公は誰やら分らねば愛も失望も何と御書きなされ候ても苦しからず候へども知友多き小弟故、小弟の關係を知つて此御作を讀まれ候ては計らぬ寃名を受ねばならず候故、愚痴をこぼし申候。結末の一句畫龍點睛此一句先づ御胸中に出來てのち此御文章の御結構に相成りし事と愚察仕候。いづれ拜眉の上萬縷可申述候。妄許多罪。

脫蟬子の答

文を草する苟くも眞情より出でたるにあらざれば、かねて御叱りの如く俗心俗腸の文士になりはてむ。生が「星夜」一篇端なくも其附記によりて、知友を弄して小說の主人公となして戲れたるものゝ如くに御疑ひを蒙りぬ　生が知己を辱うする畏友に對して斯る不敬を加ふる男と御覽ありしは生の方にも憾みあり。彼の附記なるものは適ま小生を動かして「星夜一篇」を草せしむるに至りたる因緣を言ひたるものにして、友人の事を記するの意味も、友人の平生を現はする意味も之なかりしなり。倘し强いて生が「星夜」を草したる時の腹の中を割つて見たしと仰せあらば、まこと頃日は知己の中に破契といふ不吉事多くして、忌々しきとの流行するを悲しき事に思ひて、深きまことの情をもて男に思はれながら輕々しき心もて男を疎んずる女子の薄情に激する所ありて、聊か其人々の猛省を請はんとの野心を抱きて筆を執りし義に有之候。故に全篇の主要とするところは男に情ある事を示し、其情に對して女は深く酬ひざるべからざる旨を寓するにあり。左ればこそ御批評にもありし如く女の母なる人より直ちに破約の書を男に送らしめて、以て破約といふ事の原因は多く女の母より起るものなることを暗に示したる譯に御座候。女子が薄情なりや否やは自から別問題に屬すれば此に辨ずるも益なし。唯だ今日の女流に虛名虛榮を慕ふこと多くして男子の心膽に戀することの少なきは事實にて、生を激せしめたる一原因となり居り候。從一位の殿樣ならばいかなる腐腸男子にても戀婚にせんと願ふは當今の人情にて淺間敷かぎりと存じ、いで、この薄弱なる婦人原に男子の戀はいかなるものなるかを敎へ吳れんとの大望も此の小篇の中に籠り居り候。戀愛の卑しげに描かれて主人公にせられし己れまで卑しきものになりたりとの御叱りは左ることながら、戀愛を執着なるものと認むるは小生一家の主義にて、山吹を細斷することも、婦人に漫らるゝ事も小生は信じて戀愛の實質と考へ申候。生

が星夜の主人公をして己れの爲さんとする事實の順序を其愛人に語らしめたるも世間普通の情思に照さば決して卑下なるものとのみ言ふべからずと確信致し候。すべて戀愛を世間普通の理に應じて描きたるは生が堂々たる士君子を寫さんとの野心なきを辨ずるに足るべしと存じ候。知交を辱ふしてより幾載、小生いかに鈍なりとも賢兄の品性を知らざるものと思はれしは殘念に候。賢兄の事ありし時に人の賢兄に向つて失望は一層賢兄を大にすべしと言ひし時に賢兄は怒つて婦人の故を以て品性を大にするものと見做すやと言ひ玉ひし御樣子今に我が眼前にあり、生も亦た世の硬骨男兒が往々にして戀愛の事に冷淡なるを知る。何すれぞ賢兄をうつして戀愛と失望と星夜の主人公の如くにする愚をなさむ。又た賢兄の如き人物は小說家の禁物とするところにて、もし、まこと賢兄を主人公に取る心なれば生は一部のロマンスを作りしかた宜かりしならむ。然れども、戯れにも知友を以て主人公に取りしと思ひたまふは寃罪に有之候。「春駒」の飜案成らざりしが故に星夜を得たるは事實ながら春駒の趣意をもて星夜をうつしたりとはゆめ思ひ玉ひそ。篇中の戀愛も失望も我が想中の愛兒にて、どこまでも手離す事は出來申さず、小說は世間普通の實象を描くを本旨とすればば星夜の主人公不出來なりと雖も　小生の愛兒に有之候。但し理想的に一個の硬骨男兒を寫し出せよとあらば小生は或は其模型を賢兄に偸むやも圖られず候。世の眼もし賢兄の憂ひ玉ふ如く星夜一篇に由て賢兄を見誤らん事あらばと小生の罪のほどをも恐れて作意を陳ずること斯の如し。餘は拜眉の上にて萬縷可申上候。

透谷拜具

某殿

又脫蟬子へ

「星夜」の主人公ならざりし男

御作意拜聽此上かごとがましく申すも餘りほめたことにも無之故何ゝ不申上候。

陸奥にありといふなる名取川
なき名取りてはくるしかりけり

我牢獄

もし我にいかなる罪あるかを問はゞ我は答ふる事を得ざるなり。然れども我は牢獄の中にあり。もし我を拘縛する者の誰なるを問はゞ我は是を知らずと答ふるの外なかるべし。我は天性怯懦にして強盗殺人の罪を犯すべき猛勇なし。豆大の昆蟲を害ふても我心には重き傷痍を受けたらんと思ふなるに法律の手をして我を縛せしむる如きはいかでか我が爲し得るところならんや。政治上の罪は世人の羨むところと聞けど我は之を喜ばず。一瞬時の利害に拘々として空しく抗する事は余の爲す能はざるところなればなり。我は識らず、余は悟らず、如何なる罪によりて繫縛の身となりしかを。

然れども事實として余は牢獄の中にあるなり。今更に歳の數を算ふるもうるさし。兎に角に余は數尺の牢室に禁籠せられつゝあるなり。余が投ぜられたる獄室は世の常の獄室とは異なり

て、全く我を孤寂に委せり。古代の獄吏も近世の看守も我が獄室を守るものにあらず。我獄室の構造も大に世の監獄とは差へり。先づ我が坐する、否坐せしめらるゝ所といへば天然の巖石にして、余を圍むには堅固なる鐵塀あり、余を繫ぐには鋼鐵の連鎖あり、之に加ふるに東側の巖端には危ふく懸れる倒石ありて我を脅かし、西方の鐵窓には巨大なる惡蛇を住ませて我を怖れしめ、前面には猛虎の檻ありて我室内に向けて戸を開きあり、後面には彼の印度あたりにありといふ毒蝮の尾の鈴、斷間なく我が耳に響きたり。

我は生れながらにして此獄室にありしにあらず。もし、この獄室を我生涯の第二期とするを得ば我は慥かに其一期を持ちしなり。その第一期に於ては我も有りと有らゆる自由を有ち、行かんと欲するところに行き、住まらんと欲する所に住まりしなり。われはこの第一期と第二期との甚だ相懸絶する者なる事を知る。即ち一は自由の世にして、他は牢囚の世なればなり。然れども斯くも懸絶したるうつりゆきを我は識らざりしなり。我を囚へたるものゝ誰なりしやを知らざりしなり。今にして思へば夢と夢とが相接續する如く我生涯の一期と二期とは懵々たる中にうつりかはりたるなるべし。我は今この獄室にありて想ひを現在に寄すること能はず。もし之

を爲すことあらば我は絶望の淵に臨める嬰兒なり。然れども我は先きに在りし世を記臆するが故に希望あり。第一期といふ名稱は面白からず、是を故郷と呼ばまし。然り故郷なり。我が想思の注ぐところ、我が希望の湧くところ、我が最後をかくるところ、この故郷こそ我に對して我が今日の牢獄を厭はしむる者なれ。もし、われに故郷なかりせば、もし、われにこの想望なかりせば我は此獄室をもて金殿玉樓と思ひ了しつゝ、樂き娑婆世界と歡呼しつゝ、五十年の生涯誠に安逸に過ぐるなるべし。

我は我天地を數尺の大さと看做すなり。然れども數尺と算するも人間の業に外ならず。之を數萬尺と算ふるも同じく人間の業なり。要するに天地の廣狹は心の廣狹にありて存するなり。然るに怪しくも我は天地を數尺の廣さとして己れが坐するところを牢獄と認む。然り牢吏なり。人間の形せる獄吏は來らずとも折々に見舞ひ來るもの是れ一種の獄吏に他ならず。名譽是なり、權勢是なり、富貴是なり、榮達是なり。是等のもの我に對する異樣の獄吏にてあるなり。

彼等は我に對しては獄吏と見ゆれども或一部の人には天使の如くにあるなり。彼等が人々を折檻する時に人々は無上の快樂を感ずるなり。我眼曇れるか、彼等の眼盲ひたる乎。之を斷ずる者は誰ぞ。

デンマルクの狂公子を通じて沙翁の歌ひたる如くに我は天と地との間を這ひめぐる一痴漢なり。崇重なる儀容をなし、威嚴ある容貌を備へ、能く解し、能く泣き、能く笑ふも、人間は遂に何のたはれごとなるべきやを疑へり。然り、我が五十年の生涯に萬物の靈長として傲るべき日は幾日あるべき。我は我を卑うするにあらず、我自ら我を高うせんとするにもあらず、唯だ我が本我のいかに莊嚴を飾らしむるも遂に自らを欺くに忍びざるなり。

我は如何に禪僧の如くに悟つてのけんと試むるとも我が心宮を觀ずること甚深なればなるほど我は到底悟つてのけること能はざるを知る。風流の道も我を誘惑する事こそあれ、我をして心魂を委ねて趣味と稱する魔力に妖魅せらるゝに甘んぜしめず。常に謂へらく人間はいかにいかなる高尚の度に達するとも必竟するに或種類の偶像に翫弄せらるゝに過ぎず、悟るといふも悟ること能はざるが故に悟るなり。もし、悟るといふことを全然悟らざるといふ事に比ぶれば多少は靜平にして澹乎たる妙味ありと雖、是も一種の階級のみ。人間は遂に多く辨ぜざれば多く默し、多く泣かざれば多く笑ひ、一の偶像に就かざれば他の偶像を禮す、一の獄吏に答責せられざ

れば他の獄吏の笞責に遭ふ、これも是非なし。獄吏と天使とを識別すること能はざる盲眼をいかにせむ。

奇しきかな我は吾天地を牢獄と觀ずると共に、我が靈魂の半塊を牢獄の外に置くが如き心地することあり。牢獄の外に三千乃至三萬の世界ありとも我には差等なし。我は我牢獄以外を我が故郷と呼ぶが故に我が想思の趣くところは廣濶なる一大世界あるのみ。而して此大世界にわれは吾が悲戀を湊中すべき者を有せり。捕はれてこの牢室に入りしより凡ての記臆は霰散し去り、己れの生年をさへ忘じ果てたるにも拘はらず、我は一個の忘ずること能はざる者を有せり。啻に忘ずること能はざるのみならず數學的乘數を以て追々に廣がり行くとも消ゆることはあらず。木葉は年々歳々新まり行くべきも我が悲戀は新たまりたることはなくして、いや茂るのみ。江水は時々刻々に流れ去れども我が悲戀はよどみて漫々たる洋海をなすのみ。不思議といふべきは我戀なり。

もし我が想中に立入りて我戀ふ人の姿を尋ぬれば我は誤りたる報道を爲すべきにより、言はぬ事なり、言はぬ事なり。雷音洞主が言へりし如く我は彼女の三百幾つと數ふる何の骨を愛づると云ふにあらず、何の皮を好しと云ふにあらず、おもしろしと云ふにあらず、樂しと云ふにあらず、我は白狀す我が彼女と相見し第一回の會合に於て我靈魂は其半部を失ひて彼女の中に入り、彼女の靈魂の半部は斷れて我中に入り、我は彼女の半部と我が半部とを有し、彼女も我が半部と彼女の半部とを有すること〻なりしなり。然れども、彼女は彼女の半部と我の半部とを以て彼女の靈魂となすこと能はず。我も亦た我が半部と彼女の半部とを以て我靈魂と爲すこと能はず。この半裁したる二靈魂が合して一になるにあらざれば彼女も我も圓成せる靈魂を有するとは言ひ難かるべし。然るに我はゆくりなくも何物かの手に捕はれて窄々たる囚牢の中にあり。もし彼女をして我と共にこの囚牢の中にあらしめばこの囚牢も囚牢にあらずなるべし。否な彼女とは言はず、前にも言へりし如く我が彼女を愛するは其骨にあらず、其皮にのらず、其魂にてあれば、我は其魂をこの囚牢の中に得なむと欲ふのみ。

日光を遮斷する鐵塀は比しく彼女をも我より離隔して雁の通ふべき空もなし。夢てふもの世にたのむべきものならば我は彼女と相談る時なきにあらず。然れども、その夢もはかなや、始めて我をたばかりて後にはおそろしき惡蛇の我を卷きしむるに終る事多し。眠りを甘きものと昔

しの人は言ひけれど我は眠りの中に熱汗に浴することあり。或時は我手して露の玉に濕ふ花の頭をうち破る夢を見、又た或時は春に後れて孤飛する雌蝶の羽がひを我が杖の先にて打ち落す事もあり。かつて暴らかりしものを彼女に會ひてより和らげられし我が心も度々の夢に虎伏す野に迷ひ、獅子吼ゆる洞に投げられしより再び暴れて暴れて我ながらあさましき心となれり。眠りはしかく我に頼みなき者となりしかど、もし現の味氣なきに較ぶれば欺かるゝ丈も慰めらるゝひまあるなり。

現に於ける我が悲戀は雪風凛々たる冬の野に葉落ち枝折れたる枯木のひとり立つよりき激しかるべし。然り我は已でに冬の寒さに慣れたり。慣れしと云ふにはあらねど我はこれに怖ろゝ心を失ひたり。夏の熱さにも我は我が腸を沸かす如きことは無くなれり。唯だ我九腸を裂きて又た裂くものは我が戀なり。戀ゆゑに悶ゆるにあらず、牢獄の爲に悶ゆるなり。我は籠中にあるを苦しむよりも我が半魂の行方の爲に血涙を絞るなり。雷音洞主の風流は戀愛を以て牢獄を造り、己れ是に入りて然る後に是を出でたり。然れども我が不風流は牢獄の中に捕繋せられて然る後に戀愛の爲に苦しむ。我が牢獄は我を殺す爲に設けられたり。我も亦た我牢獄にありて死すことを憂ひとはせざれども、我をして死す能はざらしむるもの則ち戀愛なり。而して彼は我を生かしむることをもせず、空しく我をして彼のデンマルクの狂公子の如く、我母が我を生まざりしならばと打ち卿たしむるのみ。

春や來しと覺ゆるなるに我牢室を距ること數歩の地に黄鳥の來り鳴くことありて我耳を奪ひ、我魂を奪ひ、我をしてしばらく故郷に歸り、戀人の家に到る思ひあらしむ。その聲を我が戀人の聲と思ふて聽く時に戀人の姿は我前にあり。一笑して我を惱殺する昔日の色香は見にず、愁涙の蒼頰に流れて紅ひ欄干たるを見るのみ。

軒端數分の間隙よりくゞり入るは世の人の嫦娥とかあだなすなる天女なれども、我が意中人の音信を傳へ入るゝことをなさねば我は振りかへり見ることもせず。いづこの庭にうへたる花にやあらむ折にふれては妙なるかほりを風がもて來ることもあれど、我が戀ふ人の魂をこゝに呼び出すべき香にてもなければ要もなし。氣まぐれものゝ蝙蝠風勢が我が寂寥の調を破らんとてもぐり入ることもあれど、捉へんには竿なし、好し捉ふるとも我が自由は彼の自由を奪ふことによりて回復すべきにあらず、況して我戀人の姿をこの見苦しき半獣半鳥よりうつし出づるこ

との望むべからざるをや。

是の如きもの我牢獄なり。是の如きもの我戀愛なり。世は我に對して害を加へず、我も世に對して害を加へざるに、我は斯く籠囚の身となれり。我は今無言なり、膝を折りて柱に憑れ齒を咬み眠を瞑しつゝあり。知覺我を離れんとす。死の刺は我が後に來りて機を覗へり。「死は近づけり。然れども、この時の死は生よりもたのしきなり。我が生ける間の「明」よりも今死する際の「薄闇は我に取りてありがたし。暗黑！、暗黑！　我が行くところは關り知らず、死も亦た眠りの一種なるかも、眠り」ならば夢の一つも見ざる眠りにてあれよ。をさらばなり、をさらばなり。

德川時代平民的理想

德川氏の時代に於て其遊戯其會話其趣味を探らんもの文士の著作に如くはなし。而して文士の著作を翫味するもの武士と平民との間に凡ての現象を通じて顯著なる相違あることを研究せざるべからず。琴の音を知り琵琶の調を知るものは之を三絃の調に比較せよ。一方はいかに莊重にいかに高韻なるに引きかへて、他はいかに輕韻卑調なるに注意するなるべし。斯の如きは武士と平民との趣味の相違なり。謠曲を聽きたる人は淨瑠璃を聽かん時にこの兩者に相容れざる特性ある事に注意するならむ。かくの如く其能樂に於て、河原演劇に於て、又は其遊藝に於て、もしくは其會話の語調に於て、極めて明晰なる區別あることを知らむ。

蓋し我邦は極めて完成せる族制々度を今日まで持ち續けたるものなるからに、吾人の思想も亦た自から單純なりし事は爭ふ可からざる事實なり。而して其單純なる思想は階級に應じて武士は武士の思想を繼ぎ、平民は平民の思想を受けて、甲乙相共に異色をもつて生長し來りぬ。今日の我が語學に志ざすところのものが我が言語に甚だしき階級語に富めることを言ふも、元より此原因あるによればなり。チノリフヒック（敬禮語）に富めるも亦たこの族制々度の完熟せるに因れること多し。是れ我國言語の特色にして、この特色は以て我邦に於ける貴族（德川時代にありては武士をも含む）平民の區界を判するに足るべし。

貴族平民の兩階級は德川氏の時代に入りし時大に亂れたり。德川氏は三河武士を以て天下を

制したるものなれば從來の階級は概ね壞裂したり。加るに長年の亂世に人民の位地も大に前とは異なりて從來貴族たりし者の、落ちて平民の籍に投ぜし者の、從來平民たりし者の登りて貴族の位地を占めし者少數にてはあらざりしならむ。斯して德川氏初代の平民は從前の平民よりは多少の活氣を帶びたりし事疑ひなし。故に彼等の思想も自から一種の特色を具備し得て隱然武門の思想と對峙せんとするが如き傾きを生じたり。宜なるかな我邦に於て始めて平民社會の胸奥より自然的育生の聲をこの時代に於て聞きたるや。

人は元祿文學を卑下して日本文學の耻辱是より甚しきはなしと言ふもの多し。われも亦元祿文學に對して常に遺憾を抱く者なれど、彼をもつて始て我邦に擧げられたる平民の聲なりと觀ずる時に余は無量の悅喜をもつて彼等に對するの情あり。然り俳諧の尤も熟したるものこの時代にて戲曲の行はれしも戲作の出でしも、實に此時代にして、而して彼等の物皆な平民社會の心骨より出でたるものなることを知らば、余は寧ろ我邦の如き貴族的制度の國に於て平民社會の初聲としては彼等を厚遇するの至當なるを認むるなり。

我國平民の歷史は始めより終りまで極めて悽惻暗淡たる現象を錄せり。而して德川氏以前にありては彼等の思想として世に存するもの甚だ微々たり。德川氏以後世運の漸く熟し來りたるを以て爰に漸く多數の預言者を得て、孚化したる彼等の思想は漸く一種の趣味を發育し來れり。然れども後等の境遇は功名心も、冒險心も、想像も、希望も、或る線までは許されて、其線を越ゆること叶はず、何事にも遮斷せらるゝ武權の塀墻ありて、彼等は聲こそは擧げたれ、憫れむべき卑調の趣味に甘んぜざるを得ざりしは亦た是非もなき事共なり。

幕府は學藝の士を網羅するに油斷なかりき。幕府のみ然るにあらず、その高等種族(武士)は文藝を容れて大に品性を發揚したり。當時、非凡なる學士の彼等の社會に厚遇せられたる事實は少く德川時代を知るもの丶共に認むるところなり。然るに是等學藝の士は平民に對して些の同情ありしにあらず。平民の爲に吟哦せし事ある者にあらず。平民の爲に嚮導せし事ある者にあらず、かるが故に既に初聲を擧るの時機に達したる平民の思想は別に大に俳道に於て其氣焰を吐けり。幕府は盛に能樂と謠曲とを奮興して代々の世主厚く能樂の大夫を遇し、而して諸藩の君主も彼等を養ひて、武門の士の能く謠曲を謳ふこと能はざるは耻辱の如き隆運に向へり。學藝に習れず、奧妙なる宗教に養はれざる平民の趣味には謠曲は到底應ずることを得ざるなり。故に

彼等の中に自から新戯曲の發生熟爛するありて、巣林子の時代に於て其盛運を極めたり。物語の類、例へば太平記、平家物語等は高等民種の中に歡迎せられたりと雖、平民社會に迎へらるべき樣なし。かるが故に彼等の内には自ら彼等の思想に相應なる物語小說の類生れ出でたり。加ふるに三絃の發明ありてより凡ての趣味の調ふに於て大に平民社會を翼け、種々の俗曲なるもの發達し來れり。斯くの如く諸般の差別より觀察し來れば平民は實に德川氏の時代に於て大に其思想を煥發したるものにして、族制的大隔離の餘を受けて或意味に於ては高等民種に對して競爭の傾きを成し來れるなり。

まことや平民と雖も素より劣等の種類なるにあらず。社會の大傾向なる共和的思想は斯かる抑壓の間にも自然に發達し來りて、彼等の思想には高等民種に拮抗すべきものなくとも、自から不羈磊落なる調子を具有し、一轉しては虛無的の放縱なるものとなりて以て暗に武門の威權を嘲笑せり。故に彼等は自然に政權を輕視して、幕府の紀律に繫がれざる豪放の素性を養ひ、社會全體より視る時は一種の破壞的原素を其中に發生せしめて大に幕府を苦しめたり。制禁に遭ひたる戯作の類、遠島に處せられたる畫家の事、是が現象の一として舉ぐるに足るべし。漸く閭巷の俠客なるもの起り來りて幕政を輕侮し、平民社會の保護者となり、壓抑者に對する破壞的手腕(天知子の語を借用す)となりたるも是が一現象なりけり。

自然の傾向は人力の爭ふこと能はざるものなり。從來、文學なるものは獨り高等民種の境内に止まりて平民は一切思想上の自由を持たざりし如くなりしものが驟かに元祿以降の盛運に際會して其思想界に多數の預言者を生みて自から一貫の理想を形くりたれば其理想する紳士も、其理想する美人も、其理想する英雄も、有り〳〵と文學上に映現し出でたり。

こゝに注意を逃がすべからざる一大現象は遊廓なるもの〻大にこの時代に榮へたるとなり。難波或は西京には古くよりこの組織ありしと雖、江戸にてこの現象の大にあらはれたるは慶長の頃かとぞ聞く。(慶長見聞記に據る)蓋し亂世の後、人心漸く泰平の樂娛を愬へ、彼の芒々たる葦原(今日の吉原)に歌舞妓、見世物等各種の遊觀の供給起り、これに次いで遊女の歷史に一大進歩を成し、高厦巨屋甍を幷べて此の葦原に築かれ、都には月花共に此里にあらねばならぬ樣になれり。凡そ女性の及ぼす勢力はいつの時代にも侮るべからざるものなり。別して所謂紳士風なる者を形成するには偉大なる勢力ある事疑ふべからず。故に平民の中にありし紳士の理想は此遊

廓の勢力によりて輕からぬ變化を經たり。讀者もし難波及び京都に出でし著作に就きて彼等の紳士なるものを尋ね見ば思ひ半ばに過ぐることあらむ。必らずしも巢林子以下の諸輩を引照するに及ばざるべし。遊廓は一個の別天地にして其特有の粹美をもつて其境内に特種の理想を發達し來れり。而して煩惱の衆生が歸依するに躊躇せざるはこの別天地内の理想にして、一度、脚を此境に投じたるものは必らずこの特種の忌はしき理想の奴隷となるなり。斯の理想は世上に滿布したり。此理想は平民社會に擴がれり。むしろ高等民種の過半をも呑みたり。或時は通と言ひ、或時は粹といふもの此理想に外ならざるなり。而して此理想なるものは即ち平民社會の紳士を作りし潛勢力にして、平民紳士の服裝、舉動、會話、趣味、この理想に基づかざる事甚だ稀なり。

眼を轉じて巢林子に次ぎて起れる戯曲界の相續者を見れば、題目として取るところは平民社會の或一種の要求を充たすものあるを見るべし。之を聞く河原乞兒の尤も幼稚なりし時に其趣好は戰國的の勇壯なるローマンス風のものにて、例せば盜賊を取りて主人公となし、之れに慈憐の志を深うせしめ、彊を捍しぎ、弱を助くる義氣に富ましめ、以て戰國に遠からぬ時代の人心に愬へたる如き、概して言へば不自然と過激とはこの時代の演劇に缺く可からざる要素なりしとぞ。後に發達したる劇曲(巢林子以後の)に到りてもこの不自然と過激とは拔くべからざる特性となりて、菅原手習傳授鑑に於て、蝶花形に於て、其他幾多の戯曲に於て、八九歳の少童が割腹したり、孝死するなどの事、戯曲の特有なるエンサシアズムにてもあるまじき程の過激に流れたり。こゝに一言すべきは、平民に特種の思想生じたりとはいへど、思想は時代の兒にてある事勿論なれば、彼等の思想も自ら封建的武勇、別して忠孝の大道を武士の影より掬養し得たりし事を思はざるべからず。故に彼等の中に起りし預言者も一は彼等の趣味に投じ、一は己れの所見に從ひて、自から忠孝即ち武士の理想をもつて平民に及ぼす事なき能はず。これ即ち封建制度に普通なる現象にてあるなり。尙ほ言を換へて曰へば封建制度は獨り武士にのみ其精華なるシバリーを備へたるにあらず、平民も亦た之を摸擬せり。然り平民の内にもシバリーは具はりたり。少なくとも俠勇の理想彼等の中に浸潤して武士の間に降りし雨は平民までをも濕ほしたることは疑ふべからざるの事實とす。

かく說き來らば平民社會には「粹」といふものゝ外に强大なる活氣、むしろ平民の俠勇と號するものあることを知らむ。而して我德川時代に於ける平民の位地を觀察すること前陳の如くな

りとせば、彼等は其「粹」をも、其「俠」をも偏固なる、矮少なる、むしろ卑下なる理想となしたることも亦明らかならむ。

英國のチョーサーは同國に於て始めてシバルリイの光芒を放ちたる詩人なり。然して其吟詠に上りたるシバルリイは武門の内にあるシバルリイにして平民の内に其筆鋒を向けざりし。蓋し彼の歴史は我歴史にあらず、彼の貴族は我の貴族の如くに平民と離れたるにあらず、彼の平民は我平民の如くに貴族に遠き者にあらず。加ふるに彼には平民と貴族とを繫げる宗教の威靈ありて教堂に集まる時に貴族平民の區劃を無みしたり、而して我にはこの大勢力あらず。宗教にも自からなる階級ありて印度の古時をうつし出しければ、これも我が平民を貴族より遠ざくるの助けをなせし事明らかなり。彼シバルリーは朝廷との關係淺からずして其華奢麗澤も自からに王氣を含みたり。而して平民社會には之に反して政權に抗し、威武に敵する氣稟あるシバルリイを成せり。彼のシバルリイには戀愛の價値高められて、俠は愛と其轍を雙べつゝ自から優美高讃なる趣致を呈せり。我が平民社會に起りしシバルリイは其ゼントルマンシップに於て既に女姓を遊戯的玩弄物になし了りたれば戀愛なるもの甚だ價値なく、女姓のレディシップをゼントルマンシップの裡面に涵養するかはりに、却つて女姓をして男姓の爲すところを學ばしめて、一種の女俠なるものを重んずるに至れり。この點に於て我がシバルリイは彼のシバルリイの如く重味あること能はず、我が紳士風は彼の紳士風の如く優美の氣韻を稟くること能はず、女姓の天眞を殺して自らの天眞をも自損せり。彼のシバルリイは「我」を重んじて輕々しく死し輕々しく生きず、我がシバルリイは生命を先づ献じて然る後にシバルリイを成さんとするもの丶如かりし。己れの品性は磨くこと多からずして他の儀式、禮法多き武門に對敵して反動的に放縱素朴に走りたり。宗教及び道德は彼のシバルリイに缺くべからざる要素なりしに我が平民のシバルリイは寧ろ當時の道德組織を斥ぞけ、宗教には緣薄きものにてありし。要するにチョーサーとシバルリイは(卽ち英國の)我がシバルリイの如く暗憺たる時代に產れたるにあらず。我がシバルリイのごとく壓抑の反動として兇暴に對する非常的手腕として發したるものにはあらで、燦然たる光輝を放ち英國今日の氣風、英國今日の紳士淑女を彼の如くになしたるも實にこのシバルリイの餘光にてありしことを知るべし。

俠といふ文字英語にては甚だ譯し難かるべし。譯し難き程に我が歴史上の俠は歐洲諸國のシ

バルリイとは異なれるところあるなり。倘し強いてシバルリイを我が平民界の理想に應用せんとせば俠と粹(俠客の戀愛に限りて)とを合せ含ましめざる可からず。俠客の妻を取りて研究せば得るところあらむ。

我が平民界の俠客をうつして文章に錄せしもの甚だ多し。われは一々之を參照する能はず。こゝに馬琴が其俠客傳に序して曰ひし數句を擧て其意見を窺ひ見む曰く「近世有大鳥居逸平關東小六幡隨院長兵衞皆是閭巷俠而其所爲或未必合於義啻立氣齊爲威福結私交以立僵於世者也較諸古者道德之士不動聲色消宇內之大變者、相去非唯霄壤而已、然氣豪、以此至捍當世之兇暴、此戰國餘習未改其私義廉潔以有然也使當時無此人則士風自是衰俠之義曷可少哉。……余有感焉而無所激憤不激不憤猶且傳俠客。云々。

支那の大歷史家同じく遊俠傳なる一小篇をのこして曰へることあり。今者游俠其行雖不軌於正義然其言必信其行必果已諾必誠不愛其軀赴士之阨困旣已存亡死生矣而不矜其能羞伐其德蓋亦有足多者焉。

韓非子の俠を論ずるの語に曰く。儒以文亂法俠以武犯禁。老子は俠を談じて大道廢有仁義仁義者道之異稱也而有似而非者と曰ふに對して、馬琴は夫俠之爲言僵也持也輕生高氣排難解孔子所謂殺身成仁者是也と言へり。

われは俠を上下する論を立つるにあらず。天知子及び愛山生の所論に對して余はむしろ平民界の俠氣に同情を投ぐるの念起りたれば、聊か匆卒の說を爲し我が平民界の「俠」及び「粹」の由つて來るところを穿鑿したるに過ぎず。若し夫れ俠なるものを愛好するやと問はるゝ人あらば我は是を愛好するなりと答ふるに躊躇せざるべし。然れども我に俠を重んずるやと問ふ者あらば我は答ふるところを知らず。われは實に德川時代に平民の理想となりて異色の光彩を放ちしこの「俠」を其時代の平民の爲に憐れむなり。かつて幡隨院長兵衞の劇を見たる時にわれは實に長兵衞の衷情を悲しめり。然れども我は長兵衞の爲に悲しむより寧ろ當時の平民の爲に悲しみしなり。彼等平民は自ら重んずる故を知らず、自から俠客なるものをして擅橫縱暴の徒とならしめたり。俠客の俠客たる所以甚だ重しとせず、平民界に入りて一種の理想となりたる跡眞に痛むべし。

德川時代平民的虚無思想

馮馬、三馬、源内、一九等の著書を讀む時にわれは必らず彼等の中に潜める一種の平民的虚無思想の絃に觸るゝ思あり。就中一九の著書膝栗毛に對してしかく感ずるなり。戯文戯墨の毒弊は世俗の衆目を顚墮せしのみかは、作者自身等をも顚墮し去んぬ。然れども其罪は之を獨り作者に歸すべきにあちず、當時の時代豈作者の筆頭を借りて其陋醜を遺存せしものにあらずとせんや。

德川氏の封建制度は世界に於て完全なるものゝ一と稱せらる、然れども武門の榮華は平民に取りて幸福を剝脫する秋霜なり。盆水一方に高ければ他方に低からざるを得ず。權力の積疊せし武門に自からなる腐爛生じ、而して平民社會も亦た敗壞し終れり。一方は盛榮の餘に廢れ、他方は失望の極に陷落せしなり。自然の結果ほど恐るべきものはあちじ。

道德の府なる儒學も平民の門を叩くことは稀なりし。高等民種の中にすら局促たる繩墨の羈絆を脫するに足るべき活氣ある儒學に入ることを許さゞりしなり。精神的修養の道一として平民を崇むるに適するものあらず。偶、俳道の普及は以て彼等を死地に救濟せんとしけるも彼等は自ら其粹美を抛棄したり。

禪味飄逸なる佛教は屈曲して彼等の内に入れり。彼等は神道家の如くに皇室を敬崇することを得ず、孔教を奉じて德性を育助することも能はず、左ればとて幽玄なる佛界の菩薩に近づく事も彼等の爲し得るところにあらず。悲しいかな佛教の中にも卑近なる教派のみ彼等の友となり、迷信は彼等を禁籠する囚牢となり、弱志弱意は彼等を枯死せしむる荒野となり、彼等をして人間の靈性を放擲して自ら甘んじて眼前の權勢に屈從せしむるに至りぬ。

自由は人間天賦の靈性の一なり。極めて自然なる願欲の一なり。然るに彼等は呱々の聲の中より既にこの靈性を喪へるを自識せざる可らざる運命に抱かれてありたり。自然なる願欲は抑へて不自然なる屈從を學ばざる可からざるタイムの籠に投げられてありたり。人誰れか全くタイムの籠に控縛せらるゝを心地よしとするものあらむ、人誰れか天賦の靈性を自殺せしむべき

運命を幸福なりとするものあらん。沙翁人間に斯般の一種の煩悶の拔く可からざるものあるを見て通解して謂へらく

For Who Would Bear the Whips and scorns of time
The Oppressor Wrong, the Proud man's contemnely Etc.

まことに人間は自由を享有すべき者なるよ。今日までの歷史を細閲すれば自由を買はんとて流せし血の價と煩悶せし苦痛の量とはいかばかりぞや。

Thus the native hue of resolution is smilled
over the pale cast of thought Etc.

徳川氏末世の平民實にこの煩悶を有つこと少なからざりしなり。この煩悶の苦痛に堪へがたかりしなり。こゝに於てか權勢家の剛復にして暴慢なる制抑を離れて、別に一種の思想境を造り以て自ら縱にするところなきを得ず。この思想は余が所謂一種の平民的虛無思想の聚成したるところなり。而して十返舍一流の戲墨は實にこの種の思想境より外に鳴り出でたる平民者流の自然の聲にあらずして何ぞや。

民友子先つ頃俗間の歌謠と題する一文を作りて平民社會に行はるゝ音樂の調子の低くして險なるを說きぬ。民友子は時勢を洞察して歎慨の餘りに此語を吐けり。われは日本の文學史に對してこの一種の虛無思想の領地の廣きを見て痛慟に勝へざるなり。彼等は高妙なる趣致ある道德を其門に辭み、韻調の整嚴なる管絃を謝して容れず。卑野なる樂調を以て飲宴の興を補ひ、放縱なる諧謔を以て人生を醜殺す。三絃の流行は彼等の中に證をなせり。義太夫、常磐津より以下短歌、長歌ことゞく立ちて之れが見證者たるなるべし。我は彼等の無政府主義なりしや、極端なる共和主義なりしや否やを知らず。然れども政治上に於て無政府主義ならずとも、共和主義ならずとも、思想上に於ては彼等は純然たる虛無思想を胎生したりしことを疑はず。愍むべし人生の靈（スピリチユアル）存（エキヂスタンス）を頭より尾まで茶にしてかゝりたる十返舍も一個の傲骨男兒なりしにあらずや。青山を抱いて自由の氣を賦せしシルレルと我好傲骨男子と其搖籠の中にありし時の距離幾許ぞや。

女學子は時勢に激するところありて膝栗毛の版を火かんと言へり。我は女學子の社會改良の熱情に一方ならぬ同情を有つものなり。然れども我は寧ろ十返舍の爲に泣かざるを得ざる悲痛あり。彼の如き豪逸なる資情を以て、彼の如きゼヌインのウイットを以て、而して彼の如くに無

無無の陋巷に迷ひ、無無無の奇語を吐き、無無無の文字を弄して、遂に無無無の代表者となつて終らしめたるもの抑も時代の罪にあらずして何ぞや。

老人は古へを戀ひ、壯年は己れの時に傲る。戀ふるものは戀ふべきの迹透明にして而して後に戀ふるにあらず。傲る者は傲るべき理の照々たるが故に傲るにあらず。彼は「時」に欺かれ盡くして古へを思ひ、これは「時」に弄せらるゝを知らずして空望を懸く。氣盈ち骨剛きものすら多くは「時」の潮流に卷かれて五十年の星霜急箭の飛ぶが如くに過ぐ。

然れども社會の裡面には常に愀々の聲あり。不遇の不平となり、薄命の歎聲となり、憤懣心の慨辭となりて、噴火口端の地底より異樣の響の聞ゆる如くに吾人の耳朶を襲ふを聽く。まことや人間社會ありてより以來、ヂスコンテンションと呼べる黑雲の天の一方にかゝらぬ時はあらざるなり。

凡そ社會の組織封建制度ほど不權衡なるものはあらず。而して德川氏の封建制度極めて完成したるものなりし事を知らば社會の一方にヂスコンテンションの黑雲も亦た彼の如くに廣大なりしものあらざりしを見るべし。その不平の黑雲の尤も多く宿るところは尤も深く人間の靈性を備へたる高尙なる平民の上にあり。訶諛佞辨をもて長上に拜服するは小人の極めて爲し易きところにして、高潔なる性格ある者に取りて極めて難しとするところなり。もし、今よりして當時の平民の心裡の實情を描けば、あはれ彼等は蠖蟄の苦を甘んずるにあらざれば放縱豪蕩にして以て一生を韜晦し去るより外はなかりしなり。一種の虛無思想彼等の心性上に廣大なる城郭を造りて彼等をして己れの靈活なる高尙の趣味を自殺せしめ、希望なく、生命なき理想境に陷殁し入らしめたり。

天知子其の平生深く自信する情神的義俠の靈骨を其鋭利なる筆尖に迸しらしめて曰く、社會の不平均を整ふる非常的手腕として俠客なるものは自然に世に出でたるなりと。又た曰く反動激發せる火花の如きものは俠客の性なりと。天知君の俠客論精緻を極めたれば我が爲めに其の性質を論評すべき餘地を餘さず。我は唯だ我が分に甘んじて、文學的に德川氏時代に平民者流の理想となりし俠と粹とが如何なる者なるべきやを觀察するの榮を得む。

わが德川時代平民の理想を査察せんとするは我邦の生命を知らんとの切望あればなり。山澤を漫渉して溪澗の炎暑の候にも涸れざるを見る時に我は地底の水脈の苟且にすべからざるを思

ふ。社會の外面に顯はれたる思想上の現象に注ぐ眼光は須らく地下に鑿下して幾多の土層以下に流るゝ大江を徹視せん事を要す。德川氏の興亡は甚しく留意すべきにあらず。然も德川氏三百年を流るゝ地底の大江我が眼前に横たはる時我は是を觀察するを樂しむ。誰か知らむ、德川氏時代に流れたる地下の大江は明治の政治的革新にてしがらみ留むべきものにあらざるを。

我が觀察せんと欲する大江は其上流に於ては一線なりしかども末に至りて二派を爲せり。而して其濕ほすところはナイル河の埃及に於けるが如くに我邦の平民社會を覆へり。

われ常に惟へらく至粹は極致の翼にして天地に充滿する一種の精氣なり。唯だ至粹を嚮へて之を或境地に箝むるは人間の業にして、時代なる者は常に其擇取したる至粹を歷史の明鏡に寫し出すなり。至粹は自ら落つるところを撰まず。三保の松原に羽衣を脱ぎたる天人は漁郎の爲に天衣を惜みたりしも、なほ駿河遊びの舞の曲を世に傳へけり。彼は撰まず、然れども彼降りて世に入るや塵芥の堆積するところを好まざるなり。否、塵芥は至粹を駐むるの權なきなり。漁郎天人の至美を悟らずして徒らに天衣の燦爛たるを吝む。こゝに於てか天人に五衰の悲痛あり。至粹の降るところ、臨むところ、時代之れを受けて其時代の理想を造り、その時代を代表するもの之を己が理想の中心となす。自由を熱望する時代には至粹は自由の氣となりて、ウイリヤム、テルの如き代表者の上に不朽なる氣稟をあらはし、忠節に凝れる時代には楠公の如き、はた岳飛、張巡の徒の如き忠義の精氣に盈ちたる歷史的の人物を生ずるに至るなり。ピユリタンの興らんとする時に至粹は彼の朴直なる田舍漢の上に望みて千載歷史上の奇觀をなし、獨逸に起りたる宗教改革の氣運の漸くルーテルが硬直誠實なる大思想に熟せんとするや至粹は直ちに入つてルーテルの聲に一種の靈妙なる威力を備へたり。

至粹は時代を作る者にあらず、時代こそ至粹を招きて自ら助くるものなれ。豪傑英雄は特に至粹のインスピレイションを享る者にてあれど、シイザルはシイザルにて拿翁（ナポレオン）は拿翁たるが如く、至粹を享くる量は同じくとも其英雄たるの質は本然に一任するのみ。時代も亦た斯の如し。時代には繼承したる本然の性質あり。之に臨める至粹の入つて理想となるは其本然の質を變ふるものにあらず。族制々度の國には族制々度の理想あり、立憲政體の國には立憲政體の理想あり。若し支那の如き族制に起りたる國に自由の精氣を需め、英米の如き立憲國に忠孝の精氣を求めなば人は唯だ其愚を笑はんのみ。

シドニイ、スペンサーの輩は好んで其理想する所に從ひてシバルリイ（俠勇）を謳へり。然れどもウオーヅオルス、バイロン輩の時に至りては是を爲さず。時代既に異なれば至粹も亦た異なれり。同じく理想を旨とするものにして其詩眼の及ぶところ、其詩骨の成るところ、各自趣向を異にす。頃者我文學界は俠勇を好愛する戯曲的詩人の起るありて、世は雙手を擧げて歡迎すなる趣きあり。俠勇を謳ふの時代未だ過ぎ去らざるか、抑も他の理想未だ渾沌たる創造前にありて未だ何の形をも成さゞるの故か、借問す沒却理想の論陣を布きながら理想詩人ドラマチストに先ちて出でんと預言し給ひし逍遙子は如何なる理想の活如來をや待つらむ。

徳川氏の時代に平民の上に臨みし至粹は如何なる理想となりてあらはれしや。我は前に言へりし如く二個の潮流あるを認むるなり。その源頭に立ちて見る時には一大江なり、其末流の岸に立ちて望めば二流に分れたり。普通の用語に從ひ我は其一を俠と呼び、他を粹と呼ばむ。

何れの時代にも預言者あり。大預言者あり、小預言者あり。其宗教に其思想に彼等は代表者となり、嚮導者となるなり。彼等は己の「時」を代表すると共に己れの「時」を繼ぐべき他の「時」を嚮導するなり。イザヤは其慷慨凛凄なる舌を其「時」によりて得たり。而して其義奮猛烈なる精神をもて次ぎの「時」の民を率ひたり。カアライルの批評的眼光を以て視へば預言者は其精神を死骨と共に棺中に埋めず、巍然として他の「時」に靈活し、無聲無言の舌を以て一世を號令するものなり。古昔の預言者は近世に望むべからず、近世の預言者は文字の人なりと言へる、己れ自ら一預言者なるカアライルの言を信ずることを得ば我は徳川氏時代に於ける預言者を其思想界の文士に求めざるを得ず。然り何れの時代にも或一種の預言者あることを疑はざれば我は文士を以て最も勢力ある預言者と見るの外なきなり。巣林子戯曲ありてより、浮世を難波の潟に、心中するもの數多くなり、西鶴一流の浮世好色小説の流布してより社會の風儀は大に紊亂せる事識者の共に認むる所なり。いざ是等平民社會の預言者に就て、その至粹を招て時代となしたる跡を尋ねて見む。

今代の難波文學は僅かに吾妻の花に反應する仇なる面影に過きざれども、徳川氏の初代に於て大に氣焔を吐きたるものは彼にてありし。江戸に芭蕉起りて幽玄なる禪道の妙機を開きて主として平民を濟度しつゝありし間に、難波には近松巣林子出でゝ艶麗なる情筆を揮ひて一世の趣味を風靡したり。次いで西鶴其碩の一流立ちて艶道の魔風隈なく四方に吹き廻れり。玆に至り

て難波の思想と江戸の思想と其文學上に現はれたるところを以て斷ずれば、各自特種の氣稟を備へて容易に踪跡し得べき痕を印せり。後に難波に起れる文士の多數と後に江戸に起れる文士の多數とを取りて檢するに、同じく混和すべからざる異色を帶びしと一點の疑を挿むべからず。不知庵主人が評して不朽の戯曲家と言ひたる巢林子をもて假に江戸に生れしめばいかならむ。深く儒家の道德に觀得するところありて加ふるに己れの自家の理想を以てしたる馬琴をして難波に生れしめばいかならむ。われは兩家其位地を顚倒すべしとは信ぜざれども、必らず其產出の上に奇異の現象を生じたりしことを疑はず。難波にては豐公の餘威全く民衆の腦漿を離れずして德川氏の武威深く其精神に貫かず。從つて當時の難波の潟に湧きたる潮の迹を問へば、寧ろ武勇の精神を遺却して、他に柔弱なる一種の精氣の漸く成熟し來れるを見るべし。ひとり一時の境遇にてしかくなりしにあらで關西の氣質と關東の氣質とは自ら異るところなり。宜なるかな俠勇を好みし京傳、馬琴の徒の關西に出でずして關東に起り、門左、西鶴等の關東に生れずして大坂に現れたるや。奇なるかな一は俠勇を尊び、一は艶美を尙びて各自特異の旗幟を樹てたるや。その始めは共に至粹の宿れるなり。啻だ一は之を俠勇に形成し、一は之を艶美(所謂粹)に形成したるの別あるのみ。

右は難波と江戸との理想の異色を觀察したるのみ。元より俠と言へば江戸に限り、粹と言へば難波に限るにあらず、われは爰に預言者の聲を吟味しその代表する時を言ひたるに過ぎず。

第三篇　再び芝公園地内にて

明治二十五年八月より
同年十一月まで

三日幻境（上）

人生何すれぞ常に忙促たる。半生の過夢算ふるに遑なし。悲しいかな我も亦た浮萍を追ひ、迷雲を尋ねて、この夕徒らに往事を追懐するの身となれり。

常に惟ふ志を行はんとするものは必らずしも終生を勞役するに及ばず。詩壇の正直男ゴールドスミスこの情を賦して言へることあり。

I still had hopes, my long vexat'on past
Here to return——and d'e at home at las'.

浮世に背き微志を蓄へてより世路酷だ峭嶢、烈々たる炎暑、凄々たる冬日、いつ、はつべしとも知らぬ旅路の空をうち眺めて、屢正直男と共に故郷なつかしく袖を涙にひぢしことあり。

われは函嶺の東、山水の威靈少なからぬところに産れたれば、我が故郷はと問はゞそこと答ふ

ろに躊躇はせねども、往時の産業は破れ、知己親縁の風流雲散せざるはなく、快く疇昔を語るべき古老の存するなし。山水もはた昔時に異なりて豪族の擅横をつらにくしと思はず。うなじを垂るゝは流石に名山、大川の威靈も半死せしやと覺て面白からず。「追懐(レコレクション)」のみに其地を我故郷とうなづけど、「希望(ホープ)」は我に他の故郷を強ゆる如し。

回顧すれば七歳のむかし我が早稲田にありし頃我を迷はせし一幻境ありけり。輕々しくも夙に少くして政海の知己を得つ。交りを當年の健兒に結びて鬱勃沈憂のあまり月を弄し花を折り遂には書を抛げ筆を投じて、一二の同盟と共に世塵を避けて一切物外の人とならんと企てき。今にして思へば政海の波浪は自から高く自から卑く、虚名を貪り俗情に蹤はるゝの人には棹を役ひ橈を用ゆるのおもしろみあるべきも、わが如く一片の頑骨に動止を制し能はざるものゝ漂ふべきところならず。然れども我は實にこの波浪に漂蕩して悲憤慷慨の壯士と共に我が血涙を絞りたりしなり。醜悪なる社會を罵蹴して一蹶青山に入り、怪しげなる草廬を結びて空しく俗骨を抛て畸人の名に敬して心には遠けしめたるなり。この時に我が爲めにこの幻境を備へわが爲にこの幻境の同住をなせしものは相州の一孤客大矢蒼海なり。

はじめてこの幻境に入りし時、蒼海は一田家に寄寓せり。再び往きし時に彼は一畸人の家に寓せり。我を駐めて共に居らしめ、我を醉はしむるに濁酒あり、我を歌はしむるに、破琴あり、縱に我を泣かしめ、縱に我を笑はしめ、我素性を枉げしめず、我をして我疎狂を知るは獨り彼のみとの歎を發せしめぬ。おもむろに庭樹を瞰めて奇句を吐かんとするものは此家の老畸人、劍を撫し時事を慨するものは蒼海、天を仰ぎ流星を數ふるものは我れ、この三箇一室に同臥、同起して玉兎幾度か罅け幾度か滿ちし。

三たび我が行きし時に蒼海は幾多の少年壯士を率ひて朝鮮の擧に與らんとし、老畸人も亦た各國の點取に雷名を轟かしたる秀逸の吟咏を廢して、自村の興廢に關るべき大事に眉をひそむるを見たり。この時に至りて我は既に政界の醜狀を悪くむの念漸く專らにして、利劍を把つて義友と事を共にするの志よりも、靜かに白雲を趁ふて千峰萬峰を攀づるの談興に耽るの思望大なりければ、義友を失ふの悲しみは胸に餘りしかども私かに我が去就を紛々たる政界の外に置かんとは定めぬ。この第三回の行はわれ髪を剃り笻を曳きて古人の跡を蹈まんと自から意向を定めてありしかば義友も遂に我に迫らず、遂に大坂の義獄に與らざりしも我が懐疑の所見、朋友を

失ひしによりて大に增進し、この後幾多の苦獄を經歷したるは又た是非もなし。

狂ひに狂ひし頑癖も稍靜まりて玆年人間生涯の五合目の中阪にたゆたひつゝ、そゞろに舊事を追想し、歸心矢の如しと言ひたげなるこの幻境に再遊の心はこの春松島に遊ひし時より衷裡を離れず。幸にして大坂の事ありてより消息絕へて久しき蒼海も獄を出でゝ近里に棲めば書を飛ばして三個同遊せんことを慫むるに來月まで待つべしとの來書なり。我は一日を千秋と數へて今日まで待ちつるものを今更に閑暇を得ながら行くべきをころに行かぬはあさはかな心の虫の焦つを抑へかねて、一書を急飛し、飄然、家を出でゝ彼幻境に向ひたるは去月二十七日。

この境、都を距ること遠からず。むかし行きたる時には幾度か鞋の紐をゆひほどきしけるが今は汽笛一聲、新宿を發して名にしあふ玉川の砧の音も耳には入らで、旅人の行きなやむてふ小佛の峠に近きところより右に折れて、數里の山徑もむかしにあらで腕車のかけ聲すさまじく、月のなき桑野原、七年の夢を現にくりかへして幻境に着きたる頃は、夜も既に十時と聞きて驚ろきたり。この幻境の名は川口村字森下。訪ふ人あらば俳號龍子と尋ねて我が老畸人を音づれよかし。

龍子は當年六十五歲、元と豪族に生れしが、少うして各地に飄遊し、好むところに從ひて義太夫語りとなり、江都に數多き太夫の中にも寄席に出でゝは常に二枚目を語りしとぞ。然れども彼は元來一個の俠骨男子、藝人の卑下なる根性を有たぬが自慢なれば、あたらしき才藝を自ら埋沒して中年家に歸り父祖の產を繼ぎたりしかど、生得の奇骨は鋤犁に用ゆべきにあらず、再三再四、家を出でゝ豪俠を以て自から任じ、業は學ばずして頭領株の一人となり、墨つぼ取つては其道の達人を驚かしめ、風流の遊場に立ちては幾多の佳人を惱殺して今に懺悔の種を殘し、或時は劍を挺して武人の暴橫に當り、危道を踏み、死地に陷りしこと數を知らず。然れども我が知りてよりの彼は沈靜なる硬漢、風流なる田人、園藝をわきまへ、俳道に明らかに、義太夫の節に巧みに、刀劍の鑑定にぬきんで、村內の葛籐を調理するに威權ある二十貫男、むかし三段目の角力を惱ませし腕力たしかに見へたり。

わが幻境は彼あるによりて幻境なりしなり。わが再遊を試みたるも寔に彼を見んが爲なりしなり。我性尤も俠骨を愛す。而して今日の社會まことの俠骨を容るゝの地なくして、剽輕なる壯士のみ時を得顏に跳躍せり。昨日の一壯士、奇運に遭會し代議士の榮譽を荷ひて議場に登るや、

酒肉足りて睥下見苦しく肥ゆるもの多し。われは此輩に會ふ毎に嘔吐を催ふすの感あり。世に知られず、人に重んぜられざるも、胸中に萬里の風月を蓄へ綽々餘生を養ふこの老俠骨に會はんとする我が得意はいかばかりなりしぞ、

車を下り閉せし雨戸を叩かんとするに、むかしながらの老婆の聲は、しはぶきと共に耳朶をうちぬ。次いで少婦の高聲を聞きぬ。わが手は戸に觸れて音なふ聲と共に、中には早や珍客の來遊におどろける言葉を洩らせるものあり。わが音むかしに變らぬか。なつかしきものは往日の知音なり。戸は開かれて我は迎へ入れられしが、老畸人の面を見ず。之を問へば王子にありと言ふ。八王子ならば車を驅つて過ぎり來しものを。この時われは呆然として爲すところを知らず。

埋火をかき起して爐邊再びにぎはしく、少婦は我と車夫との爲に新飯を炊ぎ、老婆は寢衣のまゝに我が傍にありて、一枚の澁團扇に清風をあほりつゝ我が七年の浮沈を問へり。ふところに收めたる當世風の花簪、一世一代の見立にて安物ながらも江戸の土産と、汗を拭きふき銀座の店にて購ひたるものを取出して昔日の少娘のその時五六歳なりしものゝ名を呼べば、早や寢床に入れりと言ふ。枉げてその顏見せてよと乞へば、やがて出で來りて一禮す。驚かるゝまでに變りてその名にしれし年の數もかさなりて今は十三歳と聞けばなつかしき山百合の、いま幾年たゝば人目にかゝらむなど戯れける中に老婆は他の小娘の、むかしの小娘の、としばへなるものを抱き來りて我を驚ろかせぬ。その名をぬひと呼ぶと聞きて、行先、人の妻となりてたちぬひの業に家を修むる吉瑞ありと打ち笑ひぬ。時も移りて或は老婆と小娘との紙帳に入りて一宵を過ごしぬ。この夜は七年刺多き浮世の旅路を忘却し安らかなる眠りに入りて樂しかりけり。

明くれば早曉、老鶯の聲を尋ねて鬱叢たる藪林に分け入り舊日の「我」に歸りて夢幻境中の詩人となり、既往と將來とを思ひぬぐらして神氣甚だ爽快なり。老婆は後園に植へたる百合數株、惜氣もなく堀りとりて我が朝餉の膳に供し、その花をば古びたる花瓶に活けて我が前に置据へぬ。人を市に遣りて老畸人に我が來遊を告げしめ、われに許して彼が秘藏の文庫に入りて其終生の秘書なる義太夫本を雜抽せしめたり。午になれど老人未だ歸らず、我は人を待つ身のつらさを好まねば少娘と其が兄なる少年とを携へて網代と呼べる仙境に蹈入れり。網代は山間の一溫泉場なり。むかし蒼海と手を携へて爰に遊びし事あり。巖に滴る涓水に鑛氣ありければ、これを浴

室にうつし薪火をもて暖めつゝ近郷近里の老若男女、春冬の閑時候に來り遊ぶの便に供せり。一條の山徑草深くして昨夕の露なほ葉上にのこり寒ぐる裳も濕れがちに、峽々を越へて行けば昔遊の跡歴々として尋ぬべし。老鶯に送迎せられ溪水に耳奪はれ、やがて砧の音と欺かれて、とある一軒の後ろに出づれば、仙界の老田爺が棒打とか呼べることをなすにてありけり。こゝは網代の村端にて、これより溪澗に沿ひ山一つ登れば昔し遊びし浴亭森肅たる叢竹の間にあらはれて、この行甚だ樂しからず。蒼海約して未だ來らず、老俠客の面未だ見ず、加るに魚なく肉なく、徒らに浴室内は老女の喧囂を聞くのみ。肱を曲げて一睡を貪ぼると思ふ間に夕陽已に西山に傾むきたれば、晩蟬の聲に別れてこの桃源を出で元の山路に據らで他の草徑をたどり我幻境にかへりけり。この時、弦月漸く明らかに妙想胸に躍り歩々天外に入るかと覺へたり。

樓上には我を待つ畸人あり、樓下には晩餐の用意にいそがしき老母あり。弦月は我幻境を照らして朦朧たる好風景得も言はれず。階を登れば老俠客莞爾として我を迎へ相見て未だ一語を交はさゞるに滿堂一種の清氣盈てり。相見ざる事七年、相見る時に驟かに口を開き難し。斯般の趣味人に語り易からず。始めは問答多からず、相對して相笑ふのみなりしが、漸く談じ漸く語りて我は別後の苦戰を說き起しぬ。

この過去の七年、我が爲には一種の牢獄にてありしなり。我は友を持つこと多からざりしに、その友は國事の罪をもつて我を離れ、我も亦た孤犖爲すところを失ひて、浮世の迷巷に蹈み迷ひけり。大俗の大雅に雙ぶべきや否やは知らねど、我は憤慨のあまり書を賣り筆を折りて大俗をもつて一生を送らんと思ひ定めたりし事あり。一轉して再び大雅を修めんとしたる時に產破れ家廢れて我が瘦腕をもて活計の道に奔走するの止むを得ざるに至りし事もあり。わが頑骨を愛して我が犧牲となりし者の爲に半知己の友人を過ちたりし事もあり、修道の一念、甚だ危ふく、あはや餓鬼道に迷ひ入らんとせし事もあり、天地の間に生れたるこの身を訝かりて自殺を企てし事も幾回なりしか、是等の事、今や我が日頃無口の唇頭を洩れてこの老知己に對する懺悔となり刻のうつるも知らで語りき。

しばらくありて老婆は酒を暖め來りて、飲まずと言ふ我に一杯を强ひ、これより談話一轉して我幻境の往時に入れり。淡泊洗ふが如き孤劍の快男子(蒼海)この席の談笑を共にせざるこそ終生の恨なり。少婦も出で來り、當時の主人なる無口男も席に進みて、或は舊時の田花の今は已

に寡婦になりしを語り或は近家の興廢浮沈を說き及び、或は我が棲むところを問ひなどしつ、この夜の興味は抹すべからざる我生涯の幻夢なるべし。就中、老母は我が元來の虛弱にて學道に底なき湖を渡るを危ぶみて涙を浮べて我が健全を祈るなど、都に多き知己にも增して我が上を思ふの眞情ありがたしとも尊ふとしとも言はん方なし。

この夜の紙帳は廣くして我と老俠客と枕を並べて臥せり。屋外の流水、夜の沈むに從ひて音高く、わが遊魂を卷きてなほ深きいづれかの幻境に流し行きて、われをして睡魔の奴とならしめず、翁も亦ねがへりの數に夢幾度かとぎれけむ、むく〳〵と起きて我を呼び、これより談話俳道の事、戲曲の事に闌にしていつ眠るべしとも知られず。われは眠りの成らぬを水の罪に歸して

七年を夢に入れとや水の音

と吟みけるに翁はこれを何とか讀み變へて見たり。翁未だ壯年の勇氣を喪はざれど生年限りあればかねて存命に石碑を建つるの志あり、我が來るを待ちて文を屬せしめんとの意を陳ければ我は快よく之を諾しぬ。又た彼の多年苦心して集めし義太夫本、我を得て沈滅の憂ひなきを喜び其殁後には悉皆我に贈らんと言ひければ我は其好意に感泣しぬ。翁の秀逸一二を舉ぐれば

夢いくつさまして來しぞほとゝぎす。

こゝに寢む花の吹雪に埋むまで。

なほ名吟の數多くあり、我他日翁の爲に輯集の勞を取らんことを期す。この夜、翁の請に應じて卽吟白扇に題したる老句は

曉天の白むまで眠り得ず。翌朝日闌けて起き出でたるは、いつの間にか明方の熟睡に入りたりしと覺ゆ。蒼海遂に來らねば老俠と我と車を雙べて我幻境の門を出づ。この時老婆は吳々も我再遊の前の如く長からざるべきを請ふに、この秋再びと契りて別れたり。行くところは高雄山。同伴はおもしろし。別して月も宵にはあるべし。この夜の淸興を思へば涼風盈ちて車上にあり。

（下）

むかし、われ蒼海と同に彼幻境に隱れしころ山に入りて炭燒、薪木樵の業を助くるを、こよなき漫興となせしが又た或時は彼家の老婆に破衣を借りて身をやつして炭賣車の後に尾きてこの

市に出づるをも樂しみき。

斯る無邪氣の勞力をもて我はわが胸中に蟠りたる不平を抑へつ。疲れて歸る夜の麥飯の味、今に忘れず。老崎人わが往事を說きて大に笑ふ時われは頭を垂れて冥想す。昔日わが不平幽鬼の如くにわが背後に立ちて呵々とうち笑ふ。遮莫われルーソー、ボルテイアの輩に欺かれ了らず、又た新聞紙々面大の小天地に翺翔して局促たる政治界の傀儡子となり畢ることもなく、己が夙昔の不平は轉じて限なき滿足となり、此滿足したる眼を以て蛙飛ぶ古池を眺る身となりしこそ幸ひなれ。

余は八王子に一泊するを好まざりしと雖、老人の意見枉げ難く止むことを得ずして俗氣都にも增せる市塵の中に一夜を過せり。明くれば早曉驢亭を出で馬車に投じて高雄山に向ふ。この時のわが口占(くちずさみ)は

すゞ風や高雄まふでの朝まだち。

路に梭の音の高く聞ゆる家ありければ眼を轉じて見るに花の如き少女ありて杼を用ゆることは甚だ忙はし。わが蓬萊曲の露姫が事を思ひ出でゝなつかしければ、能く其面を見んとするに馬車は行き過ぎてその事かなはず。彼少女が窓の外におもしろき花の咲けるに心づきて其名を問へば鋸草なりと言ふに、少女の風流思ひやられて句一つ讀みたれども難あれば載せず。

琵琶瀧より流れ落つる水のほとりの茶亭にて馬車に別れ、これより登り三十八丁といふ靈山の路は遠からず。道すがら巢林子の曲を評しあひ、治兵衛梅川など、わが老崎人の得意の節おもしろく間拍子とるに歩行も苦しからず。蛇の瀧も一見せばやと思しが、そこへも下りず巖角に憩て清々冷々の玄風を迎へ、體靜に心閑にして、冥思を自然の絕奧に馳せて聊か平生の煩羅を洗ふ。幽山に登るの興は登りつきたる時にあらず、荒榛を披き峭嶝を陟る間にあるなり。榮達は羨むべきにあらず、榮達を得るに至るまでの盤紆こそまことに欽すべきものなるべし。

頂上にのぼり盡きたるは眞午の頃かとぞ覺にし。憩所の凉臺を借り得て老崎人と共に縱まゝに睡魔を飽かせ、山鶯の聲に驚かさるゝまでは天狗と羽を幷べて象外に遊ぶの夢に餘念なかりき。

この山に鶯の春いつまでぞ。

とはわがねぼけながらの句なり。老崎人も亦むかしの豪遊の夢をや繰り返しけむ、くさめ一

つして起き上りたれば、冷水に喉を濕るほし眺めあかぬ立境にいとま乞して山を降れり。

琵琶瀧を過ぎ、かねて聞く狂人の樹を一見し、かつは己も平生の風狂を療治せばやの願ありければ折れて其處に下るに、聞きしに違はず男女の狂人の態、見るもなか〳〵に凄くあはれなり。そが中には家を理するの良妻もあるべく、業に勵むの良工もあるべし。戀のもつれに亂れ髪の少女もあらむ、逆想に凝て世を忘れたる小ハムレットもあらむ。われを見ていづれより來ませしぞと問ひかけたる少年こそは狂ひて未だ日淺き秀才と覺へたり。世間眞面目の言を吐かず、却つてこの狂秀才の言語尤も眞意を吐露すらし。われは極めて狂人に同情を有するものなり。かつて狂者それがしの枕頭にあること三日、己れも之に感染するばかりになりて堪へがたかりし事ありしが、今も我は狂人と共に長く留まる事能はず。琵琶瀧はさすがに靈瀑なり。神々しきこと比類多からず。高巖三面を圍んで晝なほ暗らく、深々として鬼洞に入るの思ひあり。いかなる神人ぞ、この上に盤桓してこの琵琶の音をなすや。こゝに來てこの瀑にうたれて世に立ち歸る人の多きも理とこそ覺ゆるなれ。われは迷信とのみ言ひて笑ふこと能はず。

こゝを立ち去りてなほ降るにひぐらしの聲凉しく聞ゆたれば、

日ぐらしの聲の底から岩清水。

この夜は山麓の驛亭に一泊し、あくる朝連立て蒼海を其居村に訪ひ、三個再び百草園に遊びたることあれど、記行文書きて己れの遊興を得意顔に書き立つること平生好まぬところなればこゝにて筆を擱きぬ。

心機妙變を論ず

哲學必ずしも人生の秘奥を貫徹せず。何ぞ況んや善惡正邪の俗論をや。秘奥の潛むところ、幽邃なる道眼の觀識を待ちて、無言の冥契を以て或は看破し得るところもあるべし。然れども我ば信せず何者と雖もこの『秘奥』の淵に臨みて其至奥に沈める寶珠を探り得んとは。

むかし文覺と稱する一傲客しばしが程この俗界を驗がせたり。彼は凡ての預言者的人物の如く生涯眞知己を得ることなく、傲逸・不遜、磊落、奇偉の一人物として幾百年の後までも人に誦

はれながら、一の批評家ありて其至眞を看破し、思想界に紹介するものなく今日に及びぬ。時なるかな、今年の文學界漸く森嚴になりて、幾多思想上の英雄、墳墓を出で中空に濶歩する好時機と共に、渠も亦た高峻なる批評、天知子の威筆に捕はれて明治の思想界に紹介せられたり。

天知君は文覺の知己なり。我は天知君をして文覺と手を携へて遊ばしむるを樂しむ。暗中坐禪する時、彼の怪僧天知君を訪らひ豪談一夜、遂に君を起して彼の木像を世に顯はさしむるに至りたるを羨まず。わが所望は一あり。渠が朋友としてにあらず、渠が裡面の傍觀者として、渠の心機一轉の摸樣を論ずるの榮を得む。

蓮池に臨みて蓮蕾の破るゝを見るは人の難しとするところなり。蓮華何の精あるかを知らず、俗物の見るを厭ふて幾多の見物人を失望せしむること多しと聞く。曉鴉に先ちて寢床を出で池頭に立ちて蓮女第一回の新粧を拜せんとするの志あるもの既に俗物を以て指目するに忍びず。然れども佳人何すれぞ無情なる、往々にして是等の風流客を追ひ回へすことあるは。人間界の心池の中に靈活なる動物の、心機妙轉の瞬時の變化も、或は蓮花開發に似たるところあり。

風靜かに氣沈み萬籟默寂たるの時に、急卒一響、神裝を凝らして眼前に亢立するは蓮仙なり。何の促すところなく、何の襲ふところなく、悠然泥上に佇立する花蕾の一瞬時に化體して神韻高趣の佳人となるは驚奇なり。然り驚奇なり、極めて普通なる驚奇なり。もし花なく變化なきの國あらば、之を絶代の奇事と曰はむ。絶代の奇事にして奇事ならざるもの自然の妙力が世眼に慣れて悟性を鈍くしたるの結果とや言はむ。

人間の心機に關して深く觀察する時は、この普通なる驚奇の變化、最も多く、各人の歴史に存するを見る。然りこの變化の尤も多くして尤も隱れ、最も急にして最も不可見のもの、他の自然界の物に比すべくもあらざるものあるは、人生の靈活を信ずるもの〻苟くも首肯せざるはなきところなし。惡を惡なりとし、善を善なりとし、不德を不德とし、非行を非行とするは俗眼だも過つことなきなり、但夫れ惡の外被に蔽はれたる至善あり、善の皮肉に包まれたる至惡あるを看破するは古來哲士の爲難しとするところ、凡俗の容易に企つる能ざる難事なり。もし夫れ惡の善に變じ、善の惡に轉じ、惡の外被に隱れたる至善の躍り出で、善の皮肉に藏れたる至惡の跳ね起るが如き電光一閃の妙變に至りては極めて趣致あるところ極めて觀易からざるところ、達士も往々この境に惑ふ。

人間の無爲は極めて暗黑なるところと、極めて照明なるところとあり。その無心の域に入れりとすべきは生涯の中に幾日もあらず。誰か能く快樂と苦痛の羈束を脫離し得たるものぞ。誰か能く淨、不淨の苦鬪を竟極し得たるものぞ。誰か能く眞に是非曲直の鐵鎖を斷離し得たるものぞ。唯だ夫れ人間に賢愚あり、善惡あり、聖汚あるは、その暗黑と照明との時間の「長さ」を指すべきのみ。いかに公明正大を誇負する人ありとも我は之を諾する能はず。畢竟するにその所謂公明なる所以のものは、暗黑の「影」の比較的に薄きに過ぎず、照明なる時間の比較的に長きに過ぎず、眞の大知、大能、大聖に致りては我は之を人間界に索むるの愚を學ぶ能はず。然り、大知、大能、大聖は人間界に庶幾すべからず。然れども、是を以て人間の靈活を卑うするところはなきなり。人間と呼べる一塊物（A Peace of Work）を平穩靜着なるものとする時は、何の妙觀あるを知らず。善あり、惡あり、何等思議すべからざるところありて、始めて其本性を識得するを得るなり、善鬼、惡鬼、美鬼、醜鬼、人間の心地に混交し亂戰するを以て、始めて人間なるもの〻他の動物と異なる所を見るべし。

神の如き性、人の中にあり、人の如き性、人の中にあり。此二者は常久の戰士なり。九竅の中にこの戰士なければ枯衰して人の生や危ふからむ。神の如き性を有つこと多ければ、戰ひは人の如き性を倒すまでは休まじ、休むも一時にして程經れば更に戰はざる能はず。人の如き性を有つこと多ければ終身惘々として煩ふ所なく、想ふ所なく、憂ふる所なからむ。この兩性の相鬪ふ時に精神活きて長梯を登るの勇氣あり。鬪ふこと愈多くして愈激奮し、その最後に全く疲廢して萬事を遺る。この時こそ、惡より善に轉じ、善より惡に轉ずるなれ、この疲廢して昏睡するが如き間に。

人の一生を水晶の如く透明なるものと思惟するは非なり。行ひに於ては或は完全に幾きものあうむ、心に於ては誰か缺然たらざる者あらむ。人は到底、絕對的に善なるものとなること能はず。然れども或限りある「時」の間に於て極めて高大なりと信ずる事は出來ざるにあらず。其限りある時間の長短は一問題なり、われは思ふ其極めて短かきは石火の消ぬ間にして、長きも流星の尾に過ぎじ。虛無を重んじ、無爲を尙ぶも、畢竟この理に外ならず。施爲多く思想豐かにして而して高遠なること能はざるは、寧ろ彼の施爲なく思想なくして石火中の大頓悟を樂しむに如かじとすらむ。

文覺の袈裟に對するや、如何なる愛情を有ちしやを知らず。然れども世間彼を見る如き荒逸なる愛情にてはあらざりしなるべし。當時夫婦間の關係を推するに、德川氏時代の如く嚴格なるべきものにあらず。袈裟の如き堅貞の烈女實際にありしものなりや否やを知らず。常盤の如き巴の如き節操の甚だ堅からざる女人多き時代にありて袈裟御前なるもの實際世にありしか、或は疑ひを挿むの餘地なきにあらず。然れども凡てのドラマチカルの事蹟を抹殺し去りても文覺が其妄愛に陷りて對手を害せし事は事實なるべし。少なくとも癡迷惑溺の壯年たりしことは許諾せざるべからず。

渠は油地獄の主人公の如く癡愚無明なりしものなるか、余は、しかく信ずること能はず。彼の文、彼の識、世間の道法を辨ぜざるものとは認め難し。然れども渠は迷溺するを免かれざりしなるべし。彼の本地は世間の道法に非ず、世間の快樂にあらず、世間の巧利にあらず、進取にあらず、退守にあらず、全然一個の椀白むすこたりしなるべく、何物にか迷ひ、何物にか溺るゝにあらざれば遂に一轉するの機會は非ざりしなり。渠は凡のものを蔑視したるなるべし、淨海も渠を怖れしめず、政權も渠を懸念せしめず、己れの本心も渠を躊躇せしむるところなく、激發暴進、鐵欄の以て繫縛する者あるに至るまでは停駐するところを知らざるなり。

渠は惡を惡とするを知る。然れ共、惡の惡なるが故に自ら制止することは能はず。能はざるに非ず、するの意志を有せざる也。善の善なることを知る、然れ共、善の善たるを知て之を施すことは能はず、能はざるに非ず、施すの念を有たざる也。彼の一身は一側より言へば腕白也、他の一側より見れば頑執也。人の婦なることを知りて之を姦せんとす、元より非道也。然れ共、彼は非道を世人の嫌惡する意味に於ての非道とせず。人を己の慾情の爲に殺害するの悖虐なるを知る。然れ共、悖虐を悖虐とする所以は極て冷淡なる意味に於て也。故に彼は此大惡を犯さんとする時に左轉右盻せず。白刃を睡客に加ふるの時に於てすら彼は尙大惡の大惡たるを曉知せざる也。

斯の如くに冷絕なる傲漢をして曇天の俄然として開け、皎々たる玉女、天外にひかり出でたるが如くならしめたる絕妙の變化はいかにして來りたるか。殺人の大惡、彼を驚懼せしめ、醒覺せしめしか。然らず。彼は始めより畏懼を知らず。

妙變を與へたるもの別に存するあり。少しく是を言はむ。

彼は此の際に於て天地の至眞を感ぜし事其一なり。凡てのものを蔑視したる彼は今女性の眞

美を感得せり。血肉あるの女性は血肉の美を示せども天地の至妙を示すものにあらず。始め貞操を以て辭せしものも、人間を嘲罵する彼の心絃には觸れざりしを、この際に於て豁然悟發して人間に至眞の存するあるを曉らしめたり。

彼はこの際に於て己れの意中物を害すると同時に己れの迷夢をも擊破し了れり。彼の惑溺は袈裟ありて然るにあらざりしも、この袈裟の横死は彼が一生の惑溺を醫治したり。意中物は己れの極致なり。己れの極致を殺したる時に、いかで己れの過去を存することを得む。彼は極致と共に死したり。而して他の極致を以て更生するまでの間は所謂無心無知の境なり、激奮猛奔して而して中奥に眠熟するが如き境なり。この境を過ぐるは心機一轉に缺くべからず。而してこの境は石火なり、流星なり、數眇時間なり。この數眇時間の後に他の極致は歩を進めて彼の中に入る。しばらく混亂したる時に彼は新生の極致を得て全く向前の生命と異なるものとなるなり。

彼はこの際に於て天地の實を覺知せり。「死」彼に於て何の恐るゝところなく、生、彼に於いて何の意味あるかを知らしめず。茫々たる天地、有にもなく、無にもなきに似たる有樣にありしものが、始めて「死」といふ實を見たり。死は永遠の死にして再見の機あらざるべき實を知りたり。無常彼に迫りて、無常の實を示し、離苦彼を圍みて離苦の實を表はし、戀愛その僞裝を脱して、戀愛の實を顯はし、痴情その實體を現じ、大惡その眞狀を露はし、彼をして棘然として顚倒せしめ、然る後に彼をして始めて己れの存立の實なると天地萬有の實なるとを覺知せしめたり。而して彼をして天地神明に對して極めて眞面目なるものとならしめたり。

彼はこの際に於て戀愛の至道と妄愛の不義とを悟れり。曩に愛慕したるもの眞の愛慕にあらず、動物的慾愛に過るところあらざりし。然れども事の玆に至りて、始めて妄執の妄執たるを達破し、妄愛の纏賁したるを頓脱し、戀愛の方向一轉して皮膚の愛慕を轉じて内部精神の美に對する高妙なる愛慕を興發せり。この愛慕は一の目的物に聚りて、而して四散せり。四散せるもの再た聚りて或一物の上に凝れり。彼の以後の生涯是を證するを見るべし。

最後に彼は此際に於て佛智を得たり。彼は無慚無愧無苦無憂にして百煩惱の繁擁するところとなりて自ら知ること能はざりしなり。然るに發露刀一たび彼の心機を斷截するや、彼は自ら依怙するところを喪ひたり。佛智はこの一瞬間に彼の中に入り、彼をして照明の心鏡に對せし

め慚愧憂苦、輾轉煩悶せしめ、然る後に自己を寄するところを知らしめたり。

凡そ傲逸彼の如きは、亂世にありて一佛徒として終ること能はざるところなり。然るに彼をして遂に劍鎗に杖かずして、經典に倚らしめたるもの、抑、いかなる鬼物の神力ならむ。他ならず、この一瞬時の發露刀なり、心機妙變なり。剛健彼の如く、執着彼の如く、驕慢彼の如く、血性彼の如きものをして、志の壯偉なる事は全盛の平家を倒して孤島飄落の人を起す程にありて而して胸中一物の希ふところなく、單だ一寺の建立を願欲せしむるに過ぎざりしもの抑も奈何の故ある。曰く彼時の變化なり。熱烈の舌一世を罵り勇猛の氣英雄を呑み、豪快天地を嘲るが如き舉動を爲しながら、別に一片の眞率無慾なるところ、專念回向するところ、瞑目靜思する處、殆、數個の人あるが如き觀ある者何ぞや。曰く彼時の發心なり、彼時の心機妙變なり。彼時に得たるものが深く胸奥に印して抹除すること能はざればなり。噫この、ある意味に於ての荒法師が筐中常に彼可憐の貞女の遺魂を納めて、その重荷を取り去ることを得ざりしと、懸瀑に難行して、胸中の苦熱鎖し難き痛惱とは豈生悟りの聖僧の能く味ふを得るところならんや。冷淡にして熱血ある好漢、遂に半悟の人とならず、能く自家の弱性を暴露し、罪業を懺悔せり。

然り彼の一生は事業の一生にあらずして懺悔の一生なり。彼を以て改革家なりと評する如きは蛇尾を見て蛇頭を見ざるの論なり。

文覺が袈裟を害したるは實に彼の心機を開發したる者也。蓮花蕾を破りて玉女泥中に現れたるは實に此晨也。至善の至惡を倒したるも此朝也。無漏、有漏に勝ちたるも、光明の無明を破りたるも、神性、人性を擊碎したるも、皆此時に於てありしなり。而して其時間は一閃電の間に過ぎず。人終に戰はずして勝つ能はざるか、倒れずして起る能はざるか。われは文覺の爲に悲しむ、われは彼の發機を觀じて彼の爲に且つ泣き且つ喜ぶ。彼をして斯の如き大毒刄の下に大發心を得せしめたる神意果して如何。天知子の一雜誌に載せし「怪しき木像」我眼前に往來して遂に我を宗が文覺を觀るの眼光いかんは讀者と共に刮目して待つべし。

秋窓雜記

第一

かなしきものは秋なれど、また心地好きものも秋なるべし。春は俗を狂せしむるに宜けれど秋の士を高うするに加かず。花の人を醉はしむると月の人を淸ましむるとは自から味を異にするものあり。喜樂の中に人間の五情を沒了するは世俗の免かるゝ能はざるところながら、われは萬木凋落の期に當り靜かに物象を察するの快なるを撰ぶなり。

第二

希望は人を欺き易きものぞ。今年の盛夏鎌倉に遊びて居ること僅かに二日、思へらく此秋こそは爰に來りてよろづの秋の悲しきを味ひ得んと。圖らざりき身事忙促として空しく中秋の好時節を紅塵萬丈の裡に過さんとは。然れども秋は鎌倉に限るにあらず、人間到るところに詩界の秋あり。欺き易き希望を駕御するの道は斯にこそあれ。

第三

我庵も亦た秋の光景には洩ざれける、咽なきやぶるばかりのひよどりの聲々、高き梢に聞ゆるに、窓開きてそこかこゝかとうち見れば、そこにもあらず、こゝにもあらず、窓を閉ぢて書を扱げば一層高く聞ゆめり。鳥の聲ぞと聞けば、鳥の聲なり、秋の聲ぞと聞けば、おもしろさ讀書の類にあらず。

第四

病みて他鄕にある人の身の上を氣遣ふは人も我もかわらじ。左れど我は常に健全なる人のたまく床に臥すを祝せんとはするなり。病なき人の道に入ることの難きは、富めるものゝ道に入り難きに等しからむ。世には體健かなるが爲に心健かならざるもの多ければ、常に健やかなるものゝ十日二十日病床に臥すは左まで恨むべき事にあらず。況してこの秋の物色に對して命運を學ぶにこよなき便あるをや。斯く我は眞意を以て微恙ある友に書き遣れり。

第五

萩薄、我が庭に生ふれど我は在來の詩人の如く是等の草花を珍重すること能はず、我は荒漠たる原野に名も知れぬ花を愛づるの心あれども、園藝の些技にて造詣したる矮少なる自然の美を左程にうれしと思ふ情なし。左は言へど敢て在來の詩人を責むるにあらず、又た自己の愛するところを言はんとにもあらず、唯だ我が秋に對する感の一として記するのみ。

第　六

鴉こそをかしきものなれ。わが山庵の窓近く下り立ちて、我をながし目に見やりたるのち、追へども去らず、叱すれども驚かず、やゝともすれば脚を立て首を揚げて飛去らんとする景色は見すれど、わが害心なきを知ればにや、たゞふよろ〳〵と歩むのみ。浮世は廣ければ、斯る曲物を置きたりとて何の障りにもなるまじけれど、その芥ある處に集り、穢物ある處に群がるの性あるを見ては、人間の往々之に類するもの多きを想ひ至りて聊か心惡(むね)くなりたれば、物を拋ぐる眞似しけるに、忽ちに飛去りぬ。飛去る時、かあかあ、と鳴く聲は我が局量を嘲る者の如し。實に皮肉家と云ふもの文界のみにはあらざりけり。

第　七

夜更けて枕の未だ安まらぬ時、蟋蟀の聲を聞くは眞の秋の情なりけむ。その聲を聞く時に、希望もなく失望もなく、恐怖もなく欣樂もなし。世の心全く失せて秋のみ胸に充つるなり。松虫鈴虫のみ秋を語るにあらず。古書古文のみ物の理を我に致ふるにあらず。一蟋蟀の爲に我は眠を惜まれて、物思ひなき心に思を宿しけり。

第　八

芭蕉の葉色秋風を笑ひて籬を蓋へる微かなる住家より、ゆかしき音の洩れきこゆるは、仇心浮きて其が中を覗ひ見れば、年老ひたる盲女の琵琶を彈ずる面影、凛乎として俗世の物ならず。その律調の端正なること今の世の浮華なる音樂に較ぶべからず、うれしき事に思ひぬ。

第　九

紅葉館は我庵の後にあり。古風の茶亭とは名のみにて、今の世の浮世才子が高く笑ひ低く語るの場所なり。三絃の音、耳を離れず、蹈舞の響、森を穿ちて來る。その音の卑しく、其響の險なるは幾多世上の趣味家を泣かすに足る者あるべし。紳士の風儀久しく落て之を救濟するの道未だ開けず。悲いかな。

第十

わが幻住のほとりに情しらぬもの多く住むにやあらむ、わがうつりてより未だ月の數も多からぬに三度までも猫を捨てたるものあり。一たびは朝早く我机邊に泣くを見出し、二度目には雨ふりしきる日に垣の外より投入れられぬ。三度目は我が居らざりし時の事なれば知らず。浮世の辛らきは人の上のみにあらずと覺ゆたり。

第十一

今の世の俳諧士は憐れむべきものなるかな。我庵を隔つること杜ひとつ、名宗匠其角堂永機住めり。一日人に誘はれて訪ひ行きつ。閑談久しき後彼の導くまゝに家の中あちこちと見物しけるが、華美を盡すといふ程にはあらねど、よろづ數奇を備へて粹士の住家とは何人も見誤らぬべし。間數も不足なき程にあれば何をか喞つべきと思ふなるに、俳翁頻りに其狹陋なるをつぶやきて止まず。一向に心傳ねば、笑つて翁に言ひけるやう、御先祖其角の住家より狹しと思すにやと、俳士をして俗に媚ぶとの止むを得ざるに至らしめたるものあるは余と雖之を知らぬにあらねど、高達の士の俗世に立つことの難きに思ひ至りて、默然たること稍しばしなりし。

他界に對する觀念

悲劇必らずしも悲を以て旨とせず、厭世必らずしも厭を以て趣とせず。別に一種の拔くべからざる他界に對する自然の觀念の存するものあり。この觀念は、以て、悲劇を人心の情世界に愬へしめ、厭世を高遠なる思想家に迎へしむ。人間ありてよりこの觀念なきはあらず。或は遠く、或は近く、大なるものあり、小なるものあり。宗教この觀念の上に立ち、詩想この觀念の糧に活く。

この觀念は世界の普通性なり。而してこの觀念あると共に離る可からざるものは、この觀念に二元性（デュアリズム）ある事なり。或は善惡と云ひ、或は陰陽と言ひ、或は光暗と云ふが如き、ペルシヤのむかしに、アームズトの神、アハメルの神ありし如く、イスラエルのむかしに、エホバ神と惡魔とを對比せし如く、顯著なると顯著ならざると、一神と多神との區別あるとあらざるとに拘ら

す、彼の元を二にするの性は此觀念に離れざるなり。凡そ詩歌あるの國に於て鬼といふ字のあらざるはなかるべく、神といふ字のあらざるはなかるべし。コメディ、或は鬼神なきの國にも發達するを得ん、トラゼディに至りては必らず鬼神なきの國に興るべからず。シユレーゲルも論じて古神學は希臘悲劇の要素なりとは言へり。げにやソホクルス以下の名什も彼國に鬼神なかりせば、恐らくは傳ふる程の物にてはあらざりしならむ。

フエーリイあり、エンゼルあり、サイレンあり、スヒンクスあり、或は空中に棲めるものとし、或は地上の或奥遠なるところに住めりとなす、共に他界に對する觀念なり。遠近は世界の廣狹によりて差ありしのみ。或は聖美なるもの、或は毒惡なるもの、或は慈仁なるもの、或は獰猛なるもの、宗教の變遷、思想の進達に從ひて其形を異にするが如しと雖、要するに二岐に分れたる同根の觀念なり。

ゲーテのメヒストフエリスを捕捉して其曲中に入らしむるや、必らずしも斯の如き他界の靈物實存せりと信ぜしにもあらざるべし。余が他界に對する觀念を論じて、詩歌の世界に鬼神を用ふる事を言ふも、強いて他界の鬼神を惑信するにはあらず。詩歌の世界は想像の世界にして、靈あらざるものに靈ありとし、人ならざるものに人の如くならしめ、實ならざるものを實なるが如くし、見るべからざるものを見るべきものとするは、此世界の常なり。萬有教あらざる前に此世界には既に萬有教の趣味あり、形而上の哲學あらざる前に此世界には既に形而上の觀念あり。想像は必らずしもダニエルの夢の如くに未來を曉らしむるものにあらざるも、朝に暮に眼前の事に齷齪たる實世界の動物が冷嘲する如く無用のものにはあらざるなり。漠々茫々たる天地、英國の大詩人をして、

There are more things in heaven and earth,
Than are dreamed of in your philosophy.
Horatio.

と畏れしめたるもの豈偶然ならんや。

ハムレットの幽靈は實に此觀念、この畏怖よりシエークスピアの懷裡に產れたり。其來るや極めて嚴肅に極めて凄惋なり。恰も來らざるべからざる時に來るが如く、其去るや極めて靜寂

なり、極めて端整なり。恰も去らざる可からざる時に去るが如し。來るや他界より歩み來りたる跡を隱さず。去るや他界に去るの意を徹はず。極めて熱燼(アーネスト)なる悲劇の眞中に、極めて幽玄なる光景を描き出す。玆に於て平生幽靈を笑ふ者と雖、悚然として人界以外に畏るべきものあるを識り、惡の秘し遂ぐべからざるを悟る。彼一篇より幽靈の作意を除き去らばいかに、恐らくはシエキスピーア遂に今日のシエーキスピーアにあらざりしなるべし。

長足の進歩をなせる近世の理學は、詩歌の想像を殺したりといふものあれど、バイロンのマンフレッド・ギョーテのフォウストなどは實に理學の外に超絶したるものにあらずや。毒鬼を假來り、自由自在にネゲイションの毒藥を働かせ、風雷の如き自然力を縱にする鬼神を使役して、アルプス山に玄妙なる想像を構へたるもの、何ぞ理學の盛ならざりし時代の詩人に異ならむ。その異なるところを尋ぬれば古代鬼神と近世鬼神との別あるのみ。詩の世界は人間界の實象のみの占領すべきものにあらず、晝を前にし夜を後にし、天を上にし地を下にする無邊無量無方の娑婆は即ち詩の世界なり。その中に遍滿するものを日月星辰の見るべきものゝみにあらずとするは自然の憶度なり。生死は人の疑ふところ、靈魂は人の惑ふところ、この疑惑を以て三千世界に對する憶度に加ふれば、自からにして他界を觀念せずんばあらず。地獄を說き、天堂を談ずるは小乘的宗教家の癡夢とのみ思ふなかれ。詩想の上に於て地獄と天堂に對する觀念ほど緊要なるものはあらざるなり。

新教勃興後の基督教國は一般に新活氣を文學に加へたり。其然る所以のものは基督のみ是を致せしにあらず、惡魔も與りて力あるなり。言を換へて云へば、聖善なる天力に對する觀念も、邪惡なる魔力も共に人間の觀念の區域を擴開したるものにして、一あつて他なかるべからず。基督の神性は東洋の唯心的思想が達せしむる能はざるところに觀念を及さしむると共に、サタンの魔性は東洋の惡鬼思想の到らざるところまで觀念を達せしむ。一神教の裡面は一魔教なり、多神教の裡面は即ち多鬼教なり。一神教には中心の權あるが故に中心の善美あり。是と同時に一魔教にも中心の統御あるが故に中心の毒惡あり。一のポジチーブに對して一のネガチーブあり。多のポジチーブに對して多のネガチーブあるは當然の理なり。斯の如くなるが故に、歐洲諸國に行はるゝ詩想は日本に求むべからず、善美なるものに對する觀念も、醜惡なるものに對する觀念も、中心を有せず、焦點を有せざるが故に、遠大高深なる鬼神を詩想中に産み出す事を得

ざるなり。

漫然語を爲すものあり、曰く、我國にも幽玄高妙なる想詩を構ふるに足るべき古神學あるにあらずやと。余を以て是を見れば我國の古神學は或は俗を喜ばすべき奇異譚を編むには好材料たるべきも到底所謂幽玄（ミステリー）を本とする想詩を構ふるに適するものならず。其第一の理由は到底今日を以て往古の古神學を用ふる事能はざること是なり。即ち古神の詩歌に入るは少くも古神に對する信仰ある時代にあらざれば不可なり。フォウストを構へたるギョオテは近世の鬼神を中古の物語に應用したるなり。古代の鬼神を近代の物語に欲めて玄妙なる識想を愬へんとするは到底爲すべからざる事なり。再言すれば我國の古神は既に文學上に於て死神なり。いかなるジニヤスの力を以ても復活せしむべからざればなり。其第二の理由は我國の古神は靈體にあらずして人間なること是なり。出沒自在の神通力あるにあらず、宇宙萬有を統治するものにあらず、報罰の全權を掌握するものにあらず、其天界に領有するところ多からず、ジニヤスの力ありとも是を假用するに道なからむ。第三の理由は、其複數なること是なり。前に言ひたる事あれば重ねて說かず。斯の如く我邦の文學は古神學に惠まるゝところ極めて少なし。

佛教侵來以後の日本は、他界に對する觀念の發達大に著るしきを示せり。然れども想像的鬼神の輸入あると共に、一方に於ては、萬葉時代に行はれたる單純なる「自然力」に對する恐怖を其心外無法の斧を以て破碎したり。精靈の思想は以て幽靈の新題目を文學に加ふるところありしと雖、一方に於ては輪轉あり、無常あり、寂滅あり、以つて人間の思慕を截斷し、幽奥なる觀念を遮るに足りしなり。佛教文學の精粹と呼ばれたる謠曲の中に、極めて普通なる幽靈の思想は、人間の喜怒哀樂等の情意に動かされて浮き出るものにして、人間を其儘なり。彼の Is it the host of heaven と冒頭に書出して、幽靈と他界の惡靈と協合したるものゝ如くに見はす者に比す可きにあらず。況んや狂公子のみには見へて其母には見へざる如き妙味に至りては到底わが東洋思想の企及する所にあらざるなり。母にのみ見へて公子に見へざる一事は我が戲曲の中にも其例を得るに難からず。然れども怨恨する目的物に見へずして狂公子にのみ見ゆるは其倫を我文學に求むるを得ず。天界と地界と所を異にするが故に、容易に其形を現ずること能はざるは幽靈なり。其現ずるは主觀的願欲（ヰヰイ）を以て現ずるにあらず、客觀的壓抑によつて現ず。自由の意志を以て現ずるにあらず、自然の傾として現ぜしなり。ハムレットの幽靈はジニアス

の力のみにて然るにあらず、その東洋の幽靈と相異なるところ、自から其他界に對する觀念の遙に我と違ふところあればなり。

物語時代の竹取、謠曲時代の羽衣、この二篇の結構を檢し、その仙女の性質を察するに、兩者共に月代表する者はあらず。而してこの二篇の結構を檢し、その仙女の性質を察するに、兩者共に月宮に對する人間の思慕を化體せしに過ぐるなし。竹取の仙女は人界に生れて人界を離れ、羽衣の仙女は暫らく人界に止まりて人界を去れり。共に歸るところは月宮なり。蓋し人界の汚濁を厭ふの念はいかなる時代にも、いかなる人種にも抽くべからざるものなるが故に、他界を冥想し、美妙を思欲するの結果として心を月宮に寄するは自然の理なれども、この冥想この觀念の月宮にのみ凝注したるは我文學の不幸なり。月宮は有形の物なり、月宮は宇宙の一小部分なり、人界に近き一塊物なり。その中には自在力あらず、その中には大魔力あらず、無邊無涯の美妙を支給すべきにあらざるなり。故に月宮を美妙の觀念の中心としたる我文學は（前述二篇に就きて曰ふ）神教國に於ける宇宙萬有の上に臨める聖善なるものを中心として萬有趣味の觀念を加へしめたるものに及ぶ能はず。竹、羽、二篇は實に固有の古神思想と佛教思想とを併せ備へたるものなるに、その結果、斯の如くなりとせば、我邦理想詩人の前途豈惜然ならざらんや。（嵯峨のやの夢幻境をも參考あらん事を請ふ）

我風流吟客を迷はせたるもの雪月花の外はあらず。此一事も亦た以て我文學の他界に對する美妙の觀念に乏しきを證するに足るべし。我文學を織細巧妙にならしめて崇高壯大にならしむる能はざりしもの、必竟するに他界の觀念なくして、接近せる物にのみ寄賴したればなり。

我文學に戀愛なるもの〻甚だ野鄙にして熱着ならざりしも、亦他界に對する觀念の缺乏せるに因するところ多し。「もろ〳〵の星くづを君の姿にして」などやうなる詞は到底我詩界に求むること能はじ。實際にのみ馳求する思想は高遠なる思慕を產まず、我戀愛道の肉情を先にして眞正の愛情を後にする所以茲に起因するところ少しとせず。

少時劇に誘はれて大江山の鬼を觀たりし事あり。三尺の童子たりし時にすら畏怖の念よりも寧ろ嘲笑の念を抱きたりしを記憶す。而して大江山の鬼は土蜘蛛等と共に中古の鬼物なり。是を彼のバツグピーア、ウイッチなどに比較せばいかに、その妖魅力の差違いかに遠きかは一見して知るべし。妖魅力を鬼物自らに屬するものとするは我鬼神の思想なり。妖魅力をセタンよ

り授けられたるものとするは一魔教の思想なり。一魔教(假に此語を作りて)の魔楽は天地を包める事前にも言ひたり。我國の妖魅力は一勇者渡邊綱にも頼光にも制伏せらるゝ程の微力なり。九尾狐の妖力を以ても那須與一の一箭に斃れたり。要するに我國文學上の妖魅力は人威に勝つこと能はざるものなり。是れも亦た我邦に他界に對する觀念の乏しきを證するに足れり。

「死てふ眠の中にいかなる夢をや見るらむ。」と歌ひたる詩家は泰西にあれども、「死んで仕舞へば眞くらやみ」と說いたる小說家は日本にあり。死は眠なりと言ふと、終りなりと言ふと、思想の上に莫大の差違あり。一はエターニチイの基督教的思想より來り、一は無常迅速の佛教思想より來れり。

But that dread of something after death,
The undiscovered land from whose bourn
No traveller returns, puzzles the will,

の如きに至りては、到底彼國の觀念に見るを得べくして我想界に求むる事を得ず。是も亦た我文學に他界に對する觀念の缺乏せるを告ぐるものなり。

忍月居士嘗て外來物を論じて、詩人が外來物の補助を借り、方便にすべき事を言ひたる事ありしが、他界に對する觀念は補助又は方便にすと言ふが如き卑下なる者にあらず。恰も潛者の水底に沈みて眞珠を拾ふが如く自然界の奥に闖入し、冥想を以て他界の物を攫取し來るを以て詩人の尊む可きところとはするなり。居士が外來物を方便にする一例として篁村氏の「良夜」を引きたるが如きは尤も我心を得ず。さはあれ、是も亦た我國文學に他界に對する觀念の乏しきを證するに足るなり。

禪學は北條氏以後の思想を支配し、儒學は德川氏以後の思想を支配したる事は史家の承諾する事實なるが、この二者も亦た他界に對するの觀念の大敵なり。禪は心を法として想像を閉ぢ、儒は實際的思想を尊んで他界の美醜を想せず。この二者日本文學に於ける關係は一朝一夕に論ずべきものにあらずと雖も、その他界に對する觀念に不利なりし事は明瞭なる事實なり。

我文學の他界に對する觀念に乏しきことは概前述の如し。寫實派と理想派との區別漸く立たんとする今日の文壇に、理想詩人の萬人に願求せられながら出現することの晩きも、强ち

怪しむに足らじと思はるゝなり。ギョオテの想兄フォウストと共に

Oh! if indeed spirits be in the air,
Moving twixt heaven and earth with Lordly wings,
Come from your golden "incence breathing" sphers,
Waft me to new and varied life away.

と絶叫する理想詩人遂に我文壇に待つべきや否や疑はしと言ふべし。

處女の純潔を論ず

（富山洞伏姫の一例の觀察）

天地愛好すべき者多し。而して尤も愛好すべきは處女の純潔なるかな。もし黄金、瑠璃、眞珠を尊しとせば、處女の純潔（チヤスチチイ）は人界に於ける黄金、瑠璃、眞珠なり。もし人生を汚濁穢染の土とせば、處女の純潔は燈明の暗牢に向ふが如しと言はむ。もし世路を荆棘の埋むところとせば、處女の純潔は無害無痍にして荆中に點ずる百合花とや言はむ。われ語を極めて我が愛好するものを嘉賞せんとすれども、人間の言語恐らくは此至寶を形容し盡くすこと能はざるべし。噫人生を厭惡するも厭惡せざるも誰か處女の純潔に遇ふて欣樂せざるものあらむ。

然れども我はわが文學の爲に苦しむこと久し。悲しくも我が文學の祖先は處女の純潔を尊とむことを知らず。德川氏時代の戯作家は言へば更なり、古への歌人も、また彼の靈妙なる厭世思

想家等も遂に處女の純潔を尊むに至らず。千載の孤客をして、批評の筆硯に對して先づ血涙一滴たらしむ。嗚呼處女の純潔に對して、端然として襟を正しうする作家遂に我が文界に望むべからざるか。

夫れ高尚なる戀愛は其源を無染無汚の純潔に置くなり。純潔（ピュアスチチイ）より戀愛に進む時に至道に叶へる順序あり。然れども始めより純潔なきの戀愛は飄漾として浪に浮かるゝ肉愛なり、何の價値なく何の美觀なし。

わが國の文學史中に偉大なる理想家なしとは十指の指すところなり。近世のローマンサーなる曲亭馬琴にりては批評家の月旦甚だ區々たり。われも今卒かに彼を論評する事を欲せず。細論は後日を期しつ。試みに彼が一代の傑作たる富山の奥の伏姫を觀察して見む。ロマンチックアイデアリストとしての馬琴の一端は之を以て窺ひ知るを得んか。

わが美文學は宗教との緣甚だ深からず。別して德川氏の美文學を以て然りとなす。俳道の達士桃青翁を除くの外玄奥なる宗教の趣味を知りたる者あらず。是あるは恐らく馬琴なるべし。然れども桃青と馬琴とは其方向を異にして佛教の玄奥に入れり。もし桃青の佛教を一言の下に評するを得ば入道したるなり。もし馬琴の佛教を一言の下に表はすことを得ば彼は知道なり。桃青は履踐し、馬琴は觀念せり。桃青は宗教家の如くに佛道をその風流修行に應用したり。馬琴は哲學者の如くに佛道を其理想中に適用したり。桃青の佛道は不立文字にして、馬琴の佛道は寧ろ小乘的なるべし。われは桃青を俳道の偉人として尊敬すると共に馬琴を文界の巨人として畏敬せざるを得ず。

輕浮剽逸なる戯作者流を壓倒して、屹然思想界に聳立したる彼の偉功の如きは文學史家の大に注目すべきところなるべし。然れども是等の事凡てわが論題外なり。いで富山の洞に寂座し玉ふ伏姫を觀察せむ。

八犬傳一篇を縮めて、馬琴の作意に立還らば、彼はこの大著作を二本の角の上に置けり。其一はシバルリイと儒道との混合體にして、他の一は彼の確信より成れる因果の理法なり。全篇の大骨子を彼の仁義八行の珠數に示したるは、極めて美くしく儒道と佛道とを錯綜せしめたるものなり。その結構より言ふ時は、第一輯は序卷なり、而して第二輯の第一卷は全篇の大發端にして、其實は八犬傳一部の腦髓なり。伏姫の中に因果あり、伏姫の中に業報あり、伏姫の中

に八犬傳あるなり。伏姫の後の諸卷は俗を喜ばすべき俠勇談あるのみ。

伏姫に對する八房は馬琴の創作にあらずと難ずるものあれど、余はむしろ此を馬琴の功に歸するものなり。試みに八房に把りて檢察して見む。伏姫を觀るの順序に於て斯くするを至當と思へばなり。

八房の前世は、彼の金碗孝吉に誅せられたる奸婦玉梓なり。「伏姫は此形勢をつくづくと見給ひて、此犬誠に得度せり、怨むるものゝ後身なりとも既に佛果を得たらんには」云々。

又た義實が自白の言に「かくてかの玉梓が、うらみはこゝに慊らず、八房の犬と生かはりて伏姫を將て深山邊に、隱れて親に物を思はせ。」云々。

然れば、馬琴の八房は玉梓の後身たること、佛說に據つて因果の理を示すものなること明瞭なり。然して、この八房をして伏姫を背ひ去るに至らしめたる原因は何ぞと問ふに、事成る時は伏姫の婚にせんと言ひたる義實の一言なり。伏姫が父を諫めて賞罰は政の樞機なることを說き、一言は以て苟且にすべからざるを言ひ、身を捐てゝ父の義を立てんとするに至りては、宛然たるシバルリイの美玉なり。爰に至りて伏姫の「運命」を形くりしもの二段階あり。その一は根本の因果にして佛教をその儘なり。而して其二は一種のコンペンセーションにして、一言の失言より起れるものとす。其二の者は蓋し哲學的觀念より來れるものなるべし。

馬琴を論ずるもの徒らに勸善懲惡を以て彼を責むるを知つて、彼の哲學的觀念の酬報說に論入せざる、評家の爲に惜まざるを得ず。勸善懲惡主義は支那思想より入り來りたる小說の大本の主義なれば、馬琴と雖、是に感染せざるを得ざるは勢の然らしむる所なるが、馬琴の中には別に勸懲主義排斥論をして侵犯するを得ざらしむるものゝ存するあるなり。父義實の一言を誤らざらんとて、一身の破滅を甘んずるは、シバルリイの極めて美はしき玉なり。而して其の是を實行するに至りては海潮の干滿整然として理法の圓滿を描くに似たり。

伏姫の運命を形くりしもの右の二者あるの外に驚くべき配合の美と言ふべきは、八房の他の一側なり。彼は玉梓の幽靈を代表すると共に、佛說の所謂煩惱なるものを代表せり。この煩惱の人間に纏賁するの實象を縮めて、之を伏姫と呼べる淸淨無垢の女姫に加へたり。煩惱を見ることと他の多くの作家が爲す如く惑溺癡迷の人物に加ふる事をせず。極めて無邪氣にして、極めて淸潔なる一處女に附き纏はしむ。惡魔の魅力を假用して高潔なる舞臺を濁穢する泰西作家の妙腕

は即ち馬琴が八房の中にあり。始めは伏姫徐々として八房の後に從へり。後には八房伏姫を背にして飛鳥の如くに走れり。煩惱の人間を魅するの狀を寫す何ぞ一に斯の如く靈なる。輝武健馬に鞭ちて逐へども逐に及ばず、煩惱の魔力何んぞ人間の及ぶところならんや。雲霧深く籠めて、山洞又た人力を以て達すべき道なし。輝武の眼には川一條なり。然れども靈界の幻想を以て曰へば川一條は人界と幻界との隔てなり。「横ざまに推倒れて」以下の文章深く味ふべし。

役行者は蓋し「天命」の使者なるべし。是に就きて言ふべき事あれど本題を離るゝ事遠ければ玆には言はず。唯だ讀者と共に記憶すべきは、伏姫が幼少の時に行者より得たる珠數の事なり。馬琴の深く因果の理法を信ずるや、普通の作家の如く行の奇跡を以て伏姫の業因を斷たしむることなく、却つて彼八行の珠玉を與へて、伏姫の運命の豫言者とならしめ指導者とならしめたるもの支那小說の古套とは言へ、馬琴の妙筆にあらざれば斯の如き照應を得ること能はざらむ。

次に觀察すべきは富山洞なり。富山洞はいかなる種類の幻界なるべきや。

人間世界を因果轉輪の車の上に立つものとせば、富山は馬琴の想像中にありて因果の車の軸なり。因果の理法の盈滿（コンプリケーション）を示したるものは富山洞のトラヂエヂィにして、富山はこの理法をあらはしたる舞臺なり。伏姫は世を捨てつゝ世に捨てられて此山に入れり。この山の眞相を言へば、一方に經文あり、一方に煩惱あり、一方に仙緣あり、一方に毒業あり、一方に無染あり。一方に無慾あり、一方に菩提あり、一方に畜生あり。表面を佛界なりとせば、裡面は魔界なり。表面を魔界なりとすれば裡面は佛界なり。佛が魔か、魔が佛か、一なるが如く、他なるが如く、紛錯亂綜いづれをいづれと定め難し。斯くの如くにして業因業果の全く盈滿するまでは、一箭の飛んで勢の盡くるまでは落ちざるが如きを示せり。これ幻界なり。權者の大方便と題するものは即ち所謂コンペンセイションの大法なるにあらずや。故に富山の洞を言ふ時は、馬琴の想像中に於て、因果の理法をつゞめたる一幻界に外ならじ。

この幻界にかの妖犬に伴はれて入りぬる伏姫はいかに。

山峽に伴はるゝ時の決心は身を妖犬に許せしなり。許せしとは雖も肉膚を許せしにはあらず、誠心を許せしなり。この誠心は抛げて八房の首にかゝれり。渠、もし、この誠心を會得すれば好し、然らざれば渠を一刀に刺殺さんとの覺悟あり。彼の感得せし水晶の珠數は掛て今なほ襟にあり。護身刀の袋の緒は常に解て右手に引着けたり。法華經八軸は暫らくも身邊を離れず。而

して大煩惱大業獸に向ふこと莫逆の朋友に對するが如し。誠心は非類にも許すべしとすれど肉膚は堅く純潔を守りて畜生に許さず。一方には穢土穢物を嫌ひたまはざる佛の慈悲に似たるものあり、他方には餓鬼畜生の慾情と戰へる靈妙なる人類としての純潔あり。これ伏姫が洞に入りたる時の有樣なり。

「又ある時は、父母の御爲に　經の偈文を謄寫して前なる河におし流し、春は花を手折て佛に手向奉り、秋は入る月に嘯きて坐に西の天を慕ふめり」といふに至りては伏姫の心中既に大方の悲苦を擺脫して、澄清洗ふが如くになりたらむ。八房も亦た時に至りては、讀經の聲に耳を傾け、心を澄し、欲を離れて只管姫上を戀慕するの情を斷ちぬ。更に進んで「仄歩山嶮しけれども蕨を首陽に折るの怨なく、岩窓に梅遲けれども嫁ぎて胡語を學ぶの悲しみなし。」といふに至りては伏姫の心既に平滑になりて苦痛全く癒へ、眞如鏡面又た一物の存するなし。

然れども亦た煩惱の夢に驚かさるゝ事全く無きにあらず。「或一日伏姫は硯に水を滴がんとて出て、石湧を掬ひ給ふに、横走せし止水に、映る我影を見給へば、その體は人にして頭は正しく犬なり。云々」。

とありて、之より月水の絶たることを說けり。

こゝにも亦た因果の道法を隱微の中に示顯して至妙に達せり。月水の絶たるは、仙童に訊ふまでもなく懷胎の徵なり。而してこの懷胎は八犬子を生む爲にあらずして、その實、宿因の滿潮を示したるものなり。これよりして强く張りたる弦は弛みはじめたるなり。その體は人にして其頭は犬なりと云ふは、即ち是れ宿因の絶頂に登りたるを指すにやあらむ。

更に進みて、仙童に言はせたる豫言の中に「今こそ八つの子を遺せり。八は即ち八房の八を象り又法華經の卷の數なり」とあるに至りては、明らかに業と法との兩者の對峙して伏姫に臨めるを示し、遂に其宿因よりして、却つて八英雄を得るに至らしめたる禍福の理法益明らかなり。同じ筆意にて成れる文字この後にも見にたり。曰く「こは不思議やと取なほして、とさまかうさま見給ふに數取りの珠に顯はれたる如是畜生發菩提心の八の文字は跡もなく、いつの程にか仁義禮智忠信孝悌となりかはりて、いと鮮に讀まれたり」。

更に又た、

「やよ八房よ。わが言ふ事を能く聞けかし。よに幸なきもの二つあり。又幸あるものふたつあ

り。則ちわなみと汝なり。己れは國主の娘なれども義を重しとする故に畜生に伴はる。この身の不幸なり。しかれども穢し犯されず。ゆくりなくも世を遯れて自得の門に三寶の引接を希ひしかば、けふ往生の素願を遂げん。……又只汝は畜生なれども、國に大功あるをもて、國主の息女を獲たり。人畜の道異にしてその欲を得遂げざれども耳に妙法の尊を聽く。……

……おなじ流れに身を投て共に彼岸に到れかし」

といふに到ては、平等無差別遙かに人間を離れて菩薩の心備はれり。誠心は隱すところなく八房に與へたり。而して、不穢不犯玲瓏たるチヤスチチイの處女、禍福の外に卓立し、運命の鐵柵を物ともせざるは、實にこの馬琴の想兒なり。

最後に護身刀を引拔て眞一文字に搔切たる時に、一朶の白氣閃めき出で空に舞ひ上りたる八珠粲然として光明をはなつに及びて、「歡ばしやわが腹に物がましきはなかりけり。神の結びし腹帶も、疑ひも稍解けたれば、心にかゝる雲もなし。」云々と云ふに至りては明らかに因果の結局をあらはして八房と伏姫との關係を閉ぢたり。

要するに伏姫は因果の運命にその生涯を献じたる者なり。因果は萬人に纏ひて悲苦を與ふるものなるに、萬人は其繩羅を脱すること能はずして、生死の巷に彷徨す。伏姫は自ら進んでこの大運命に一身を託ねたるものなり。義は彼をこの大運命の囚獄に連れ行きたる囚吏なり。宿因は八房に代表せられて、彼を破滅に導きたるなり。破滅は又た幸福を里見の家に臨ませたるなり。凡て是等の錯綜せる哲理の外に、晃々としてこの大作を輝かすものこそあれ。そを何ぞと曰ふに、伏姫の純潔なり。始めより終りまでの純潔なり。その純潔の誠實は通じて非類の八房を成佛せしめしは尊しと言ふも愚かなり。

鬼心非鬼心

悲しき事の、さても世には多きものかな。われは今讀者と共に、しばらく空想と虛榮の幻影を離れて、まことにありし一悲劇を語るを聞かむ。

語るものはわがこの夏霎時の假の宿とたのみし家の隣に住みし按摩男なり。ありし事がらは

そがまうへなる禪寺の墓地にして、頃は去歳の初秋とか言へり。

二本榎に朝夕の烟も細き一かまどあり、主人は八百屋にしてかつぎうりを以て營とす。そが妻との間に三五ばかりなる娘ひとりと、六歳になりたる小兒とあり。夫は實直なる性なれば、家業に怠ることなく、妻も日頃謹慎の質にして物多く言はぬほど糸針の道には心掛ありしとのうはさなり。かゝれば、かまどの烟細しとは言ひながら、其日其日を送るに太き息吐く程にはあらず、折には小金貸し出す勢ひさへもありきと言ふものありけり。

妻の何某はいつの頃よりか、何となく氣鬱の樣子見へ始めたれども、家内のものは更なり、近所合壁のやからも左したる事とは心付かず、唯だ年長けたる娘のみは、さすが母の氣むずかしげなるを面白からず思ひしとぞ。世のありさま三四年このかた金融の逼迫より、種々の轉變を見しが、別して其日かせぎの商人の上には輕からぬ不幸を生ぜしも多かり。正直をもて、商賣する者に不正の損失を蒙らせ、眞面目に道を歩むものに突當りて荷を損ずるやうの事漸く多くなれりと覺ゆ。かの夫妻未だ左したる困厄には陷らねど、思はしからぬが苦情の元なれば、時として、夫婦顔を赤めるなどの事もありしとぞ。裏家風情の例として、其日に得たる錢をもて明日の米を買ふ事なれば、米一粒の尊さは餘人の能く知るところにあらず。或日の事とて妻は娘を家に殘しつ、小兒を携へて出で行きしが、米買ふ錢を算へつゝ、ふと其日を洩れたる言葉は「もし此小兒なかりせば、日々に二錢を省くことを得べきに」なりし。之を聞きたる小娘は左までに怪しみもせざりし。その容貌にも殊更に思はるゝところはあらざりしとなむ。

このあたりの名寺なる東禪寺は、境廣く樹古く、陰鬱として深山に入るの思あらしむ。この境内に一條の山徑あり、高輪より二本榎に通ず。近きを擇むもの、こゝを往還することゝなれり。累々たる墳墓の地、苔滑らかに草深し。もゝちの人の魂魄無明の夢に入るところ。わがかゝこに棲みし時には、朝夕杖を携へて幽思を養ひしところ。又た無邪氣の友と共に山いちごの實を拾ひて樂みしところなり。

家を出でゝ程久しきに、母も弟も還ること遲し。鴉は杜を急げども、歸らぬ人の影は破れし簷の夕陽の照光にうつらず。幾度か立出でゝ、出で行きし方を眺むれど、沈み勝なる母の面は更なり、此頃とんぼ追ひの仲間に入りて樂しく遊びはじめたる弟の形も見へず。日は全く暮れぬれども、未だ歸らず。案じわびて待つうちに、雨戸の外に人の音しければ、急ぎ戸を開くに、

母ひとり、忙然として立てり。その樣子怪しけに見へはせしものゝ、いかに悲しき事のありけんとは思ひもよらず。弟はと問へば、しばし默然たりしが、何かは知らず太息と共に、あれは殺して來たよ、と答へぬ。

始めは戯れならむと思ひしが、その容貌の青ざめたるさへあるに、夜の事とて共に歸らぬ弟の身の不思議さに、何處にてと問ひければ、東禪寺裡にてと答ふ。驚ろき呆れて、半ば疑ひながらも、母の言ひたるところに走り行きて見れば、こはいかに、無殘や一人の弟は倒まに墓の門なる石桶にうち沈められてあり。其傍になまぐさき血の迸りかゝれる痕を見たりと言へば、水にて殺せしにあらで、石に擊つけてのちに水に入たりと覺ゆたり。氣も絶へ入んほどに愕き惑ひしが、走り還りて泣き叫びつゝ、近隣の人を呼びければ、漸く其筋の人も來りて、死體の始末は終りしが、殺せし人の繼しき中にもあらぬ母の身にてありながら、鬼にもあらぬ鬼心をそしらぬものもなかりけり。

東禪寺寺内より高輪の町に出でんとする細徑に覆ひかゝれる一老松あり。晝は近傍の頑童等こゝに來りて、松下の細流に小魚を網する事もあれど、夜に入りては蛙のみ雨を誘ひて鳴き騷けども、その濁れる音調を驚ろき休ます足音とては、稀に聞くのみなり。寺内に棲みける彼の按摩、その業の爲にはかゝる寂寥にも慣れたれば、夜出でゝ夜歸るにこわさといふもの未だ覺ゆ知らず、五月雨の細々たる陰雨の中に一二度は彼燐火をも見たれど、左して怖るゝ心も起らじと言へり。

雨少しくそぼちて、桐の青葉の重げに垂るゝ一夜、暮すぎて未だ程もあらせず、例の如く家を出でゝ彼の老松の下に來掛りし時、突然片影より顯はれ出るものありと見る間に、わが身にひたとかじりつき、逃げんとするも逃げられず。膽潰れながらも、其人を見れば、髪は亂れて肩にからみ、色は夜目にも青白く、鬼にやあらむ、人にやあらむと思ふばかり、身はわなゝくと顫ひて、振り離さん程の力もなくなれり。やうやく氣を沈めて其人の態をつくゞゝ打ち眺むれば、まがう方なき狂女なり。さては鬼にもあらずと心稍々安堵したれば、何故にわれを留むるやと問ひしに、唯ださめ〴〵と泣くのみなり。再三再四問ひたる後に、答へて曰うやう、妾は今宵、この山のうしろまで行かねばならずと。何用あつて行くやと問ひければ、そこにて兒を殺したる事あれば、こよひは我も共に死なむと思ひてなり。この言を聞きて、さては前日の

兒殺よなと心付きたれは、更に氣味あしく、いかにもして振離して逃げんとすれど、狂女の力常の女の腕にあらず。しばしがほどは、或は賺しつ、或はなだめつ、得意客は待ちあぐみてあらむに、いかにせばやと案じわづらふばかりなり。いかに言ふとも一向に聞き入れず、死なねば濟まずとのみ言ひ募りて、捕へし袖を挽きて、吾を彼の山中に連れ行んとす。もし愈々死なむとならば獨り行きても宜からずやと言へば、ひとりにては、寂しき路を通ひがたしと言ふ。幸にも、この時角燈の光微かにかなたに見へければ、聲を擧げて巡行の査官を呼び、茲に始めて蘇生の思ひを爲せり。

始は査官言を盡して說き諭しけれど、一向に聞入れねば、止むことを得ずして、他の査官を傭ひ來りつ、遂に警察署へ送り入れぬ。

彼女は是より精神病院に送られしが、數月の後に病全く癒へて、その夫の家に歸りけれど、夫妻とも、元の家には住まず、いづれへか移りて、噂のみはこのあたりにのこりけるとぞ。以上は我が自から聞きしところなり。但し聞きたるは、この夏の事、筆にものして世の人の同情を請はんと思ひたちしは、今日土曜日の夜秋雨紅葉を染むるの時なり。

殺さんと思ひたちしは偶然の狂亂よりなりし。されども斯の如き悲劇の斯くの如き徒爾の狂亂より成りしことを思へば、まがつみの魔力いかに迅且大ならずや。親として子を殺し、子として親を殺す、大逆不道此の上もあらず。然るに斯般の惡逆の往々にして世間に行はるゝを見ては、誰か悽惻として人間の運命のはかなきを思はざらむ。狂女心底より狂ならず。醒め來りて一夜悲悼に堪へず、兒の血を濺ぎしところに行きて己れを殺さんとす。己れを殺さん爲にその悲しき場所に獨り行くことを得ず、却つて路傍の人を連れ立てんことを請ふ。狂にして狂ならず、狂ならずして猶ほ狂なり。あわれや子を思ふ親の情の、狂亂の中に隱在すればなるらむ。その狂亂の原はいかに渠が出でがけに、日ひし一言、深く社會の罪を刻めり。

昨夜は淵明が食を乞ふの詩を讀みて其淸節の高きに服し、今夜は慘憺たる實聞をものして思はず袖を濕らしけり。知らぬうちとて、默思逍遙の好地と思ひしところ、この物語を聞きてよりは自からに足をそのあたりに向けずなりにき。かの地に住みし時この文を作らず、却つて今の菴にうつりて之を書くは、わが悲悼の念のかしこにては餘りに强かりければなり。思へば不思議なるほどに酸鼻のこともあるものかな。

第四篇　麻布簞笥町にて

明治二十五年十一月より
二十六年七月まで

富嶽の詩神を思ふ

空を望んで駿驅する日陽、虚に循て警立する候節天地の運流いつを以て極みとはするならん。朝に平氏あり夕に源氏あり、飄忽として去り飄忽として來る。一潮山を嚙んで一世紀沒し、一潮退き盡きて他世紀來る。歴史の載するところ一潮毎に葉數を減じ、古苔蒸し盡して英雄遺魂日に月に寒し。

嗟吁人生の短期なる、昨日の紅顔、今日の白頭。忙々促々として眼前の事に營々たるもの、悠々綽々として千載の事を慮るもの、同じく之れ大暮の同寐。霜は香菊を厭はず。風は幽蘭を容さず。忽ち逝き忽ち消へ、邈冥として踪ぬべからざるを致す。

墳墓何の權かある。宇内を睥睨し、日月を叱咤せし古來の英雄何すれぞ墳墓の前に弱兎の如くなる。誰か不朽といふ字を字書の中に置きて、而して世の俗眼者流をして縱に流用せしめたる。嗚呼墳墓汝の冷々たる舌、汝の常に餓へたる口、何者をか嚙まざらん、何物をか呑まざらん。而して墳墓よ、汝も亦た遂に空々漠々たり。水流滔々として洋海に趣けど、洋海に終に溢れて大地を包まず、冉々として行暮する人世遂に新なるを知らず、又故なるを知らず。

花には花に弄せられざるもの誰ぞ、月には月に翫ばれざるもの誰ぞ、風狂も亦た一種の變調子。風狂も亦た一種の變調子なりとせば、人間いかにして變調子ならざる事を得む。暗冥なる「死」の淵に、相及び、相襲ぎて沈淪するもの、果して之れ人間の運命なるか。舌能く幾年の久しきに辯ぜん。手能く幾年の長きに支へん。辯ずるところ何物ぞ、支ふるところ何物ぞ、わが筆も亦た何物ぞ。言ふ勿れ蓊鬱たる森林幾百年に亘りて巨鷲を宿らすと。言ふ勿れ豐公の武威、幾百世を蓋ふと。嗟何物か終に盡きざらむ。何物か終に滅せざらむ。寤めざるもの誰ぞ、悟らざるもの誰ぞ。損喪せざるもの竟に何處にか求めむ。

寤果して寤か、寐果して寐か、我是を疑ふ。深山夜に入りて籟あり、人間晝に於て聲なき事多し。寤むる時人眞に寤めず、寐る時往々にして至樂の境にあり。身體四肢必らずしも人間の運命を示すにあらず。別に人間大に施爲する所あり。潛に思ふ、終に寤ざるもの眞の寤か。終

に寐せるもの眞の寐か。此境に達するは人間の容易く企つる能はざる所なり。

愛すべきものは夫れ故郷なるか。故郷には名狀すべからざるチャームの存するあり。風流雅客を嘲るもの、邦家を知らざるの故を以て彼等を貶せんとする事多し。故郷は之れ邦家なり。多情多思の人の尤も邦家を愛するは何人か之を疑はむ。孤劍提げ來りて以太利の義軍に投じ、一命を惡疫に委したるバイロン我れ之を愛す。請ふ見よ、羅馬死して羅馬の遺骨を幾千萬に傳へ、死して猶ほ死せざる詩祖ホーマーを。邦家の事曷んぞ長舌辯士のみ能く知るところならんや。別に滿腔の悲慨を涵へて、生死悟明の淵に一生を憂ふるものなからずとせんや。

俗物の尤も喜ぶところは憂國家の稱號なり。而して自稱憂國家の作するところ、多くは自儘なり。彼等は僻見多し、彼等は頑曲多し、彼等は復讐心を以て事を成す。彼等は盲目の執着を以て業を急ぐ。彼等は夢幻中の虛想を以て唯一の理想となす。彼等の慷慨、彼等の憂國、多くは彼等の自ら期せざる渦流に卷き去られて終ることあるものぞ。

朽ちざるものいづくにある、死せざるものいづくにある。われ答を俟ちて躊躇せり。而して答遂に來らず。朽ちざるに近きものいづくにかある、死せざるに近きものいづくにかある。われこの答へを聞かんが爲に、過去の半生を逍遙默思に費やせり。而して遂にその一部分を聞けりと思ふは非か、非ならざるか。

天地の分れし時の、神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺を、天の原振りさけ見れば渡る日の、影も隱ろひ、照る月の光も見にず、白雲もい行憚り時じくぞ雪は降りける、語り繼ぎ云ひ繼ぎ行かん富士の高嶺は。(赤人)

白雲、黑雲、積雪、潰雪、閃電、猛雷、是等のものを用役し、是等のものを使僕し、是等のものを制御して、而して恒久不變に威靈を保つもの、富嶽よ、夫れ汝が、渡る日の影も隱ろひ、照る月の光も見にず、晝は晝の威を示し、夜は夜の威を示す。富嶽よ汝こそ不朽不死に邇きものか。汝が山上の浮雲よりも早く消に、汝が山腹の電影よりも速に滅する浮世の英雄何の戲れぞ。いさましや汝の山麓を西に馳する風、こゝろよや汝の山嶺を東に飛ぶ風。流轉の力汝に迫らず、無常の權汝を襲はず。自由汝と共にあり、國家汝と與に樹てり、何をか畏れとせむ。

遠く望めば美人の如し。近く眺れば威嚴ある男子なり。アルプス山の大歐文學に於ける、わが富嶽の大和民族の文學に於ける、淵源するところ、關聯するところ、豈、寡しとせんや。遠

く望んで美人の如く、近く眺めて、男子の如きは、そも我文學史の證しするところの姿にあらずや。アルプスの崇嚴或は之を缺かん。然れども富嶽の優美何ぞ大に讓るところあらん。われはこの觀念を以て我文學を愛す。富嶽を以て女姓の山とせば、我文學も恐らく女姓文學なるべし。雪の衣を被ぎ白雪の頭巾を冠りたる恒久の佳人、われはその玉容をたのしむ。

盡きず、朽ちざる詩神風に乘り雲に御して東西を飄遊し玉へり。富嶽駿河の國に崛起せしといふ朝、彼は幾億萬里の天崖よりその山嶺に急げり。而して富嶽の威容を愛するが故に、その殿居に駐ゝり棲みて遂に復た去らず。是より風流の道大に開け、人磨赤人より降つて、西行芭蕉の徒この詩神と逍遙するが爲に、富嶽の周邊を往返して、形なく像なき紀念碑を空中に構設しはじめたり。詩神去らず、この國なほ愛すべし。詩神去らず、人間なほ味あり。

「罪と罰」の殺人罪

不知庵主人の譯に成りし「罪と罰」に對する批評仲々に盛なりとは聞けるが、病氣其他の事ありて、余が今日までに見たるは僅に四五種のみ。而して其中にも學海先生が國民の友に揭げられし評文は特に見目立ちて見ゆ。余は平生學海居士が儒家らしき文氣と馬琴を承けたる健筆に欽羨するものなるが、「罪と罰」に對する居士の評文の餘りに居士を代表する事の多きには聊か當惑するところなき能はざりし。

居士は、人命犯には必らず萬已むを得ざる原因ある事を言ひ、財主の老婆が、貪慾を慣ふるのみの一事にして忽ち殺意を生ずるは、殺人犯の原因としては甚だ淺薄なりと言ひ、而して自ら辨じて言はるゝは、作者の趣意は、殺人犯を犯したる人物は其犯後いかなる思想を抱くやらんと心を用ひて推測り、精微の情を寫して己が才力を著はさんとするのみと。再び曰くその原因の如きはもとより心を置くにあらずと。末段更に、財主の妹を殺したる一條を難じて「その氣質はかねて聞たる正直質朴のものたに、これをも殺したるいかにぞや……さてはのち我にかへりて大にこれを痛み悔ゆべきに云々」と言はれたり。

余は學海居士の批評に對して無用の辯を費やさんとするものにあらず。右に引きたるは居士の批評法の如何に儒教的なるや、いかに勸善懲惡的なるやを示さんとしたるのみ。居士には居

士の定見あり、そを評論せんは一朝一夕の業にあらじ。

余は「罪と罰」第一卷を通讀すること前後二回せしが、その通讀の際、極めて面白しと思ひたるは、殺人罪の原因のいかにも綿密に精微に畫出せられたる事なり。もし或兇漢ありて或貞婦を殺し、而して後に或義士の一擊に斃れたりと書かば、事理分明にして面白かるべしと雖、「罪と罰」の殺人罪は、この規矩には外れながら、なほ幾倍の面白味を備へてあるなり。

一醉漢ありて酒毒の爲に神經を錯亂せられ、これが爲に自殺するに至りたる事ある時は、彼は酒故に自殺したりと言ふを躊躇せざるべし。酒は卽ち自殺の原因なり。一頑漢ありて社會の制裁と運命の自然なる威力に從順なる事能はず、これが爲に人には擯けられ、世には捨てられ、事業を愚弄し、人間をくだらぬものとし、階級秩序の如きをうるさきものとし、誠愛誠實を無益のものと思ひ、無暗に人を疑ひ、矢鱈に天を恨み、その極、遂に精神の和を破りて行ふべからざる事を行ひ自ら知らざる程の惡事を爲遂ぐる事あらば、其惡事、例へば殺人罪の如き惡事は意味もなく、原因も無きものと云ふを得べきや。之を心理的に解剖して仔細に其罪惡の成立に至るまでの道程を描きたる一書を淺薄なりとして斥くる事を得べきや。

殺人罪は必らずしも或見ゆべき原因によりて成立つものにあらざるなり、必らずしも報酬の理論若くは勸善懲惡の算法より割出し得るものにあらざるなり。我が「罪と罰」一卷に見るところのもの全篇悉く慘憺たる血くさき殺戮の跡を印するを認むるなり。見よ飲酒は彼非職官吏を殺しつゝあるにあらずや。非職官吏の放蕩懶惰は其愛らしき妻を殺しつゝあるにあらずや、其無邪氣の娘を殺しつゝあるにあらずや。姪賣と名け肺病と名け、惰慢と名づくるもの、これ實に精神的に死してあるなり、殺してあるなり。悲哀懊惱の幽暗なる事は「死」の幽暗なるよりも多きなり。讀者余が言を信ぜずば「罪と罰」に就きて、更に其他の記事を精讀せられよ。思ひ蓋し半に過ぎんか。

余が前號の批評にも云ひし如く「罪と罰」とは最暗黑の露國を寫したるものにてあるからに馬琴の想像的勇俠談にある如く、或復讎を忠孝等の故を以て殺人罪を犯さしめたるものにあらざること分明なり。最暗黑の社會にいかにおそろしき魔力の潜むありて、學問はあり分別ある腦髓の中に、學問なく分別なきものすら企つることを躊躇ふべきほどの惡事をたくらましめたるかを現はすは蓋しこの書の主眼なり。而して斯の如く偶然の機會よりして偶然の殺戮を見得る

が故に一見して淺薄にして原因もなきもの〻樣なる、この書の眞價は實に右に述べたる魔力の所業を描寫したるに於て存するのみ。もしこの評眼をもちて財主の妹を財主と共に虐殺したる一節を讀まば、作者の用意の如何に非凡なるかを見るに惑はぬなるべし。

作者は何が故にラスコーリニコフが氣鬱病に罹りたるやを語らず。開卷第一に其下宿住居を點出せり。これらをも原因ある病氣と言て斥けたらんには、この書の妙所は終にいづれにか存せんや。何が故に私宅教授の口がありても錢取道を考へず、下宿屋の婢に何を爲て居ると問はれて、考へる事を爲て居ると驚かしたるや。何が故に、姪賣女に愛を行ふ資本と知りながら、香水料の慈惠を爲せしや、何が故に少娘を困厄せしめし惡漢をうちひしぐなどの正義ありて、而して己れ自ら人を殺すほどの惡事を爲せしや、何が故に極て正直なる心を以て極めて愛情にひかさるべき性情を以て而して母と妹の愛情を冷笑するに至りしや、何が故に一人の益なきものを殺して多人數を益する事を得ば惡しき事なしといふ立派なる理論をもちながら流川する事覺束なき裝飾品數個を奪ひしのみにして立去るに至りしか、何が故にこの裝飾品を奪ふは單に斬取强盜の所爲にして苟くも理論を構へたる大學生の爲すべからざるところなるを忘れしか、是等の凡ての撞着、是等の凡ての調子はづれ、是等の凡ての錯亂、即ち作者が精神を籠めて脚色したるもの而して其殺人罪を犯すに至りたるも、實に是れこの錯亂、この調子はづれ、この撞着より起りしにあらずんばあらず。而して斯くこの書の主人公を働かせしものは即ち無形の社會而已なること云を須たず。

運命人間の形を刻めり、境遇人間の姿を作れり、不可見の苦繩人間の手足を縛せり、不可聞の魔語人間の耳朶を穿てり。信仰なきの人、自立なきの人、寛裕なきの人、往々にして極めて愍れむべき悲觀に陷ることあるなり。之に加ふるに頑愚の迷信あり、誤謬の理論あり、惑溺の癡心あり、無憑の恐怖あり、盲目の驕慢あり、涯なき天と底なき地の間に

What a poor wretched creature as I am,
Creeping between heaven and earth.

と絶叫するもの、豈ハムレットのみならんや。

來島某、津田某等のいかに憐れむべき最後を爲したるやを知るものは「罪と罰」の殺人の原因

を淺薄なりと笑ひて斥くるやうの事なかるべし。利慾よりならず、名譽よりならず、迷信よりならず、而して別に或誤謬の存するあるにもあらずして、この殺人の罪を犯す、世に普通なるにあらずして、しかも普通なる理由によりてなり。これを寫す極めて難し、これを讀むものも亦た其心して讀まざる可らず。涙香子探偵小說の如く俗を喜ばすものにてなき由を承知して一讀せば自ら妙味を發見すべきなり。余はこの書を讀者に推薦するを憚らず。學海居士の評文の目に付きたるも之を以てなり。

山庵雜記

其一

夢見まほしやと思ふ時あやにくに夢の無き事あり。夢なかれと思ふ時うとましき夢のもつれ入ることあり。醒むる時亦た斯の如し。意はざらんと思ひに意ひ、意はんと思ふに意はず。去りとて意の如くならぬをば意の如くせまじと思ふにもあらず。靜に傾き盡きなんとする月を見ればよろづ意の儘にならぬものぞなき。徐ろに咲き出らん花を待つに、よろづ心に任せぬものぞなき。如意却つて不如意、不如意却つて如意悲しむも何かせむ、歡ぶも何かせむ。「無心」を備ひ來つて、悲みをも歡びをも同じ意界に放ちやりてこそまことの樂は來るなれ。

其二

早曉臥床を出でゝ心は夢寐の間に醒め、意ひは意無意の際にある時、一鳥の弄聲を聽けば、忽として我れ天涯に遊び、忽として我塵界に落るの感あり。我に返りて後其聲を味へば凡常の野雀のみ。然るも我が得たる幽趣は地に就けるものならず。爰に於て私に思ふは、感應我を主として他を主とせざるを。

其三

人間の心中に大文章あり。筆を把り机に對する時に於てよりも、靜默冥坐する時に於て、燦爛たる光明ある事多し。心中の文章より心外の文章を綴るは善し、心外の文章を以て心中の文章を裝はんとするは文字の賊なるべし。古へより卓犖不羈の士往々にして文章を事とするを喜

ばず。文字の賊とならんより心中の文章に甘んじたればならむ。

其四

身心を放ちて冥然として天造に任せんか、身心を收めて凝然として寂定に歸せんか、或は猖狂或は枯寂、猖狂は猖狂の苦味あり、枯寂は枯寂の悲寥あり。魚躍り鳶舞ふを見れば聊か心を無心の境に驅ることを得、雨そぼち風吹きさそうにあひては忽ち現身の心に還る。自然は我を弄するに似て弄せざるを感得すれば虛も無く實もなし。

其五

世にありがたき至寶は涙なるべし。涙なくては情もなかるらぬ。涙なくては誠もなかるらむ。狂ひに狂ひしバイロンには涙も細繩程の役にも立たざりしなるべけれど、世間おほかたのものを繫ぎ止むるはこの寶なるべし。遠く行く情人の足を蹈み止まらすもの、猛く勇む雄士の心を弱くするもの、情差ひ歡薄らぎたる間柄を緊め固ふするもの、涙の外には求めがたし。人世涙あるは原頭に水あるが如し。世間もし涙を神聖に守るの技に長けたる人を擧げて主宰とすることあらば、甚く悲しきことは跡を絕つに幾からんか。

其六

「麁く斫られたる石にも神の定めたる運あり。」とは沙翁の悟道なり。靜かに物象を觀ずれば物として定運なきにあらず。誰か恨むべき神を知りそめたる。誰か喞つべき佛を識りそめたる。心を物外に抽かんとするは未だし。物外物内何すれぞ悟道の別を畫かむ。運命に默從し、神意に一任して、始めて眞悟の域に達せんか。

其七

孤雲野鶴を見て、別天地に逍遙するは詩人の至快なり。然れども苦海塵境を脫離して一身を挺出せんとする人間の道にあらず。苦海塵境に清涼の氣を輸び入るゝにあらざれば詩人は一の天職を帶びざる放蕩漢にして終らんのみ。

其八

他を議せんとする時尤も多く己れの非を悟る。頃者激する所ありて生來甚だ好まざる駁擊の文を草す。草し終りて靜に内省するに、人を難ずるの筆は同じく己れを難ぜんとするに似たり。是非曲直輕しく判じ難し。如かず修練鍛磨して、叨りに他人の非を測らざることをつとむ

るに。

其九

大なる「悔改」は又た一個の大信仰なり。罪の罪たるを知らざるより大なる罪はなし、とはカーライルに聞くところなり。昨日の非を知りて明日の是を期するは、信仰に入るの要蹄にして、罪人の必らず自殺すべしとせざるは之をもてなり。罪の重荷は忘れざるによつて忘るゝを得べし。忘れたる重荷はいつまでも重荷なり。悔改の生涯は即ち信仰の生涯なるか。

人生に相渉るとは何の謂ぞ

纎巧細弱なる文學は端なく江湖の嫌厭を招きて異しきまでに反動の勢力を現はし來りぬ。愛山生が德川時代の文豪の遺風を襲ひて、「史論」と名くる鐵槌を揮ふことになりたるも其の一現象と見るべし。民友社をして愛山生を起たしめたるも江湖をして愛山生を迎へしめたるもこの反動の勢力の鬱勃したる餘りなるべし。

反動は愛山生を載せて走れり。而して今や愛山生は反動を載せて走らんとす。彼は「史論」と名くる鐵槌を以て擊碎すべき目的を擴めて、頻りに純文學の領地を襲はんとす。反動をして反動の勢を縱にせしむるは余も異存なし、唯だ反動を載せて、他の反動を起さしむるまで遠く走らんとするを見る時に、反動より反動に漂ふの運命を我が文學に與ふるを悲しまざる能はず。愛山生は文章卽ち事業なる事を認めて賴襄論の冒頭に宣言せり。何が故に事業なりや。愛山生は之を解いて曰く、第一、爲す所あるが爲なり。第二、世を益するが故なり。第三、人世に相渉るが故なりと。

而して彼は又た文章の事業たるを得ざる條件を擧げて曰く、第一、空を擊つ劍の如きもの。第二、空の空なるもの。第三、華辭妙文の人生に相渉らざるもの。而して彼は此冒頭を結ひて曰く「文章は事業なるが故に崇むべし、吾人が賴襄を論ずる卽ち渠の事業を論ずるなり」と。

大丈夫の一世に立つや、必らず一の抱く所なくんばあらず。然れども抱く所のもの必らずしも見るべきの功蹟を建立するにはあらず。建築家の役々として其業に從ふや、幾多の歲月を費

して後確かに巍乎たる樓閣を起すの算あり。然れども人間の靈魂を建築せんとするの技師に至りては、其費やすところの勞力は直ちに有形の樓閣となりて、ニコライの高塔の如く衆目を引くべきにあらず。衆目衆耳の聳動することなき事業にして或は大に世界を震ふことあるなり。

天下に極めて無言なる者あり、山嶽之なり。然れども彼は絶大の雄辯家なり。若し言の有無を以て辯の有無を爭はゞ凡ての自然は極て憫れむべき啞兒なるべし。然れども常に無言にして常に雄辯なるは自然に加ふるものなきなり。人間に若し自然の如く無言なるものあらば、愛山生一派の論士は其の傍に來りて、爾何ぞ能く言はざると嘲らんか。

人間の爲すところも亦斯の如し。極めて拙劣なる生涯の中に尤も高尤なる事業を含むことあり。極めて高大なる事業の中に尤も拙劣なる生涯を抱くことあり。見ることを得る外部は見ることを得ざる内部を語り難し。盲目なる世眼を盲目なる儘に睨ましめて眞摯なる靈劍を空際に擊つ雄士は人間が感謝を拂はずして恩澤を蒙むる神の如し。天下斯の如き英雄あり。爲す所なくして終り、事業らしき事業を遺すことなくして去り、而して自ら能く甘んじ自ら能く信じて、他界に遷るもの、吾人が尤も能く同情を表せざるを得ざるところなり。

吾人は記臆す、人間は戰ふ爲に生れたるを。戰ふ爲に戰ふにあらずして戰ふべきものあるが故に戰ふものなるを。戰ふに劍を以てするあり、筆を以てするあり。戰ふ時は必らず敵を認めて戰ふなり。筆を以てすると劍を以てすると戰ふに於ては相異なるところなし。然れども敵とするもの〻種類によつて戰ふもの〻戰を異にするは其當なり。戰ふもの〻、戰の異なるによつて勝利の趣きも亦た異ならざるを得ず。戰士陣に臨みて、敵に勝ち凱歌を唱へて家に歸る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家は評して事業といふ。事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし。然れども高大なる戰士は斯の如く勝利を携へて歸らざることあり。彼の一生は勝利を目的として戰はず、別に大に企圖するところあり。空を擊ち虛を狙ひ、空の空なる事業をなして、戰爭の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。

斯の如き戰は、文士の好んで戰ふところのものなり。斯の如き文士は斯の如き戰に運命を委ねてあるなり。文士の前にある戰場は、一局部の原野にあらず、廣大なる原野なり。彼は事業を齎らし歸らんとして戰場に赴かず、必死を期し原頭の露となるを覺悟して家を出るなり。斯の如き戰場に出で、斯の如き戰爭を爲すは文士をして兵馬の英雄に異ならしむる所以にして、事

業の結果に於て大に相異なりたる現象を表はすも之を以てなり。

愛山生が「文章即ち事業なり」と宣言したるは善し。然れども文章と事業とを都會の家屋の如く相接近したるものゝ如く言ひたるは不可なり。敢て不可といふ。何となれば、聖淨にして犯すべからざる文學の威嚴は、「事業」といふ俗界の「神」に近づけられたるを以て損ずべければなり。八百萬づの神々の中に、事業といふ神の位地は甚だ高からず。文學といふ女神は或は老嬢（オールドミス）にて世を送ることあるも、卑野なる神に配することを肯んぜざるべければなり。

京山、種彦、馬琴の三文士を論ひて、京山を賞揚せられたるは愛山生なり。其故いかにといふに、馬琴は己れの理想を歌ひて馬琴の文學を衒ひたるに過ぎず、種彦は人品高尚にして俗情に疎きところあり、馬琴によりては當時の社會を知るには役に立たず、種彦は平民に緣遠きが故に不可なり。獨り京山に到りては、番頭小僧までも寫實して殘すところなきが故に重んずべきなりと、斯く愛山生は說けり。天下の衆生をして悉く愛山生の如き史論家ならしめば、當時の社會を知るの要を重んじて、京山をも、西鶴をも、最上乘の作家として畏敬するなるべし。天下の衆生をして、悉く愛山生の如き平民論者ならしめば、山東家の小說は凡ての他の小說を凌ぐことを得べきこと必せり。

然れども文學は事業を目的とせざるなり。文學は人生に相涉ること、京山の寫實主義ほどになるを必須とせざるなり。文學は敵を目掛けて擊ちかゝること山陽の勤王論の如くなるを必須とせざるなり。最後に文學は必らずしも一人若しくは數百人の敵、見るべきの敵を目掛けて擊つを要せざるなり。擊といふ字は山陽一流の文士にこそ用あれ、愛山の所謂空の空を目掛けて大に擊つ文士に何の用かあらむ。山陽も擊てり。山陽の擊ちたる戰は今日に於て人に記憶せらるゝなり。然れども其の擊ちたるところは愛山生の言ふ如く直接に人生に相涉れり。人生に相涉るが故に人生を離るゝ事も亦た速ならんとす。源頼朝は能く擊てり。然れども其の擊ちたるところは速かに去れり。彼は一個の大戰士なれども、彼の戰場は實に限ある戰場にてありし。西行も能く擊てり、シエクスピーアも能く擊てり、ウォーヅオルスも能く擊てり、曲亭馬琴も能く擊てり。是等の諸輩も大戰士なり。而して前者と相異なる所以は前者の如く直接の敵を目掛けて限ある戰場に戰はず。換言すれば天地の限なきミステリーを目掛けて擊ちたるが故に、愛山生には空の空を擊ちたりと言はれんも、空の空を擊ちて星にまで達せんとせしにあるのみ。

行いて頼朝の墓を鎌倉山に開きて見よ。彼が言はんと欲するところ何事ぞ。來りて西行の姿を山家集の上に見よ。孰れか能く言ひ、孰れか能く言はざる。

然れども、文士は世を益せざるべからず。西行馬琴の徒が益したるところ何物ぞと斯く愛山生は問はむか。

文學のユチリチー論今日に始まりたるにあらず。吾等の先祖に勸善懲惡說あり、吾等の同時代に平民的批評家としての活用論者を愛山生に得たるも故なきにあらず。硝子は水晶に比して活用の便あり、以て窓戸を裝ふべし、以て洋燈のホヤとなすべし。天下普く其の活用の便を認むるを得るなり。然れども天下の愚人が、水晶といふ活用の便に乏しきものに向つて高價を拂ふは何ぞや。水晶を買ふものをして、數十金を出して露店の硝子玉を買はしめんとする神學を創見するものあらば、余は疑はず水天宮に參詣する衆生は爭ひ來りて其說法を聽聞するなるべし。京山をして、山陽をして學をテンブルの偶像たらしめば、カーライルをして英雄崇拜論に一題を缺きたりしを地下に後悔せしむることあるべし。

吉野山に遊覽して、歎息するものあり、曰く、何ぞ櫻樹を伐りて梅樹を植へざる、花王樹は何の活用に適するところあらむ、梅樹の以て千金の利を果實によつて得るに如かんやと。一人あり て傍より容喙して曰へらく、梅樹は作るところの利に於て甘藷を作るに如かず。他の一人は又た曰く甘藷は市場に出ての相場極めて廉なり、亞米利加種の林檎を植ゆるに如かずと。われは是等の論者が利を算するの速なるを喜び、眞理を認むるの確なるを謝するに吝ならざらんと欲す。然れども吉野山を以て活用論者の手に委ぬるは福澤先生を同志社の總理に推すことを好まざると同じく好まざるなり。

肉の力は肉の力を擊つに足るべし、死したるものゝ死したるものを葬むるを得るといふ眞理はナザレの人の子も之れを說けり。然れども死したるものゝ葬むることを得ざるものあるは、肉の力の擊碎することを得ざるものあると共に、他の一側に横はれる眞理なり。一人の敵を學ぶの非なるは、萬人の敵を學びても猶ほ失敗したる項羽すら之を發見せり。萬人の敵を學ぶは百萬人の敵を學ぶに如かざればならむ。百萬人の敵を學びたる(假定して)漢王も亦た「死朽」といふ不可算の敵の前には無言にして倒れたり。「死朽」といふ敵に對して、吾人は吾人の刀劍を揮ふこと愛山生の所謂英雄劍を揮ふ如くするも、成敗の數は始めより定まりてある如く、吾人

は自然(力としての)の前に立ちて脆弱なる勇士にてあるなり。

「力」(フォスー)としての自然は、眼に見へざる、他の言葉にて言へば空の空なる銃鎗を以て時々刻々「肉」としての人間に迫り來るなり。草薙の劍は能く見ゆる野火を薙ぎ盡したりと雖、見へざる銃鎗は、よもや薙ぎ盡せまじ。英雄をして劍を揮はしむるは見る可き敵に當ればなり、文章をして京山もしくは山陽の如く世を益するが爲めと、人世に相渉らしむるが爲に戰はしむるは、見るべき實(卽ち敵)に當らしむるが爲なり。然れども空の空なる銃鎗を迎へて戰ふには空の空なる銃鎗を以てせざるべからず。玆に於て靈の劍を鑄るの必要あるなり。

自然は吾人に服從を命ずるものなり、「力」としての自然は吾人を暴壓することを憚らざるものなり。「誘惑」を向け「慾情」を向け、「空想」を向け、吾人をして殆ど孤城落日の地位に立たしむるを好むものなり。而して吾人は或る度までは必らず服從せざるべからざる「運命」、然り、悲しき「運命」に包まれてあるなり。項羽は能く虞美人に別るゝことを得たれども、吾人は此の悲しき「運命」と一刻も相別るゝを得ざるものなり。然れども自然は吾人をして「失望落膽」の極遂に甘んじて自然の力に服從し了するまでに吾人を困窘せしめざるなり。爰に活路あり、活路は必らずしも活用と趣を一にせず。吾人をして空虛なる英雄を氣取りて力としての自然の前に、大言壯語せしむるものは我が言ふ活路にあらず。吾人は吾人の靈魂をして、肉として吾人の失ひたる自由を、他の大自在の靈世界に向つて縱に握らしむる事を得るなり。自然は暴虐を專一とする兵馬の英雄の如きにあらず、一方に於て風雨雷電を驅つて吾人を困ましむると同時に、他方に於ては、美妙なる絕對的のものをあらはして吾人を樂しましむるなり。風に對しては戸を造り、雨に對しては屋根を葺き、雷に對しては避雷柱を造る。斯くして人間は出來得る丈は物質的の權を以て自然の力に當るべしと雖、かくするは限ある權をもて限なき力を擊つの業にして、到底限ある權を投げやりて自然といふものゝ懷裡に躍り入るの妙なるには如かざるなり。爰に於て吉野山は活用論者の睹易からざる活氣を吾人に敎ふるなり。「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」と歌ひたる詩人が活用論者の知ること能はざる大活機を看破したるは卽ち爰にあるなり。

宗敎なし、サブライムなしと嘲けられたる芭蕉は振り向きて嘲りたる者を見もせまじ。然れども斯く嘲りたる平民的短歌の史論家(同じく愛山生)と時を同ふして立つの悲しさは無言勤行

の芭蕉より其詞句の一を假り來つて、わが論陣を固むるの非禮を行はざるを得ず。古池の句は之を引かず、一層簡明なる一句余が淺學に該當するものあれば暫らく之を論ぜんと欲す。其は

明月や池をめぐりてよもすがら

の一句なり。

池の岸に立ちたる一個人は肉をもて成りたる人間なることを記臆せよ。彼はすべての愛縛、すべての執着、すべての官能的感覺に圍まれてあることを記臆せよ。彼は眼ある物質的の權をもて爭ひ得る丈は是等無形の仇敵と搏闘したりといふことを記臆せよ。彼は功名と利達とに手を出すべき多くの機會ありたることを記臆せよ。彼は人世に相渉るの事業に何事をも難しとするところなかりしことを記臆せよ。然るに彼は自ら滿足することを得ざりしなり。自ら勝利を占めたりと信ずることを得ざりしなり。淺薄なる眼光を以てすれば勝利なりと見るべきものをも彼は勝利と見る能はざりしなり。爰に於て、彼は實を擊つの手を息めて、空を擊たんと悶きはじめたるなり。彼は池の一側に立ちて池の一小部分を睨むに甘んぜず、徐々として歩みはじめたり。池の周邊を一めぐりせり。一めぐりにては、池の全面を睨むに足らざるを知りて。再回せり。再回は池の全面を睨むに足りしかど池の底までを睨らむことを得ざりしが故に更に三回めぐりたり。四回めぐりたり。而して終によもすがらめぐりたり。池は卽ち實なり。而して彼が池を睨みたるは、暗中に水を打つ小兒の業に同じからずして、何物をか池に寫して睨みたるなり。何物をか池に打ち入れて睨みたるなり。何物にか池を照さしめて睨みたるなり。睨みたりとは、視る仕方の當初を指して言ひ得る言葉なり。視る仕方の後を言ふ言葉は Annihilation の外なかるべし。彼は實を忘れたるなり、彼は人間を離れたるなり、彼は肉を脫したるなり。實を忘れ、肉を脫し、人間を離れて何處にか去れる。杜鵑の行衞は問ふことを止めよ、天涯高く飛び去りて絕對的の物、卽ち Idea にまで達したるなり。

彼は事實の世界を忘れたるにあらず、池をめぐりて兩三回するは實を見貫く心ありてなり。實は自然の一側なり。而して實を照らすものも亦た自然の他の一側なり。實は吾人の敵となりて、吾人に迫ることを爲せども、他の一個なる虛は吾人の好友となりて、吾人を導きて天涯にまで上らしむるなり。池面にうつり出たる圍々たる明月は彼をして力としての自然を彼へに見て、一躍して美妙なる自然に進み入らしめたり。

サブライムは形の判斷にあらずして想の領分なり。即ち前に云ひたる池をめぐりてよもすがらせる如き人の、一躍して自然の懷裡に入りたる後に彼處にて見出すべき朋友を言ふなり。この至眞至誠なる朋友を得て、而して後、夜を徹するまで池をめぐるの味あるなり。池をめぐるはNothingnessをめぐるにあらず。この世ならぬ朋友と共に逍遙遊するを樂しむ爲にするなり。

造化主は吾人に許すに、意志の自由を以てす。現象世界に於て煩悶苦戰する間に吾人は造化主の吾人に與へたる大活機を利用して、猛虎の牙を弱め、倒崖の根を堅ふすることを得るなり。現象以外に超立して最後の理想に到着するの道吾人の前に開けてあり。大自在の風雅を傳道するは此の大活機を傳道するなり。何ぞ英雄劍を揮ふと言はむ。何ぞ爲すところあるが爲めと言はむ。何ぞ人世に相渉らざる可からずと言はむ。空の空の空を擊つて星にまで達することを期すべし。俗世をして俗世の笑ふまゝに笑はしむべし、俗世を濟度するは俗世に喜ばるゝが爲ならず。肉の劍はいかほどに鋭くもあれ、肉を以て肉を擊たんは文士が最後の戰場にあらず、眼を擧げて大、大、大の虛界を視よ。彼處に登攀して、清涼宮を捕握せよ、清涼宮を捕握したらば携へ歸りて俗界の衆生に、其一滴の水を飲ましめよ。彼等は活きむ嗚呼彼等庶幾くは活きんか。

自然の力をして縱に吾人の脛脚を控縛せしめよ。然れども吾人の頭部は大勇猛の權(ちから)を以て、現象以外の別乾坤にまで挺立せしめて、其處に大自在の風雅と逍遙せしむべし。彼物質的論家の如きは、世界を狹少なる家屋となして、其家屋の內部を整頓せるの外には一世の能事なしとし、甘じて爰に起臥せんとす。而して風雨の外より犯す時、雷電の上より襲ふ時、慄然として、恐怖するを以て自らの運命とあきらめんとす。靈性的の道念に逍遙するものは世界を世界大の物と認むることを知る。而して世界大の世界を以て甘心自足すべき住宅とは認めざるなり。世界大の世界を離れて大大大の實在(リアリチー)を現象世界以外に求むるにあらずんば止まざるなり。物質的英雄が明晃々たる利劍を揮つて狹少なる家屋の中に、仇敵と接戰する間に、彼は大自在の妙機を懷にして無言坐するなり。

悲しきLimitは人間の四面に鐵壁を設けて、人間をして、或る卑野なる生涯を脫することを能はざらしむ。鵬の大を以てしても、蜩の小を以てしても、同じくこの限を破ること能はざるなり。而して蜩の小を以て自らその小を知らず、鵬の大を以て自ら其の大を知らず、同じく限

に縛せらるゝを知らず、欣然として自足するは憫れむべき自足なり。この憫れむべき自足を以て現象世界に處して、快樂と幸福とに缺然たるところなしと自信するものは淺薄なる樂天家なり。彼は狹少なる家屋の中に物質的論客と共に坐を同くして泰平を歌はんとす。歌へ汝が泰平の歌を。

然れども斯の如き狹屋の中には、味もなき「義務」双翼を張りて、極めて得意になるなり。剛健なる「意志」其の脚を失ひて、幽靈に化するなり。譯もなき「利他主義」は莊嚴なる黄金佛となりて禮拜せらるゝなり。「事業」といふ匠工は唯一の甚五郎になるなり。「快樂」といふ食卓は最良の哲學者になるなり。ペタントリーといふ巨人は屋根裡に突き上るほどの英雄になるなり。凡ての靈性的生命は此處を辭して去るべし。人間を悉く木石の偶像とならしむるに屈竟の社殿はこの狹屋なるべし。この狹屋の内には、菅公は失敗せる經世家、桃青は意氣地なき遁世家、馬琴は些々たる非寫實文人、西行は無慾の閑人となりて、白石の如き、山陽の如き、足利尊氏の如き、仰向すべきは是等の事業家の外なきに至らんこと必せり。

頭をもたげよ、而して視よ。而して求めよ。高遠なる虚想を以て、眞に廣濶なる家屋眞に快美なる境地、眞に雄大なる事業を視よ、而して求めよ。爾の Longing を空際に投げよ。空際より爾が人間に爲すべきの天職を捉り來れ。嗚呼文士、何すれぞ局促として人生に相渉るを之れ求めむ。

滿足

われ今此處に立てり、而してわが今立つところの「此處」はわれ得て之を知る能はず、ひとり我が知るところは、我は「彼」と此との中間に立てるものなることなり。彼とは何處ぞ、「此」とは何處ぞ。われは直覺によつて其一端を窺ひ得るのみ。唯だ我が中に「經驗」なるもの存するありて、我は或處より旅をはじめ、或處まで到着せんとする一旅人なることを我に囁くあるのみ。我が出立したる「或處」は我が知り得るところにあらず、我が到着せんとする「或處」は我が知り得るところにあらず。然れども我は必らず「或處」にまで到着せんとするものなり。觀念この心

を我に傳へ、希望この願を我にたしかむ。

人の一代に暗黑なる時代あり。物欲の尤も熾焰したる時、功名心の尤も猛烈なる時、自我の尤も強盛なる時、人は自然に暗黑なる隧道を通過せざるを得ず。人間は風物を賞覽する旅客にあらず、商賣をなしながら渡り行く旅人なり。渠の肩には重荷あり、渠の懷中には帳簿あり、渠の財布には資本あり。渠は高樓に登つて酒肉を縱にし、枕を高ふして葉胥に遊ぶべきものならず。渠は生れながらにして重荷の意味を知れるならず、渠は始より帳簿の眞理を知れるならず、渠は當初より財布の取締を知れるならず。渠の初めて家庭を出づるは恰も世間見ずの旅商が始めし千里の遠行に上るが如きなり。渠の前には成功の幻像あり、渠の後には嘲弄の鬼隱れたり。渠は己れを知らざるなり。爰に於て暗黑の時代は必らず一度渠を其幕中に卷き去らんとす。

此時に當りて、渠は端なくも「經驗」といふ白頭翁に遭會す。翁は天より來るものにあらず、地より遣はされたるものにあらず、人生の自造的なる教師にして號令の威なく、懲罰の權なく、然も極めて親切に、人生を誘導するものなり。重荷の爲に疲れて眠れる時に、彼はひそひそと其耳に來りて重荷を負ふ可き秘訣を教ゆ。帳簿の錯誤の爲に、大なる苦痛を惱む時に、彼は懇ろに其手を把りて、帳簿を整理するの道を教ゆ。財布の空乏の爲に、限なき悲恨を招く時に、彼は噯き口を以ていかに處置すべきかを教ゆ。經驗は常識の世界に於ける常識の大導師なり。人は己れを卑くしてこの導師に從ひ行くに、暗黑なる隧道は忽ち光明なる白日となるなり。

人は知ることを得ざる「或處」より知ることを得ざる「或處」まで旅しつゝある心細きものなり。然れども「經驗」といふ白頭翁は、旅と共に旅して、今日の旅には今日の旅を教へ、明日の旅には明日の旅を教ゆ。人間は之を以て今日の旅に滿足し、又た明日の旅に滿足することを得るなり。爰に於て吾人は、常識の世界に於て、吾人が滿足すべき方法の一端を學び得たり。其術如何、曰く、宜しく常識の「經驗」に聞くべし。今日を以て今日に滿足せよ、明日を以て明日に滿足せよ。

然りと雖、人間は商賣をなすが爲のみの動物にあらず。理性と感情と意志とは、人間を驅つて自ら覺らざる境に投るものなり。默思默想は彼をして物我の界に迷はしむるものなり。人世は遠き古より遙かなる未來まで、眞個に之れ幻奇を極めたる一大ドラマたり。昨日の人は此ドラマの舞臺を過ぎて去れり、今日の人は此ドラマの舞臺の上に働らきつゝあるなり。而して

明日の人は衣裝を整へて頓て此舞臺に登場すべき用意をなしつゝあるなり、千年萬年斯の如くにして地球の廻轉の停まらざる限り、太陽系の引力絶ゆざるかぎりは、此大ドラマを撤去するものなきなり。

悲劇と喜劇とはこの大ドラマの二、大眞相なり。然れども悲劇にして喜劇を兼ぬるものなきにあらず、喜劇にして悲劇を兼ぬるものなきにあらず。悲にして喜、喜にして悲、人世の變幻得て察すべからず。甘美なる宗教は泣けるものゝ涙を拂ひ、笑へるものゝ聲を低からしむ。嚴肅なる哲學は、「前」と「後」とを苟且にするものを誡しむ。老實なる經驗は無識無學を警醒す。而して人世は是等の尊重すべき教師の引續きて教養するものあるにも拘らず、一大ドラマたるに於ては萬古不變なり。泣かんとするものは泣き、笑はんとするものは笑ひ、善惡邪正の種は盡くる曉なく、迷悟の機は綿々として斷ゆる時なし。墳墓は虛にして且つ廣く、人を呑み、時を呑み、世を呑み、呑みては吐き、吐きては呑むこと、行きては返へり、返へりては行く江河の水の如くなれど、人世は終古一大ドラマにして、生滅も之を奪ふ能はず、輪轉も之を撤ずる能はず。この變幻に對し、この永續に對し、人智能く何をか加へん、人力能く何をか成さむ、人理能く何をか議せむ。クリードを携へて是に迫るものあり、知識を提げて之を犯すものあり、美術を手にして之に近よるものあり。彼等は何事をか成すなり、彼等は何物をか擊つなり、彼等は或成功を遂ぐるなり。然れども彼等が擊ちたりと思ふは千丈の壁の寸分に過ぎず、彼等が成したりと思ふは萬尋の淵より一滴の水を掬し得たるに過ぎず、歷史をして之を自證せしめよ。

「滿足」といふ社殿に達するには、二條の徑路あり。其一は徹頭徹尾常識界の王なる「經驗」に從ふこと之なり。然れども人間は常識のみの動物にあらざるが故に、「疑」といふ妖婦の爲に常識界より迷出づるの止を得ざる人なきにあらず。「何ぞや」といふ疑問先づ襲ひ來りて知識なるものを得、知識なるものを得て然る後再び他の「何ぞや」に入る。斯の如く「何ぞや」といふ一の迷霧の中に彷徨して、而して更に又た他の迷霧に進み行くものあり。一たび、「何ぞや」を出る時、遙かに滿足といふ社殿を朦朧たる烟霞の中に認めて、再び「何ぞや」に沒入し、更に又た「滿足」といふ社殿を遠見す。「何ぞや」によりて進むべき「滿足」に通ずる路は、常識の「經驗」に誘はれて「滿足」に通ずる路とは相異なれり。彼の路によれば、其歩武は甚だ平らかなり、其行程は甚だ迂し、然れども「何ぞや」によりて進むべき種類の人間は到底常識の「經驗」に誘はれて進

むべき人間とは同一なる能はず。廣漠たる原を過ぎ、峭嶢たる山を越へ、茫々漠々たる沙漠にさへ迷ひ入り、自立的（インヂビヂュアル）の經驗を積み、自立的の希望を蓄へ、自立的の方向を畫し、最後に主觀的觀念なる伴侶を得て其の觀念の直覺に憑りてはじめて雪霧を破りて皎々たる白殿に到着するを得るものなり。

すべてのクリードも、すべての知識も、すべての美術も、若し直覺といふものを缺く時には何等の効用もなかるべし。唯理論の旺盛なる時代にありては主觀的觀念を觀るものなく、直覺なるものは眞正の意味に於て了解せらるゝ事なく、論理は知識の唯一の標率となり、經驗といふ導師のみは世に時めきて在せしかど、神を知り、人を知り、世を知る完全なる方法としては斯の如き學派の勢力遂に長久なること能はざりし。

然りと雖、單に滿足といふ問題の下に觀察する時は、吾人は前者を以て福なるものとし、後者を以て不幸なるものと認むるを躊躇せず。常識に默從するものは容易く無心になることを得るものなり、智慧の木の實を食ひたるものは、バイロンの所謂「わが眠は眠にあらず」的の苦痛を味ふの悲みあり。第二種のものには、危道を蹈まざるべからざるものあり、第一種のものには坦路を歩むの便あり。但し彼等が到着したる「滿足」の種類を云ふ時は、自ら相異なるものあるなり。

最後に滿足は天命を知るによつて生ずるものなり。人間五十始めより天命を知るものにあらず、本より主觀のみにて天命を知悉すべきにあらず、本より客觀のみにて天命を明知すべきにあらず、本より經驗のみによりて天命を認むるものにあらず。眞に天命を知るは己れを知りたる後にあり。己れを知り天命を知るが爲には、造化萬物情を秘することなく、吾人をして縱に觀察し縱に學究し、縱に冥契するを得せしむ。造化を觀じ、人間を觀じ、然る後に天を觀ず。詩人哲學者宗教家一々其軌を異にするが如しと雖、歸する所は即ち一なり。或は主觀に偏し、或は客觀に流るゝが如しと雖、要するに智識の進歩の道程に於て盆水の時に一方に傾くが如きのみ。

カーライルの連りたる或宴席に於て人のギョーテを評するものあり、曰く、ギョーテには宗教なしと、矯激なるカーライルは直ちに遮りて評者に向つて曰く、評者よ汝は汝の卷煙草に火を點ずること能はざるの故を以て太陽を責むるやと。蓋し偏狹なる宗教家思想を以て妄りに大戯

曲家を嘲るを戒めたるなり。吾人は不幸にして今日の時代にギョーテの如き大家を有せず。然れども吾人はギョーテの如き大家を出さんが爲に、妄りに宗教と哲學とをポエトリーより分離し去らんとするの僻見を排せざる可からず。吾人は大ドラマの中に蠢動しつゝある者なり。天を知り、人を知り、世を知るの第一者はこのドラマの存在する事實之なり。この事實を離れたる滿足は眞正の滿足といふべからず。徒に天を仰いで空を望むべからず空しく地に俯して事實に頑執すべからず、天を仰げば次第をなして翔ける鴻に學ぶところあるべし。地に俯せば生活の實態に醒むるところあるべし。「滿足」を得るは難からず、圓滿なる滿足を得るは夫れ難いかな。(論旨盡さず常に讀者に罪を得るを悲しむ)

快樂と實用

明治文學管見の一

明治文學も既に二十六年の壯年となれり。此歲月の間に如何なる進歩ありしか、如何なる退歩ありしか。如何なる原素と如何なる精神が此文學の中に蟠りて、而して如何なる現象を外面に呈出したるか。是等の事を研究するは緊要なるものなり。而して今日まで未だ此範圍に於て史家の技倆を試みたるものはあらず。唯だ國民新聞の愛山ありて、其の鋭利なる觀察を此範圍に向けたるあるのみ。余は彼の評論に就きて滿足すること能はざるところあるにも係らず、其氣鋭く膽大にして幾多の先輩を瞠若せしむる技倆に驚ろくものなり。余や短才淺學にして、敢て、此般の評論に立入るべきものにあらねども、從來白表女學雜誌々上にて評論の業に從事したる由來を以て聊か見るところを述べて明治文學の梗概を研究せんと欲するの志あり。余が曩に愛山生の文章を評論したる事あるを以て、此題目に於て再び戰を挑まんの野心ありなど思はゞ此上なき僻事なるべし。之れ余が日本文學史骨を著はすに當りて豫め讀者に注意を請ふ一なり。

余は之れより日本文學史の一學生たらんを期するものにて、素よりこの文學史を以て獨占の舞臺などゝせん心掛あるにはあらず。斯く斷りするは曾つて或人に誤まられたることあればなり。余は學生として、誠實に研究すべきことを研究せんとするものなれば、縱令如何なることあ

りて他人の攻擊に遭ふことありとも之に向つて答辯するものと必せず。又容易に他人の所論を難ずる等の事なかるべし。且つ美學及び純哲學に於て極めて初學なる身を以て文學を論ずることとなれば、其不都合なる事多かるべきは吳々も豫め斷り置きたる事なり。加ふるに閑少なく事實の便なく、事實の蒐集思ふに任せぬことのみなるべければ、獨斷的の評論をなす方に自然傾むき易きことも、亦た豫め諒承あらんことを請ふになむ。

特に山路愛山先生に對して一言すべきことあり。爰にて是を言ふは奇しと思ふ人あらんかなれど、余は元來余が爲したる評論に就きて親切なる教示を望みたるものなるに、愛山君は余が所論以外の事に向て攻擊の位地に立たれ少しも滿足なる教示と見るべきはあらず。余は自ら受けたる攻擊に就きて云々するの必要を見ざれば其儘に看過したり。本より文學の事業なることは釋義といふ利刀を假り來らずとも分明なることにして、文學が人生に涉るものなることは何人といへ共、之を疑はぬなるべし。愛山先生若しこの二件を以て自らの新發見なりと思はゞ余輩其の可なるを知らず、余は右の二件を難じたるものにあらず。余が今日の文學の爲に聯か眞理を愛するの心より知交を辱ふする愛山君の所說を難じたるは、豈に虛空なる自負自傲の念よりするものならんや。これを以て余は愛山君の反駁に答ふることをせざりし。然るに豈圖らんや、其他にも余が所論を難ぜんとしてか、或は他に爲にする所ありてか、人性に相涉らざるべからずといふ論旨の分明に解得せらるゝ論文の、然も大家先生等の手に成りて出でしを見るに至らんとは、若し此事にして余が所說に對して或は余が所說に動かされて出でたるものなりとするを得ば、余は至幸至榮なるを謝するに吝ならざるべし。然れども極めて不幸なりと思ふは余は是等の文章に對して返報するの權利なきこと是なり。文學が人生に相涉るものなることは余も是を信ずるなり。恐らく天地間に文學は人生に相涉るべからずと揚言する愚人は無かるべし。但し余が難じたるは(1)世を益するの目的を以て(2)英雄の劍を揮ふが如くに(3)空の空を突かんとせずして、或的を見て華文妙辭を退けて、而して人生に相涉らざるべからずと論斷したるは難じたるなり。故に余は以上の條件を備へざる人生相涉論ならば、奈何なる大家先生の所說なりとも是に對して答辯するの權利なきなり。然ども余自ら山庵雜記に言ひし如く、是非眞僞は容易に皮相眼を以て判別すべき者ならざるに、余が文章の疎雜なりしが爲め、或は意氣昂揚して筆したりしが爲か、斯も誤讀せらるゝに至りたるは極て殘念の事と思ふが故に、余は不肖を

顧みず、淺膚を厭はず、是より評論紙上に於て出來得る丈誤讀を免かるゝ樣に、明治文學の性質を論ずるの榮を得んとす。之を爲すは本より愛山君の所說を再評するが爲にはあらざるも、若し余が信ずる所に於て君の敎示を促すべきことあらば請ふ自ら寬ふして之を垂れよ。

余は先づ明治文學の性質を以て始めんとす。而して、明治文學の性質を知らんが爲には、如何なる主義が其中に存するかを見ざるべからず。純文界にも批評界にも或は時事界にも濟々たる名士羅列するを見る。然れども余は存生中の人を評論するに於て二箇のおもしろからぬ事あるを慮るなり。其一は、もし賞揚する時に諛言と誤まれんか、若し非難する時に詬評と思はれんかの恐れあり。其二は自らの主義、人間は Passion の動物なれば少くとも自家の私見善く言ひて主義なるものに拘泥することなき能はず。故に若し一の私見と他の私見と撞着したる時に、近頃流行の罵詈評論に陷ることなきにしもあらず。之を以て余は敢て現存の大家に向つて直接の批評を加へざるべしと雖、もし余が觀察し行く原實（エヂント）の道程に於て相衝當する事あらば避くべからざる場合として之を爲すことあるべし。

余は明治文學管見の第一として「快樂（プヂユア）」と「實用（ユチリチ）」とを論ずべし。

「快樂」と「實用」とは疑もなく「美」の要素なり、必らずしもプレトーを引くには及ばず。マシューアーノルドは「人生の批評としての詩に於ては詩の理、詩の美の定法に應ふかぎりは人生を慰め人生を保つことを得るなり」と云へり。

文學が一方に於て人生を批評するものなることは余も之を疑はず。然れどもアーノルドの言ふ如く、人生の批評としての詩は又た詩の理と詩の美とを兼ねざるべからず。吾人文學を研究せるものは、單に人生の批評のみを事とせずして、詩の理と詩の美とをも究むるにあらざれば不可なるべし。

人生を慰むるといふ事より、Pleasure なるものが、詩の美に於て、缺くべからざる要素なる事を知るを得べし。人生を保つといふ事より Utility なるものが、詩の理に於て缺くべからざる要素なる事を知るべし。眞に人生を慰め眞に人生を保つには、眞に人生を觀察し人生を批評するの外に、眞に人生を通譯することなかるべからず。人生を通譯するには、人生を知覺せざるべからず。故に天賦の詩才ある人は、人間の性質を明らかに認識するの要あるなり。然らざればヂニアスは眞個の狂人のみ、靴屋にもなれず秘書官にもなれぬ白痴のみ。

人生（Life）といふ事は、人間始まつてよりの難問なり。哲學者の夢にも此難問は到底解き盡くす可らずとは古人も之を言へり。若し夫れ社界的人生などの事に至りては或は鋭利なる觀察家の眼睛にて看破し得ることもあるべけれど、人生の Vitality に至りては、全能の神の外は全く知るものなかるべし。故に詩人の一生は、默示の度に從ひて、人生を研究するものにして、感應の度に從ひて人生を慰保するものなるべし。

快樂と實用とは、主觀に於ては美の要素なりと雖、客觀に於ては美の結果なり、內部にありては美を構成するものなりと雖、外部の現象に於ては美の成果なり。この二要素を論ずるに先ちて吾人は

人生何か故に美を要するか。

に就きて一言せざるべからず。

音樂何の爲に人生に要ある。繪畫何が故に人生に要ある。極めて些末なる裝飾品までも何が故に人生に要ある。何が故に歌ある。何が故に詩ある。何が故に温柔なる女性の美ある。何が故に花の美ある。何が故に山水の美ある。是等の者はすべて遊惰放逸なる人間の惡習を滿足せしむるが爲に存するものなるか。もし然らんには人生は是等の凡ての美なくして成存することを得べし。然るに古往今來尤も野蠻なる種族に、尤も劣等なる美の觀念を有し、尤も進歩せる種族に尤も優等なる美の觀念を有するは何が故ぞ。尤も野蠻なる種族にも必らず何につけてか美を求むるの念ある事は明白なる社界學上の事實なり。或は鳥吟を摸擬し、或は美花を粗末なる仕方にて模寫するなどの事は、極めて拙劣の人種にも是あるなり。又た尤も幼稚なる嬰兒にても、美くしき玩弄品（トイス）を見ては能く笑ひ、音樂の響には耳を澄ます事は普通なる事實なり。之を以て見れば文明といふ怪物が人間を遊惰放逸に驅りたるよりして、始めて美の要を生じたりと見るの僻見なることは多言せずして明らかなるべし。美は實に人生の本能に於て、本性に於て自然に願欲するものなることは認め得べきことなり。斯の如く美を願欲するには人生の本能、人性の本性に於て、然りといふ事を知り得たらば吾人は一歩を進めて

人生は快樂を要するものなりや否や

の一問を解かざるべからず。

快樂は何の爲に、人生に要ある。人生は快樂なくして、生活し得べきものなるべきや。ピュ

リタニズムの極端にまで攀ぢ登りて見ても、唯利論の絶頂にまで登臨して見ても人生は何事か快樂といふものなくては月日を送ること能はざるは常識といふ活眼先生に問ふまでもなく明白なる事實なり。

快樂は即ち慰藉（Consolation）なり。詳に人間生活の狀態を觀よ、蠢々喁々として何のおもしろみもなく、何のおかしみもなきに似たれど、其實は、個々特種の快樂を有し、人々異樣の慰藉を領するなり。放蕩なる快樂は飲宴好色なり。着實なる快樂は宴居閑樂なり。熟性ある快樂は忠孝仁義等の目的及び希望なり、誠實なる快樂は家を齊へ生を理するにあり。然れども是等は、特性の快樂を擧げたるのみ。若し通性の快樂をいふ時は、美くしきものによりて、耳目Sight and hearing を樂しますことにあり。耳には音を聞き、目には物を睹る、之れ快樂を願欲するの最始なり。然れどもマインド（智、情、意）の發達するに從ひてこの簡單なる快樂にては滿足すること能はざるか故に、更に道義（モーラル）の生命（ライフ）に於て、快樂を願欲するに至るなり。道義の生命に於て快樂を願欲するに至る時は單に自然の模倣（ネーチュアイミテーション）を事とする美術を以て眞正の滿足を得ること能はざるは必然の結果なるが故に、創造的天才（クリエーチヴジニアス）の手に成りたる美を愛好するに至ることも亦た當然の成行なり。美は始めより同じものにして輕重增減あるものにあらざれど、美術の上に於ては進歩すべきものなること是を以てなり。而して其觀察點より推究する時は、尤も進歩したるモーラル、ライフ（道義の生命）を有つものは、尤も健全にして、尤も圓滿なる美を願欲するものなることは判斷するに難からじ。而して社界進歩の大法を以て之を論ずる時は、尤も完全なる道義の生命を有する國民が尤も進歩したる有樣にある事は明白なる事實なれば、從つて、又、尤も圓滿なる快樂を有し、尤も完全なる美を願欲する人種が尤も進歩したる國家を成すことは容易に見得べき事なり。吾人は更に、

道義的生命（ライフといふ字は人生と譯するも可なり）が快樂に相涉る關係

に就きて一言せざる可からず。

道義（モーラル）といふ字を用ふるには、宗教及哲學に訴へて、其字義を釋說すること大切なるべし。然れども吾人は序言に於て斷りしたる如く、成る可く平民的に、（平民的といふ言爰に用ふるを得るとすれば）雜誌評論らしき普通の諒解にうちまかせてこの字を用ふるなり。

人生は、フヒジカルに於て進歩すると同時に、モーラルにも進歩するものなり、Phisical world

の擴まり行くと共に Moral world も擴まり行くものなり。故に其必要とする快樂に於ても亦た單に耳目を喜ばすといふのみにては足らぬ樣になるなり。加ふるに智情意の發達と共に、各種各樣の思想を生ずるが故に、其の必要とする快樂も彼等の發達したる智情意を滿足せしむる程の者たらざるべからず。かるが故に道義的人生に相涉るべき適當の快樂なくしては、道義自身も槁れ、人生自身も味なきに至らん事必せり。爰に於て道義の生命の中心なる靈魂を以て、美の表現の中心なる宇宙の眞美を味ふの必要起るなり。宇宙の眞美は、或はサブライムといひ、或はビューチフルと言ひ審美學家の孜々として討究しつゝある問題にして容易に論入すべきものにあらず。但し余は『人生に相涉るとは、何の謂ぞや』と題する一文の中に其一端を論じたる事あれば就いて讀まれん事を請ふになむ。是より

「快樂」と「實用」との雙關

に就きて一言せむ。

「快樂」と「實用」とは特種の者にして、極めて密接なる關係あるものなり。實用を離れたる快樂は、絶對的には全然之なしと斷言するも不可なかるべし。快樂の他の意味は慰藉（コンソレーション）なる事は前にも言ひたり。慰藉といふ事は孤立（アイソレーテッド）したる立脚點（スタンドポイント）の上に立つものにあらずして、何者にか雙對するものなり。エデンの園に住みたる始祖には、慰藉といふものゝ必要は無かりし。之あるは人間に苦痛ありてよりの事なり。故に、

人生何が故に苦痛あるか

の一問を解くの止むべからざるを知る。

曰く、欲（パナション）なる魔物が、人生の中に存すればなり。凡ての罪、凡ての惡、凡ての過失は欲あるが故にこそあるなれ。而して罪惡、過失等の形を呈せざる內部の人生に於て、欲と正義と相戰ひつゝある事は、苟くも人生を觀察するに缺くべからざる要點なり。この戰爭が人生の靈魂に與ふる傷痍は即ち吾人が道義の生命に於て感ずる苦痛なり。この血痕、この紅淚こそは古昔より人間の特性を染むるものならずんばあらず。かるが故に、必要上より、「慰藉」といふもの生じ來りて美しきものを以て、欲を柔らかにし其毒刄を鈍くするの止むなきを致すなり。然れどもすでに必要といふ以上は慰藉も亦た多少實用の物ならざるにあらず。試に一例を擧て之を說かん。

梅花と櫻花との比較

梅花と櫻花とは東洋詩人の尤も愛好するものなり。梅花は其の華に於ては、單に慰藉の用に當つべきのみ、然れども、その果に於ては、實用のものとなるなり。斯の如く固有性に於て慰藉物なるもの、附屬性に於て實用品たることあり（之と反對の例をも見よ）櫻花は果を結ばざるが故に、單に慰藉の用に供すべきのみなるかと問ふに、貴人の園庭に於て必らず無くてならぬものとなり居るところよりすれば、幾分かは實用の性質をも備へてあるなり。（梅櫻と東洋文學との關係に就きては他日詳論することあるべし）これと同じく家具家材の實用品と共に或種類の裝飾品も亦た多少實用の性質あるなり。屏風は實用品なり、然れども白紙の屏風といふものを見たる事なきは何ぞや。裝飾と實用との相密接するは之を以て見るべし。之より

實用の起原

に就きて一言すべし。

この問題は至難なるものなり。然れども極めて雜駁に、極めて獨斷的に之を解けば、前に「快樂」の起原に就きて曰ひたる如く、人間は欲の動物なるが故に、その欲と調和したる度に於て、自家の滿足を得る爲に意と肉とを適宜に滿足せしむるが爲に、必要とする器物、もしくは無形物を願求せるの性あること之れ實用の起原なり。而して人文進歩の度に應じて「實用」も亦進歩するものなる事は前に言ひたると同じ理法にて明白なり。人文進歩とは物質的人生（フヒジカルライフ）と道義的人生（モラルライフ）との兩像に於て進歩したるものなるが故に、實用も其の最始に於ては、單に物質的需用を充たすに足りし者が追々に道義的需用を充たすに至るべき事は當然の順序なり。他の側面より見る時は野蠻人と開化人との區別は道義性の發達したりしと、否とにありしといふも不可なかるべし。爰に於て道義的人生に相渉るべき文學なるものは、人間の道義性を滿足せしむるほどのものならざるべからざる事は認め得べし。之より

道義的人生の實用

とは何ぞやの疑問にうつるべし。

人間を正當なる知識に進ましむるもの（學理）其一なり、人間を正當なる道念に進ましむるもの（倫理）其二なり、人間を正當なる位地に進ましむるもの（美）其三なり。

斯の如く概說し來りたるところを以て、吾人は快樂と實用との上に於て吾人が詩と稱するものゝ地位を瞥見する事を得たり。快樂即ち慰藉は、道義的人生に缺くべからざるものたると

共に、實用も亦た道義的人生に缺くべからざるものなる事を見たり。但し慰藉は主として道義的人生に渉る性を有し、實用は客觀に於ては物質的人生に渉ると雖、前にも言ひし如く、到底主觀に於ては道義的人生にまで達せざるべからざるものなり（此事に就きては恐らく詳論を要すなるべし）

余は「快樂」と「實用」との性質に就き及び此二者が人生と相渉れる關係に就きて粗畧なる解釋を成就したり。是より

「快樂」と「實用」とが文學に關係するところ如何

に進むべし。

快樂と實用とは、文學の兩翼なり、雙輪なり、之なくては鳥飛ぶ能はず、車走る能はず、然れども快樂と實用とは文學の本體にあらざるなり。快樂と實用とは美の的（Aim）なり。美の結果（Effect）なり。美の功用（Use）なり。「美」の本體は快樂と實用とにあらず。これと共に、詩の廣き範圍に於ても、快樂と實用とは其的、其結果、其功用に過ぎずして他に詩の本能ある事は疑ふ可からざる事實なるべしと思はる。

若し事物の眞價を論ずるに、其的、其結果、其功用のみを標準とする時は、種々なる誤謬を生ずるに至るべし、本能本性を合せて、其結果、其功用其的を觀察するにあらざれば、余輩其の可なるを知らず。故に文學を評論するには、少くとも其本能本性に立ち入りて、然る後に功用、結果、目的等の陪審官に諮はざるべからず。

快樂と實用とは詩が兼ね備へざるべからざる二大要素なることは疑ふまでもなし。然れども詩（ポエトリー）が必らずこの二大要素に對して隷屬すべき地位に立たざるべからずとするは、大なる誤謬なり。

吾人が日本文學史を研究するに當りて第一に觀察せざる可からざる事は、如何なる主義（プリンシプル）、如何なる批評眼、如何なる理論（セオリ）が主要（オーソリチー）の位地を占有しつゝありしかにあり。而して吾人は不幸にも、世益主義（世道人心を益せざるべからずといふ論）勸懲主義（善を勸め惡を懲らすべしといふ論）及び目的主義（何か目的を置きて之に對して云々すべしといふ論）等が古來より尤も多く主要の位地に立てるを見出すなり。斯の如くにして、神聖なる文學を以て、實用と快樂に隷屬せしめつゝありたり、宜なるかな我邦の文藝今日まで憐れむべき位地にありたりしや。

余は次章に於て德川時代の文學に、「快樂」と「實用」との二大區分（クラシフイケツシヨン）ある事、平民文學貴族文學

の區別ある事、倫理と實用との關係等の事を論じて追々に明治文學の眞相を窺はん事を期す。

精神の自由

明治文學管見之二

造化萬物を支配する法則の中に生と死は必らず動かすべからざる大法なり。凡そ生あれば必らず死あり。死は必らず、生を躡ふて來る。人間は「生」といふ流れに浮びて「死」といふ海に漂着する者にして其行程も甚だ長からず。然に人間の一生は「生」より「死」にまで旅するを以て最後の運命と定むべからざるものあるに似たり。人間の一生は旅なり。然れども「生」といふ驛は「死」といふ驛に隣せるものにして、この小時間の旅によりて萬事休する事能はざるなり。生の前は夢なり。生の後も亦た夢なり、吾人は生の前を知る能はず、又た死の後を知る能はず。然れども僅かに現在の「生」を覗ひ知ることを得るなり。現在の、「生」は夢にして「生」の後が寤なるべきや、否や、吾人は之をも知る能はず。

吾人が明らかに知り得る一事あり。其は他ならず、現在の「生」は有限なること是れなり。然れども其の有限なるは人間の精神にあらず、人間の物質なり。世界は意味なくして成立するものにあらず、必らず何事かの希望を蓄へて進みつゝあるなり。然らざれば凡ての文明も、凡ての化育も虛僞のものなるべし。世界の希望は人間の希望なり。何をか人間の希望といふ。曰く、此の有限の中にありて彼の無限の目的に應はせんこと是なり。有限は圈環の内にありて其中心に注ぎ、無限は方以外に自由なり。有限は引力によりて相結び、無限は自在を以て孤立することを得るなり、而して人間は實に有限と無限との中間に彷徨するもの、肉によりては限られ、靈に於ては放たるゝ者にして、人間に善惡正邪あるは必竟するに内界に於て有限と無限との戰爭あればなり。歸一（ユニチー）を求むるものは物質なり、調和を需むるものは物質なり。而して精神に至りては始めより自由なるものなり。始めより獨存するものなり。

人間は活動す。而して活動なるものは「我」を繞りて歩むものにして、「我」を離るゝ時は萬籟靜止するものなり。自己の「我」は生存を競ふものなり、法の「我」は眞理に趣くものなり。然れども人間の種族は生存を競ふの外に活動を起すこと稀なり。愛國若くは犧牲等の高尚なる名の下

にも、究極するところ生存を競ふの意味あり。人は何事をか求むるものなり、人は必らず情を離れざるものなり、人は自己を愛するものなり。倫理道德を守る前に人間は必らず自己の意欲に僕婢たるものなり。斯の如く意の世界に於て人間は禁囚せられたる位地に立つものなり。

人生は斯の如く多恨なり、多方なり。然れども世界と共に存在し、世界と共に進歩する思想なるものは、羅針盤なくして航行するものにあらずと見たり。吾人は夢を疑ふ。然れども吾なるもの全く人間を離れたるものにあらず。吾人は想像力を訝る。然れども想像力なるもの全く虛妄なるものにあらず。吾人は理想を怪しむ。然れども理想なるもの全く人間と關係なきものにあらず。夢や、想像力や、理想や、是れ等のものはスフヒンクスに屬する妖術の種類にあらずして何事をか吾人に敎へ、何物をか吾人に默示し、吾人をして水上の浮萍の如く浪のまに〳〵漂流するものにあらざるを示すに似たり。且つ吾人は自ら顧みて己れを觀る時に何の希望もなく、何の目的もなく、在來の倫理に唯諾し、在來の道德を墨守し、何事かの事業にはまりて、一生を竟るを以て自ら甘んずること能はざるものあるに似たり。怪しむべきは此事なり。

倫理道德は人間を羈縛する墨繩に過ぎざるか。眞人至人の高大なる事業は境遇と周邊と場所とによりて生ずるに止まるか。人間の窮通消長は、機會(チヤンス)なるもの〻横行に一任するものなるか。吾人は諾する能はず、別に精神なるものあり。人間の覺醒は即ち精神の覺醒にして、人間の睡眠は即ち精神の睡眠なり。倫理道德は人間を盲目ならしむるものにあらずして、人間の精神に怨ふるものならずんばあらず。高大なる事業は境遇等により(絕對的に)生ずるものにあらずして精神の靈動に基くものならざるべからず。人間の窮通は機會の獨斷すべきものにあらずして、精神の動靜に因するものならざるべからず。精神は自ら存するものなり、精神は自ら知るものなり、精神は自ら動くものなり、然れども精神の自存・自知自動は、人間の內にのみ限るべきにあらず。之と相照應するものは、他界にあり。他界の精神は人間の精神を動かすことを得べし。然れども是は人間の精神の覺醒の度に應ずるものなるべし。かるが故に人間を記錄する歷史は精神の動靜を記錄するものならざるべからず、物質の變遷は精神に次ぎて來るものなるが故に、之を苟且にすべしと云ふにはあらねど、眞正の歷史の目的は人間の精神を研究するにあるべし。人生實に無邊なり。然も意味なき無邊にあらず。必竟するに精神の自由の爲に砂漠を旅するものなり。希望爰に存し、進步爰に萠すなり。之なくんば凡ての事皆な虛僞なり。

文學は人間と無限とを研究する一種の事業なり。事業としては然り。而して其起因するところは、現在の「生」に於て人間が自らの滿足を充さんとする欲望を塡ぐ爲にあるべし。文學は快樂を人生に與ふるものなり、文學は保全を人生に補ふものなり。然れども歴史上にて文學を研究するには。そを人生の鏡とし、そを人生の欲望と滿足の像影として見ざるべからず。人生は、文學史の中に其骸骨を留むるものなり。その宗教も、その哲學も文學史の中に散漫たる形にて殘るもの也、その欲望も其滿足も文學史の上には蔽ふべからざる事實となるなり。而して吾人は、その欲望よりも、其滿足よりも、其狀態よりも、第一に人生の精神を知らざるべからず、吾人は觀察なるもの〻甚だ重んずべきを認む。然れども狂態(ステート)を觀察するに先ち赤裸々の精神を視ざるべからず、認識せざるべからず。然かる後にその精神の活動を觀察せざる可からず。

精神は終古一なり。然れども人生は有限なり。有限なるもの〻中にありて、無限なるもの〻趣きを變ゆ。東洋の最大不幸は始めより今に至るまで精神の自由を知らざりし事なり。然れども是は東洋の政治的組織の上に言ふのみ。其宗教の上に於ては大なる差別あり。始めより全く精神の自由を知らず、且つ求めざるの國は、必らず退歩すべきの國なり、必らず歴史の外に消ゆべきの國なり。政治と懸絶したる宗教に向つて精神の自由を求むるは、國民が政治を離る〻の徴なり。宗教にして若し政治と相渉ることなくんば、其邦の思想は必らず一方には極端なる虚想派を起し、一方には極端なる實際派を起さゞるべからず。吾人は他日日本文學と國體との關係を言ふ時に於て此事を評論すべし、今は唯だ日本の政治的組織は、一人の自由を許すと雖、衆人の自由を認めず。而して日本の宗教的組織は主觀的に精神の自由を許すと雖、社界とは關係なき人生に於て此自由を享有するを得るのみにして、公共の自由なるものは此上に成立することなかりしといふ事を斷り置くのみ。

爰に於て、吾人は讀者を促して前號の題目に反らんことを請ふの要あり。人間は精神を以て生命の原素とするものなり。然れども人間生活の需要は慰藉と保全とに過ぐるなし。文學も其直接の目的は此二者を外にすること能はず。文學の種類は多々ありとも、この直接の目的に外れたるものは文學にあらざるなり。而して何をか尤もこの目的に適ひたるものとすべきかは此本題の外にあり。

徳川時代文學の眞相は、其時代を論ずるに當りて詳かに研究すべし。然れども余は既に逆路

より余の研究を始めたり。極めて粗雜に明治文學の大體を知らんこと余が今日の題目なり。爰を知らずして能く兒を知るは稀れなり。之を以て余は今日に於て、甚だ亂雜なる研究法を以て德川文學が明治文學に傳へたる性質の一二を觀察せんと欲す。

文學の最初は自然の發生なり。人に聲あり、人に目あると同時に、文學を發生すべきものなり。然れども其發達は人生の機運に伴ふが故に長育するものなり。能く人生を樂しめ、能く人生に功あるものは、人間に連れて進歩すべき文學なり。之を以て、一國民の文學は其時代を出ること能はざるなり。時代の精神は文學を蔽ふものなり。人は周圍によりて生活す、其聲も其目も周圍を離るゝことは斷じて之なしと云ふも不可なかるべし。

德川氏の前には文學は佛門の手に屬したり。而して佛門の人間を離れたりしは、當時の文學の人間を離れたる大原因となりて居たりき。德川氏の覇業を建つるや、恰も漢土に於て儒教哲學の勃興せし時の事とて文學の權を僧侶の手より奪ひ取ると同時に、儒教の趣味を滿潮の如く注ぎ込みたり。然るに德川氏の覇業は性質の革命にあらずして、形體の革命に止まりしが故に、從つて起りたる文學の革命も、僧侶の手より儒者の手に渡りたるのみにして、其性質に於ては依然として、國民の一半に充つべきものにてありたり。疑もなく文は此學時代に於て復興したり。然も其復興は佛と儒との入れ代りに過ぎずして、要するに高等民種に應用さすべきものたるに過ぎざりし。之に加ふるに德川氏は文學を其政治の補益となすことに潛心したるが故に、儒教も亦た一種の德川的儒教と化し了し、風化を補ひ世道を益し、德川氏の時代に適ふべきものにあらざれば、文學として世に尙ばるべからざるが如き觀をなせり。これ即ち德川氏の時代にありて、高等民種(武士)の文學は甚だ倫理の圈圍に縛せられて、其範圍內に生長したる主因なり。

然れども倫理といふ實用を以て、文學の運命を縮むるは精神の許さゞるところなり。爰に於て俳諧の頓かに成熟するあり。更に又た戲曲小說等の發す生るあり。戰亂罷んで泰平の來る時文運は必らず暢達すべき理由あり。然れども其理由を外にして德川時代の初期を視る時は、一方に於て實用の文學大に奬勵せらるゝ間に他方に於ては、單に快樂の目的に應じたる文學の勃として興起したるを視るべし。武士は倫理に捕はれたり、而して平民は自由の意志に誘はれて、放縱なる文學を形成せり。爰に至りて平民的思想なるものゝ始めて文學といふ明鏡の上に照り

出づるものあり。これ日本文學史に特書すべき文學上の大革命なるべし。

吾人は此處に於て、平民的思想の變遷を詳論せず、唯だ讀者の記憶を請んとすることは斯の如く發達し來りたる平民的思想は人間の精神が、自由を追求する一表象にして、その歸着する處は倫理と言はず、放縱と言はず、實用と言はず、快樂と言はず、最後の目的なる精神の自由を望んで馳せ出たる最始の思想の自由にして、遂に思想界の大革命を起すに至らざれば止まざるなり。

維新の革命は政治の現象界に於て、舊習を打破したること萬目の公認するところなり。然れども吾人は寧ろ思想の內界に於て遙かに偉大なる大革命を成し遂げたるものなることを信ぜんと欲す。武士と平民とを一團の國民となしたるもの實に此革命なり。長く東洋の社界組織に附帶せし階級の繩を切りたる者此革命なり。而して思想の歷史を攻究する順序より言はゞ、吾人はこの大革命を以て單に政治上の活動より生じたるものと認むる能はず。自然の理法は最大の勢力なり。平民は自ら生長して思想上に於ては、最早舊組織の下に默從することを得ざる程に進みてありたり。明治の革命は武士の劍鎗にて成りたるが如く見ゆれども、其實は思想の自動多きに居りたるなり。

明治文學は斯の如き大革命に伴ひて起れり、其變化は著るし、其希望や大なり。精神の自由を欲求するは人性の大法にして、最後に到着すべき所は、各個人の自由にあるのみ。政治上の組織に於ては、今日未だ此目的の半を得たるのみ。然れども思想界には制抑なし。之より日本人民の往かんと欲する希望はいづれにかある、愚なるかな。今日に於て舊組織の遺物なる忠君愛國などの岐路に迷ふ學者、請ふ刮目して百年の後を見ん。

變遷の時代

明治文學管見之三

殘燈もろくも消ゆて、德川氏の幕政空しく三百年の業を遺し、天皇親政の曙光漸く昇りて、大勢頓かに一變し、事々物々其相を改めざるはなし。加ふるに、物質的文明の輸入堤を決するが如く、上は政治の機關より、下萬民の生活の狀態に至るまで、千枝萬葉悉く其色を變へたり。

舊世界の預言者なる山陽、星巖、益軒、息軒等の巨人は、或は既に墳墓の中に眠り、或は時勢の狂濤に排されて、曉明星光薄く、而して、横井、佐久間、藤田、吉田等の改革的偉人も亦た相繼ぎて歴史の卷中に沒し去り、長劍を横へて天下を跋渉せし昨日の浪人のみ時運の歡迎するところとなりて、政治の樞機を握り、既に大小の列藩を解綬し、續いて武士の帶刀を禁じ、士族と平民との名義上の區別は置けども普天率土同一なる義務と同一なる權利とを享有し、均しく王化の下に沐浴することゝはなれり。

文學は泰平の賜物なり。戰亂の時代にありては、文學は必らず活動世界を離れたる場所に潛逸するものなり。足利氏の末世に於て即ち然り。然れども維新の戰亂は甚だ長からず。足利氏の末路に於て文學の庇護者たりし佛教は此時に至りては既にその活力を失ひて再び文學の庇護者たる名譽を荷ふ能はず。文學は却つて活動世界の從樸となりて、勤王家、慷慨家等の名士をして其政治上の事業に附帶せしむるに至りぬ。此處にて一言すべきことあり。吾人は文學なる者をして何時の時代に於ても必らず政治と離隔せしめざるべからずと論ずるものにあらず。文學は時代の鏡なり、國民の精神の反響なり。故に、天下の蒼生が朝夕を安ずること能はざる曉に當りて、超然身を脫して心を虛界に注ぐべしとするにあらず。必竟するに詩文人は其原素に於ては兵馬の人と異なるなきなり。之を詩人に形り、之を兵士に形るものは時代のみ。國民は常に活動を欲するものなり、國民は常にその巨人を造るなり、國民は常にその巨人によつて其精神を吐くものなり、國民は常に其精神を吐きて盛衰の運を迎ふるものなり。精神の枯るゝ時、巨人の隱るゝ時、活動の消ゆる時、國民は既に衰滅の徵を呈するものなり。之を以て巨人は必らず、國民の被造者にして、而して更に復た國民の造物者たらずんばあらず。國家事多ければ必らず能く天下を理する人起るなり、國家德乏しければ必らず聖淨なる君子世に立つなり。國家安逸ならば必らず彼の一國の公園とも云はるべき詩文の人起るなり。若し此事なくば國家は半ば死せるなり。人心は半ば眠りたるなり、希望全く無き有樣に近きなり。讀者よ誤解する勿れ、吾人は偏狹なる理論を頑守するものにあらず、吾人は國民をして出來得る丈自由に其精神を發揮せしめんことを希望するものなり。宗教に哲學に、將た又文學に、國民は常に其耳を傾けてあるなり。而して「時代」なる第二の造化翁は國民を率ひてその彼造物なる巨人の說敎を開かしむるなり。

明治初期の思想は實に第二の混沌たりしなり。何が故に混沌といふ、看よ、從來の紀綱は全く弛みたりしにあらずや、看よ天下の人心はすべての舊世界の指導者を失ひて、就いて聽くべきものを有たざりしにあらずや、看よ儒教道德の大半は泰西の新空氣に出會ひて、玉露のはかなく朝暉に消ゆるが如くなりしにあらずや。然れども此混沌は原始の混沌の如くならず、速に他の組織を孕まんとする混沌なり、速に他の時代に入らんとする混沌なり。而して此混沌の中にありて、外には格別の異狀を奏せざるも、內には明らかに二箇の大潮流が逆卷き上りて、一は東より、一は西より、必らず或處にて衝當るべき方向を指して進行しつゝあるを見るなり。

吾人をして此相敵視せる二大潮流を觀察せしめよ。

極めて解り易き名稱にて之を言へば其一は東洋思想なり、其二は西洋思想なり。然れども此二思想の內部精神を討ぬれば、其一は公共的の自由を經驗と學理とによりて確認し、且握取せる共和思想なり。而して其二は長上者の個人的の自由のみを承認して國家公共の獨立自由を知らず、經驗上にも學理上にも國家には中心となりて立つべきものあるを識れども、各個人の自己に各自の中心あることを認めざる族長制度的思想なり。

明治の革命は既に貴族と平民との堅壁を打破したり。政治上既に斯の如くなれば國民內部來生命なる「思想」も亦迅速に政治革命の跡を追躡したり。此時に當つて橫合より國民の思想を刺擊し、頭を擧げて前面を眺めしめたるものこそあれ。そを何ぞと云ふに、西洋思想に伴ひてのれる(寧ろ西洋思想を抱きて來れる)物質的文明之なり。

福澤諭吉氏が「西洋事情」は寒村僻地まで行き渡りたりと聞けり。然れども泰西の文物を說教するものは泰西の機械用具の聲にてありき。一般の驚異は自からに崇敬の念を起さしめたり。文武の官省は洋人を聘して改革の道を講じたり。留學生の多數は重く用ひられて一國の要路に登ることゝなれり、而して政府は積年閉鎖の夢を破りて外交の事漸く緒に就くに至れり。各國の商賈は各開港場に來りて、珍奇實用の器物をひさげり。チョンマゲは頑固といふ新熟語の愚弄するところとなれり。洋服は名譽ある官人の着用するところとなれり。天下を擧て、物質的文明の輸入に狂奔せしめ、すべての主觀的思想は舊き日は混沌の中に長夜の眠を貪り、新らしきは春草未だ萠ゑ出るに及ばずしてゼーセなきイスラエル人は荒原の中にさすらへて靜に命運の一轉するを俟てり。

斯の如き、變遷（トランジション）の時代にありては、國民の多數はすべての預言者に聽かざるなり。而して思想の世界に於ける大小の預言者も亦た國民を動かすに足るべき主義の上に立つこと能はざるなり。之を以て思想界に、若し勢力の尤も大なるものあらば、其は國民に向つて極めて平易なる教理を說く、預言者なるべし。再言すれば敢て國民を率ひて或處にまで達せんとする的の預言者は斯かる時代に希ふ可からず。巧に國民の意向に投じ、詳かに其の傾くところに從ひ、或意味より言はゞ國民の機嫌を取ることを主眼とする的の思想家より多くを得る能はず。爰に於て吾人は小說戲文界に於て、假名垣魯文翁の姓名を沒する能はず、更に高品なる戲文家として は、成島柳北翁を推さゞるべからず。蓋し魯文翁の如きは德川時代の戲作者の後を襲ぎ、而して此の混沌時代にありて放縱を極めたるものゝみ。柳北翁に至つては純乎たる混沌時代の產物にして天下の道義を嘲弄し、世道人心を抛擲して、うろたへたる風流に身をもちくづしたるものなり。吾人は敢て魯文柳北二翁を詰責するものにあらず、唯だ斯かる混沌時代にありて指揮者をもたざる國民の思想に投合すべきものは、悲しくも斯る種類の文學なることを明言するのみ。

眼を一方に轉すれば、彼三田翁が着々として思想界に於ける領地を擴げ行くを見るなり。文人としての彼は孳々として、物質的知識の進達を助けたり。彼は泰西の文物に心醉したるものにあらずとするも、泰西の外觀的文明を確かに傳道すべきものと信じたりしと覺ゆ。敎師としての彼は實用經濟の道を開きて、人材の泉源を造り、社會各般の機務に應ずべき用意を嚴にせり。故に泰西文明の思想界に於ける密雲は一たび彼の上に簇まりて、而して後八方に散じたり。彼は實に平民に對する預言者の張本人なり。前にも言ひし如く維新の革命は前古未曾有の革命にして、精神の自由を公共的に振分けんとする革命にてあれば、此際に於て尤も多く時代に需められるべきは、此目的に適ひたるものなるが故に、其第一着として三田翁は皇天の召に應じたるものなり。然れども吾人を以て福澤翁を崇拜するものと誤解すること勿れ。吾人は公平に歷史を研究せんとするものなり。感情は吾人の此場合に於て友とするものにあらず、吾人は福澤翁を以て明治に於て始めて平民間に傳道したる預言者なりと認む、彼を以て完全なる預言者なりと言ふにはあらず。

福澤翁には吾人「純然たる時代の驕兒」なる名稱を呈するを憚らず。彼は舊世界に生れなが

ら、徹頭徹尾舊世界を拋げたる人なり。彼は新世界に於て擴大なる領地を有すると雖、その指の一本すらも舊世界の中に置かざりしなり。彼は平穩なる大改革家なり。然れども彼の改革は寧ろ外部の改革にして國民の理想を嚮導したるものにあらず。此時に當つて福澤氏と相對して一方の思想界を占領したるものを敬宇先生とす。

敬宇先生は改革家にあらず、適用家なり。靜和なる保守家にして、然も泰西の文物を注入するに力を効せし人なり。彼の中には東西の文明が狹き意味に於て相調和しつゝあるなり。彼は儒教道教を其の末路に救ひたると共に一方に於ては泰西の化育を適用したり。彼は其の儒教的支那思想を以てスマイルの自助論を崇敬したり。彼に於ては正直なる採擇あり、熱心なる事業はなし、温和なる崇敬はあり、執着なる崇拜はなし。彼をして明治の革命の迷兒とならしめざるものは此適用、此採擇、此崇敬あればなり。多數の漢學思想を主意とする學者の中に挺立して能く革命の氣運に馴致し、明治の思想の建設に與つて大功ありしものは、實に斯る特性あればなり。改革家として敬宇先生は無論偉大なる人物にあらざるも、保守家としての敬宇先生は、少くも思想界の一偉人なり。舊世界と新世界とは彼の中にありて、稀有なる調和を保つことを得たり。

福澤翁と敬宇先生とは新舊二大潮流の尤も視易き標本なり。吾人は極めて疎略なる評論を以て此二偉人を去らんとす。爰に至つて吾人は眼を轉じて政治界の變遷を觀察せざるべからず。

政治上の變遷

明治文學管見之四

族長制度の眞相は蛛網なり。その中心に於て、その制度に適するすべての精神を蒐むるなり。而して數百數千の細流は其中心より出でゝ、金環を周綴し、而して又た再び其の金環より中心に歸注するものなり。

斯の如き眞相は、吾人之を我が封建制度の上にも同じく認むるなり。歐洲各國の歷史が一度經過したる封建制度と我が封建制度との根本の相違は蓋し此點に於て存するなり。然れども尤も多く族長制度的封建を完成したるは、之を德川氏に見るのみ。足利氏は終始事多くして制

度としては何の見るべきところもなし。北條氏は實權は之を保有せしにせよ、其狀態は恰も番頭の主家を攝理するが如くなりしなり。源家に至りては極めて規模なく、極めて經綸なきものにして、藤原氏の如きは暫らく主家を横領したる手代のみ。藤原氏の時代には政權の一部分は猶皇室に屬したり。藤原、北條氏の時代に於ては政權は既に大方武門に歸したりと雖、なほ文學宗教等は王室の周邊にあつまれり。降つて德川氏に至りては、雄大なる規模を以て政治をも宗教をも文學をも、悉くその統一權の下に集めたり。德川氏は封建制度を完成したり。その「完成」とは即ち悉皆日本社會に當て篏めたるものにして、再言すれば日本種族の精神が其制度に於て「滿足」を見出すほどに完備したるなり。

德川氏は封建としては、斯の如く完備したる制度を建設したり。故に德川氏の衰亡は即ち封建制度の衰亡ならざるべからず。日本民權は德川氏に於て、すべての封建制度の經驗を積みたり、而して德川氏の失敗に於てすべての封建政府の失敗を見たり。天皇御親政は即ち其の結果なり。

德川氏の失敗は、封建制度の墜落となれり。明治の革命は二側面を有す。其一は御親政にして其二は聯合體の治者是なり。更に細說すれば、一方に於ては武の統御に打勝ちたる王室の權力あり。他方に於ては、一團體の統治亂れて聯合したる勢力の勝利あり。制伏者として天下を治めたる武斷的政府は德川氏を以て終りを告げ、廣き意味に於て國民の輿論の第一の勝利を見たり。而して之を促したるものは外交問題なりしことを忘るべからず。

凡そ外交問題ほど國民の元氣を煥發するものはあらざる也。之なければ放縱懶惰安逸虛禮等に流れて覺束なき運命に陷るものなり。德川氏の天下に臨むや、法制嚴密にして注意極めて精到、之を以て三百年の政權は殆ど王室の尊嚴をさへ奪はんとするばかりなりし。然るに彼の如くもろく倒れたる者は、好し腐敗の大に中に生じたるものあるにもせよ、吾人は主として之を外交の事に歸せざるを得ず。而して外交の事に就きても、蓋し國民の元氣の之に對して勃として興起したることを以て德川氏の根柢を拔きたる第一因とせざるべからず。

國民の精神は外交の事によつて覺醒したり。其結果として尊王攘夷論を天下に瀰漫せしめたり。多數の浪人をして孤劍三尺東西に漂遊せしめたり。幕府衰仁の顚末は櫻痴居士の精細なる叙事にて其實況を知悉するに足れり。吾人は之を詳論するの暇なし。唯だ吾人が讀者に確かめ

置きたき事は、斯の如く覺醒したる國民の精神は啻に德川氏を倒したるのみならず、從來の組織を碎折し、從來の制度を擊破し盡くすにあらざれば滿足すること能はざることゝなり。

明治政府は國民の精神の相手として立てり。國民の精神は明治政府に於て其の滿足を遂げたり。爰に至つて外交の問題も一ト先づ其の局を結びたり。明治六七年迄は聯合したる勢力の結托鞏固にして、專ら破壞的の事業に力を注ぎたり。然れども明治政府の最初の聯合體は、寧ろ破壞的の聯合組織にして、破壞すべき目的の狹まくなりゆくと共に、建設すべき事業に於て相撞着するところなき能はず。爰に於て征韓論の大破綻あり。佐賀の變、十年の役等は蓋し其の結果なるべし。之よりして政府部内にあるすべての競爭は聯合體より單一體に趣かんとする傾向に基けり。凡ての專制政體に於て此事あり、吾人は獨り明治政府を怪しまざるなり。

吾人の眼球を一轉して、吾國の歷史に於て空前絕後なる一主義の萠芽を觀察せしめよ。

即ち民權といふ名を以て起りたる個人的精神是なり。この精神を尋ぬる時は、吾人奇くも其發源を革命の主因たりし精神の發動に歸せざるべからざる數多の理由を見出すなり。渠は革命の成功と共に一たびは沈靜したり。然れども此は沈靜にあらずして潛伏なりき。革命の成るまでは皇室に對し國家に對して起りたる精神の動作なりき。既に此目的を達したる後は如何なる形にて、其動作をあらはすべきや。

國民は既に政治上に於ては專制を打破して萬民俱に萬民たるの權利と義務を擔へり。この「權利」と「義務」は自からに發達し來れり。權義の發達は即ち個人的精神の發達なり。材能あるものは登用して政府の機務を處理することゝなれり。而して材能なきものと雖も一村一邑に獨立したる權義の舞臺となりて、個人的の自由を享有するものとなれり。富の勢力は驕かに上騰したり。アビリチーの榮光漸くあらはれ來れり。必要は政府を促がして、法律の輸入をなさしめたり。之を要するに個人的精神は長大足の進歩を以て狹き意味に於ける國家的の精神の領地を掠め去れり。國民の自由を保護すべき武器として、言論、集會、出版等の勢力漸くにして世に顯はれたり。政府未だ如何にして是等の新傾向に當るべきかを知らざりしなり。明治政府はひたすら聯合より單一に趣かんことに意を鋭くしたり。十年の役は聊か其目的を達したりと雖、なほ各種の異分子の相疾惡するもの政府部内に蟠據するあれば、表面は堅固なる組織の如くなれど其實極めて不安心なる國體なりと云はざるを得ず。

頑執妄排の弊

宇宙を觀察するの途二あり。一は宇宙を「死體」として觀るにあり、他は宇宙を「生體」として觀るにあり。人生を觀察するの途二あり。一は人生を今世に限られたるものとして觀るにあり、他は人世を未來に亘るものとして觀るにあり。爰に於て吾人は知る、人間に處するの途は現在に希望を置くと未來に希望を置くとの二岐に分るゝあるのみ。更に去つて歷史を觀るに、盛衰興亡の端多く、一去一來の跡空しきも、之を要するに、歷史の中心潮は、未來の希望を現實に適用するにあるのみ。悠々たる天と、邈々たる地の間に孰れの所にか墳墓なる者あらんや。其の之あるは、人間の自から造れる者なり。國民の自から造れる者なり。印度自から其墳墓に埋もれたり。羅馬自ら其墳墓に沈みたり。彼等は去れり。然れども彼等を葬りし墳墓は彼等と共に其影を徹したり。天下孰れの處にか墳墓なる者あらんや。世界は墳墓に赴くにあらず、頭を擧げて、蛇行するが如き、此世界は、遂に「生命」に達すべき者なり。「記憶」渠唯だ記憶のみ「過去」渠唯だ過去のみ、「未來」には權あり、「希望」には命あり。

過去現在未來は全宇宙の所有物にして、人間の私有にあらず。時間と空間は人間を或る立場に繫けども、人間は過、現、未、の中心に立つて動く者にあらず。然りと雖、宇宙の人間に對するは蛇の蛙に於けるが如くなるにあらず、人間も亦た宇宙の一部分なり、人間も亦た遠心、求心の二引力の持主なり、又た二引力の臣僕なり。魚市に喧囂せる小民、彼も亦た宇宙に對する運命に洩れざるなり、彼も亦た彼の部分を以て、宇宙を支配しつゝあるものなり。この觀を以てすれば、王侯將相と彼との間に何の徑庭あらんや、

宇宙に精神あるが如く、人間にも亦た精神あるなり。而して人間個々の希望は、宇宙の精神に合するにあり。人間世界の最後の希望は全く宇宙の精神に合體するにあり。唯理論、唯心論、もしくは又た唯物論、彼等何ものぞ。もしくは又た凡神教彼等何ものぞ。彼等の一を假ることなくんば、彼等の一に僻することなくんば、遂に人間の希望を達すること能はずとするか。何が故に唯心論を惡しとするか、何が故に凡神論を惡しとするか、何が故に唯物論を惡しとするか、

又た何が故に彼等を善しとするか、空々漠々たる癖論家よ。民友子大喝して曰く「ベベルの高塔を築かんとするは誰ぞ」と。

彼の唯物論、彼の唯心論、彼の凡神論彼等は各々其使命を帶びて來れり。而して彼等は各其使命の幾分を遂げたり。而して彼等は各々其誤謬を殘したり。看よ人間の歴史は恒に善き事をなして、恒に惡しき事を爲すにあらずや。恒に眞理に近づき、恒に眞理に遠かるにあらずや。恒に進歩して、恒に退歩するにあらずや。然れども記憶せよ、宇宙の精神と人間の精神とは恒に進歩にして恒に退歩なる中にありて相接近しつゝあるにあらずや。唯心論を以て唯物論を罵るは誰ぞ。唯物論を以て唯心論を罵るは誰ぞ。彼にも粹あり、此にも粹あり、彼にも糠あり、此にも糠あり、妄に此の粹を以て、彼の粹を擊たんとするは誰ぞ。縱に此の糠を以て、彼の糠を排せんとするは誰ぞ。民友子大喝して曰く、「砂丘の上にベベルの高塔を築かんとするは誰ぞ」と。

「造化は終古依然たり。而して終古鮮新なり。」とは善く言はれたるかな。宇宙は實に其中心に於て、一定の方向あるのみ。其外面に於ける進歩と退歩とは、常久に鮮新なる狀態を呈するなり。預言者、英雄、詩人、彼等何すれぞ宇宙以外の新物を貪らんや。彼等も亦た自からの墳墓を造るものなり。百年、千年、萬年、あやしきは Time なり、怖るべきは Time なり。墳墓も亦た Time の爲に他の墳墓に投げらるゝなり。墳墓すら其迹を留めず。曷んぞ預言者、英雄詩人を留めんや。營々たる街頭の商兒、役々たるレボレトリーの化學者、紛々たる新聞屋の小僧、彼等も亦た彼の預言者と、彼の英雄と、彼の詩人と、其歸着する運命を同ふするなり。「腐朽」わが右にあり、「死淵」わが左にあり。劍を揮ふもの誰ぞ、筆を弄するもの誰ぞ、天を談ずるもの誰ぞ、地を說くもの誰ぞ、何れに進歩あらむ、何れに退歩あらむ。然れども讀者よ、請ふ汝の謹嚴なる眼を開けよ。宇宙の大精神は一定の場所に安住せず、造化は終古依然たり。然れども讀者よ、請ふ汝の靈活なる心を醒せよ、造化は其中心に於て、宇宙は其中心に於て、必らず何程かの動あるなり。造化彼れ何物ぞ、宇宙の一表現に過ぎざるなり。宇宙既に動あり、造化豈動なからんや。地球の表面は終始依然たり。然れども其の形狀は常に變はりつゝあるなり。要は千年の眼を以て、天文臺の觀測をなすに　り。これ其の外形に就きて言ふのみ、宇宙果して「死物」なるか、將た又「生體」なるか、吾人が地球と名くる此の一惑星の中に於て此の變動あり。「死體」にもせよ「生體」にもせよ、既にこの變動あるあり。何ぞ知らん、人間と稱する

此二足動物の上に激雷の驟かに震ふが如く、諸天群がり落ちて火焔忽ち起りて、一指を投ずるの暇に於て、この終古依然たる天地は、默示錄の約翰が「われ新らしき天と新らしき地を見たり。先の天と先の地は既に過たり。海も亦たあることなし。」と言ひたる言葉の空の空にあらざることを實證するの時あらんを。

「信仰個條」彼れ何物ぞ、「繩墨」彼れ何物ぞ。否な彼等も亦た宇宙の精神の大進歩の道程に於て、何等かの必要に需求せられて出でたるものなり、彼等も彼の唯心論の如く、彼の唯物論の如く、彼の凡神論の如く、相當の敬禮を要求するの權利あるものなり。然れども彼等を崇拜し、彼等を保持し、彼等を以て唯一の標準とせんとするは何物ぞ。聖書を把つて屑籠の中より古布と古紙とを分つが如く、或は彼を取り、或は此を取り、而して我が取る所の者は宇宙の大眞理に適へりと妄信し、他の取る所の者は一理の存するなきが如くに誣ゆる者誰ぞ。嗚、思想界に於ける病毒の本源は存して爰にあるなり。己れの取る所を奉信するは善し、己れの取る所を以て他の取る所を妄排す、是を思想界の藪醫術と言はずして何ぞや。夫れ藪醫術とは外科の醫術を言ふなり。而して其の外科たるは人間の病原を探りて後に其治術を講究するにあらずして、外部に表はれたる病象の一部分を見て、直に膏藥を塗するに留まるなり。嗚、藪醫術はいかほどに進歩するとも、人世に於て何の功益するところあらんや。信仰個條彼れ自身は、藪醫術にあらず、繩墨彼自身は藪醫術にあらず、唯心論も亦た然り、唯物論も亦た然り。然れども個の信仰個條を擁し、個の繩墨を擁し、個の善惡論を擁し、個の唯心論を擁し、個の唯物論を擁し、之を以て宙宇を法規する唯一の眞理と迷信する輩の手に於て藪醫術の本源は存するなり。

内部生命論

人間は到底枯燥したるものにあらず。宇宙は到底無味の者にあらず、一輪の花も詳に之を察すれば萬古の思あるべし。造化は常久不變なれども、之に對する人間の心は千々に異なるなり。造化は不變なり、然れども之に對する人間の心の異なるに因つて造化も亦た其趣を變ゆるなり。佛教的厭世詩家の觀たる造化は悉く無常的、厭世的なり、基督教的樂天詩家の觀たる造化は

悉く有望的、樂天的なり。彼を非とし、此を是とするは余が今日の題目にあらず。夫れ斯の如く變化なき造化を斯の如く變化ある者とするもの、果して人間の心なりとせば、吾人豈人間の心を研究することを苟且にして可ならんや。

造化（ネーチュア）は人間を支配す。然れども人間も亦た造化を支配す。人間の中に存する自由の精神は造化に默從するを肯ぜざるなり。造化の權は大なり、然れども人間の自由も亦た大なり。人間豈に造化に歸合するのみを以て滿足することを得べけんや。然れども造化も亦た宇宙の精神の一發表なり、神の形の象顯なり。その中に至大至粹の美を籠むることあるは疑ふべからざる事實なり。之に對して人間の心が自からに畏敬の念を發し、自からに精神的の經驗を生ずるは豈不當なることならんや。此場合に於て、吾人と雖も聊か萬有的趣味を持たざるにあらず。

人間果して生命を持てる者なりや。生命といふは、この五十年の人生を指して言ふにあらざるなり。謂ふ所の生命の泉源なるものは、果して吾人々類の享有する者なりや。この疑問は人の常に思ひ至るところにして、而して人の常に輕んずる所なり。五十年の事を經綸するは到底五十年の事を經綸せざるに若かざるなり。明日あるを知らずして今日の事を計るは到底眞に今日の事を計るものにあらざるなり。五十年の人生の爲に五十年の計を爲すは、如何に其計の大に密に妙に精にあるとも到底其計なきに若かざるなり。二十五年を勞作に費し、他の二十五年を逸樂に費やすとせば極めて面白き方寸なるべし、人間の多數は斯の如き夢を見て消光する亦り。然れども實際世界は決して斯の如き夢想を容るゝの餘地を備へず。我が心われに告ぐるに五十年の人生の外はすべて夢なりといふを以てせば、我は寧ろ勤勞を廢し、事業を廢し、逸樂晏眠を以て殘生を送るべきのみ。

吾人は人間に生命ある事を信ずる者なり。今日の思想界は佛教思想と耶教思想との間に於ける競爭なりと云ふより、寧ろ生命思想と不生命思想との戰爭なりと云ふを可とす。吾人が思想界に向つて微力を献ぜんと欲することは、耶蘇教の用語を以て佛教の用語を奪はんとするにあらず、耶蘇教の文明（外部）を以て佛教の文明を倒さんとするにあらず、耶蘇教の智識を以て佛教の智識を破らんとするにあらず、吾人は生命思想を以て不生命思想を滅せんとするものなり。彼の用語の如き、彼の文明の如き、彼の學藝の如き、是等外部の物は、自然の陶汰を以て自然の進化を經べきなり。吾人の關する所爰にあらず。生命と不生命之れ卽ち東西思想の大衝突なり。

つら〳〵明治世界の思想界に於て「新領地を開拓したる耶蘇一派の先輩の事業の跡を尋ぬるに、宗教上の言葉にて、謂ふ所の生命の木なるものを人間の心の中に植ゑ付けたる外に、彼等は何の事業をか成さんや。洋服を着用し、高帽子を冠ることは思想界の人を勞せずして、自然に之を爲すなり。凡そ外部の文明は内部の文明の反影なり。而して東西二大文明の要素は、生命を教ふるの宗教あると生命を教ふる宗教なきとの差異あるのみ。優勝劣敗に由つて起るところ玆に存せずんばあらざるなり。平民的道徳の率先者も、社會改良の先覺者も、政治的自由の唱道者も、誰か斯民に生命を教ふる者ならざらんや。誰れか斯民に明日あるを知らしむる者にあらざらんや、誰か斯民に數感々々として今日にのみ之れ拘束せらるゝを警醒するものにあらざらんや。宗教としての宗教彼れ何物ぞや、哲學としての哲學彼れ何物ぞや。宗教を説かざるも、生命を説かば既に立派なる宗教にあらずや、哲學を談ぜざるも生命を談ぜば既に立派なる哲學にあらずや。生命を知らずして信仰を知る者ありや、信仰を知らずして道徳を知る者ありや、生命を教ふるの外に、道徳なるものゝ泉源ありや。凡そ生命を教ふる者は既に功利派にあらざるなり、凡そ生命を傳ふる者は既に曖昧派にあらざるなり、凡そ生命を知るものは既に高蹈派にあらざるなり。詭言流行の今日、世人自から惑ふこと勿らんことを願ふなり。

吾人をして去て文藝上に於ける生命の動機を論ぜしめよ。

文藝は宗教若くは哲學の如く正面より生命を説くを要せざるなり、又た能はざるなり。文藝は思想と美術とを抱合したる者にして、思想ありとも美術なくんば既に文藝にあらず、美術ありとも思想〻くんば既に文藝にあらず。華文妙辭のみにては文藝の上乘に達し難く、去りとて思想のみにては決して文藝といふこと能はざるなり。此點に於て吾人は非文學黨の非文學見に同意すること能はず。先覺者は知らず末派のボジチビズムに於て、文學をボジチーブの事業とするの餘りに清教徒の誤謬を繰返さんとするに至らんことを恐るゝなり。

戯文世界の文學は、價値ある思想を含有せし者にあらざること、吾人と雖、之を視ざるにあらず、然れども戯文は戯文なり、何ぞ特更に之を以て今の文學を責むるの要あらんや。吾人を以て之を見れば過去の戯文が華文妙辭にのみ失したるは、華文妙辭の罪にあらずして、文學の中に生命を説くの途を備へざりしが故なり。請ふ少しく徳川氏の美文學に就きて、一之を言はし

めよ。

すべての倫理道德は必らず多少人間の生命に關係ある者なり。人間の生命に關係多きものは人間を益する事多き者にして、人間の生命に關係少なき者は人間を益する事少なき者なり。德川氏の時代にあつて、最も人間の生命に近かりしものは儒教道德なりしこと何人も之を疑はざるべし。然れども儒教道德は實際的道德にして未だ以て全く人間の生命を教へ盡したるものとは言ふべからず。繁雜なる禮法を設け種々なる儀式を備ふるも到底Formalityに陷るを免かれざりしなり、到底貴族的に流るゝを免かれざりしなり。之を要するに其の教ふる處が、人間の根本の生命の絃に觸れざりければなり。其時代に於ける所謂美文學なるものを觀察するに至りては、吾人更に其の甚しきを見る。人間の生命の根本を愚弄すること彼等の如くなるは、吾人の常に痛惜する處なり。彼等は儀式的に流れたる儒教道德をさへ備へたるもの稀なり。彼等の多くは卑下なる人情の寫實家なり。人間の生命なるものは彼等に於ては、諧謔を逞ふすべき目的物たるに過ぎざりしなり、彼等は愛情を描けり、然れども彼等は愛情を盡さゞりしなり。彼等の筆に上りたる愛情は肉情的愛情のみなりしなり。肉情よりして戀愛に入るより外には愛情を說くの道なかりしなり。プラトーの愛情もダンテの愛情もバイロンの愛情も彼等には夢想だもすること能はざりしなり。彼等は忠孝を說けり。然れども彼等の忠孝は寧ろ忠孝の教理あるが故に忠孝あるを說きしのみ。今日の僻論家が敕語あるが故に忠孝を說かんとすると大差なきなり。彼等は人間の根本の生命よりして忠孝を說くこと能はざりしなり。彼等は節義を說けり、善惡を說けり。然れども彼等の節義も彼等の善惡も寧ろ人形を並べたるものにして、人間の根本の生命の絃に觸れたる者にあらざるなり。謂ふ所の勸善懲惡なるものも、斯る者が善なり、斯るものが惡なりとて定て、之に對する勸懲を加へんとしたる者にして、未だ以て眞正の勸懲なりと云ふ可からず。眞正の勸懲は心の經驗の上に立たざるべからず。即ち內部の生命(インナーライフ)の上に立たざるべからず。故に內部の生命を認めざる勸懲主義は到底眞正の勸懲なりと云ふべからざるなり。彼等は世道人心を說けり、爲すあるが爲めに文を草すべきを說けり、世を益するが爲めに文を草すべきを說けり、然れども彼等の世道人心主義も到底偏狹なるポジチビズムの誤謬を免かれざりしなり。未だ根本の生命を知らずして、世道人心を益するの正鵠を得るものあらず。要するに彼等の誤謬は人間の根本の生命を認めざりしに因するものなり。讀者よ吾人が

五十年の人生に重きを置かずして、人間の根本の生命を尋ぬるを責むる勿れ、讀者よ吾人が眼に見ゆる所の事業に心を注がずして人間の根本の生命を暗索するものを重んぜんとす命るを責むる勿れ、讀者よ吾人の中に或は唯心的に傾き、或は萬有的に傾むくものあるを責むる勿れ。吾人は人間の根本の生命に重きを置かんとするものなり。而して吾人が不肖を顧みずして、明治文學に微力を献ぜんとするは此範圍の中にあることを記憶せられよ。

明治の思想は大革命を經ざるべからず、貴族的思想を打破して、平民的思想を創興せざるべからず。吾人が敬愛する先輩思想家にして既に大に此般の事業に鐵腕を振ひたるものあり。吾人が若少の身分を以て是より進まんとするもの、豈に彼等の既に進みたる途に外れんや、吾人豈に人情以外に出でゝベベルの高塔を築かんとする者ならんや。若し夫れ人間の根本の生命を尋ねて或は平民的道德を敎へ、或は社會的改良を圖る者をしも、ベベルの高塔を砂丘に築くものなりと言ふを得ば、吾人も亦たベベルの高塔を築かんとする人足の一人たるを甘んぜんのみ。

文藝は論議にあらざること幾度言ふとも同じ事なり。論議の範圍に於て根本の生命を傳へんとするは論議の筆を握れる者の任なり。文藝(純文學と言ふも宜し)の範圍に於て根本の生命を傳へんとするは文藝に從事するものゝ任なり。純文學は論議をせず、故に純文學なるもの無しと言はゞ誰か其の極端なるを笑はざらんや、論議の範圍に於て、善惡を說くは正面に之を談ずるなり。文藝の範圍に於て善惡を說くは裡面より之を談ずるなり。

人性に上下なく、人情に古今なし、とは觀察論の著者の名言なり。實にや詩人哲學者の言ふところは、人情が自ら筆を執つて萬人の心に描きたるものに外ならざるなり。善と言ひ、惡と言ふも元より道德學上の製作物にあらざること明らかなり。究竟するに善惡正邪の區別は人間の內部の生命を離れて立つこと能はず。內部の自覺と言ひ、內部の經驗と言ひ、一々其名を異にすと雖、要するに根本の生命を指して言ふに外ならざるなり、詩人哲學者の高尙なる事業は、實に此の內部の生命を語(セス)るより外に出づること能はざるなり。內部の生命は千古一樣にして、神の外は之を動かすこと能はざるなり。詩人哲學者の爲すところ豈に、神の業を奪ふものならんや。彼等は內部の生命を觀察する者にあらずして何ぞや。(國民之友觀察論參照)然れども彼等が內部の生命を觀察するは沈靜不動なる內部の生命を觀るにあらざるなり、內部の生命の百般の表顯を觀るの外に彼等が觀るべき事は之なきなり。即ち人性人情の Various Manifesta-

tions を觀るの外には觀るべき事は之なきなり。觀は何處までも觀なり。然れども此の場合に於ては觀の中に知の意味あるなり。即ち觀の終は知に落つるなり。而して觀の始も亦た知に出るなり、人間の内部の生命を觀ずるは、其の百般の表顯を觀ずる所以にして、靈知靈覺と觀察との相離れざるは之を以てなり。靈知靈覺なきの觀察が眞正の觀察にあらざること之を以てなり。

夫れヒューマニチー(人性、人情)とは人間の特有性の義なり。詩人哲學者は無論ヒューマニチーの觀察者ならずんばあらず、然れども吾人は恐る、民友子の觀察論の讀者には、或は詩人哲學者を以て單に人性人情の觀察者なりと誤解する者あらんことを。民友子の觀察論を讀みたる者は必らず又た民友子の「インスピレーション」を讀まざるべからず。然らずんば吾人民友子に對する誤解の生ぜんことを危ぶむなり。詩人哲學者は到底人間の内部の生命を解釋するものたるに外ならざるなり。而して人間の内部の生命なるものは、吾人之れを如何に考ふるとも、人間の自造的のものならざることを信ぜずんばあらざるなり、人間のヒューマニチー即ち人性人情なるものが、他の動物の固有性と異なる所以の源は即ち爰に存するものなるを信ぜずんばあらざるなり。生命！此語の中にいかばかり深奥なる意味を含むよ。宗教の泉源は爰にあり。之なくして教あるはなし、之なくして道あるはなし、之なくして法あるはなし。眞理！世上所謂眞理なるもの果して何事をか意味する。ソクラテスも靈魂不朽を說かざれば一個の功利論家を出る能はざるなり、孔子も道は邇きにありと說かざれば一個の藪醫者たるに過ぎざりしなり。道は邇きにありと言ひたるもの、即ち人間の秘奥の心宮を認めたるものなり。靈魂不朽を說きたるもの即ち生命の泉源は人間の自造的にあらざるを認めたるものなり。内部の生命あらずして天下豈人性人情なる者あらんや。インスピレーションを信ずるものにあらずして眞正の人性人情を知るものあらんや。五十年の人生を以て人性人情を解釋すべき唯一の舞臺とする論者の誤謬は多言を須ひずして明白なるべし。

文藝上にて之を論ずれば、所謂寫實派なるものは客觀的に内部の生命を觀察すべきものなり。客觀的に内部の生命の百般の顯象を觀察する者なり。此目的の外に嘉賛すべき寫實派の目的はあらざるなり。世道人心を益するといふ一派の寫實論も此目的を外れたらば何等の功益もあらざるなり。勸善懲惡を目的とする實寫派も此目的を外れたらば何の勸懲もあらざるなり。爲す

あるが爲と言ひ世を益するが爲と言ふも眞正に此の目的に適はするより外なきなり。所謂理想派なるものは、主觀的に內部の生命を觀察すべきものなり。主觀的に內部の生命の百般の顯象を觀察すべき者なり。いかに高大なる極致を唱ふるともいかに美妙なる理想を歌ふとも、この目的の外に理想の嘉賛すべき目的はあらざるなり。

理想とは何ぞや。理想派とは何ぞや。吾人は此小論文に於て、理想とは何ぞやを說かざるべし。然れども爰に一言せざるべからざることは、文藝上に言ふところのアイデアなる者は、形而上學に於て言ふところのアイデアとは、名を同ふして物を異にする者なること之なり。形而上學にてアイデアリスト(唯心論者)といふものは、文藝上にてアイデアリスト(理想家)といふところの者とは全く別物なり。

文藝上にて理想派と謂ふところのものは、人間の內部の生命を觀察するの途に於て、極致を事實の上に具體の形となすものなり。絕對的にアイデアなるものを研究するは形而上學の唯心派なれども、そのアイデアを事實の上に加ふるものは文藝上の理想派なり。ゆゑに文藝上にては殆どアイデアと稱すべきものはあらざるなり。其の之あるは理想家が暫らく人生と人生の事實的顯象を離れて、何物にか冥契する時に於てあるなり。然れども其は瞬間の冥契なり。若しこの瞬間にして連續したる瞬間ならしめば、詩人は既に詩人たらざるなり。必らず組織的學問を以て研究する哲學者になるなり。詩人豈に斯の如き者ならんや。

瞬間の冥契とは何ぞ、インスピレーション是なり。この瞬間の冥契ある者をインスパイアドされたる詩人とは云ふなり。而して吾人は、眞正なる理想家なる者はこのインスパイアドされたる詩人の外には之なきを信ぜんとする者なり。インスピレーションを知らざる理想家もあらん、宗教の何たるを確認せざる理想家もあらん、然れども吾人は各種の理想家の中に就きて、斯の如きインスピレーションを受けたるを以て最醇最粹のものと信ぜんとするなり。インスピレーションとは何ぞ。必らずしも宗教上の意味にて之を云ふにあらざるなり。一の宗教(組織として)あらざるもインスピレーションは之あるなり。一の哲學なきもインスピレーションは之あるなり。必竟するにインスピレーションとは宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち內部の生命なるものに對する一種の感應に過ぎざるなり、吾人の之を感ずるは電氣の感應を感ずるが如きなり。斯の感應あらずして、曷んぞ純聖なる理想家あらんや、

この感應は人間の内部の生命を再造する者なり。この感應は人間の内部の經驗と内部の自覺とを再造する者なり。この感應によりて瞬時の間、人間の眼光はセンシュアル、ウオルドを離るゝなり。吾人が肉を離れ實を忘れ、と云ひたるもの之に外ならざるなり。然れども夜遊病患者の如く「我」を忘れて立出るものにはあらざるなり、何處までも生命の眼を以て、超自然のものを觀るなり。再造せられたる生命の眼を以て。

再造せられたる生命の眼を以て觀る時に、造化萬物何れか極致なきものあらんや。然れども其極致は絶對的のアイデアにあらざるなり、何物にか具體的の形を顯はしたるもの即ち其極致なり、萬有的眼光には萬有の中に其極致を見るなり、心理的眼光には人心の上に其極致を見るなり。

國民と思想

思想上の三勢力

一國民の心性上の活動を支配する者三あり、曰く過去の勢力、曰く造的勢力、曰く交通の勢力。

今日の我國民が思想上に於ける地位を詳らかにせんとせば、少なくとも右の三勢力に訴へ、而し後明らかに、其關係を察せざる可からず。「過去」は無言なれども、能く「現在」の上に號令の權を握れり。歴史は意味なきペーヂの堆積にあらず、幾百世の國民は其が上に心血を印して去れり。骨は朽つべし肉は燼るべし。然れども人間の心血が捺印したる跡は之を拭すべからず。秋果熟すれば即ち落つ、落つるは偶然にして偶然にあらず。春日光暖かにして、百花妍を競ふ、之も亦偶然にあらず。自然は意味なきに似て大なる意味を有せり。一國民の消長窮達を言ふ時

に於て、吾人は深く此理を感ぜずんばあらず。引力によりて相繫纏する物質の力、自由を以て獨自卓犖たる精神の力、この二者が相率ひ、相爭ひ、相呼び、相結びて、幾千幾百年の間、一の因より一の果に、一の果より他の因に、轉々化し來りたる跡、豈に一朝一夕に動かし去るべけんや。

然れ共「過去」は常に死に行く者なり。而して「現在」は恒に生き來るものなり。「過去」は運命之を抱きて幽暗なる無明に投じ、「現在」は暫らく紅顏の少年となりて、希望の袂に縋る。一は死して、一は生く。この生々死々の際、一國民は時代の車に乘りて無盡無絶の長途を輪轉す。何れの時代にも、思想の競爭あり。「過去」は現在と戰ひ、古代は近世と爭ふ。老ひたる者は古を慕ひ、少きものは今を喜ぶ。思想の世界は限りなき四本柱なり。梅谷も爰にて其運命を終りたり、境川も爰にて其運命を定めたり。凡そ爰に登り來るもの必らず又た爰を去らざる可からず。この世界には永久の桂冠あると共に永久の義罰あり。この世界には曾つて沈靜あることなく、時として運動を示さゞるなく、日として代謝を告げざるはなし。主觀的に之を見る時は、此の世界は一種の自動機關なり。自ら死し、自ら生き、而して別に自ら其の永久の運命を支配しつゝあるものなり。

一國民に心性上の活動あるは、自由黨あるが故にあらず、改進黨あるが故にあらず。彼等は劇場に演技する優人なれども、別に書册の裡に隱れて、彼等の爲に臺帳を制する作者あるなり。偉大なる國民には必らず偉大なる思想あり。偉大なる思想は一投手一舉足の間に發生すべきにあらず。寧んぞ知らん、一國民の耐久的修養の力なるものを俟つにあらざれば、蓊鬱たる大樹の如き思想は到底期すべからざるを。

過去の勢力は之を輕んずべからず。然れども徒らに過去の勢力に頑迷して、乾枯せる歷史の槁木に夢醉するは豈に國民として、有爲の好徵とすべけんや。創造的勢力は何れの時代にありても之を缺く可からず。國民の生氣は、その創造的勢力によつて卜するを得べし。尤も多く保守的なるとき、尤も多く固形的なる時、國民は自然に墳墓を眺めて進みつゝあるなり、創造的勢力は潮水を動かして、前進せしむるもの、之なくては思想豈に圓滑の流動あらんや、之なくては國民豈に進歩的生氣あらんや。

創造的勢力と馬を駢べて、相馳驅するものあり。之を交通の勢力とす。今や、思想に對する

世界は日一日より狹くなり行かんとす。東より西に動く潮あり、西より東に流るゝ潮あり。潮水は天然なり。人工を以て之を支へんとするは癡人の夢に類するものなり。東西南北は思想の側のみ、思想の城郭にあらざるなり。思想の最極は圓環なり。叨りに東洋の思想に執着するも愚なり、叨りに西洋思想に心醉するも癡なり。奔流急湍に舟を行るは難し。然れども舟師は能く富士川を下りて、船客の心を安ふす。富士川を下るは難し。然れどもその尤も難きは東西の二大潮が狂湧狂瀉して相撞突するの際にあり。此際に於て、能く過去の勢力を無みせず、創造的勢力と、交通の勢力とを鐵鞭の下に驅使するものあらば、吾人は之を國民が尤も感謝すべき國民的思想家なりと云はんと欲す。

今の思想界に於ける創造的勢力

つら〳〵今の思想界を見廻せば、創造的勢力は未だ其の絃を張つて箭を交ふに至らず。却つて過去の勢力と外來の勢力とが、勢を較して陣前馬頻りに嘶くの聲を聞く。戰士の意氣甚だ昂揚して、而して民衆は就く所を失へるが如き觀なきにあらず。

見よ詩歌の思想界を嘲るものは、その餘りに狹陋にして硬骨なきを笑ふにあらずや。見よ、政治を談ずるものは、空しく論議的の虛影を追隨して停まるところを知らざるにあらずや。見よ、デモクラシーは宿昔の長夜を攪破せんとのみ悶き、アリストクラシーは急潮の進前を妨歇せんとのみ噪ぐにあらずや。斯の如き事たる素より今の思想界の必當の運命たるべしと雖、心あるもの陰に前途の濃雲を憂ふるは又た是非もなき事共かな。今の思想界は實に斯の如し、徒らに人間の手を以て造化の力を奪はんとする勿れ。進むべき潮水は遠慮なく進むべし、退くべき潮水は顧盼なく退くべし。直ちに馳せ直ちに奔り、早晩大に相撞着することあるを期すべし。知らずや、斯かる撞着の眞中より新たに生氣勃々たる創造的勢力の釀生し來るべき理あるを。

姉と妹

某の村に某の家あり。三千年の系圖ありと誇稱す。この家近き頃までは、全村の舊家として勢威赫々として犯すべからざるものありて存せり。然れども是れ山間の一小村にして四圍層巒を以て繞らし、自然に他村と相隔絶したるの致せしのみ。今を距ること三十年、一度び他村との交通を開きてより、忽ち衰廢して前日の強盛は夢の如く泡の如く、再び回へすべからざるものとなりぬ。この家に二個の娘子あり。姉は幼なきより隣村の某家に養はれて人と成るまで家に

歸らず。渠の養はれし家は寶貨充實生を理する事一々其機に投ぜざるなし。之を以て彼の芳紀正に熟するや、豐頰秀眉一目人を幻するの態あり。或時人に伴はれて其の實家に歸り、その妹を見しに風姿は聊も毀損するところなけれど、自から痩弱にし顏色も光澤を缺けり。姉は頻りに己れの美貌を以て妹に誇負するところあらんとす。妹即ち曰く、爾は體健かに美形なりと雖、他家に寓して人となれり。我は體弱く形又た醜しと雖、祖先の家を守りて暫らくも爰を離れず。誇るべきところ我にあり、何ぞ爾の下にあらんやと。

姉の頭にはデモクラシー(共和制)と云へる銀簪燦然たり、インヂビヂユアリズム(個人制)といへる花釵きらめけり。クリスチアンモラリチーも亦た飾られたり。眞に之れ絶世の美人なり而して妹の頭には祖先の血によりて成りたる毛髮の外何の有るなし。妹の形は悄然たり、姉の面は嬌妖たり。妹の未來は悲觀的なり。姉の將來は希望的なり。姉を娶らんか、妹を招かんか。國民よ少しく省みよ、爾の中に爾の生氣あらば、爾の中に爾の希望あらば、爾の中に爾の精神あらば、安くんぞ此の婚嫁によつて爾の大事を決せんとするを要せむ。この二娘子の一を娶らざるべからずと信ずる勿れ。止むなくんば多妻主義となりて、この二娘を合せ娶れよ。汝はこの婚嫁によりて爾の精神を失迷せしむべからず。然り爾に大なる元氣(Genius)の存するあり、一夫一妻となるも、一夫多妻となるも、爾の元氣に於て若し損するなければ爾は希望ある國民なり。

國民の一致的活動

凡そ一國民として缺く可からざるものは、其の一致的活動なり。活動、われは之を心性の上に於て云ふ。政治的活動の如きは我が關り知る所にあらざればなり。凡そ心性の活動あらずして外部の活動あるはあらず。思想先づ動きて動作生ず。ルーソーあり、ボルテールあり、而して後に佛國の革命あり。國民の鞏固なる勢力は、必らず一致したる心性の活動の上に宿るものなり。此點より觀察すれば、國民の生命を證するもの實に其制度の舞臺に於て能く國民を一致せしむるあると否とに存せり。何を以て國民に心性上の結合を與へん。如何なる主義を以て此の目的に適ひたるものとせん。如何なる信條を以て此の目的に合ひたるものとせん。吾人は多言を須ひずして知る。尤も多く彼等を敎ふるもの、尤も多く最多數の幸福を圖るもの、尤も多くヒユーマニチーを發育するもの、尤も多く人間の運命を示すもの、即ち此目的に適合する事尤

も多き者なるを。斯の如く余はインヂビジュアリズムの信者なり、デモクラシーの敬愛者なり。然れども、

國民の元氣

國民の元氣は一朝一夕に於て轉移すべき者にあらず。其の源泉は隱れて深山幽谷の中に有り。之を索むれば深く地層の下にあり。砥の如き山、之を穿つ可からず。安くんぞ國民の元氣を攫取して之を轉移することを得んや。思想あり、思想の思想あり、而して又た思想の思想を支配しつべきものあり。一國民は然らず、國民と成すべき丈の精神を有すべきなり。之に加ふるに藪醫術を以てし、之を率ふるに輕業師の理論を以てするとも、國民は頑として之に從ふべからざるなり。渠を圍める自然は渠に與ふるに天然の性情を以てし、渠に賦するに、特異の性格を以てす。是等の性情、是等の性格は幾千年の間その國民の活動の泉源たりしなり、その國民の精神の滿足たりしなり。國民も亦た一個の活人間なり。その中に意志（ウイル）あり、その中に自由を求むるの念あり。國家てふ制限の中に在て其の意志の獨立を保つべき傾向を有せずんば非ず。以太利は如何に斧鉞を加へて盛衰興亡の運命を悟らしむるも其の以太利たるは依然として同じ。獨逸も亦た斯の如し。佛蘭西も亦た斯の如し。國民の元氣の存する處に其の豫定の運命あり。死すべきか、生くべきか。嗚呼一國民も亦た無常の風を免れじ。達士世を觀ずる時、宜しく先づ命運の歸するところを鑑むべし。若し我が國民にして、果して秋天霜滿ちて、樹葉黃落の曉にありとせんか、須らく男兒の如く運命を迎ふべし、然り須らく男兒の如く死すべし。國民も亦た其の天職あるなり、其の威嚴あるなり、其の死後の名あるなり、其の生前の氣節あるなり。之を破らず、之を折らず、而して能く生存競爭の國際的關係を全ふし得るの道ありや、否や。

デモクラシー（共和制）を以て、我國民に適用し、根本の改革をなさんとするが如きは極て雄壯なる思想上の大事業なり。吾人は其の成功と不成功とを論らはず、唯だ世人が如何に冷淡に此の題目を看過するかを怪訝しつゝある者なり。吾人は寧ろ進步的思想に與するものなり、然りと雖、進步も自然の順序を履まざる可からず。進步は轉化と異なれり。若し進步の一語の裡に極めて危險なる分子を含めることを知らば、世の思想家たる者何ぞ相戒めて、如何に眞正の進步を得べきやを講究せざる。國民のヂニアスは退守と共に退かず、進步と共に進まず。その根本の生命と共に、深く且つ牢き基礎を有せり。進步も若し此れに協はざるものならば進步にあ

らず、退守も若し此れに合ざるものならば退守にあらず。

地平線的思想

政事の論議に從事し、一代の時流を矯正して民心の歸向を明らかにする思想家、素より偏見僻說を頑守し、衆を以て天下を脅かす的の所謂政事家なるものに比較すべきにあらず。然れども其の說くところ概ね卑近にして、俚耳に入り易きの故を以て人之を俗物と稱す。吾人は、今斯の如き俗物の感化が、今の米國を造り、今の所謂文明國なるものを造るに於て大なる力ありし事を信ずる者なり。凡そ適切なる感化を民衆に施して、少歲月の中に大なる改革を成就すること、多くは謂ふ所の俗物なるもの丶力にあり。マコーレーも或意味に於ては俗物なり、エモルソンも或意味に於ては俗物なり。彼等は實に俗物なりしが故にグレートなりしなり。教養(カルチユーア)は素と自然を尊びて、眞朴を主とするものなり。古より大人君子の成せしところ、蓋し之に過ぐるなきなり。平坦なる眞理は遂に天下に勝つべし。此意味に於て吾人は所謂俗物なるものを崇拜するの心あり。然れども、爰に記憶せざるべからざることあり。世間幾多の平坦なる眞理を唱ふるもの丶中には、平坦を名として濫りに他の平坦ならざるものを罵り、自から謂へらく、平坦なるものにあらざれば、眞理にあらずと。斯の如き即ち眞理を見るの眼にあらずして平坦を見るの眼なり。

思想界には地平線的思想と稱すべき者あり。常に人世(アース)の境域にのみ注ぎ、社界を改良すと曰ひ、國家の福利を增すと曰ひ、民衆の意向を率ゆと曰ひ、極て尨雜なる目的と希望の中に働らきつ丶あり。國民は尤も多く此種の思想家を要す。凡そ此種の思想家なき所には何の活動もなく、何の生命もなし。然ども記憶せよ、國民は此種の思想家のみを以て甘んずべきにあらざるを。眞正のカルチユーアを國民に與ふるが爲には、地平線的思想の外に更に一物の要すべきあり。

高蹈的思想

吾人は之を高蹈的思想と呼ぶ。數週前に民友先生が言はれし高蹈派といふ文字と其意味を同ふするや否やを知らず。吾人は實に地平線的思想の重んずべきを知ると雖、所謂高蹈的思想なるもの丶一日も國民に缺くべからざるを信ずるものなり。ヒューマニチーを人間に傳ふるは獨り地平線的思想の任にあらず。道德は到底固形の善惡論にあらざれば、プラトーの眞善美もミルトンの虛想も、人間をして正當に人間たる位地に進ましむるに浩大なる裨益あることを信ずる

なり。ヒューマニチーは社會的義務の爲めにのみ存するにあらず、人間の性質（キヤラクター）は倫理道德の拘束によりてのみ建設すべきものにあらず、純美を尋ね、純理を探る世の詩人たり、學者たる者、優に地平線的思想家の預り知らざる所に於て人類の大目的を成就しつゝあるにあらずや。

何をか國民的思想と謂ふ

必ずしも國民といふ題目を以て詩歌の材とするを國民的思想といふにあらざるなり。マルセーユの歌に對して製りたる獨逸祖國歌は非常の賞賛を得て一篇の短歌能く末代の名を存せしと聞く。然れども是れ賞賛のみ、喝采のみ。一の國民の私に表せし同情のみ。未だ以て眞正の詩歌界に於ける月桂冠とは云ふべからざるなり。吾人は「早稲田文學」と共に少くとも國民的の思想を得んことを希望すること切なりと雖、世の詩歌の題目を無理遣りに國民的問題に限らんとする輩に向ひては聊か不同意を唱へざる可からず。「國民の友」曾つて之を斯題目として詩人に勸めし事あるを記憶す。寔に格好なる新題目なり。彼の記者の常に斯般の事に烱眼なるは吾人の私に畏敬する所なれど、世には大早計にも之を以て詩人の唯一の題目なる可しと心得て、叨りに所謂高蹈的思想なるものゝ攻擊せんとするき傾あるは豈に歎息すべき至りならずや。詩人は一國民の私有にあらず、人類全體の寶匣なり。彼をして一國民の爲に歌はしめんとするの餘りに彼が全世界の爲に齎らし來りたる使命を傷らしめんとするは、吾人其の是なるを知らず。

然りと雖、詩人も亦た故國に對する高妙の觀念なきにあらず。邦國の區劃は彼に於て左までの事にはあるまじきが、その天賦の氣稟に於て少くともその國民を代表する所なき能はず。之を以てバイロンは如何にその故國を罵るとも、英國の一民たるに於ては終始變るところなく深く之を其の著作の上に印せり。之を以てレッシングは佛國の思想がライン河を渉りて縱に其の鄕國の思想を横領するを惡みて大に國民の夢を醒したり。斯く詩人も亦た其の鄕土の愛國者たるは拔くべからざる天稟の存するあればなるべし。

詩人豈に國民の爲にのみ產れんや、詩人豈に所謂國民的なる狹少なる偏見の中にのみ限られんや。然れども事實に於て詩人も亦た愛國家なり、詩人も亦國民の中に生くるものなり。那翁の侵略に遭ひて國亡び家破れんとするに當つて從容として、那翁の玉座に近づき、彼をして言ふ可からざる敬畏の念を抱かしめたるギョーテが、戰陣に臨みて雜兵の一人となり、屍を原頭に曝らさゞるの故を以て國民的ならずと罵るものあらば、吾人は其の愚を笑はずんばあらざるな

り。

創造的勢力の淵源

吾人は再び曰ふ、今日の思想界に缺乏するところは創造的勢力なりと。模倣、卑しき模倣、之れ國民の尤も悲しむべき徵候なり。我は英國文學を唱道すと宣言し、我は獨逸文學を唱道すと宣言し、我は佛國文學を唱道すと宣言す。その外に又た我は英國思想を守ると曰ひ、我は米國思想を傳ふと曰ひ、我は何、我は何と、各々便利の思想に據つて國民を率ひんとす。而して又た、少しく禪道を謂ふものあらば、即ち固陋なりと罵り、少しく元祿文學を唱ふるものあらば、即ち苟且の復古的傾向なりと曰ふ。嗚呼不幸なるは、今の國民かな。彼等は洋上を渡り來りたる思想にあらざれば一顧の價なしと信ずるの止むべからざるものあるか。彼等は模倣の渦卷に投げられて、何時まで斯くてあらんとする。今日の思想界達士を俟つこと久し。何ぞ奮然として起り、十九世紀の世界に立つて恥づるなき創造的勢力を此の國民の上に打建てざる。復古、爾も亦た賴むべからず。消化、爾も亦た賴むべからず。誰か能く剛强なる東洋趣味の上に、眞珠の如き西洋的思想を調和し得るものぞ。出でよ詩人、出でよ眞に國民的なる思想家。外來の勢力と、過去の勢力とは、今日に於て既に多きに過ぐるを見るなり。缺くところのものは創造的勢力。

熱意

眞贅の隣に熱意なる者あり。人性の中に若し「熱意」なる原素を取去らば、詩人といふ職業は今日の榮譽を荷ふこと能はざるべし。すべての情感の底に「熱意」あり、すべての事業の底に熱意あり、凡ての愛人の底に熱意あり。若しヒューマニチーの中に「熱意」なるもの無かりせば、恐らく人間は歷史なき他の四足動物の如くなりしなるべし。

勞働と休眠は物質的人間の大法なり。然れども熱意は眠るべき時に人を醒ますなり。快樂と安逸は人間の必然の希望なり。然れども熱意は快樂と安逸とを放棄して苦痛に進入せしむることあり。生は人の欲する所、死は人の恐るゝ所、然るに熱意は人をして生を捐て、死を甘受する

事あらしむ。人間の事恒に「己」を繞りて成れり。己を去つて人間の活動なし。然るを熱意は往々にして「己」を離れ、身を輕んじて、「他」の爲に犧牲とならしむる事あり。愛國家の心靈を鼓舞して、天下蒼生の爲に、赫々たる功業を奏せしむるものもこの熱意あり、忠臣君の爲に死し、孝子親の爲に苦しむも、この熱意あればなり。戀人の相想も、讐仇の怨惡も、その原素に於ては即ち一なり。人間を高うするもの、人間を卑ふするものも、義人を起すものも、盜兒を生ずるものも、その原素に於てはその熱意の外あることなし。

熱意とは何ぞや。感情の激甚に外ならざるなり。感情の中の感情たるに外ならざるなり。且つ湧き且つ靜まり、且つ燃ゆ且つ消ふる感情の、一定の事物の上に接續して、連鎖の如き現象を呈する者即ち熱意なり。人間は道義的生命の中心として、愛を有つと共に、感情的生命の中心として熱意を有つなり。熱意は凡ての事業に結局を與ふる者なり。痴情の熱意には、痴情の結局を見るの意味あり。節義の熱意には節義の結局を見るの意味あり。熱意は常に結局を睨んで立てり。熱意の終るところは結局にあり。

人間の五官は、靈魂と自然との中間に立てる交渉器なり。靈魂をして自然を制せしむる是なり。而して人間の靈魂をして全く自然を離れて獨立せしめざる者も亦た是なり。靈魂の一側は常に此の交渉器を通じて、自然と相對峙す。而して靈魂の他の一側は他の方面より「想像」の眼を假りて、自然の向ふを見るなり、自然を超て、自然以外の物を視るなり。人に想像あるは人に思求あるを示すものなり。人に思求あるは、人に熱意あるを示すものなり。熱意は冷淡と相反す。冷淡は人を閑殺し、熱意は人を活動的ならしむ。冷淡は思求なき時の心靈の有樣にして人生の意味少なき場合を指すなり。幸福なる生涯には、熱意なる者少なし。熱意は不幸の友なり、熱意は悲哀の隣なり。幽澤邈谷の中に濃密なる雲霧を屯せしむ。平地には斯の如き事あらず。國亂れて忠臣興るなり。家破れて英兒現はるゝなり。遂げ難き相思益々戀を激發し、成し難きの事業愈々志氣を奮勵す。不幸の觀念は何物をか捉へんとして捉ふること能はざるより生ずるなり。此の觀念の存在する限は、心靈の平衡を失ひたる者にして、熱意なる者は蓋し此の平衡を回復せんが爲に存するなり。磁石に消極・積極の二質あり。この二質が平均せざる限は、引力といふ不可思議の力を此世より絶つこと能はざるなり。斯の如く人間も亦た心靈の平衡を回復せざる限りは、熱意といふ不可思議の力を絶つこと能はざるなり。熱意は力なり。必らず

到着せんとするところを指せる、一種の引力なり。この引力は人をして適ま偉大なる人物とならしめ、適ま醜悪なる行爲をなさしめ、或は善、或は悪、或は聖愛、或は痴情等の名を着たる百般の光景を現出して、人生を變幻極りなきドラマたらしむ。

人は夢の如き事實を追隨する事あり、事實の如き夢を追隨する事あり。虚心を以て觀る時は夢にして、而して熱意を以て觀る時は事實の如く視らるゝ者あり。虚心は想像を容れず。熱意は想像の好友なればなり。虚心は徹頭徹尾事實の中に注ぎ、熱意は往々にして、想像の跡を追ふて事實の域を脱す。虚心は意味ある者を意味なくし、熱意は意味なき者に意味を加ふ。虚心は波瀾を迎へ、熱意は風濤を生ず。諒解力は當に道理と伴はず。道理は能く人を制抑し、諒解力は能く人を興發す。夢と事實とは、其物の夢と事實とにあらず、之を夢とする者と之を事實とする者との別あるのみ。預言者の先見は夢の如くにして而して事實なる事あり、商賣人の蓄財は事實の如くにして而して夢なる事あり。熱意は凡ての事に洗禮を施す者なり。熱意なきは活火なきなり。活火なきは意味なきなり。

意味多き生涯と、意味少なき生涯とは、プロビデンスの手に握れる斧の擊ち方の相異より生ずる差別なり。人間の額上に刻める皺波は、即ち、意味多きと意味少なきとを見分けべき字引の一種なり。

人生を解釋せんとする者は詩人なり。而して、詩人の尤も留意するところは意味の一字にあり。熱意は即ち意味なり。全く熱意なくして意味ある者あらず。意味を生ずるものは熱意なり。人生に意味あるは即ち熱意あるが故なり。熱意あるが故に執着あり、執着のるが故に、困難あり、又た不幸あり。悲哀なる出し物に對して、悲哀の同感を生ずるは彼方の熱意が此方の熱意を誘發すればなり。熱意はトラゼヂーの要素にして、而して、悲哀の物に對する快感の要素の一なり。人生に熱意あるは即ち戯曲にトラゼヂーある所以なり。熱意、之れ詩人が討究すべき一題目ならずや。

桂川(吊歌)を評して情死に及ぶ

まづ祝すべきは市谷の詩人が俗嘲を顧みずして、この新らしき題目を歌ひたることなり。

殘花道人嘗つて桂川を渡る。期は夜なり。風は少しく雨を交ゆ。昨日も今日も五月雨に、ふりくらしたる頃なれど、とあるを見れば梅雨の頃かとぞ思ふ。霧たちこめし水の面に、二ッの光りてらすなり。友におくれし螢火か、はた亡き魂か、あはれ〳〵、と一面慘絶の光景を畫きて先づ幽魂の迷執をうつす。それより情死の事由を列ね、更に一轉してその苦痛と應報とを陳ぶ。あやなき闇に凄まじや、閻羅と見ゆる夏木立。之より一回轉して虛實の中に出沒し視るところのものゝ心裡を寫出する一節絶筆なり。

こゝは處も桂川、最前の起句を再用して、造化の筆はいつもなほ悲慘の景色うつしいで、我はた冥府の人なりきといふ末句の如き千鈞の重ありと云ふべし。これより、急調に眼を過ぐるものを言ひ、三ッ四ッおちし村雨は、つゝみたる誰が涙かなにて結び、更に玉鉾の道は小暗し、たどりゆく繩手はほそし、松風の寛の音も、身にしみて、いとうらかなし。と巧麗婉艶の筆を以て行路の詩人の沈痛なる同情を醒起す。これより漸く佳境に進みて影なる人の語るを言ひ、或は平瀉、或は急奔、遂にわれらが罪をゆるせかし、犧牲となりしは愛のためにて全篇を結べり。余は殘花氏の巧妙と幽思この篇にて盡くるを見る。明治の韻文壇、斯かる佳品を出すもの果して幾個かあらむ。

試に余をして簡約に情死に就きて余が見るところを言はしめよ。

人の世に生るや、一の約束を抱きて來れり。人に愛せらるゝ事と、人を愛する事之なり。造化は生物を理するに一の法を設けたり。禽獸鱗介に至るまで、自からこの法に洩るゝ事なし。之ありて萬物活情あり、之ありて世界變化あり。他ならず、心性上に於ける引力之なり。人はこの引力の持主にして、彼の約束の捺印者なり。

余、今村舍に宿して一面の好畫を見たり。雄鷄は外に出でゝ食をもとめ、雌鷄は巢に留りて雛を温む。孵りて後僅かに半月、或は母鷄の背に升り、或は羽をくゞりて自から隱る。この間、言

ふ可からざるの妙趣ありて余を驚破せり。細かに萬物を見れば情なきものあらず。造化の攝理愕ろくべきものあり。

或は劣情と呼び、或は聖情と稱ふ。何を以て劣と聖との別をなす、何が故に一は劣にして一は聖なる。若し人間の細小なる眼界を離れて、造化の廣濶なる妙機を窺えば、孰を聖と呼び、孰れを劣と稱ふを容るさむ。濫りに道法を劃出して、この境を出づれば劣なり、この界に入れば聖なりと言ふは何事ぞ。

情の素たるや一なり。之を運ぶ器と、機の異なるに因つて聖劣を分たんとす。世間の道義は之に對して聲を勵まして正邪を論ず。何ぞ迂なるの甚しき。文化は人に被らすに數葉の皮を以てす。之を着ざれば即ち曰く破德なりと。むしろ蕃野の眞朴にして、情を包むに色を以てせざるに如かんや。

人の中に二種の相背反せる性あり。一は研磨したるもの、一は蕃野なるもの、「德」と云ひ、「善」と云ひ、「潔」と云ひ、「聖」といふ。是等のものは研磨の後に來る。而して別に「情」の如き、「慾」の如き、是等のものは常に裸體ならんことを慕ひて縱に繫禁を脫せんことを願ふ。この二性は人間の心の野にありて常に相戰ふなり。

電火は人を戮ろすと謂ふ。然り渠は魔物なり。然れども少しく造化の理を探れ、自からに電火の起らざるべからざるものあるを悟れ。天の氣と、地の氣と相會せざる可からざるものあるを察せよ。自然界に於て猶此事あり、人間の心界何ぞ常に靜謐なるものならんや。風雨遽かに到り、迅雷忽ち轟ろく光景は心界の奇幻。之を見て直ちに繩墨の則を當て、是非の判別を下さんとするは豈達士の爲すところならんや。

人は常に或度に於て何物かの犧牲たり。能く何物にも犧牲たらざるものは、人間として何の佳趣をも備へざる者なり。何を以て犧牲たる、何が故に犧牲たるを甘んずるを得るや。美いかな人間の情、好むべきかな人間の心。友の爲に身を苦しめ、親の爲めに心を痛め、而して自ら甘心し、眞實何の悔恨なきを得るは豈に讃むべき事にあらずや。「自己(セルフ)」といふ柱に憑りかゝりて、われ安し、われ樂しと喜悅するものゝ心は常に枯木なり。花は玆に咲かず、實は玆に熟せず。情は一種の電氣なり。之あるが故に人は能く活動す。時に或は愁雲恨雨の中に暴然嗚吼をなし、霹靂一聲人耳を愕ろかすことあるも亦た止むべからず。花なき花は之なり、實なき實は是なり。

桂川(吊歌)を評して情死に及ぶ

情死輕んずべからず。

世の中に絶ゑて心中なかりせば、二世のちぎりもなからまじ……と冥土の飛脚に言はせたる巣林子、われその濃情を愛す。人の誠意は情によりて始めて見るべし。沈靜は元より沈靜の味あり。然れども熱意も亦た熱意の味あるにあらずや。熱意は人を誠實に驅り、誠實は往々にして人を破却に逐ふ。破却素より惡むべし。然れども破却の中に誠實あり。人死して誠實殘る。愛の妙相は之なり。眞玉白玉種類あれど、愛に易ふべきものはなし、と市谷の詩人大に若くなれり。

よしや幻想に欺かるゝ事ありとも、二人が間には一點の詐僞なく、一粒の疑念なし。二にして一、一にして二、斯の如く相抱て水に投ず。死する時樂境にあるが如く、濁水も亦た甘露を味ふに似たり。萬事斯くして了れば殘るものははしたなき世の浮名のみ。浮名も何ぞや。嗚呼罪なり。然り、罪なり。然れども凡そ世間の罪にして斯の如く純聖なる罪ありや。罪は罰なり。然り罰なり。然れども世間の罰にして、斯の如く甘義なる罰ありや。嗚呼狂なり、然り、狂なり。然れども世間の狂にして斯の如く眞面目なる狂ありや、幻と呼び夢と呼ぶも理あれど、斯の如く眞實なる幻と夢とは人間の容易に味ひ得ざるところ。之を以てわれは情死を憫れむ事切なり。

義理人情に感ずること多きもの、情死の主人となること多きは巣林子の戯曲之を證せり。捉ふるものは義理人情、逃ぐるに怯ならず、避くるに卑しからず、死を以て之を償ふ、滅を以て之を補ふ。情死は勇氣ある卑怯者の處爲なり。是を大膽なる無情漢に比すれば如何ぞや。

そも愛といひ、戀といふふかき意を世の人は、さらく〳〵まず氷より、霜より冷えしそのこゝろ、と殘花氏の妙句味ひ多しと言ふべし。請ふ去つて再び桂川の一篇を讀め。巣林子以後圖らずも「情死」は友人を法界の人に得たりけり。

第五篇　國府津在前川村長泉寺にて

明治二十六年八月より
同年十一月まで

哀詞序

歡樂は長く留り難く、盡くる時を知らず。よろこびは春の華の如く時に順つて散れども、かなしみは永久の鼓吹をなして人の胸をとゞろかす。會ふ時のよろこび、別るゝ時のかなしみを償ふべからず。はたまた會ふ時の心は別るゝ時の心の萬分の一にだも長からず。生を享け人間に出でゝ心を勞して荆棘を過る。或は故なきに敵となり、或は故なきに味方となり、恩怨兩つながら暴雨の前の蛛網に似て、徒らに啻だ毛髮の細き緣を結ぶ。夕に笑ひしに因て朝に泣くの果を見つ。朝に泣きしに因つて更に又た夕に笑はんとす。斯の如きは憫れむべし、斯の如きは悲しむべし、斯の如きは厭ふべし。我れつら〳〵世相を觀ずるに、誰か亦た斯の如くならざらむ。娼婦の涕は紅涙と賞ぜられ、狼心の僞捨は慈悲と稱へらる。友と呼び愛人といふも、はしたなきもつれに脆くも水と冷ゆるは世の習ひなり。鷺を白しと云ひ、鴉を黑しといふも唯だ目にみゆる

ところを言ふのみ。人の心を尋ぬればよしなきことを爭ひては、瞋恚の焰を懷にもやし、露ほどの恨みも長しへに解くることなく、人を毀はんと思ふ。右に行くものゝ袂は左に往くものゝ手に把られ、左に行くものも亦た右に往くものに支へらる。鴿の面をもてる者に蛇の心あり、美はしき果實に怖ろしき毒を含めることあり。洞に近けば六蛇蟄し、林に入れば猛獸遊ぶ。二世といふ緣に二世あるは少なく、三世といふに三世あるも亦尠なし。まことの心にて契る誓は稀にして、唯だ目前の情と慾とに動くも亦はかなき至りなり。讐と恩とに於て亦た斯の如し。必らず酬ふべしと思ふ程ならば酬はずして自から酬ゆるものを。必らず忘れじといふ恩ならば忘るゝとも自から忘るまじきを。讐には手をもて酬ひんと思ふこと多く、恩には口をもて報ずること多し。敵と味方に於いて亦た斯の如し。一時の利の爲めに味方となるものは、又た一時の害の爲めに離るゝを易しとす。一時の害の爲めに敵となるもの、又た一時の利の爲めに味方となるを易しとす。西風には東に飛び、東風には西に揚がるは紙鳶なり。人の心も大方は斯くの如し。風の西に吹くを能く見るものを達識者と呼び、風の東に轉ずるを看破するものあれば卓見家と稱なへんとす。勇者はその風に御して高く飛び、智者はその風を袋に蓄はへて後の用を爲す。運よくして思ふこと圖に當りなば、傲然として人を凌ぎ、運あしくして躬窮りなば憂悶して天を恨む。凌がるゝ人は凌ぐ人よりも眞に愚かなりや、恨まるゝ天は恨む人の心を測り得べきや。斯の如きは世なり。斯の如きは人間なり。深く心を人世に置くもの安くんぞ憂なきを得ん。安くんぞ悲なきを得ん。甘露を雨らす法の道も世を霑ほすこと遲く、仁義の教も人の心をいかにせむ。天地の間に我が心を寄するものを求めて得ざれば我が心は涸れなむ。

我はあからさまに我が心を曰ふ、物に感ずること深くして悲に沈むこと常ならざるを。我は明かに我が情を曰ふ、美くしきものに意を傾くること人に過ぎて多きを。然はあれども、わが美くしと思ふは人の美くしと思ふものにあらず。わが物に感ずるは世間の衆生が感ずる如きにあらず。物を通じて心に徹せざれば自ら休むことを知らず。形を鑿ちて精に入らざれば自ら甘んずること難し。人われを呼びて萬有的趣味の賊となせど、われは既に萬有造化の美に感ずるの時を失へり。多くの繪畫は我を欺けり。名匠の手に成るものと雖、斯く我を感ぜしむる能はず。繪畫既に然り。この不思議なる造化も然り、造化も唯だ自然に成りたる繪畫のみ。われは世の俗韻俗調の詩人が徒らに天地の美を玩弄するを惡むこと甚だし。然れども自ら顧みる時は、何

が故に我のみ天地の美に動かさるゝことの少なきかを怪しまずんばあらず。動かさるゝこと少なきにあらず、斯く動かされて斯く自ら欺きたればなり。我は再び言ふ、われは美くしきものに意を傾くること人に過ぎて多きを。花のあしたを山に迷ひ、月のゆうべを野にくらすなど、人には狂へりと言はるゝも自から悟ることを知らず、人には愚なりと言はるゝとも自から賢からんことを冀はず。或時は蝶の夢の覺め易きを恨み、またある時は蟲の音の夜を長うするを悲しむ。この恨み、この悲しみを何か故の恨み、何が故の悲しみぞと問ふも、蝶の夢は夢なればこそ覺め、蟲の音は秋なればこそ悲しきなれと答ふるの外に答なきに同じ。嗚呼天地味ひなきこと久し。花にあこがるゝもの誰ぞ、月に嘯くもの誰ぞ。人生の冉々として滅毀するを嗟し、悵として命運の私しがたきを慨す。

身は學舍にあり、中宵枕を排して、燈を剪りて亡友の爲に哀詞を綴る。筆動くこと極めて遲く、涕零つること甚だ多し。相距ること二十餘日、天と地の間に於てこの距離は幾何ぞ。

（哀詞本文は未だ稿を完ふせず）

ほたる

ゆうべの暉をさまりて、
まづ暮れかゝる草陰に、
わづかに影を點せども、
なを身を恥づるけしきあり。

羽虫を逐ふて細川の、
淺瀨をはしる若鮎が、
靜まる頃やほたる火は、
低く水邊をわたり行く。

腐草に生をうくる身の、
かなしや月に照らされて、
もとの草にもかへらずに、
たちまち空に消えにけり。

蝶のゆくへ

舞ふてゆくへを問ひたまふ、
心のほどぞうれしけれ、
秋の野面をそこはかと、
尋ねて迷ふ蝶が身を。
行くもかへるも同じ闇、
越へ来し方に越へて行く。

花の野山に舞ひし身は、
花なき野邊も元の宿。
前もなければ後もまた、
「運命(かゝ)」の外には「我」もなし。
ひら〳〵と舞ひ行くは、
夢とまことの中間なり。

雙蝶のわかれ

ひとつの枝に雙(ふた)つの蝶、
羽を收めてやすらへり。
露の重荷に下垂るゝ、
草は思ひに沈むめり。

蝶のゆくへ　雙蝶のわかれ

秋の無情に身を責むる。
花は愁ひに色褪めぬ。

言はず語らぬ蝶ふたつ
齊しく起ちて舞ひ行けり。
うしろを見れば野は寂し、
前に向へば風冷し。
過ぎにし春は夢なれど、
迷ひ行衛は何處ぞや
同じ恨みの蝶ふたつ。
重げに見ゆる四の翼。
雙び飛びてもひにわたる、
秋のつるぎの怖ろしや。

雄も雌も共にたゆたひて、
もと來し方へ悄れ行く。

もとの一枝をまたの宿、
暫しと憩ふ蝶ふたつ。
夕告げわたる鐘の音に、
おどろきて立つ蝶ふたつ。
こたびは別れて西ひがし、
振りかへりつゝ去りにけり。

眠れる蝶

けさ立ちそめし秋風に、

「自然」のいろはかわりけり。
高梢に蟬の聲細く、
茂草に蟲の歌悲し。
林には
　鵯のこゑさへうらがれて、
野面には、
　千草の花もうれひけり。
あはれ、あはれ蝶一羽、
　破れし花に眠れるよ。

早やも來ぬ、早やも來ぬ秋、
萬物秋となりにけれ。
蟻はおどろきて穴索め、

蛇はうなづきて洞に入る。
田つくりは、
　あしたの星に稻を刈り、
山樵は
　月に嘯むきて冬に備ふ。
蝶よ、いましのみ、蝶よ、
　破れし花に眠るはいかに。

破れし花も宿假れば、
運命のそなへし床なるを。
春のはじめに迷ひ出で、
秋の今日まで醉ひ醉ひて、
あしたには、

眠れる蝶

千よろづの花の露に厭き、
ゆうべには、
夢なき夢の數を經ぬ。
只だ此まゝに『寂』として
花もろともに滅ばやな。

萬物の聲と詩人

萬物自から聲あり、萬物自から聲あれば自から又た樂調あり。蚯蚓は動物の中に於て、醜にして且つ拙なるものなり。然れども夜深々窓に當りて斷續の音を聆く時は人をして、造化の生物を理する妙機の驚ろくべきものあるを悟らしむ。自然は不調和の中に調和を置けり。悲哀の中に欣悅を置けり。欣悅の裡に悲哀を置けり。運命は人を脅かすなり、而して人を驅つて怯懦

卑劣なる行爲をなさしむるなり。情慾は人を誘ふなり、而して人を卒ひて我儘氣隨のものとなすなり。自然は廣漠たる大海にして人生は廷々たる浮島に似たり。風浪常時に四圍を襲ひ來りて、寧靜なる事は甚だ稀なり。四節は追はずして駿馬の如くに奔馳し、草木の榮枯は輪なくして廻轉する車の如く、自然は常變なり、須臾も停滯することあるなし。自然は常動なり、須臾も寂靜あることなし。自然は常爲なり、須臾も無爲あることなし。その變、その動、その爲、各自一個の定法の上に立てり、而して又た根本の法ありて之を支配するを見る。淵に臨みて靜かに水流の動靜を察するに、行きたるものは必らず反へる、反へれるものは必らず行く。若きもの必らず老ゆ、生あるもの必らず死す。苦あるものに樂あり、樂あるものに苦あり。造化は偏頗にして偏頗にあらず、私にして無私なり。差別の底に無差別あり。不平等の懷に平等あり。然り造化の妙機は秘して其最奥にあるなり。人間の最奥なるところ之を人間の空と言ひ、造化の最奥なるところ之を造化の靈と言ふ。造化の最奥！造化の靈！そこに大平等の理あるなり。そこに天地至妙の調和あるなり。人間はいかほどに卑しく拙くありとも、天地至妙の調和は之によりて毀損せらるゝことなきなり。あはれこの至妙の調和より萬物皆な或一種の聲を放ちつゝあるに

あらずや。

形の醜美を見て直ちに其醜美を決するは未だ美を判ずるの最後にあらず。外極めて醜なるものにして、内極めて美なるものあり。外極めて美にして、内極めて醜なるものあり。醜と美とを判つは必らずしも其形象に關はるにあらざるなり。形體にあらはれたる醜美を斷ずるは獨り眼眸のみ。眼眸は未だ以て醜美を斷ずる唯一の判官となすべきにあらず。鼓膜亦た關つて力あるべきものなり。否、否、眼眸も鼓膜も未だ以て眞に醜美を判ずべきものにあらざるなり。凡そ形の美は心の美より出づ、形は心の現象のみ。形を知るものは形なり、心を視るものは又た心ならざるべからず。造化は奇しき力を以て、萬物に自からなる聲を發せしむ。之を以て聊かその心を形狀の外にあらはさしむ、之を以てその情を語らしめ、之を以てその意を言はしむ。無絃の大琴懸けて宇宙の中央にあり。萬物の情、萬物の心悉くこの大琴に觸れざるはなく悉くこの大琴の音とならざるはなし。情及び心、一々其軌を異にするが如しと雖、要するに琴の音色の異なるが如くに異なるのみにして、宇宙の中心に懸れる大琴の音たるに於ては均しきなり。個々特々の悲苦及び悅樂要するにこの大琴の一部分のみ。悲しき時は獨り悲しむが如くなれども、然るにあらず、凡てのものゝ悲しむなり。喜ぶ時は獨り喜ぶが如くなれども、然るにあらず、凡てのものゝ喜ぶなり。「自然」は萬物に「私情」あるを許さず。私情をして大法の外に縱なる運行をなさしむることあるなし。私情の喜は故なきの喜なり、私情の悲は故なきの悲なり。彼の大琴に相涉るところなければ、根なき萍の海に漂ふが如きのみ。情及び心、個々特立して而して個々その中央を以て、宇宙の大琴の中心に聯なれり。海も陸も、山も水も、ひとしく我が心の一部分にして、我れも亦た渠の一部分なり。渠も我も何物かの一部分にして歸するところ即ち一なり。四節の更迭は、少老盛衰の理と果して幾程の差違かあらむ。樹葉の凋落は老衰の末後と如何の異別かあらむ。花笑ふ時に我も笑ひ、花落つる時に我も落つ。實熟する時に我も熟し、實墜つる時に我も墜つ。渠を支配する引力の法は即ち我を支配する引力の法なり。渠を支配する生命の法は即ち我を支配する生命の法なり。渠と我との間に「自然」の前に立ちて甚しき相違あることなし。法は一なり。法に順ふものとの關係も亦た一なり。情及び心、漠として捕捉すべきやうなき如き情及び心、渠も亦た法の中にあり、渠も亦た法の下にあり。法の重きこと斯の如し。斯に於て凡ての聲、情及び心の響なる凡ての

聲の一致を見る。高きも低きも、濁れるも清めるも、然り此の一致あり。この一致を觀て後に多くの不一致を觀ず、之れ詩人なり。この大平等大無差別を觀じて而して後に多くの不平等と差別とを觀ず、之れ詩人なり。天地を取つて一の美術となすは之を以てなり、あらゆる聲を取つて音樂となすは之を以てなり。詩人の前には凡ての物、凡ての事、悉く之れ詩なるは之を以てなり。多くの不一致の中の一不一致を取り、多くの不平等の中の一不平等を取り、多くの差別の中の一差別を取り、而して之に戀着するを知つて、彼の大一致、大平等大差別に悟入すること能はざるものは未だ以て天地の大なる詩たるを知らざるものなり。難いかな詩人の業や。

道德を論ずるの書は多し。宗教の名と其の教法を設くるものは多し。然れども道德は未だ人間をして縱に製作せしむる程に低くならざるなり。宗教も亦た人間をして隨意に料理せしむる程に卑しくならざるなり。道德の底に一の道德あり、宗教の底に一の宗教あるは、美術の底に一の美術あると相異なる所なからんか。要するにモーラリチーは一なるのみ。政治的に所謂道德なりとするところの者例せば儒教の如きとの未だ以てモーラリチーの本然とは言ふべからず。宗派的に所謂道德なりとするところのもの未だ以てモーラリチーの本然と言ふべからず。

宗教の中の宗教とすべきは、その人性人情に感應する所多きにあり。モーラリチーも亦た然らんか。美術も亦た然らんか。必竟するに宗教も美術も人心の上に臨める大感化力なるに於ては相異なるところあるなし。然れどもラスキンの言へる如く美術は道義を圓滿にするの力を有すれども宗教の如く道義を創作することは能はず。宗教の天啓たるが如く、美術も亦た一種の天啓なり。宗教の高尚なる使命を帶びたる如くに美術も亦た高尚なる使命を帶べり。ヒューマニチーは其の唯一の目的なり。無より有を出すにあらず。有を取りて之を完ふするものなり。尤も劣等なる動物より尤も高等なる劣物を作るにあらず、尤も高等なる動物をして、その高等なる所以を自覺せしめ、その高等なる職分を成就せしむるにあり。宇宙の存在は微妙なる階級の上に立てり。一點之を傷くるあれば必らずその責罰としての不調和あり。之れ即ち調和の中に戰へる不調和の原意(エレメンツ)ある所以なり。微妙なる階級微妙なる秩序、これありて萬物悉く其の處を安んずるを得るなり。東に吹く風は再び西に吹き來る、氣燥くところに雲自から簇まるなり、雲は雨となり、雨は雲となる、是等のもの一として宇宙の大調和の爲に動くところの小不調和にあらざるはなし。萬づの事皆な空にして法のみ獨り實なり、法のみ獨り實にして法に遵ふと

ころの萬物皆な實なるを得べし。自然は常變にして不變、常動にして不動、常爲にして無爲、法の眼に於て然り。

宗教完全にして美術も亦た完全ならんか、美術と宗教と相距ること數歩を出でざるなり。然れども宗教にしていつまでも乾燥なる神學的の論據に立籠らんか、美術も亦た己がじまゝなる方向に傾かんとするは當然の勢なり。宗教の度と美術の度とは殆ど一種の比例をなせり。國民の美術は到底その倫理の表象なり。野卑なる國民は野卑なる美術に甘んじ、高尚なる國民は高尚なる美術を求む、勇敢なる國民に勇武の物語出で、淫逸なる國民に淫逸なる史乘あり。必竟するに萬物その自からなる聲をなして、而して美術はその聲を具體にしたるものに過ぎざれば、形は如何にありとも、その聲の主なる心にして卑野なれば美術も卑野ならざらんと欲して得べからざるは至當の理なり。宇宙の中心に無絃の大琴あり、すべての詩人はその傍に來りて、己が代表する國民の爲に己が成育せられたる社會の爲に、百種千態の音を成すものなり。ヒューマニチーの各種の變狀は之によりて發露せらる。眞實にして虛飾なき人生の說明者はこの琴絃の下にありて、明々地にその至情を吐く。その聲の悲しき、その聲の樂しき、一々深く人心の奥を貫ぬけり。詩人は己れの爲に生くるにあらず、己が圍まれるミステリーの爲めに生れたるなり。その聲は己れの聲にあらず、己れを圍める小天地の聲なり。渠は誘惑にも人に先んじ、迷路にも人に後るゝなし、渠は無言にして常に語り、無爲にして常に爲せり。渠を圍める小天地は悲をも悅をも、彼を通じて發露せざることなし。渠は神聖なる蓄音器なり、萬物自然の聲、渠に蓄へられて而して渠が爲に世に啓示せらる。秋の蟲はその悲を詩人に傳ひ、空の鳥は其自由を詩人に告ぐ。牢獄も詩人は之を辭せず、碧空も詩人は之を遠しとせず、天地は一の美術なり、詩人なくんば誰れか能く斯の妙機を闡て之を人間に語らんか。

情熱

ミルトンは情熱（インパッション）を以て大詩人の一要素としたり。深幽と清楚とを備へたるは少なからず。然れどもまことの情熱を具有するは大詩人にあらずんば期すべからず。サタイアをもユーモア

をも適宜に備ふるものは多くあれど、情熱を缺くが故に眞正の詩人たらざるもの稀て數ふべからず。情熱なきサタイアリストの筆は諷刺の半面を完備すれども人間の實相を刻むこと難し。ボルテーアとスウヰフトの偉大なるは、その諷刺の偉大なるに非ずして、其情熱の熾烈なるものあればなり。ユーモリストに到りては自ら其趣を異にすれども、之とても亦た隱約の間に情熱を有するにあらざれば戯言戯語の價直を越ゆること能はざるべし。

然はあれども尤も多く情熱の必要を認むるはトラゼチーに於てあるべし。シユレーゲルも悲曲の要素は熱意なりと論じられぬ。熱意、情熱、必竟するに其素たるや一なり。情熱を缺きたる聖淨は自から講壇より起る乾燥の聲の如く、美術のエボルーションには適ひ難し。情熱を缺きたる純潔は自から無邪氣なる記載に止りて將た又た詩的の變化を現じ難し。情熱を缺きたる深幽は自からアンニヒレーチーブにして、物に觸れて響なく、深淵泓澄たる妙趣はあれども、巨瀑空に懸つて岩石震動するの詩趣あらず。凡そ美術の壯快を極むるもの莊嚴を極むるもの、優美を極むるもの、必らず其の根底に於て情熱を具有せざるべからず。内に鬱勃するところのものありて、而して外に異彩ある光線を放つべし、情熱はすべてこのものに奇異なる洗禮を施すものなり。特種の進化を與ふるものなり。「神聖」といふ語、「純潔」といふ語などに、無量の味ある所以のものは必竟或度までは比較的のものにして、情熱と纏繋するに始まりて情熱の最後の洗禮によりて終に殆んど絶對的の奇觀を呈す。

詩人は人類を無差別（チスインクレステフト）に批判するものなり。「神聖」も「純潔」も或一定の尺度を以て測量すべきものにあらず。何處までも活きたる人間として觀察すべきものなり、「時」と「場所」とに限られて、或る宗教の形（フオーム）に拘はり、或る道義の式（システム）に泥みて人生を批判するは詩人の忌むべき事なり。人生の活相を觀ずるには極めて平靜なる活眼を以てせざるべからず、寫實（リアリズム）は到底是認せざるべからず、唯だ寫實たるや、自から其の注目するところに異同あり、或は殊更に人間の醜惡なる部分のみを描畫するに止まるもあり、或は殊更に調子の狂ひたる心の解剖に從事するに意を籠むるもあり。是等は寫實に偏したる弊の漸重したるものにして、人生を利することも覺束なく、宇宙の進歩に益するところもあるなし。吾人は寫實を厭ふものにあらず。然れども卑野なる目的に因つて立てる寫實は好美のものと言ふべからず。寫實も到底情熱を根底に置かざれば、寫實の爲に寫實をなすの弊を免れ難し。若し夫れ寫實と理想と兼ね備へたるものに

至りては情熱なくして如何に其の妙趣に達するを得べけんや。

情熱は虚思の反對なり、情熱は執なり、放にあらず。凡そ情熱のあるところには必らず執るところあり。故に大なる詩人には必らず一種の信仰あり、必らず一種の宗教あり、必らず一種の神學あり。ホーマーに於て希臘古神の精を見る、シエーキスピーアに於て英國中古の信仰を見る、西行に於て西行の宗教あり、芭蕉に於て芭蕉の宗教あり、唯だ俗眼を以て之を視ること能はざるは凡ての儀式と凡ての形式とを離れて立てる宗教なればなり。彼等の宗教的觀念は具體的なるを得ざるも、之を以て宗教なしと言ふは、宗教の何物たるを知らざる論者の見なり。人類に對する濃厚なる同情は以て宗教の一部分と名づく可からざるか。人類の爲に沈痛なる批判を下して反省を促がすは以て宗教の一部分と名く可からざるか。トラゼヂーも以て宗教たるを得べく、コメデーも以て宗教たるを得べし。然れども誤解すること勿れ、吾人は彼の無暗に宗教と文學を混同して、その具體的の形式に箝めんとまでに意氣込みたる主義に左袒するものにあらず。

宗教(余が謂ふ所の)は情熱を興すに就いて疑ひなく一大要素ならずんばあらず。是非と善惡とを辨別するに最大の力を持てる宗教なかりせば、寧ろブルータルなる情熱を得ることあるとも優と聖と美と備へたる情熱は之を期すべからず。宗教的本能は人心の最奥を貫きて純乎たる高等進化をすべての觀念に施すものなり、あはれむべき利己の精神によつて偸生する人間を覺醒して、物類相愛の妙理を觀ぜしめ、人類相互の關係を悟らしむるもの宗教の力にあらずして何ぞや。玆に宗教あり、而して後に高尚(ノーブル)なる情熱あり、宗教的本能を離れざる情熱が美術の上に異妙のエボルーションを與ふるの力豈輕んずべけんや。

いかに深遠なる哲理を含めりとも、情熱なきの詩は活きたる美術を成し難し。いかに技の上は情巧を極むるものと雖、若し情熱を缺けるものあれば丹青の妙趣を盡せるものと云ふべからず。美術に餘情あるは、その作者に裡面の活氣あればなり。餘情は徒爾に得らるべきものならず、作者の情熱が自からに湛積するところに於て、餘情の源泉を存す、單純なる模倣者が人を動かすこと能はざるは之を以てなり。大なる創作は大なる情熱に伴ふものなり。創作と模倣、必竟するに情熱の有無を以て判すべし、然り丹青家が無意味なる造化の模倣を以て事とし、只管に虚譫をのみ心とするは抑も情熱を解せざるの過ちなり。

顧みて明治の作家を屈ふるに、眞に情熱の趣を具ふるもの果して之を求め得べきや、露伴に於て多少は之を見る、然れども彼の情熱は彼の信仰(宗教?)によりて幾分か、常に冷却せられつゝあるなり。彼は情熱を餘りある程に持ちながら、一種の寂滅的思想を以て之を滅毀しつゝあるなり。彼がトラゼヂーの大作を成さゞるは他にも原因あるべけれど、主として此理あればなるべし。紅葉の情熱は宗教と共に歩まず、常に實際(リアル)と相追隨するものなり。故に彼は世相に對する濃厚なる同情を有すると雖、其の著作の何とやら技の妙に偏して、想の靈に及ばざるは寧ろ情熱の眞ならざるに因するにあらずとせんや。美妙に於ては殆情熱と名くべきものあるを認めず。叙事家としては知らず、寫實家としての彼の技倆は紅葉に及ぶべからず。湖處子を崇拜する人々にして荐りに彼の純潔を言ふ者あるは好し、然れども余は彼の純潔が情熱の洗禮を受けたるものにあらざるを信ずるが故に、美しき純潔なりと言ふを許さず。嵯峨のやにおもしろき情熱あるは實なり、然れども彼の情熱は寧ろ田舍法師の情熱にして大詩人の情熱を離るゝこと遠しと言ふべし。頃日古藤庵の悲曲續出するや、讀者孰れも何となく奇異の觀をなすと覺ゆ。要するに古藤庵の情熱自から從來の作者に異るところあればなるべし、悲曲としての價値は兎も角も吾人は其の情熱を以て多く得難きものと認めざるを得ず。齋藤綠雨におもしろき情熱あるは彼の小説を一見しても看破し得るところなれど、憾むらくはその情熱の素たる自から卑野なるを免かれず、彼の如く諷刺の舌を有する作者にして彼の如く野卑の情熱をもてるは惜しむべき至りなり。彼をして一年間も露伴の書齋に籠もらしめばやと外目には心配せらるゝなり。今日の作者が病はその情熱の缺乏に基づくところ多く、人間觀に嚴肅と眞贄とを今日の作家に見る能はざるもの職として之に因せずんばあらず。好愛すべきシンプリシチーと愛憐すべきデリケーシーとを見る能はざるも職として之に因せずんばあらず。若し日本の固有の宗教を解剖して情熱と相關するところを發見するを得ば文學史上に愉快なる研究なるべけれども、之れ余が今日の業にあらず、聊か記して識者に問ふのみ。

一夕觀

其一

ある宵われ牕にあたりて横はる。ところは海の鄕、秋高く天朗らかにして、よろづの象、よろづの物凛乎として我に迫る。恰も我が眞率ならざるを笑ふに似たり。恰も我が侷促たるを嘲るに似たり。恰も我が力なく能なく辨なく氣なきを罵るに似たり。渠は斯の如く我に徹透す、而して我は地上の一微物、渠に悟達することの甚だ難きは如何ぞや。

月は晩くして未だ上るに及ばず。仰いで蒼穹を觀れば、無數の星宿紛糾して、我が頭にあり。顧みて我が五尺を視、更に又内觀して我が内なるものを察するに、彼と我との距離甚だ遠きに驚ろく。不死不朽彼と與にあり、衰老病死我と與にあり。鮮美透凉なる彼に對して、撓み易く折れ易き我れ如何に赧然たるべきぞ。爰に於て、我は一種の悲慨に擊たれたるが如き心地す。聖にして熱ある悲慨我が心頭に入れり。罵者の聲耳邊にあるが如し、我が爲すなきと我が言ふなきと我が行くなきとを責む。われ起つて茅舍を出で、且つ仰ぎ且つ俯して、罵者に答ふるところあらんと欲す。胸中の苦悶未だ全く解けず。行く行く秋草の深き所に到れば、忽ち聽く蟲聲縷の如く耳朶を穿つを。之を聽いて我心は一轉せり、再び之を聽いて悶心更に明かなり。曩に苦悶と思ひしは苦悶にあらざりけり。看よ卿々として秋を悲しむが如きもの、彼に於て何の悲しみかあらむ。彼を悲しむと看取せんか、我も亦た悲しめるなり。彼を吟哦すと思はんか、我も亦た吟哦してあるなり。心境一轉すれば彼も無く、我も無し、邈焉たる大空の百千の提燈を掲げ出せるあるのみ。

其二

われは歩して水際に下れり。浪白く萬古の響を傳へ、水蒼々として永遠の色を宿せり。手を拱ぬきて蒼穹を察すれば、我れ「我」を遺れて飄然として、襤褸の如き「時」を脱するに似たり。茫々乎たる空際は歴史の醇の醇なるもの、ホーマーありし時、プレトーありし時、彼の北斗は今と同じき光芒を放てり。同じく彼を燭らせり、同じく我れを光らせり。然り、人間の歴史

は多くの夢想家を載せたりと雖、天涯の歴史は太初より今日に至るまで大なる現實として殘れり。人間は之を幽奥(ミステリー)として畏るゝと雖、大なる現實は始めより終りまで現實として殘れり。人間は或は現實を唱へ、或は夢想を稱へて、之を以て調和す可からざる原素の如く諍へる間に天地の幽奥は依然として大なる現實として殘れり。

其三

われは自から答へて安らかなる心を以て蓬窓に反れり。わが視たる群星は未だ念頭を去らず。靜かに燈を剪つて書を讀まんとするに、我が心はなほ彼にあり。我が讀まんとする書は彼にあり。漠々たる大空は思想の廣ろき歴史の紙に似たり。彼處にホーマーあり、シエークスピーアあり、彗星の天系を亂して行くはバイロン・ボルテーアの徒、流星の飛び且つ消ゆるは泛々たる文壇の小星、吁、悠々たる天地、限なく窮りなき天地、大なる歴史の一枚、是に對して暫らく茫然たり。

ゆきだをれ

痩せにやせたるそのすがた、
枯れにかれたるそのかたち、
　何を病みてかさはかれし、
　何をなやみて左はやせし。
みにくさよ、あはれそのすがた、
いたましや、あはれそのかたち、
　いづくの誰れぞ何人ぞ。
　里はいづくぞ、どのはてぞ。
親はあらずや子もあらずや、
ゆきだをれ

妻もあらずや妹もあらずや、
　あはれこの人もの言はず、
　ものを言はぬは啞ならむ。
啞にもあらぬ舌あらば、
いかにたびゞとかたらずや。
　いづくの里を迷ひ出て、
　いづくの里に行くものぞ。

いづこよりいづこへ迷ふと、
たづぬる人のあはれさよ。
　家ありと思ひ里ありと、
　定むる人のおろかさよ。
迷はぬわれを迷ふとは。

迷へる人のあさましさ。
　親も兒も妻も妹も持たざれば、
　闇のうきよにちなみもあらず。
みにくしと笑ひたまへど、
いたましとあはれみたまへど、
　われは形のあるじにて、
　形はわれのまろふどなれ。
かりのこの世のかりものと、
かたちもすがたも捨てぬとは、
　知らずやあはれ、浮世人、
　なさけあらばそこを立去りぬ。

こはめづらしきものごひよ、

唖にはあらでものしりの、
　乞食のすがたして來たりけり。
　いな乞食の物知顔ぞあはれなる。
誰れかれと言ひあはしつ、
物をもたらしつどひしに、
　物は乞はずに立ち去れと、
　言ふ顔にくしものしりこじき。
里もなく家もなき身にありながら、
里もあり家もある身をのゝしるは、
　おこなる心のしれものぞ、
　乞食のものしりあはれなり。
世にも人にもすてられはてし、
恥らふべき身を知るや知らずや、

浮世人とそしらるゝわれらは、
汝が友ならず、いざ行かなむ。

里の兒等のさてもうるさや、
よしなきことにあたら一夜の、
月のこゝろに背きけり、
うち見る空のうつくしさよ。
いざ立ちあがり、かなたなる、
小山の上の草原に、
　こよひの宿をかりむしろ、
　たのしく月と眠らなむ。
立たんとすれば、あしはなへたり、
いかにすべけむ、ふしはゆるめり、
ゆきだをれ

そこを流るゝ清水さへ、
今はこの身のものならず。
かの山までと思ひしも、
またあやまれる願ひなり。
西へ西へと行く月も、
山の端ちかくなりにけり。

むかしの夢に往來せし、
榮華の里のまぼろしに、
このすがたかたちを寫しなば、
このわれもさぞ哄笑ひつらむ。
いまの心の鏡のうちに、
むかしの榮華のうつるとき、

そのすがたかたちのみにくきを、
われは笑ひてあはれむなり。
むかしを拙なしと言ふも晩し、
今をおこぞと言ふもむやくし、
夢も鏡も天も地も、
いまのわが身をいかにせむ。
物乞ふこともうみはてゝ、
とふべず過ぎしは月あまり、
何事もたゞ忘るゝをたのしみに、
草枕ふたゝび覺ぬ眠に入らなむ。

第六篇　斷篇及び舊稿

蓬萊曲のうちより

小詩二首

一

きみ思ひ、きみ待つ夜の更け易く、
ひとりさまよふ野やひろし、
彼方なる丘の上に咲く草花を
たをりきつゝも連なき身、
誰が胸にかざし眺めん由もなく、
思はずも揉めば散りける花片を、
また集むれど花ならず。

蓬萊曲のうちより

二

露なれば、露なれば、
　消ゆ行く可しと豫て知る、
露なれば露なれば
　草葉の陰を宿と知る。
露なれば、露なれば
　月澄む野邊に置く可しと知る、
露なれば、露なれば
　ひとたび消ゆても再た結ぶなれ。
露が身を戀しと思はゞ尋ね來よ
　すみれ咲くなる谷の下みち。

髑髏舞

うたゝねのかりのふしどにうまひして
　としつき經ぬる暗の中。
枕邊に立ちける石の重さをも
　物の數とも思はじな。
月なきもまた花なきも何かあらん、
　この墓中の安らかさ。
たもとには落つるしづくを拂ねば、
　この身も溶くるしづくなり。
朽つる身ぞこのまゝにこそあるべけれ。

ちなみきれたる浮世の塵。
めづらしや今宵は松の琴きこゆ、
遠の水音も面白し。
深々と更けわたりたる眞夜中に、
鴉の鳴くはいぶかしや。
何にもあれわが故郷の光景を、
訪はゞいかにと心うごく。

ほられたる穴の淺きは幸なれや。
墓にすゑたる石輕み。
いでや見むいかにかはれる世の態を、
小笹蹈分け歩みてむ。
世の中は秋の紅葉か花の春、

いづれを問はぬ夢のうち。
暗なれや實に春秋も、
あやめもわかぬ暗の世かな。
月もなく星も名殘の空の間に、
雲のうごくもめづらしや。
天を衝く立樹にすがるつたかつら、
うらみあり氣に垂れさがり。
繁り生ふ蓬はかたみにからみあひ、
毒のをろちを住ますらめ。
思ひ出るこゝぞむかしの藪なりし、
いとまもつけでこのわが身。
あへなくも落つる樹の葉の連となり、
死出の旅路をいそぎける。

すさまじや雲を蹴て飛ぶいなづまの
　空に鬼神やつどふらむ。
寄せ來るひゞき怖ろし鳴雷の、
　何を怒りて騒ぐらむ。
鳴雷は髑髏厭ふて哮るかや、
　どくろとてあざけり玉ひぞよ。
昔はと語るもをしきことながら。
　今の髑髏もひとたびは、
百千の男なやませし今小町とは
　うたはれし身の果ぞとよ。
忘らるゝ身よりも忘るゝ人心、
　きのふの友はあらずかや。

人あらば近ふ寄れかし來れかし、
　むかしを忍ぶ人あらば。
天地に盈つてふ精も近よれよ、
　見せむひとさし舞ふて見せむ、
舞ふよ髑髏めづらしや髑髏の舞、
　忘れはすまじ花小町。
高く跳ね輕く躍れば面影の、
　霓裳羽衣を舞をさめ、
かれし咽うるほはさんと溪の面
　うつるすがたのあさましや。
はら〳〵と落つるは葉末の露ならで。
　花の髑髏のしとしづく

うらめしや見る人なきもことはりぞ、
　昨日にかはれる今日の舞。
巔頭の山を成しける夢の跡、
　覺めて恥かし露の前。
この身のみ秋にはあらぬ野の末の
　いづれの花か散らざらむ。
うたてやなうきたる節の吳竹に、
　迷はせし世はわが迷ひ。
忘らるゝ身も何か恨みん悟りては、
　雲の行來に氣もいそぐ。
暫し待てやよ秋風よ肉なき身ぞ、
　月の出ぬ間にいざ歸らむ。

彈琴

悲しとも樂しとも、
浮世を知らぬみとりこの。
いかなればこそ琵琶の手の、
うごくかたをば見凝るらむ。
何を笑むなる、みどりこは、
　琵琶彈く人をみまもりて。
何をか囁くみどりこは、
　琵琶の音色を聞き澄みて。
浮世を知らぬものさへも、

浮世の外の聲を聞く。
こゝに音づれ來し聲を、
いづこよりとは問ひもせで。
破れし窓に月滿ちて、
埋火かすかになりゆけり。
こよひ一夜はみどりこに。
琵琶のまことを語りあかさむ。

みゝずのうた

この夏行脚して廻りありきけるとき、或朝ふとおもしろき草花の咲けるところに出でぬ。花々眺むるに餘念なき時、わが眼に入れるものあり、これ他の風流漢ならずして一蚯蚓なり。おかしきことありければ記しとめぬ。

わらじのひもののゆるくなりぬ、
まだあさまだき日も高らかに、
ゆうべの夢のまださめやらで、
いそがしきかな吾が心、さても雲水の
身には恥かし夢の跡。

つぶやきながら結び果てゝ立上り、
歩むとすれば、いぶかしきかな、
われを留むる、今を盛りの草の花、
わが魂は先づ打ち入りて、物こそ忘れめ、
この花だにあらばうちもゐ死なむ。

みゝずのうた

そこ這ふは誰ぞわが花の下を、
答へはあらずはひまわる、
わが花盗む心なりや、おのれくせもの、
思はずこぶしを打ち擧げて
うたんとすれば、やよしばし。
「おのれ地下に棲みなれて
花のあぢ知るものならず、
今朝わが家を立出でゝより、
あさひのあつさに照らされて、
今唯だ歸らん家を求むるのみ。

「おのれは生れながらにめしひたり、
いづこをば家と定むるよしもなし。

朝出る家はタべかへる家なず、
花の下にもいばらの下にも、
わが身はえらまず宿るなり。

「おのれ生れながらに鼻あらず、
人のむさしといふところをおのれは知らず、
人のちりあくた捨つるところに、
われは極樂の露を吸ふ、
こゝより樂しきところあらず。

「きのふあるを知らず
あすあるをあけづらはず、
夜こそ物は樂しけれ、
みゝずのうた

草の根に宿借りて
歌とは知らず歌うたふ。」

やよやよみゝず説くことを止めて
おのがほとりに仇あるを見よ、
智慧者のほまれ世に高き
蟻こそ來たれ近づきけれ、
心せよ、いましが家にゆるぎ行きぬ。

「君よわが身は仇を見ず、
さはいへあつさの堪へがたきに、
いざかへんなん、わが家に、
そこには仇も來らまじ、安らかに、

またひとねむり貪らん。」

そのことといまだ終らぬに、
かしこき仇は早や背に上れり、
こゝを先途と飛び躍る、
いきほひ猛し、あな見事、
仇は土にぞうちつけらる。

あな笑止や小兵者、
今は心も強しいざまからむ、
うちまはる花の下、
惜しやいづこも土かたし、
入るべき穴のなきをいかん。

みゝずのうた

またもや仇の來らぬうちと
心せくさましほらしや。
かなたに迷ひ、こなたに惑ひ、
ゆきてはかへり、かへりては行く、
まだ歸るべき宿はなし。

やがて痍もをちつきし
敵はふたゝびまとひつく。
こゝぞと身を振り跳ねをどれば、
もろくも再びはね落され、
こなだを向きて後退さる。

二つ三つ四ついつしかに、敵の數の、
やうやく多くなりけらし。
こなたは未だ家あらず、
敵の陣は落ちなく布きて、
こたびこそはと勇むつはもの。

疲れやしけむ立留まり、
こゝをいづこと打ち案ず、
いまを機會ぞかゝれと敵は
むらがり寄るをあはれ悟らず、
たちまち背には二つ三つ。

振り拂ひて行かんとすれば、
みゝずのうた

またも寄せ來る新手のつはもの。
蹈み止りて戰はんとすれば
寄手は雲霞のごとくに集りて、
幾度跳ねても拂ひつくせず。

あさひの高くなるまゝに、
つちのかわきはいやまして。
のどをうるほす露あらず、
悲しやはらばふ身にしあれば
あつさこよのふ堪へがたし。
受けゝる手きずのいたみも
たゝかふごとになやみを增しぬ
今は拂ふに由もなし、

爲すまゝにせよ、させて見む、
小兵奴らわが背にむらがり登れかし。

得たりと敵は馳せ登り、
たちまちに背を蓋ふほど、
くるしや許せと叫ぶとすれど、
聲なき身をばいかにせむ、
せむ術なくてたをれしまゝ。

おどろきあきれて手を差し伸れば
パッと散り行く百千の蟻、
はや事果しかあはれなる、
先に聞し物語に心奪はれて、

みゝずのうた

救得させず死なしけり。
ねむごろに土かきあげ、
塵にかへれとほふむりぬ。
うらむなよ凡そ生とし生けるもの
いづれ塵にかへらざらん、
高きも卑きもこれを免れじ。

起き上ればこのかなしさを見ぬ振に、
前にも増せぬ花の色香。
汝もいつしか散らざらむ。
散るときに思ひ合せよこの世には
いづれ絶えぬ命ならめや。

月前の柳

まねく手はほそくたゆめど空とほく
なびかぬ月のうらめしきかな

花間蝶

こゝろありやなしやはしゝず花のうちに
うさをはなれぬ蝶ぞゆかしき

雨後の花

雨すぎてうらめしけなる花のおも

ちるまで友とちぎらざりしに
あさしとなちぎりとがめそうきよには
はなれがたきもはなれやすきを

友に

折れたまゝ咲いて見せたる百合の花

マンフレッド及ひフォースト（斷篇）

大陸文學漸く其絶頂に達せんとし一世を睥睨せしゴエテも既に老境に臨み、其戴きし大桂冠未だ嗣ぐべき人あらず。忽ち大月をアルプス山上に懸け來つて、一篇のフォースト、ゴエテが最後の傑作として、ゴエテが桂冠の眞價として、全歐洲を震駭せり。此時に當つてはシエーキスピーアの崇拜熱も漸く薄らぎて、英國文學何となく、寂寥たる觀なきにあらず。前世記の幕と共にボーブ、クーパア等の群雄は冷却せる玉露の下に、無言の人となりて捲き去られ、シエリー、スコット等未だ大陸文學に對して傲顔なる能はず。

フォースト出でゝより幾年ならず、以太利に飄遊して豪逸峭崛の名をチヤイルド、ハロルドに震ひしバイロンの手に成れるマンフレッドなる戲曲出づ。バイロンは此時尚ほ壯にして其の心想漸く詩情より實動を渴望するの域に進み、其書架を、其寢牀を、其醫師を、其從者を載せて、

富豪なる貴族の華奢を盡して、アルプス山を越え、自ら詩界のナポレオンを以て許さんとし、峰巒を疾呼し、懸瀑を號令し、閃電暴雷を指揮し、崇厳なる自然を透視し、其幽玄なる至境に向つて萬斛の熱涙を傾瀉し、去つて凱旋のシイザルに似て三寸筆頭に迸洩せしもの即ちこのマンフレッドなり。

ゴエテの始めてマンフレッドに接するや、拍手して己れのフォーストに想を同ゝするを歎美し、能くも斯の如く其形裝を異にして類似せる奇想を縱にせし者かなゞ言ひし。而して、バイロンは自ら言ふ、われ獨字を解せず、フォーストを讀まざる前にマンフレッドの稿を脫せりと。フォーストはゴエテの傑作なり、世界の傑作なり、マンフレッドは實にバイロンの傑作なり、世界の一大奇觀と稱するも過譽ならじ。而して彼も鬼神談既に古文人の談柄に上るのみにして文界將に實際に進まんとするの時に成り、此も實に近代の鬼神を驅馳し、新創の幽境に特異の幽玄的超自然の理想を着て出でたり。第十九世記の雙兒傑作と呼ばるゝも豈に怪しむに足らんや。

ゴエテも厭世家なり、バイロンも厭世者なり。ゴエテは其日記に書して「われ運命の好侶として生れ、福祥世に全かりし、然れども今年七十三歳、回顧してわが過去の生涯を見るに四週間の樂日月を得し事あらず」と。彼れ自ら言へり、わが詩を作るは自己を責むるなり、自己を罰するなりと。然れどもゴエテは其厭世家たるの分量に於て遙かにバイロンに及ばざりき。抑もバイロンが、天地を跼促たりとし、人生を悲戯の最極と觀ずるに至れるは、其搖籃の中にありし時より、否な寧ろ彼の幼少なるバイロンの爲に泣き、又た屢々小バイロンをして暗室に欷歔徹宵ならしめし母氏の胎中にありし時より既に其厭世的迷想の根蔕を固ふしたるを見るべし。而して又其美術に關する兩詩人の位地を熟察し來れば兩者の理想の上に及せる隔離、容易に看破することを得べし。ゴエテは古人も言ひし如く、詩人よりも寧ろ美術家なり。其年齒未だ少かりし時山水の絶景に眩惑せられて、詩人と畫工との間に、其前途を彷徨せしめて、幾度も心を玆に迷はせりと言ふものあるを見ても、後來一世を震動せし大技倆は其詩精の分量を持ちたりしよりも、多く自然の奥妙を恰も優婉なる少女が己れと同年輩なる己れと、同位地なる美人の畫に對して精微に觀察し細緻に分析するが如き美術的風流詩想の粹を踏破したるに歸すべし。

バイロンに至りては然らず、其詩は即ち神微なる自然の上に幻寫せるバイロン自身也。卑猥

なる人生を怒りて、常に暴騰せる火煙なり、休憩すること能はざる、慰藉すること能はざる所謂「目を開きながらに切齒する」熱汗なり。思想は實にアルプス山より落つる崩雪の如く、然も想像は一小詩人よりも多からざるは、抑も彼が自己に餘りに「詩」にして想像を容るゝの閑室に事缺けばなり。故に其詩の如きも往々にして咄嗟の間に成り、熟練を積む事なかりき。ブリゾナア、オフ、チロンの名篇も僅に三日子を費せしのみなりと聞けり。之を以て見るにバイロンは寧ろ詩人にして美術家の聲譽は最も少なく荷ふ事を得べきなり。

第七篇　日誌及び手紙

日誌より

明治二十二年四月中　（透谷廿二歳の時）

四月一日　病來久しく文筆に倦み自傳も中斷れとなり居たりしが、近頃漸く舊來の精神を回復し、勇氣を奮ふて學事にも從事する樣になりたれば再び自傳を記述することを始めんと思ふなり。

余は實に過る二三年の間を混雜紛擾の間に送りたり、愛情の爲め、財政上の爲め、或は病氣の爲め、是等の凡てが余をして何事をも成すことなく過ぐる二三年を費消せしめたり。人生僅に五十年、今日の壯顏は明日の白頭、時日の無罪なる小童は今日の多恨多罪なる老人とならんとす、況んや余の如き多病なる者に於てをや。

實に余が眼前には一大時辰機あるなり。實に此時辰機が余をして一時一刻も安然として寢床に横らしめざるなり。嗚呼余が前後左右を見よ、驚く可き余の運命は萎縮したるにあらずや。自ら悟れよ、自ら慮れよ……獨立の身事遂に如何んして可ならんとする？

同十二日　「楚囚の詩」と題して多年の思望の端緒を試みたり。大に江湖に問はんと印刷に附して春祥堂より出版することゝし、去る九日に印刷成りたるが又熟考するに餘りに大膽に過ぎたるを慚愧したれば、急ぎ書肆に走りて中止することを賴み、直ちに印刷せしものを切りほぐしたり。自分の參考にも成れと一册を左に綴込み置く。

明治二十三年中　（透谷廿三歳の時）

二月廿二日　末兼來る談話半日、古文を讀み詩人を評するなど面白かりし。露伴を評して爲すありと言へり。

同廿三日　近來讀賣新聞の女學生攻擊盛に起る。

同廿四日　イビー先生方休業なり。

吾が「明治文明」史は項を分つて「宗教」と云ふ所に極めて重要なる問題多かるべし。佛教の衰頽せる有樣より起れる一般の宗教輕蔑心等は大に道德を破りたるものなり。

同廿七日　余が「渡守日記」を以て一パンフレットと爲さん心組愈々切なり、是れに由りて余は余が文學上に抱ける者を世に示すべし。

余一日遊びて此渡守を見、これを社會に紹介せん。先づかれの人形を示し、後に順を追ひて左の如き者を出すべし。

小兒（十二三歳）。是れには小兒が渡守の前に來り、其愛すべきさま、無邪氣のさま等を序して、翁に其名を問へば翁無名と答ゆ。凡ての最後に彼少年が愛すべき男兒と成り、愛の爲めに死を決する迄に至るべし。

盲人。彼をして心中の不平を談らしめよ、彼が政治家を罵るの口調、浮世を嘲るの慷慨重もに爰に現はるべし。

尙ほ愚人及び舊友を來り訪はしむ。

一里餘にして一小閭里あり、これに行いて見る。其里に一人の富める者あり。渡守屢々行き尋ね。（渡守をして前に既に言はしむべし。かれが家は卑しからず、彼が學藝は淺からず、唯世界の外界を見るにあり。其奇怪にして、否々寧ろ彼の身の上と彼が身を隱せし原因をば秘密となす方好かるべし）其里に一盲女あり、渡守尋ねて聞く、彼が身上の悲慘悉くひらき言へり。爰に其里に一富人あり。彼の盲女は先きに此富人の妻にてありしなり、而して彼少年は此盲女の兒なりしなり。

渡守日記はチユードレヂツヒの口調にてやるべし翁曰く。「一度吾れ人間の最下流に居れり。爰に居りて世界の慘憺の甚しきを見たゝ、其相喰ふ所、相嚙む所のすべては吾眼中に集まれり。政治を說く者は虛然之を說き宗教をいふ者は恍然之を言ひ、而して此下流まで達せず。」渡守の生れし所其他何もわからず、唯一日記者此を過ぎて逢ひ、其所以を聽き、後尋ね到るに何もなし（これを末節に爲すべし）渡守は正さに哲學的詩人的の醇粹なる者となるべし。ブラトーを讀みカントを讀みて無衣遊士曰く吾れ世に飄ふこと數載未だ曾て疑迷を脫せず、希の哲學も近世の哲學も、悉く以て余を慰癒するに堪にず、懨々とし、恍々とし、虛然とし、鬱然とし、想至り情極むとも以て余を如何ともするなし。

甲武の邊境に一川あり、吾聞く此處に一隱仙の住めるありと。川のほとりに小藥屋あり、彼れ一棹に據りて衣食す。彼れ說き出でゝ人類の兇惡を攻擊す。Five years of town living これ亦渡守翁談話の一項たるべし。

三月三日　四谷に大火ありしが今朝亦淺草大火。

同　五日　三田田町邊大火イビー氏よりの歸途、聖坂のコーサンド氏を見舞ひたり。其學校にも其教會にも病めるも老たる者も充てり、彼等の荷物甚だ少し。辭して歸るに狂へる寡婦と見へし老母少女の手を引いて飯櫃一つ中には茶碗と何か入れて居り、まご〳〵す。實に去り難かりし。

同　六日　近來甚だなまけ者に相成たり。多分春氣のせいならん、されども今春は大責任あり。

同　九日　余思ふ、余が進路は露伴篁村等の一個〳〵を評し、又一字題の寓言を作るべしと。「餓」「愛」「劍」等は忘る可らず。「劍」は稍々春の屋の一圓札を擬すべし。吾れ事實に由りて「處女」を書き始めたり。

余が少年なりし頃家を逃れて鎌倉に遊ぶ、大塔の宮の穴の中苦むすあたりの狀を詳說せよ。

（少年園に與ふべし）

同十一日　晴天風あり。大さん疲れて困つた。

一の島あり、此島にては他島より來りて結婚する能はざるの規則あり。之に對する嚴罰もあり。島長の家に他より流浪し來りたる島長のむすこあり。かれが本島の謀叛の事を記す（流浪するに至るまでも）是をどだいとする如何。

同十二日　「チャリチー」を論じて基督教新聞に投ずべし。

同十三日　「露伴子」と題して、彼の觀念漸々詩人的となるを賛め、而して眞正の詩人は其念ずる所莊大にして區々たらず云々、而して最も詩人に尊ぶ所は志節なるを論じ、幸に子に於て奇節を見る、願くは之を發達せしめよ。遂に見る所諒然、何が邦民の利益と成り、何が同屬の害毒と成るか、眞正の美は眞正の道義にある事などを云ひ、君が釋氏を取て無用の如く論ぜるを見たり、君請ふギョーテの如く疑へ、此疑は以て君を詩人たらしむべし。酒云々を見て君が志をも知れり。旅行日記を見て須らく天眞爛熳たるべし。詩人の天職は如上、詩人の意志は不羈豪放云々、詩人は須らく日を見月を見て區々たる科學的の算當に拘泥せざるべし。

萬物悉く詩人の前には記號耳、其裏面こそ汝が研究すべき目的物なり。道德上の如き余は近來の基督信者が文學家に責むる如くには言はねども成るべく注目あるべきなり。

同十六日　「死」　此題にて書くべし。蟬は三日にて死す、人は五十年にして死す云々。

吾は塔澤の片ほとりに居をいとなみて書を置き住むの思切なりし。

「文字考」　ラテン一タイの語は年を追て短く成り日本話は年を逐ふて長く成る。

「西行傳」成らんとす、行いて日本の歷史を讀め、悲慘限りなき者何處にかある。日本の歷史には朝廷の……あるのみ、然れども貧民……說明する者なきなり。(西行撰集を讀みてこれにて王者を論ずべし。上院の墓に到る所を見よ)

何れの時にか不平なからん、不平の聲は何れの時にも聽ゆ。詩人あり歌人あり、僧あり、豫言者あり。日本の歷史に不平多し。然れども不平多きは西行の時代に增すなからん。然れども西行は不平を詩歌に洩すの徒に非ず、彼は旣に上に登れり、彼は旣に不平を吊ふ身となりしなり。西行の時代は佛敎の大に隆興せし時なり、少くとも陰に盛りなりしなり。撰集に見る所の諸名僧偶然ならず。之を爲せるは時なり、ひとり源氏の不平者に限らず。

凡そ詩人は自ら作りしに非ず、他より作られしなり。自ら詩人として生るれど、是をして詩を作るの詩人たらしめ、世界の靈秘を發表するの詩人たるは他よりなさるゝなり。今古に超越する者はシエーキスピアなるが、彼如何にして彼に成りし、學識にあらず、唯身の經歷なり。少々字を作して世の荒波に逢へること甚しく、時代も戀時代なり。夫が故彼の如き者出來せり。而して西行の時代如何。

西行の歌は實に人世を吊へり、人世を敎へり。之れ蓋し彼が詩を歌ふの意ならず、自ら彼が胸臆を躍り出づるが故に然るのみ、今の詩人の如くならず。

西行の經歷する所多し、美人あらん、美衣あらん。金殿あらん、財寶あらん、而して凡て是れ彼に於て如何。彼れルーサーたりしならん、若くはシエークスピーアたりしならん。ルーサーがルーサーと成りし如く沙翁が沙翁と成りし如く、西行が西行と成りしなり、西行豈別人ならん。當時の……彼をして西行たらしめしなり。落語家遊三會て曰く、西行は上院の愛妃に戀着して思ひ達せず、遂に出家すと、此の如きは秘密のみ。然れども大詩人の大悟するは重に此の如きに因せり。極めて淸からざる前に極めて汚穢なることあり、極めて善ならざ

る前に極めて惡なるあり、況んや西行の如き、豈少童の中に西行ならん。我知る極めて多情多望多恨なりし者則ち西行なりと。而して若し大に疑ひし者も亦西行ならん。道を求むる者道を得、始めより西行ならば遂に西行を得ざらん。彼道なき所にあり。道なき苦境を渡りて而して後に道を得けん。文覺上人の西行を見ざりし時彼を呼んで僧にあらずと云へり、余も亦是れに似たる言を爲さんと欲す。彼れ僧に非ず、僧の時に於て僧たりしのみ。マホメットの時ならばマホメットと成り、ルーサーの時ならばルーサーと成る人なるを信ず。かれ僧の衣を穿てる者のみ。大深大遠を貫視するは敢へて他に讓らず。

四月二日　「盲目旅人」を書きて讀賣新聞にもて行け。

……

八月一日　昨日は「天香」君終りに近くして筆熟せず、心大に怒れりしも今日は心地よく數枚を走らせたり。

同　二日　吾れ此夜月のさやけきを見ずして眠れり。あすは入谷の朝顔見んと樂む。此日陰雨濛々西風濕涼わが痼疾吾れを困頓せしめ書を披けば眠らんとし、歩を屋外に試れば氣萎む、「天香君」一たび稿を脫するに垂んとして是を繼ぐの心なく終日鬱々たり。

「あまか君」の中に（牢舍の段）彼が眠れる間に神來りて眠りつゝ談るさまを書かば如何、是れ甚だ新奇にして人を喜ばせんも知らず。

吾れ小田原にあるの間に西行傳を終るべし。

西行の詩人としての性格は「吉野山こぞのしをりのみちかわてまた見ぬかたのはなをたずねむ」に於て見るべし。則ち千種萬樣の悲境に入りて遂に達然高悟の人となりしにあり、ひとり佛道の故にあらず。

「こよひこそおもひしるらめ淺からずきみにちきりのある身なりとは」右は一院かくれ給ひし折のうたなり。其質直なること思ふべし。

同三日　知らず越せしきのふは二百十日とぞ。ふつか三日降りしきりし雨足なほやまず、今日よりあけぼのに早く起きてより雨雲のみ空にかゝり折々にしづくを流すにわが陋窓のながめもあきて心地常ならず、されど夜に入りては月輕雲の間に出沒し眺めまた尋常ならず、われ何事もなさで過ぎし。

同四日　曉起節を曳て築地を歩む。雲重く雨を催ふし、風はなく柳動かず。「天香君」將さに全局を終わんとしつ、なほわが氣到らず、これは時經月歷るにあらでは出來上るまじと思ふ。西行傳成りたらば「再來浦島」こそ其次ぎに取懸るべきものならめ。

第一、來着。第二、世の變遷。第三、今の戀昔の戀。第四、古往今來の小歷史。つら〳〵思ふに「盲目旅」「金持乞兒」等の小篇は今年の中に成り「渡守」の一篇もやがて成るべし。而して「再來浦島」は明年を以て成り、「天香君」は明後年を期すべし、「西行傳」は折を見て出すことよろし。「盲者巡禮」は「世にめくら程つらきはなく又めくら程」云々の句を以て始むべし。彼れ若くして明なし、錢はなし、鄙の里を辭して旅へ登る。終りに花の都に着きて、始めに大學に往きて眼の療治を賴む、癒ゆべからずといふ、病原の見るべきなし。ひとなみの眼にて見わぬはづなしと言ふ、しかも見わず、然らばもろ〳〵の寺に詣でんといひて立ちにき。名譽地藏を拜み、錢のほとけ寺に詣で云々。

「天香君」は「おとしものとし無名にて出す可し、おとし主序として中に言へ「われかゝるものを作りてより日夜なやみ思ひし、誇大なる放言もて世をてらふが如き觀もあり、また未熟なる詩體にて世に笑はれん恐れもあり、本屋にもて行く氣も起らず、遂に心を決して社養眞の窓を犯して投入れぬ云々」

同十三日　「浦島」　浦島は奇異なる生涯を送れる者なり。釣に往きてむすびくひける時魚かゝりてあはてふためき、むすび投げ捨てゝけるおかしさよ、魚も得ず、むすびはすてるおろかさよ、魚は逃げむすびは砂に達磨樹云々。

同十四日　うたひ稽古始めたり

同十五日　夕すゞにわん先に出て風を迎ふ、子供等の集りて花火遊ぶぞおもしろき、いもをかぢりつゝあるもの、水菓子ひとへらを有難そうににぎるもあり、花火散りて足元に奔り逃げ出すどよみの無邪氣なる。

同十七日　夜われ早川にうつる。閑夏記第二及第三成る。此夜われば〻に伴はれて觀音に詣り御詠歌をきけり。

同十八日　江の浦まで歩みたり、景色よろし、わかき夫妻の六部を見たり。「渡守」の腹案ほゞ成りて更に今宵かねて貯わし「鼠」の第二を思ひ出でたり。

「鼠」　或村に大家ありて、將に衰へて亡びんとす。こゝの主人に妾あり、家折々にいさかひ起る、不祥の事のみ此家に多し。此等の事鼠ども出でゝ見る。(家の事を眞髓とし其亡ぶる樣な國の滅亡にたとへなば適ひもせむ、然らずもよし、面白し。鼠にはどぶ鼠何助とか黑鼠何兵衛とかいろ〳〵名を命ずべし)一ッの鼠出でゝ猫と戰ひ傷けられて、いろ〳〵のいたみごとを言ひ、煤を取來りて療治しなどし、遂に辭世を言ふて死ぬ所面白からん。猫の攻め來るを聽て防ぎする事。火事の近きにあるを知りて皆共に集りて逃げ仕度する事。佛の來りて亡さぬ樣佛具にて相談する樣の暗夜に見ゆるなど。寺の坊主が來りて經を讀み折々布施に貰ひし物を開きてそッと見るなど、これを天井より見おろして互いにどよむ。否寧ろ家の出來事を一筋として其家の娘が戀ひ男拵へて、そこへ往かんとするに之れを許さず、金ある家にゆくべしと勸むる樣など、まとまりて面白かるべし。

「渡守」の腹案略成れり。或位ある者が戀して親と世とに許されず、ひとりは貴族、ひとりは平民とす。女は憤りて尼と成り、男は僧に成ること心妙ならねば諸方を遍歷しけり。或時或ばゝの信心深きに感じて是より心を佛道に沈めけり。其村に落着て渡守となる爰をまむしや蜂の村としては如何、村の者を食はず他を困む。尼來りてまむしに食はれ云々。

同二十日　われ宮の下に行きて歸る。石垣山を越ゆ湯本におりて行きければ路なき野山をあさりて秋の虫にもしみ〴〵懇意に成りたり。

同廿七日　東京に歸る。「天香君」の中に露姫を擁して出る時かしの實を取りて仙人のくらしをする樣面白かるべし。

同三十日　「源平名殘」　第一常盤、第二賴朝、第三義經、第四實盛等囘を分て詩若くは散文にて書くべし。演劇詩にしくみてヘンリー五世の如く二篇若くは三篇に作るこそ好からん。然らざれば餘り長くて面白からず。第一篇淸盛の病臥して死ぬところの場までか、若くは義仲の沒落までやるべし。

われ決心せり、ちよこ〳〵短きものをつゞらんより長大篇のみに心を注ぐべし、其間に淸雅なる小散文を書くべし。

「天香君」世に出でゝ演劇詩の可否決すべし、然る後われこれをわが舞臺とせん。

其終りは。天地ひとりでに靜平にして、こゝに天、露ふたり立ちて祝する言葉にて終るべし。

其表紙に「星」を散すべし、其下には琴もよからん。

九月一日　近頃になき心地よき日なり、二百十日の厄日、人々が首をひねつて待ちわびしも今日になりて見れば數日來の陰雲一排し去り曉日の光り涼しく長閑なり。われ酒を沾ふて國民の爲めに祝せんと欲す。

此日湖處子來る、久野氏も來る。平和會議の爲なり。われ湖に伴ふて其家に往く之れが始めなり、一泊して歸れり。湖子余が「渡守」の趣向を激賞せり。

夜眠られぬまゝに再び同篇の趣向を考へ直す。

第一　落馬者。　第二　水一掬。　第三　百世契。
第四　奔逸。　第五　戀心地。　第六　空然家。
第七　浮浪人。　第八　初信心。　第九　渡守。
第十　初日。　第十一　第二日。　第十二　第三日。
第十三　第四日。　第十四　第五日。　第十五　第六日。
第十六　第七日。

同四日　朝靄の歌「もらすなよあだうつくしの花、消ゆる汝共に散るものを、うつくしとても幾日經ぬべき、盛りと見しははやすたり」云々樣の文字あるべし。「バットル、ラブブックス」に似せて「文字の戰」なるものをものすべし。國文家の舊文字を經とし新文家の新文字のみに據るを笑ふなり。

詩人自ら先づ詩たるべし。

元祿文學は第三時期なり。則ち第一は風流時期、第二は佛教的時期、第三は哲味。明治の文學未だ新哲味なきこと其甚大缺點なり。如何にして新文學界は起るべき。

同九日　「初戀心」忘るなよ、一篇の詩となすことを。「新蓬萊」なるもの書き初めたり。

「吾想界消ゆたり」の句を以て終るべし。

「破窓」の詩を入れて。琴のねきよくひくときに、ひとりの女出で來りてそゞろに感ず。これが辨才天なること。

「田舍政事家」「無言詩人」やるべし、前はサタイアなり。

「如何にして輕浮ならざるを得ん」これは文學の調子を慨し、之を救ふには詩人の觀念極大な

らざる可らずと云ふを主にて。

業平朝臣の曾てありし如く、大神宮にて某女と或男の愛せしことを昔になりて作りなば興あらん。

同廿一日　コーサンド氏より書簡來りて是より同氏の飜譯を爲すべき旨を傳ふ。

「伽羅枕」を批評すべし。元祿文學の弱點は高尚なるエキスプレッションを爲すに、稍々戯言的に陷るにあり、其妙處は洒々落々の中に舒述し去るにあり。

同廿四日　米九升七合なり。

日本古來の偉人を取來りて是れが傳記を批評的に歴舒するは名を廣くし、多く讀まれ、且錢を得るの一手段たるべし。日本偉人傳とでも名づけて出版するは宜しからん。

同廿五日　「蓬萊曲」終りに琴の弦きれて、吾がなほ觀音堂にあるを覺ゆ。則ち爰なりしなり。

同廿六日　「九郎義經」これは、ドラマとして向ふ一年間專ら研窮すべし。

同廿九日　コーサンド氏に行くことを始めたり、歸つて來て甚だ悲しかりし。緣日にておみながほゝづきを買ふべし、お芋もおすきだ。

「義經」。宇治河岸にて、賴朝に謁する所に始むべし。賴朝に向つて常盤と雪に立ちし幼な心より北國にさすらひし苦み、其間の用意を語り、常盤の末後、其破節の苦を說き、平家の暴横を憤り、劍を握つて兄に語る處を畫くべし。幕に近づきて、長田に向ひ、「其劍の切れなきを」など面白からん。答として、ジュリアス、シーザアを熟談すべし、ウヲーレスタインも亦始めて靜を見る處面白く書くべし。然するは後に舞曲をなさしむる時の强みを扶くべし。他の事は皆うッちやれ今はドラマの時來れるぞ。

十月十三日　「天香」の改作を爲すべし。月と慧星との會合は餘り奇なり。故に之れを廢して初齣を神等集りて「神つどひ」を爲し、天香の生長を祝し王位に登せ、ひめ娶らせんと云ふに始めん。

同十五日　「蓬萊曲」は余が最初の作として出つべし。彼の山姫が前に出でゝ、自らの世にありての面白さを談り、姫は其勇氣をほむれど、なほ彼をもて人間となし其戀心を悟らず人間をそしるべし。

同廿日　戀しらず姫は到底蓬萊曲に寫しがたければ（短期もの故）更に「戀しらず」なる散文を

書くべし。則ち田舍の景にして一公子がさまよひ行きて戀するさまをゑがくべし、いろ〳〵に戀わびつゝることをも。

同廿二日　「楊貴妃」われ支那歴史的エピック又はドラマを作りて白樂天を泣かしむべし。

十一月十一日　蓬萊曲の改作。手琴を主眼とすべし、彼れが倒るゝ時手琴を打破るべし、之を崖に投落すべし。

「西行の復生」を作るべし。

(一)鴨立澤に詩人の感慨　(二)西行が鎌倉の懐古

(三)西行が入京　(四)むかしの武藏野を想ふ。

(五)西行死後の知人を喚呼す。

同二十日　普連土女學校を教へ始む。

同廿三日　芝公園地内三十八號寺門嚴かに俗塵稍々遠きの處に居をトす。

十二月二日　「四千圓の函」　サタイアにてやるべし。

(一)當撰祝ひ(教員あり五十圓貰ひ京見物に行き云々)

(二)召集狀　(壯士來りて祝す云々)

(三)出京　(召集狀を忘れ且夫人を携ふる爲めに汽車より引返す)

(四)夫人に西洋服を着けしむ。鹿鳴館に宴會あり。

(五)黨派爭ひの爲めに演說會に妨害に行く。白馬を買ひて壯士四五名を引連れて行く。味方の者牝馬を持ちたるが故にあれて馬より落ち、大怪我を爲す。

(六)自黨の演說會に出でゝ妨害起り短刀を振廻す。

八百圓受取り其内四百圓壯士に取られて慷慨す。壯士に不平起る。壯士にをどかされて逃げ還る。家に歸れば四千圓の頭痛。

(七)下宿屋に來りたるに壯士幾人も來り宿す、車代まで支拂はす。たまらずして密かに逃出せり。壯士議場に待ちぶせて怒る。

同十一日　「義經曲」は余が第二の要作なるべし。荒村曲の飜譯成らば直に着手すべし。義經曲成功したらば直に「平氏曲」を作るべし。清盛の死ぬ所など餘程面白かるべし。斯くして源平對比して後世に傳ふるものを得べからん。義經曲成るまでに一二の田舍景を寫したるもの出

づべし。義經曲の後に一二の田舍ドラマ作るべし。

「義經曲」第一齣初案　（富士河岸の野陣）東國の武士舊を談り後を說いて……九郎二十餘騎を從て來る、梶原景時是を見て禮せずして過ぐ。義經賴朝に對面す云々。

「四千圓の函」の作意を用ゐて「狐夢貴人」といふ一篇のサタイア出來べし。右はジョン、キルピンの樣な短きものにして成可くは韻文にてやるべし。

（一）召集令をふところにして家を出で、

（二）宴席に招かれて美人の懷ろに眠る、

（三）森の中にて木の葉切株の上にて演說す、

（四）野中の半舍（議會）にて會議す。狗吠ゆ、馬嘶く、これを相手にして戰ふ。

（五）名士の會合（豫算會議）たもとに入りたる黃白に眠る。

（六）黃白みな狐美人に吸取らる。

（此間一考すべし、何故なれば豫算計りにては面白からざれば）

（七）狐夢議長に成り大臣に成り妾を貯へ……したり（實際）夢さめて見れば獅子小屋にあり。

同廿九日　東京を出で塔澤一の湯にて年をとる。

明治二十四年中　（透谷廿四歲の時）

一月三日　歸京す。

同十九日　イビー氏飜譯の仕事始まる。

同廿六日　「おその」はごぜと爲すべし。人の門に寄りて爲すことはやめて森の中の場にて樹陰に入る時に手琴を取出でゝ戀の歌を彈ぜしむべし。

二月四日　「賤伏屋の月」　田舍端物の外題なるべし。

同十五日　新渡戸夫妻に敎會にて面す。

「蓬萊曲」　其初には源兵衞なる從者の代りに一の哲學者を共にあらしめては如何。「春は來ぬ」と云へる題にて櫻井明石君に贈らんとする小詩蓬萊曲の後に出づべし。「今日はじめて春

のあたゝかさ覺ゆぬ、風なく日光いつもよりほがらなり。」

彼姫が形と見しは是れ琵琶なりし(びわを捨てゝ行き)抱きて見れば之れ吾が理想なりし。彼姫は空しく我が理想と先きの戀人とが集りて出來し者なりし。理想と戀人とが凝成したりし者なりき。而して抱きての後には琵琶と化しけり。

同廿二日　盤梯山の破裂の時一少女の婚嫁に先立ちて死せるあり、彼に付きて一詩出來べし。

「おその」は蓬萊曲の次に出べきパムフレットなるべし。蝶を追ふて云々の小歌は此中に用ゆべし。おその之を歌ひて門に立ち或は義一之を夢みて語る所。

「蓬萊山一夜」これは余が蓬萊山に宿りし時の一夜の狀を寫すべし。

五月二日　「蓬萊曲」全く脫稿。十日印刷にかゝる。

同十二日　露國皇太子大津にて遭難、人心惶々。

「地龍子」我れ地龍子の輾轉する樣を見て之れを小詩に作らんことを期す。

「重箱行脚」ぼろ箱行脚にても宜し。二千五百年來の寶物なる重箱に罅損を生じたり云々を以て始むべし、行脚鞋の脚色もこゝに入るべし。

同廿九日　「蓬萊曲」印刷成る。

六月一日　横濱にてシエーキスピーアのハムレットを演ずるを聞きに行く。山手公會堂に於ありし、中々面白かりき。春のやに逢ふ。

再びガイドたらんと欲してホテルへ相談に行きしも不都合多くて成らず。

同　七日　坪内雄藏君を大久保に訪ふ、專門學校にありて世話になりし故。春のや吾れに語るに古事記時代を以てバラダイス、ロースストを書くべきを以てす。吾れ淸盛の作を談りしに彼非常に贊成しグランドなり〳〵と言へり。蓬萊曲を評して第一缺點は其優美なる場所を取りて悽惻なる景色を寫したるを以てなり云々。

同　九日　今夜吾れつくぐ音樂なきを悲めり。古事記を研究するの念起れり。

○地　龍　子

行脚の草鞋紐ゆるみぬ。胸にまつはる悲しの戀も思ひ疲るゝまゝに衰へぬ。と見れば思ひもうけぬ所に目新らしき花の園、人のいやしき手にて作られし物と變りて、百種の野花思ひ〳〵に咲けるぞめでたき。何やらん花の根にうごめく物あり。眼を下向けて見れば地龍子な

り。

○戯曲を論じて雲峰子に質す

猫は鼠に非ず、故に鼠は鼠にあらずと謂はゞ、誰か其愚を笑はざるものあらん。長歌の定義を以て戯曲を判じ、其定義に背けるを見て戯曲にあらずとするは、余が子の博學なるに奇とする所……テニオハの誤り多しとて戯曲を排す。新體詩界すらテニオハには……戯曲尤も不規則なるべき戯曲に於て無理にテニオハを要す……君若し戯曲を作らば、如何なるものをかなす。役者をして一々樂器に合せて歌はしむべきや。役者のエキスプレッションをして悉く唱歌とすべきや。マーロー、ベンジョンソン、シエーキスピーア……定調とはいかなるものぞ、多分メテアを言ふなるべし。余は未だ戯曲にメテアあらざる可らざることを聞かず。英國のドラマチストは多くは……。獨逸のパワーフルのラングエーヂにしてミステリアスの事をいふべし……。舞臺（ステーヂヤイツ）に曲すべきものと爲す可らざるものとの二種あるを知らずや。ブラウニング、ゴールドスミス等のドラマを讀め云々。

「大盜曲」を作るべし。此中の理想は善とはいかなるものぞ。人間の善を成すは作り事なり。惡とは何ぞ、吾れ惡を成さず善を成すなり。捕はれて後の事などおもしろかるべし。

七月十三日　夜二時頃左の意匠成る。

○平家榮華の仇夢

第一幕　（一）六波羅邸外。小兒探偵等と百姓町人出で百姓町人清盛を惡口する所。彼等の一二人捕はるゝ事。

（二）源三位頼政と齋藤別當との問答。

（三）清盛邸内にて清盛と常盤。清盛が常盤に對する愛惠衰へ、長々來らざりし事。常盤は思ひ亂れて病あり、病衰ふ事。清盛去る。

源三位來る、常盤と互に胸中をうらに問答す。清盛宗盛相携へて入る、清盛、頼政と常盤と談るを聞きて面白からず、直ちに常盤を去らしむ。

第二幕　（一）小松邸に於ける重盛宗清との對談（清盛の專横を現はす）

（二）頼政の娘爰に預けられてある。維盛との愛。

（三）重盛獨誦。宗盛入る。重盛深く之を戒しむ。平家の運を說き源氏の未來を談る。常

盤暇を告げんとて尼裝束して來る。宜しく深刻なる感情あるべし。

(四)源三位娘を家に連れ歸らんとて來る。維盛の婚姻なからしめんとす。重盛之れを慰藉す。宗盛之れを蔑視す。照子姫と維盛。

第三幕　(一)六波羅に於ける清盛兵を整にて法皇を幽せんとす。重盛來る。

(二)熊野權現に於ける使丁、從僕等が樹を折り燒いて暖を取る所、政道の議論する所。重盛の憂苦死を祈る。(以下未定)

醉夢　(戀に醉ひたるもの、お園の如し)　未定案

魔夢　(蓬萊曲改作)　定案

仇夢　(平清盛が事)　定案

惡夢　(山賊が事)　定案

浮夢　(一世話物)　未定案

毒夢　(明智光秀が事)定案

十月二日　三の橋際の腰掛けうどん屋に入りたるに學校の小使の家なりければ咏みてやる

極樂はすゝる溫曇のけむのうち

十一月十三日　夜、毒夢想成る

〇毒夢

女主人公を阿鶴と稱す。其父は淺井家に仕へて大野佐右衞門といふ、二百石を取る。其兄は放縱にして出奔し、羽柴秀吉に據り、家には知らしめず。男主人公は三十石許の小武士、淺井に仕ふ。前沼吉繼九郎兵衞、齋藤龍興は當のかたき。淺井長政も亦。

第一幕　第一。大野佐右衞門やかたの場

佐右衞門は忠義一圖の武士、其むすこは放蕩にして家にとては寄附かず、主を輕んじ家を賤しむ。此場に於て佐右衞門言ひ爭ひ家を勘當すと言出す、之れを幸ひに出行かんとす。妹お鶴は父の入りたる跡に出來りて兄を留む、聽かず。兄は妹に婚嫁に苟且にすべからざるを說く、自ら言ふ吾れは大望あるものなりと。

第二。佐右衞門煙草くゆらし息子の事を思ふ。爰に妻女お政出來りて息子の事を嘆き父の短

慮を論ず。近侍某來る。說くに齋藤戀慕のことを以てし利害の左右を論ず。

第三。大野別室。大野と妻女、いゝなづけの前波に對することに付きて眉をひそむ。妻女ひとり殘りて娘を呼寄せ思ひきらしめんとす。娘終に陽に承引す。

第四。齋藤ぬけまいりして一杯飲まんことを求む（三昧の松花錄を見よ此類あり。）娘いやがる兩親は無理に酌を取らしむ。齋藤歸る。

第二幕　第一。朝。

第二。前波が家。貧武士の態。老僕一人あるのみ。對話よろしく嫁取りの話しなど。大野來る、齋藤の事情を談る。緣切らせたふもなし、切らでは成らず。前波思ひ切て斷るといふ。大野喜び歸る、

第三。夜に入りて行燈取出し書机に向ひて兵書を讀む。ほと〳〵と音なひてお鶴來る。物言ふも答えなし。老僕に向つて訴ふ。（以下未定）

明治二十五年中　（透谷廿五歲の時）

一月一日　ふた葉三葉去歲を名殘の柳かな。

同　七日　フレンド敎會々友を招じ餅會を催せり。

同十一日　病床にあり、重箱行脚著作の念を決す。

同十五日　コーサンド氏より愈々免職の相談あり、歸途步上作あり。

ぬら〳〵とからをはなれた蝸牛

是よりいよ〳〵文壇に躍出る考へ專らなり。

心中論を草せんとす（海音作心中二ツ帶を讀みて所感）。

同十八日　巢林子理想の批評を思立つ。

同廿一日　コ氏を送りて橫濱に到る、大矢正夫君出獄して公道倶樂部にあるを聞き行きて訪ふ。獄中にて〇〇の事を聞く、以て余が愛情の議論を確むべし。

同廿四日　宗像大助君來訪、櫻井明石君來訪。

同廿七日　源實朝を害したる公曉を主人公として他の油地獄を作すべし。
同廿九日　イビー氏方も亦免職となる。
同三十日　家尊任地より歸る。
二月一日　昨夜少雪あり、鬼瓦に白班を痕す。
同　二日　久野正香君來訪清談夜に入る。
同　三日　明石、愛山兩兄來訪快談夜に入る。
同　四日　隅谷巳三郎兄來訪。

今日の讀賣新聞を見るに余が曾て意匠を構へたる德川千姫(權現樣孫女)に付きて。　坂崎(?)某の事に付きて新脚色を作り、當今ことぶき座にて興行中との事御菊の前なる者云々。判事某の邸に千姫が情郎を埋め〳〵したる井戸あり云々。との事曾て春の舍主人野分の千草にて此事に說及べり。

今日午後より降雪夜に入りて益甚しく近年稀なる大雪となれり、積ること三四寸。

千姫物語(ゾラ派寫眞主義の小說、但し德川氏の忌諱に觸るべきや否や)

藤波氏王子を吊ふ歌

ともに見し紅葉の秋も過果て
落葉の音をきくもかなしき

十八日　湖處子及春のや先生を訪ふ。
廿六日　岩本善治君來りて明治學校文學會に同行を促す、因て往く。君われに向ひて女學雜誌文學批評の筆を執るを勸む、之を諾す。
三月四日　テンペストを讀む。時不圖心に浮びけるはわが曾て法ゐん珠材羅刹篇を讀みし時に得べしと思ひし一脚色再燃し來りぬ。
(批)　沙翁の「大」の一は「魔」の宇宙想なり。吾曾て之を論ぜしことありテンペストの「大」も亦其一なり
(作)　貴族の家に家令奥樣と密通し生ませたる子の生長したる後その家令主人を毒害し其子をもり立てんとたくむ。其子大に迷ひていかにともせんようなし。他に忠臣あり其女と相愛す、然れどもまことの父なる家令は彼をして婚せしめず、遂にいつはり狂して

トラゼデーを起す云々。

同　五日　久藤翁を訪ふ、歸途戸川安宅氏(殘花子)を訪ふ仲々に面白き談話ありし。

同　七日　戸川氏來訪。愛山兄來る、もろ共に深川蛤くひに行く。

同　八日　女學雜誌社に到り岩本氏に會ふ。擔當することゝなりたる批評の第一を置て來りたり。元祿文學攻撃の第一着手即ち之なり。

依田學海翁を訪ふ、演劇に就きて同翁の說は、

第一　演劇は「眞」に近かるべき事。則ち狐忠信の如き、寺子屋の如き、凡て不自然を排斥すべしとの意。

第二。せりふは成るべく自然、即ち「眞」に近かるべき事。道具は出來る丈け美くしき方よろし。則ち觀客をして「眞」に樂み「眞」に喜ぶことを得せしむべき事。

第三　床淨瑠璃は廢すべし、役者自らをして言はしむべし。之れ即ち作の問題に屬すべしと余は言ひぬ。

第四　日本演劇は木偶より起りたるものなれば、五官を具へたる人間の學ぶべき所に非ずとの事。

第五　昔は人形芝居と踊りの一派と兩樣ありしが、いつか合して人となりしと。此點に於ては先生は能を度外視したりと余は思ひき。

第六　莊高なる者を古神的近世神的に興行するは如何と問ひしに答へて、之れ遂におどけとなるべし、幽靈も鬼神も若し眞に迫らば大に可なるべきも戯れに見ゆるこそ是非なけれと言はれたり。

第七　俠といふこと如何なる所より起りしやと問ひしに、答へて之は實に著作家が盜賊、心賤き者を小人賦人小屋長屋連中を喜ばしめんが爲に、義俠の心ある者となしたるより起りたる者なり。盜みしたる金、家じり切りたる金もて人を救ふとは如何なることぞと。余大に此說に服したり。

第八　粹とは如何なる者ぞと問ひしに之も作者の不量見よりなりと答へられし。くもの糸まきの中にある十八通などが其始めなるべしとのたまへり。余も此說に同意なり。

第九　昔は戯作者など言はゞ人の汚れと思ひしが、唯馬琴に至りて少しく品格を上げたり。

然れども馬琴を先生と呼びし者はなしと。

同　十日　かねてねらひ置きたるナイトのシャーキスピア全集を得たり。其價十二金なり。

同　十二日　余は芝神明町一番地なる高田與五郎といふ人を訪ふ。同氏は元と吾父など同僚の官人なりしが去歳よりひまに成りたるなり。能樂の事に堪能なりとの事なれば山内氏の紹介を經て尋ねたり。其語る所の概略を記せば。

（一）余が元と能にして劇に似たる者ありやの問に答へて、日吉派と云ふ者ありて奈良大坂の邊に行はれたりし、可成り古き者なるが能より脫して稍俗に流れたる者なりと言へり。昨年同派の人東京に來りて興行したることありと。

（二）金春を以て四派（金春金剛寶生觀世）中の最舊派とす、これは千年餘なり。

（三）謠曲の番數は今は二百十番（内外合せて）なれども昔は千二百番もありしなり。各時代に必ず謠曲に熱心なる人ありて新作ありたる樣なり。加賀の藤何とかも其證なり。西行櫻は西行の作、江口は一休の作（其原稿藤堂氏にあり）、

（四）代々能役者は仲々の勢力なりし。金春家は五百石を領し、寶生は二三百石を領せり。代々の君のすきに從ひて家の隆替あり（つゞみ其他も之に應じて得失あり）

（五）豐臣太閤は仲々能樂に心得あり、自ら蹈舞中大明に書を裁したり、

同十七日　ジョンスなる宣教師と共に奥州の旅に向ふ。

（編者云此間旅行略記あり）

五月十七日　高輪東禪寺の寺内にうつる。

一つのアドベンチュアースマンを撰みてラブの大苦惱をしるすの妙味を悟る、如何。

七月十三日　狹穗彦の亂に付て皇后とインセストなど面白きこと限りなかるべし。

八月廿三日　芝公園地第二十號四番に移る、樹鬱地高く尤も我意に適せり。

同三十日夜感、寺の大黑を借來りて非道なる慾張者を寫し出すべし。

幽界に對する觀念（自然的幽靈を論ず）

芭蕉翁の一側（俳道の自在を論ず）

世の狂亂（マッドネス、ラブ、ウラールド）

風流の賊（似而非風流を論ず）

悟迷一轉機（文覺、西行、芭蕉等の品性を評すべし）

同卅一日　民友社より書狀來り、國民の友へ寄書せんことを請ふ。わが其雜誌にあらはるゝ時機未だ來らずと自ら信ぜしこと或は如何。

九月　性靈集第四、四十八　禪經曰佛以四隨說法隨樂隨宜隨治隨義、佛苑曰積恩爲愛積愛爲仁。

同　廿日　德富猪一郎君に會す。石田政敏といふ優人に會す。

星野愼之輔君（天知子）を訪ふて一泊す。女學雜誌に同氏の文覺上人を論ずる文を見て急に逢ひたく思ひし故なり。快談深夜に及ぶ。

○他界に對する觀念

ソロモンを引きて人生に自ら安んじ難き所以を見さしむべし。詩篇を引きて他にしたふ所あるを知らしむべし。

基督にありては靈魂を重んじ、從つて生命を重んじ、我にありては靈魂の靈活を知らず、生命の無常のみを知る。故にスピリツトなるものあるを知らず、惡鬼夜叉も之を信ずる彼になしと、エターナルの思想彼に存して我になし。

彼の惡鬼には神通力あり。フオースト五十八に「我にはいつでも惡形のみなり。」彼の惡鬼は神の裡面なり。我には神通力あらず。ハムレツトのは遠くより來れる如し。日本のは近接せり、殺されて世を去らず、去る能はず、念佛回向によりて成佛せざる可からざるが如し。高僧の手にていかにともなる幽靈なり。エターニチーを知らざるが故に戀愛の如き高きを得ず。尤も是は東洋宗教の戀愛を重んぜざるにも起因す。吾幽靈は其時よりすぐにエキジストして誰人にも言を加ふ。ハムレツトのは然らず、ハムレツトのみに出で他の者には見にず、母にさへ見にず。詩の上に於て世界に對する觀念二途あり。一は善美なるものをうつすなり。他は醜惡なるものをうつすなり。竹取、羽衣等は前者に屬す、番町皿屋敷、お岩、源氏等は後者に。

○前波新脚色

前第一　花見の幕、極めて賑はしくして其終りに前波を出して不滿足を見すべし（終りに喧嘩をなさしめ戰國の狀を示し前波の武藝を見せしむべし）。

第二　波の書齋。獨想

花見の時に、彼少女をして極めて汚なき着ものをきせ、濁酒のびんをさけて行かしむべし。これを以て彼の人品を現はし。人々をして彼を笑はしむべし。然る後に前波の之を見て救ふ所とすべし。

同廿一日　熊本松崎鶴雄君へ一書。其中に認めたる句一ッ

西ひがし夢は一つのかれのはら

○惡惡作意

第二のアクトには

公曉が修善寺に往事を記し、或民家にて行き暮れ休らふ時。公曉に弟子僧あるべし。温泉場は燒跡にする方凄かるべし。

其第二幕は住所しれぬ高僧ありて(平家の遺族とすべし)範頼のあとを吊ふ所を出すべし。なみの形にて爰に範頼現はれて「いづこの誰ぞや、そも我なき跡を吊らふは。あの世まで迷ふは子故、成佛のしようげを我と我が途へ、立ちふたがらせて川霧のあやめも知らぬ三途をばわたりも得せず歸へり來て、このわたりにさまよふを、あはれとは思せかし。

同じく是れ圓頂縮衣の人。あはれ汝が公曉にてあらば、千萬遍の回向にも增して成佛のよすがともなりぬべきに、南無阿彌陀佛とは聞けどいかにせむ、億萬里外にかけ離れては、うらみの一言を語らむ。

公曉此に來りて亡靈に會す。亡靈此時平家の怨軍に圍まれていきき〳〵に出來る。平家の怨全篇を貫くべし。

第一アクトは公曉のむす子げなる所を寫すべし。彼は北條氏を憚りて斯くするなり。廣元の孫女にラブさすべし。彼の家に通ふこと多くなりて、義時ひそかに來りて樣子を窺ふ。公曉宛然たる白痴なり。義時實朝の自滅を計りて實朝に彼娘をすゝむ。實朝これを諾して婚期近し彼女父命を背き難くして諾す。うば彼女に說くに利を以てす。

第三アクトにては義時實朝と共に行くを約して行かず。

大江廣元は學師とすべし。其孫むすめあり。公曉爰に通學す、學友あり、北條氏を罵る。

十月六日　「他界に對する觀念」の一文成る。

島崎兄の夏草を讀みて與へたる

夏草のしげみに蛇の目の光い

十一月三日　麻布簞笥町四番地に移る、山羊をコサンドより購ひて畜ふ。

同十六日　德富蘇峰君より春期附錄に著述の依頼來る。來年春八王子に遊て荒村行を著し政治社會を動かすべし。其主人公は女にて美くしき機織なり、男は政治に狂奔して東西に奔走して歸らず、云々。

明治二十六年中　（透谷廿六歳の時）

八月三十日　國府津在前川村に來り長泉寺に投ず、蓋し祖先の骨を埋むる處、家族を携へ弟と義妹とを與にす繁雜なる旅行なり。

富井松子は曾つて一たび師弟の緣あるもの。而して親しく交れること兩三年其人品に於て、氣稟に於て我が深く重んずるところありしもの、わが奥州にあるの間に於て、慥焉として遠逝す、われ深く悼むの心あり。知己は多く得べからず。渠の如きは、余が生涯に於て有數の友なりしを惜いかな。余が此行に於て尤も多くの興をうちけされしは渠を失ひし事の愁よりなり。

此行始めてエマルソン研究に着手せり。十二月に於て脫稿し得んと期すればなり。

九月四日　われ此地に來りてより後も常に自ら晏如たること能はざるを悲しむ。われつら〳〵近時の自己を顧みるに危機にのぞめること久しと謂ふべし。凡そ一時間も書を讀めば則ち大に勞れて爲すところを知らず。思想も亦た斯の如し。此地に來りてより評論の爲に一文を爲さんには凡そ四五日を費せり。斯の如きはこれまで曾てあらざりしところ、之を以て余は余が精神の當を失しつゝあるを知るものなり。

然れども萬事必然の因より余が多年の辛苦も漸くに水泡に歸したり。寸蓄も之を成す能はず、空しく唯だ獨立せざるの事業に苦役す。斯の如くして余が精神遂に亂れざるを得ざるべきなり。余はたしかに精神の不安の原因を知る。而して遂に之を如何ともするなきを知る。

余は多くの者に欺かれたり、希望にもライフにもすべてのもの余を苦しむるなり。

余は爰に於て從來のすべての忍耐を甘んじて打破すべしと決心す。妻に對することも、妻の家に對する事も、我が家に對することも、事業に對することも、而して我は之よりすべての事に耐久の精神を破りて自ら好むところ、自ら題するところの外は必らず之を爲すまじ。わが獨立の爲愛には犧牲に供すべし。最後は三界乞食の境界に沒入するの覺悟あれば則ち可なり。嗚呼男兒何ぞ斯の如く長く碌々として遠慮をのみ事とすべけんや。

九月七日　日本人が萬有に對する觀念

〔徳川氏以前〕
〔徳川氏以後〕

右を歴史的に研究すべし。基督教新聞に山田寅之助氏の萬有に關する論文も見たり。

十一月一日　余は始めて日記を錄するの暇ある身となれり。顧れば明治十七八年の頃桃紅日錄と題して日に記し來れる文字今はなし。仲頃の大變動を過ぎて漸くにして今日もとの書生となれり。即ち先月を以て

聖書の友編輯の任を解かれ、

引續き教會の方にも苦情出で、牧師としての太田君に對する反動起り、從つて余も亦去辭し去らざるべからざるに到れり、余は之を以て機會なりとす。

則ち斷然從來三年間執着せし宗教的生涯を打破し、之より大に我が意志を貫くべし。われ多艱なる過去を通り來れり。この頑骨を枉げて面白からぬ仕事に追ひつかはれたり。看よ之よりの余が猛志を。エマルソンを脫稿するの後直ちに公曉に取蒐らんか。おもしろし〳〵。

三日　教會會議あり、われ議長としておもしろき滑稽をやりたり。

四日　ウートウオルスを霞町に訪ふ。

公有の人、私有の人(人物を論ずべし)

手紙の中より

父へ送りしもの

拜啓小生は今日以後一大不孝者とならんとするを前知したり。生は實に暗涙を硯に垂れて此書狀を書き認むる者なり。嗚呼事皆止むを得ざるに出づ。何の止むを得ざる事かある、其は此最後の手紙を以て詳に赤心を吐露致す可し。

生は決して正明なる大人が生の一身を愛せざる如き事なきを知れり。故に生は常に大人の意に背かざらん事を思へども、生は終に孝行者となるを得ざり。此は生の性質の然らしむる所なりと雖傲慢不屈の不信仰（神に對して云ふ）の致す所ならざるを得ず。嗚呼危かりし此不信仰心は殆んど生の貴重なる生命を覆沒せんとしたり。生は此點に至つては實に我が恩人なる石坂孃に深く謝せざる可からず。孃は詳に生の性質、意志、企圖を貫察して、生の爲めに神の貴きを知らしめたり。生は過日一篇の長文章を草して自己の性情の變化を說き、其性情は嘗つて生の信仰を妨げしも今に至りて却て至極の信仰心を誘起したるを論じて過日石坂孃に投ずるとひとしく、生は孃と永く別るゝ旨を告げて歸りたり。則ち斷然身を砂漠に拋つの覺悟ありたればなり。

生は今詳に生の性情の由つて來りし所を述べんとすれども、徒らに時間を費やして、勞じて効なきを知れば敢て此に石坂孃に送りし書面を繰り返さず。若し生の性情如何んを知らんと思召さば願はくは東京日々新聞に當時掲載中なる詩人コロリアの少年の時の傳を御覽下さる可し。生の少年の時の教育と行爲とは毫も彼れに異なる所なし。却て今日病氣中の執筆よりも生の性情を見るには近からんと信じ申候。

小生は自ら常に思へらく、小生一身の浮沈は能き習慣を得ると然らざるとにあり。若し惡しき習慣になじまば最も不幸なる一人となるべし。能き習慣になじまば人に勝りたる幸福を得べしと。是れ生の如き過激なる人種にありては普通なる天則にして今更ら喋々を待たざるなり。

熟ら過來の生活を看視するに、二種の原因によりて一に破滅したるなり。其第一は『神の信ず可きを知らざりし事、』其第二は『人の愛を買ふの道を知らざりし事』右二種の原因は總べての惡性を誘起したり。

則ち

第一「不安心」　第二「功名心」　第三「凡　慾」
第四「不經濟」　第五「驕傲奢侈」　第六「不尊敬」
第七「無愛敬」　第八「社會を輕蔑せし事」
第九「飲酒癖」　第十「權謀心」

其他にも尙ほ數ふ可からざる多數の惡性を釀出したり。嗚呼、斯くの如くにして、猶ほ倒れざらん事を望むも豈得べけんや。其未だ倒れざるは未だ心の確なる所あるに由れるかと生は少しく自ら寄る所あり。生の性質は極めて激烈なり惡習慣を釀せし事も亦激烈なり。此に至りて身の破滅も亦た激烈ならざるを望むも豈得べけんや。事既に此に至れり。生は實に激烈なる勇氣を以て身を保護するに非ざれば殆ど再生の見込なきなり。

例へば相場師が全敗を取りたる後、非常の大膽を以て大合戰を試みるが如し。生は實に是を試みんとして商業上に入りたるなり。然るも尙ほ中途にて敗れたり、生は元より商業と見込を立てし譯にはあらず、唯激烈なる企圖を以て激烈なる全敗を取回へさんと企てしのみ、生は横濱に入りてより非常の忍耐力を以て此大膽なる血戰を起すまでに運びたりしも思考の足らざるより遂に再び一層の大敗軍に陷りたり。生は既に自ら生の才能は成すあるに足らず、則ち此非常なる敗軍を回復するの見込なしと信じて疑はず。

生の一身は名譽と功業とを成さんと思ふの心にて固まりたり。此心を外にせば生の魂は無一物なり、生の腦髓は死物にひとし。發狂するか白痴になるかの二にあらざるよりは此心に離れて安穩なる生活を過ごす事を得ざるべし。生は既に名譽を得、功業を成すの機會を失へり。今や其道絶へて無し、是れを之れ我生の大敗軍と云はずして何ぞや。

生は我が未だ狂せざるを怪むのみ、白痴とならざるを奇とするのみ。蓋し此六月以來生は自ら驚く程の耐忍力を以て此大敗軍に伴ひたる失望落膽を拒ざたり。然れども此間に又た生を救ひたる援兵なきにしもあらざりし。其援兵の第一は日常の遊戯なりし。其第二は我が親愛なる石坂

孃にてありし。

此二者は能く生を助けて狂せしめざりし。故に生は去る十七日までは泰然として毫も自ら恐怖せざりしも遂に生は僅に四日間にして落城したり。十六日の夜生は石坂孃を訪ふて二時頃まで其室に對談したり。此夜の談話は一言も己れの不幸に及ぼさず。孃も亦た生を日本人中の洒落なる人、傲世の客、英雄の末路と評せり。其後三日を經て十九日の夕景生は孃を訪ふて三時の樓鐘を聞くまで對話せり、此日生の孃に面するや孃は左も悲しげなる怪しき眼付にて生の容顔を熟視し居けり。生も自ら其奇狀に怪しみて之を問へば貴君の顔色痛く衰へたり、果して如何なる不幸ありてか君を苦しむる斯くの如きぞと。生は其敏察に驚いて逐一從來の失敗を告げ又た後來望む所なし、唯貴孃の活潑に生活し勇猛に世に盡さん事を希ふと云ふ一語を述べ、是れより翌日の午後までも眞の歐州風の交際を以て生は心を慰め居けり。

生は實に此四日間に於て殆んど發狂せんとせり。恰も落城するに近かりし、此は則ち彼の援兵の力を失ひけるに由れり。既に遊戯の權を奪はれたり。又た石坂孃と交際を絶つ可しと決心したり。此は則ち十六日の事にして十九日に至りては已に落城を告げんとせり。嗚呼我神經の激烈なる殆んど生をして自ら驚かしむ。

右に出でたる石坂孃の事に付きては、歐州人ならぬ大人に多少の辨解を呈せざるを得ず。抑も石坂公麿氏は凡べての朋友の上に立ち志望膽略巍然として諸輩を心服せしめ居たり。其公麿氏が最も心を置き最も計り得ざりしは小生なりき。小生の氣風は遠く公麿氏の上に在りたり。之れ則ち公麿氏が生の傲慢不屈なるにも拘はらず、生に結ぶに最も親密なる交際を以てせし所以なり。又石坂の一家にて最も公麿氏と意氣相投ぜしは氏の姉なる美那子にてあり、又た美那子と生との交際を結ばしめたる主因は公麿氏と生との間に存せし親密の交際にてありけりと云はゞ生と美那子との志望の相投ずる所あるをば推想あるべし、生の傲世逸俗の氣風は公麿氏及美那子の最も敬愛せし所なりし、又た彼等の淡泊にして高尚なる思想は小生の夙に欽慕して止まざる所にてありし。美那子は常に云へり、此社會は尊敬す可き社會にあらず。財産を持ち名譽を負ふ人の如きは皆是れ土芥に比しき者なり。名譽もなく、財産もなき壯快の男子こそ我夫と定む可き者なりと。以て生と意氣相投じたるを知り玉ふ可し。生は實に歐州風の交際を以て此敬愛す可き一貴孃を友とせり、生は今に至るまで曾つて一回も戀情に關する事を云はざりけ

り。抑も石坂孃は教育も高く智識も持し、加之其父より受けたる榮譽を荷へり。此榮譽ある孃子は遂に戀情の爲めに其身を破らんとせり。孃は實に生を慕へり、生も亦孃を慕ふの念日一日に加はれり。生は始めより敗軍の將なる事を承知し居りければ、是より世を輝かさんとする此一少女を誤まらせんとは決して思はざりし、然れども凡俗の人間何ぞ良心を全ふするを得んや。兩個の熱愛其度に達して尙ほ五六日を經ば約婚の契約書も將に出でんとするに至りて、生は最も激烈なる良心の奮鬪を以て全く其迷雲を排したり。嗚呼、孃は眞の神の敎を以て衆生を救はんとする有要の一貴女なり、生は實に大敗の餘成す所なき一糟粕のみ、我れは曾つて人を救はんが爲めには己れの生命をも犧牲に供せんと企てし事もありにき。況んや區々たる戀情をや。嗚呼孃をして其目的を達せしむるには生と結婚なぞと忌はしき志望を脫却せしむ可し。是れ生が斷然此交際を破らんと計りし所以なり、此戀情は則ち石坂孃が世を益せんが爲めの犧牲なり。石坂の一家の日本人共は生と美那子とは怪しむ可き親友なりと評する趣きを聞きし事あり。又た石坂の老母は生と孃との交際を絶たしめんと欲する樣にも見へたり。碌々たる未開の頑民案じ煩ふ事なかれ、余と美那子とは堂々たる紳士令孃の交際に劣る所なかりき。

生は石坂孃と別るゝに當りて重要なる誓言を約せり。則ち人生の正路を取つて進む可き事是なり。蓋し孃は生の激烈なる性質を知る者なり。誤つて輕卒の事を企て遂に貧苦に陷らん事を前知するに似たり。我れ何ぞ親友の言葉を無にせんや、孃は實に第二の大矢なり。

人は斯くの如くにして勇猛にも我痴情に打勝ち又た我親友の心をも動かして二人の幸福を恢復し得たると同時に驚く可き洪水の如き勢力を以て神に感謝し神に歸依す可きを發悟せり。余が斯くまで勇猛なる決心を成し得しは是れ神に捧ぐる献上物なり、イザ我れ眞の神の臣下となり神に忠義を盡くす可し。我れは敗軍の將なりと神は嘲り給ふまじ、神は却て我をあはれまん、左なり左なり、我身は神に捧ぐ可し、我心は神に從ふて及ばん限りは神を敬ひ尊ぶ可し。をさらば左らばイザ左らば之れより慾の世界を離れ眞の神の園に遊ぶを待つのみなり。

生の一身上に付いては、冷淡にして御考へなき大人よ。生は今日生の云ふに忍びざる所を公言したり、斯く公言する以上は生が生の生活を撰むに横濱の西洋人の如く專横奸惡なる人の下に壓抑され居るの望なきを悟り玉へかし、生は既に商業上にて大勝利を博し、分取物の山を積むの見込なくんば、生の商業界に入る可き最初の決心は全く消滅に歸せしなり。生の試みたる商業

は實に小さき者なりしかども生の期せし所は最も甚しき大相場にてありし。此大山は深みにはまらざる内につぶれて去り、此に至つて生の商業界に立つべき企圖は全く敗れたり。何となれば元と生は商業を作さんが爲めに商界に入りたる者にあらずして、此大山を試みんとなしたる故なればなり。（以下略）

石坂美那子に送りしもの

拜啓

親愛なる貴孃よ、生は筆の蟲なりと云はれまほしき一奇癖の少年なり。生は筆を弄ぶ事を以て人間最上の快樂なりと思考せり。然れども時としては此たしなみは却て云ふに云はれぬ不愉快を感ぜしむる事もあり、其は他ならず、詩文を試みて意想を寫す能はざるの時、書簡を認めて所見を述ぶる事叶はぬ曉、精神鬱快として殆んど人事を忘るゝに至る如き之れなり。

生は貴孃の風采を慕ふ事いと永かりし、而して親友たるの時日は斯の如くそれ短し。生は貴孃の親友として世を送るを得ば他に何の求むべき幸福あらんやと、曾つて思考したりき。計らざりき此得難き幸福を破つて遠く貴孃に別るゝの日に迫らんとは。嗚呼天も亦た無情なる乎、今や貴孃に別れてく遠く去らんとするに際し、聊か貴孃に懇願する所あり。其は他ならず生のミザリイを聞いてたもと云ふ一事是なり。

貴孃は常に生のハッピイなるを祈りたまふ我親友なりかし、然らば則ち生のミザリイを察して心の苦を慰むる術もがなあらば是れを指示しくれたまふ可き道德上の義務をもちたまふ御身なるべし。是れ即ち生が誰にも語らぬ心中の苦を打明けて貴孃に書き送りまいらす所なりかし。抑も生が所謂心中の苦とは何者ぞ、下に生の經歷を述べて以て其詳細を御話し申さん。

嗚呼若し生をして一の大家たるを得るあかつきありと念はしめば、生は今に於いて己れの履歷を語るの必要なかるべし。生は寧ろ堂々たる自傳を玉の如き名筆を以て書き始む可し。然れども其望なしとせば生はしばらくの間おもしろき妄想を持ちたる事を慝さず、白狀するこそ能けれと思ふなり。げに生の生活は世の有爲の少年の爲めに一部の警戒書となるべし、生の失敗は以て彼等に示す可し、秘し隱す可き者にあらず。

生の父は封建制度の下にありて、嚴格なる式禮の間に成長したる人たるにはあらず、傲慢磊落の氣風あれども、或る一部分に至りては極めて小心なる所もあり。明治十一年祖父の中風病にかゝるや、直ちに官を辭して鄕里に歸り、爾後七年間孝養を盡して怠る所なく、是れが爲めに僅かの財産も消費し去れども意に介せざる如きは其小心なる一例なるべし。又た生の母は最も甚しき神經質の恐るべき人間なり。一家を修むるにも唯己れの欲する如く、己れの畫き出せる小さき模範の通りに、配下の者共を處理せんとする六づかしき將軍なり。偖て生の神經の過敏なる惡質は之れを母より受け、傲慢不羈なる性は之を父よりもらひたり。言を變へて之を云へば丁度五分と五分の血を父母より受けて此世に現はれたり。明治六年生の父母は生を祖父母に托して東都に去れり。十一年まで五年間、生は全く祖父母の膝下に養育せられけり。此貴重なる時日の教育につき一言せざるべからず。生の祖父は凡そ世にめづらしき嚴格の人にして活潑に飛はねる事を好む少年をこらすの術に苦しみたる事、今もしほ〳〵祖母の物語に聞き得る事どもなり。又た祖母は今でこそ至つて温順なれど、其頃は生に取りて餘り利益を能へしとは覺ぬず。何となれば彼れは實の祖母にあらずして生に對してはまゝ祖母たる人なればなり。生の天性は不羈磊落我儘氣隨なるに、此のやかましき祖父と我が利益には餘り心配せぬ祖母との間に養育せられたるなれば、此に生が淡泊なる小兒思想は或る奸曲なるむづかしき想像心にからまれて、物事に考へ深き性情を作りたるの事實は決して蔽ふ可からざるあとなりとす。偖て此際生の習慣、鄕校にありての舉動等をも詳に述べんと欲すれど、餘りに長くなりては讀む人の氣心も如何かと存ずれば其は讀者の鑑定に任して唯其筋骨のみを綴るべし。其頃生の最も好みたる小說は楠公三代記、漢楚軍談、三國誌、等にして、日夜是等の小說を手離す事能はざりし程なりき。又た生の最も喜びたる遊戯は多數の小兒を集めて軍事をまねる事にてありし。生は常に自ら軍師となりて進退運轉を司どりけり。是等の遊戯は我やかましき祖父の最も嚴禁する所にてありしにもかゝはらず、淸く快よき濱邊の砂上にあつまりてかしこのつゝみ、こゝの丘を城堡と定め伏兵を隱す可き場所をも見極めて、軍略をめぐらし、智勇を奮ひ、砂礫を飛して銃丸に代へ、長短の棒片は、刀鎗を代用せり。此遊戯は則ち生の祖父に對する不平を慰す可き單なる快樂にてありけり。然れども之れ以て全く生を慰むるに足らずして、鬱々快々として月日を過したれば、生は最も甚しきパッショネイトの人物となり、又た極めて涙もろく考へつめては、な

かゝにいやすべくもあらぬこまりものとなりたる事も亦明らかならん。

何にかに付けて生は涙をこぼす事多かりし、又くやしくてたまらぬ時は殆んど正體なくなき狂へり。

偖て明治十一年の春となり、我がやかましき祖父は中風病にかゝりて其性質は全く一變し生を叱責するの性は變じて生を憐愛するの情となれり。然れども生は遂に温良なる性質を養ふの暇はなかりけり。實に生は温良なる性質を受くる道には一度も接したる事なしと云ふも不可なかるべし。生の血統中にも亦た温良なる好性質をもつ者は一人もなし。況んや生の父は傲慢磊落の人にして生の母は極めて甚だしき神經質なるに於いてをや。

生の父母は祖父を助けんとて東都より歸り來れり。生の活潑なる心に仇する事は、生の母の神經質より甚しきはなし。又た生の母は普通のアンビションを抱けり、則ち生をして功名を成さしめんと思ふの情切なりければ毎夜十二時頃までも窮屈なる書机に向はしめ、母自身は是れが看守人たり。又た母は婦女子の性として活潑なる舉動遊戯を好まずして生を束縛して殆んど諸ろの頑童等との交通を絶しめたり。生の最も苦しく思ひしは彼の戰鬪戯をなすを得ざるにこそ、生の諸書就中歴史小説（ヒストリカルノベル）を好むや、英雄豪傑の氣風を欽慕して、寢ても起きても其事ばかり思ひ續けて、いつも己れの一身を是等の英雄の地位に置かん事を望み居けり。且つ又た生は既に考へ深かき小兒となりたれば、諸兒の如く笑ひ興じて愉快に光陰を送ると云ふ事出來ず。最も爽快にして豪放なる遊戯にあらざれば樂しみと思ふ事能はざりし、又た生は父母祖父母皆、愛情に薄き人々なりと思ひ込みければ、生を親愛する者一人もなく人生の價値とす可き所なしと考へ居けり。是れ則ち後に生をして氣鬱病を發せしむべき最大なる原素なるべきか。此に記臆す可き一種の幸福なる事あり、其は他ならず、生の母は生が小説を好むの癖あるをきらつて堅く之を禁制せり。若し生にして依然小説を讀むの權力ありて全く身をアンビションの極度に蹈みこましめば其結果は實に如何ぞや。諸ろの英雄の少時によくある例なる自死を試みるに至らんこと必せり。

然れどもアンビションの病は遂に生の身を誤れり。其は明治十五年に至りて始めて純然たる病氣の形をあらはしけり。

明治十四年は生が父母に携へられて東都に移つりし初年なり。生は東都に移り泰明學校と云

ふ小學校に入りしが、此學校は聊か以て生の不平を慰めけり。今其概略を述べんに、同校の校長谷口と云へる人は東京中にて、第一等の教師と評判せらるゝ程の人にてありし。其人は生の淡泊なる性質を鍾愛し、最も親愛して生を教育せられけり。又た生は人の意表に出づる議論を好みて文章を造るに愉快活潑の氣象をあらはしければ、卑屈コンモンなる數多の教師どもには かに生を敬愛するに至りたり。從つて校中の評判生の一身に集まり、生の最も得意とするアンビションは此學校の生活には全く其功を奏したりと云ふ可し。此年は國内政治思想の最も燃ゑ盛りたる時なりければ生も亦風潮に激發せられて政治家たらんと目的を定むるに至り、奮つて自由の犧牲にもならんと思ひ起せり。從來のアンビションは悉く此一點に集合し、畏るべき勢力を以て生の心を支配し始めたり。此年は多少生をして愉快に其日を送らしむるを得たり。或日飄然として家を出で、懐中には一錢の金をも持たずして、東海道を徒歩し、鎌倉に遊びたり。抑も鎌倉は詩人に取りてのイタリーの如く最も生の渇望して一見せんと欲するの土地なりし、何となれば其頃生の日常讀む所は重に日本の歴史にして其歴史中最も重要の事件は彼地に於いて演ぜられたればなり。又た或日は獨り千葉地方に遊びたり。生は此時滿十三年にも足らぬ少年なりしも、活潑に之等の運動を試みけるは實に生をして身を誤るの基たらしめたり。何となれば生は既に自ら謂らく斯くの如く活潑に生活は過ぎ行く可しと。何ぞ知らん未だ一歳をも經ざる内生の一身は全くアンハッピイの占領する所とならんとは。

同十四年の十二月小學校の課程を終りて、卒業の式を擧げたり。生は是より先き青年社會にありて演説の稽古をなし居りければ少しは其心得もあるものから、演臺に上りて一演説を試みたる所、意外の好評にて其座にありし明治日報記者の如きは其雜報欄内に生を稱して奇童なりと云へり。

同十五年は生をして殆んど困死せしむべき程の一年なり。之等アンハッピイの第一着は我が極めて親愛せる善良の教師谷口氏の去て北海道に行ける事之れなり、其第二着は生が新たに入學したる岡千仞の私塾は實に生をして不愉快に堪へざらしめたり、其第三は會て熱心に盡力したる青年黨の面々散り〳〵に分離したる事等なり、其第四は政府の擧動漸くをかしくなりて、此神經質の少年をして憤慨に耐ゆざらしむる事少なからず、其第五は生よりも一層甚しき神經家なる我家の女將軍は生が活潑に粗暴を交へて動作するをいたく嫌ひて種々の軍略を以て生を

壓伏せんと企てたり。

右等の仇敵は交も生の心中を惱亂せしめたれば、爰に全く活潑なる天性をそこねて穩着沈默なる肉落ち骨枯れたる一少年とこそなりにけり。從つて又怯弱なる畏懼心をかもし、年來腹裡に蓄へたるアンビションをして徒らにをそれをのゝく事を知らしむるに至れり。アンビション果して成すに足らざるか生が生活は何に寄りて過ごさん、何を目的として世を送らんかなどゝ考へれば考へる程、心を病まし氣を痛め終日臥床にありて涙と共に一二月を過ごし何時癒ゆべしとも思はれざりし。此に至りて生が父は何の原因より起りし病とは知らねど、氣鬱病とは知るものから生を放つて地方に旅行せしめたり。此は是れ生が旅行の嚆矢にして爾後重もに旅行を以て氣鬱を慰むるの機具となしたるも端緒を此に開きしなり。

其年五月生は本郷なる共慣義塾と云ふに入塾せしが、是れまた生をして不愉快を感ぜしむる者の一たりし。

翌十六年三月生は早稻田なる東京專門學校に入塾したり。生は常に學問の仕方は自ら修め自ら窮むる禪宗臭い說を持ち居けり。去れば學校に在りても教科書をしらべんよりは數多の書史に涉獵するこそ面白しと日々書籍室に入りて漸く鬱を慰め居けり。

翌十七年は生をして一度び怯懦なる畏懼心を脫却して、再びアンビションの少年火を燃へ盛らしむるの歲にてありし。此時のアンビションは前日の其れとは全く別物にして名利を貪らんとするの念慮は全く消に、憐む可き東洋の衰運を恢復す可き一個の大政治家となりて、己れの一身を苦しめ萬民の爲めに大に計る所あらんと熱心に企て起しけり。己れの身を宗教上のキリストの如くに政治上に盡力せんと望めり。此目的を成し遂げんには一個の大哲學家となりて歐州に流行する優勝劣敗の新哲派を破碎す可しと考へたり。其考へは實に殆んど一年の長き一分時間も生の腦中を離れざりし。嗚呼何者の狂痴ぞ、斯かる妄想を斯かる長き月日の間包有する者あらんや。

翌明治十八年に入りて生は全く失望落膽し、遂に腦病の爲めに大に困難するに至れり。然れども少しく元氣を恢復するに至りて、生は從來の妄想の非なるを悟り、爰に小說家たらんとの望を起しけり。然れども未だ美術家たらんとは企てざりし。希くは佛のヒューブ其人の如く政治上の運動を纖々たる筆の力を以て支配せんと望みけり。此年生は各地に旅行し風景の賞味家

となれり、又た種々の人間に交際して人情の研究家となれり。

此年の暮生は全くアンビションの梯子より落ちて、是より氣樂なる生活を得たり。

以上縷述し來りたる生の經歴と性質とは以て生をして自ら小説家たるを得んと自負せしむるに足る者なり。嗚呼此自負は則ち今ま生を苦しむる事一方ならざるくせ者にこそ。

生は既に自ら生活を營む可き身にてあり、鋭敏に商政を計るべき一個の無間暇男兒なり。汝をして小説家となるべき企圖を抱しめんか、汝は一椀の飯をも得る能はざるべし。然れども汝の胸中にある小説家とならんと云ふ望みは遂に奪ふ可からざる者なり。

嗚呼此は是れ當今生の暇多き生活にともなひける一種の病氣なるべし。生の身は須らく繁忙なる事業に從はしむべし。是れ則ち此度生が斷然志を決して神戸地方に遊ばんとする所以なり。

我親愛なる石坂孃よ、斯くまで苦るしき生が心根を察して玉へ、若し友の情あらば。

然れども此病ひは一時のみ、生が去つて彼地に着せしを報ずる時あらば、再び光りかゞやくあさ日の下に幸福なる月日を過ごすと知り玉へ。

（編者附記。石坂孃はやがて透谷夫人となつた人である）

旅より妻に送りしもの

拜啓。貴書を得て茫然たること久し。何の意にて書かれたるや一切わからず、おんみに對して敬禮を缺けりといひ、眞の愛を持たずといひ、いろ〳〵のこと前代稀聞の大叱言、さても夫たるはかほどに難きものとは今知れり。われいつのまに惡魔になりすましたるにや、この書にてしか見ゆめり。この手紙はわれを聖人たれよといひ、他の世界はわれを惡魔たらしめんとす。詩人惡魔ならば、俗人いかほどの惡魔なるべき。われ不幸にして斯く生れたり。われ不幸にして斯の性をもつて生れたり。しかるに今われをもつて亞米利加風の夫たらしめんとするものあり、法理上の權義をもつて一家を成さしめんとするものあり、斯生非耶、斯生是耶、惆悵これを久ふす。

人生の不調子なる、不都合なる、誰か知らざるものあらん。しかるにこれを聖境となさんとする。誰かその愚を知るものぞ。聖境他にあり、人界は苦境なり。誰かこれを慮らざるべき。悲

しいかな、昨日公家の娘今は貧詩人の妻となりしを。

詩人は面白かりて道を說く傳道師にあらず、悲しきに悅びを飾りて世をくらます隱君子にあらず、徹頭徹尾社會の實勢を見、不調子を看破し、眞理をかざして進むにあり。道程いかに險なるを知らず、航路いかに荒るゝを問はず。I君の任のごときは表面にあり、われらの責とするところは裡面にあり。かれ女子を悅ばすの說をなす、わが心あるひは女子を驚かすことあるを期す。

おんみ口に貧を厭はずといふ。おんみ曾てわが分に應じたる貧ならば耐ゆべしと言ひしにはあらずや。曾ては女學生たり且つ門地ありと言はゞ奈何なるところを今のおんみの分とせん。夫貧すれば初めて妻の助けありと聞くものを、われは貧して初めて妻の怨言不足を聞く、露伴子よくも穿ちたりと思ふなり。

よしやわれ、このまゝに病み朽ちて人の笑はれものと成らんとも恨みじ。むしろわが死せしかたはらに一點の花もなかれよ。おんみの語氣つねにわが意氣地なくして、金を得ること少く、世に出づることの遲く、居るところの幅狹きを責むるごとく聞ゆ。止みなんかな、止みなんかな、眞の苦は矢張自己の中にこそあれ。わが妻となりしおんみにあらずや、何ぞ遲々として大道を看破するの遲き。詩人の妻豈に幸福あらんや。

且つまた、當世は詩人を出すに早きなり。詩人自ら出でんとすればこそ苦痛更に大なるなり。乞兒となり餓乎となりても、おんみはなほ詩人の妻となる心ありや否や。

われ思ふ、おんみ既に婚して夫に合すれども、半身は夫のものにして、半身はしからず。おんみが常に苦しむところ夫の事業のためならずして他にあり。夫の沮喪したる勇氣を挽回せんとにあらずして、夫の自己に忠ならんことを望むに過ぎたり。これ事情の然らしむるものにして互に堪忍すべきところ爰にあり。しかるをかへつて怨言彼のごときはいかに。

妻には語るべからざるか。いにしへより詩人のごとき、改革者のごとき、多くは妻と折合はぬなり。多くは妻と離るゝなり。ミルトンを捨て去りし妻あり、カアライルをしてその自傳中つねに憤懣して妻の不德を擧げしめたる妻あり。しかして彼等の妻はなほ夫の犧牲となりしものなり。あゝ近時米國の婦人の傲慢なる、及び米國の夫の婦人に對しての僞善は世人の知るところなり。しかしてこれを習慣全く容れざるの日本に求めんとするものあり。捨んと欲せば捨て

よ、言ひ甲斐なく大事業の中途に彷徨するこのわれを。われ既に墓標もなく花一本も與へられざらんことを覺悟せるものなるを。

われは妻が奈何なる事業を持つを知らず、また妻としてこれを成すべきや否やを知らず、しかれども貧しき人の妻として、多涙多恨なる貧詩人の世に容れられず、世に容れられざるの産物を出さんとし、終生刻苦して世と戰はんと欲するものゝ妻として、内に不足怨言をほしいまゝにするものを聞かず。

おんみ奈何ほどの愛ありて斯くわれを責むるぞ。われをして中道にわが業を停めしめんとの愛にてか。多くの詩人の妻は他と異なれり。われもまた他の夫と異なるを知る。

わが腦われを苦しむること甚し。人はこれを知らず。しかれども貴書に接して旅行の快味靡然として去れり。いざ都の敵界に躍り歸りて、再び苦悶の聲を發し、この聲をせめてもに天とゞろかして世に盡すものとせん。明晩御地にて相見んなり。

透谷全集終

（透谷全集）

定價　貳圓

大正十一年三月十二日印刷
大正十一年三月十五日發行

著作權相續者　北村美那子
編纂者　島崎春樹
發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彦
印刷者　東京市芝區南佐久間町一丁目三　和田操
印刷所　東京市芝區南佐久間町一丁目三　弘榮堂
發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂　電話本局五十一番　振替東京一六一七

◇圖書目錄進呈……往復葉書御申越次第……春陽堂

11193

島崎藤村著作目錄

藤村文集　定價金九十五錢　送料金六錢

藤村詩集　定價金壹圓五拾錢　送料金十二錢

新生（全二冊）　定價各壹圓八十錢　送料各金十二錢

水彩畫家　定價金八拾五錢　送料金六錢

千曲川のスケッチ　定價金壹圓四拾錢　送料金十二錢

新片町たより　定價金壹圓四拾錢　送料金十二錢

巴里たより　定價金壹圓貳拾錢　送料金十二錢

愛の歌　定價金五拾錢　送料金四錢

櫻の實の熟する時　定價金壹圓貳拾錢　送料金十二錢

近刊豫告

エトランゼエ